

第 章 第 7 次調査 (医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査)

第 1 節 調査経過と概要

1. 調査に至る経緯

1997年度に、老朽化の進む医学部校舎（基礎研究棟）の新嘗が、既存施設の南側に広がる駐車場に計画された（図 8）。同予定地の面積は845 m²程度であったが、同地点が鹿田遺跡内にあたることから、まずは対象地に確認調査を行い、その状況を探ることとなった。

1ヶ所行った確認調査結果に加え、予定地周辺では既に鹿田遺跡第6次調査が本地点の西側で行われており、それらの調査成果を参考とし、本地点には比較的遺構密度の高い中世包含層とやや希薄な状態を示す弥生時代～古墳時代の包含層との存在が予想されることとなった。

こうした状況を踏まえて、全面的な発掘調査の実施が決定された。調査対象面積は、最終的には829 m²となり、調査員2名が担当することとなった。調査期間は約5ヶ月を予定し、表土掘削を1998年2月から開始した。

2. 調査体制

調査主体	岡山大学	学 長	小坂二度見
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員：調査主任	〃	助 手	山本 悦世（2月～8月）
調査研究員	〃	〃	野崎 貴博（2月～3月）
〃	〃	〃	小林 青樹（4月～8月）
〃	〃	〃	豊島 直博（6月～8月）

管理委員会（発掘調査年度：1997年度～1998年度8月）

【委員】

学 長	小坂二度見	工 学 部 長	大崎 紘一	1998年度
文学部長	成田 常雄	農 学 部 長	内田 仙二	
教育学部長	松畑 熙一	環境理工学部長	河野伊一郎	
〃	森川 直	文化科学研究科長	岩間 一雄	
法学部長	植松 秀雄	自然科学研究科長	岩見 基弘	
〃	石島 弘	資源生物科学研究所長	青山 勲	1997年度
経済学部長	坂本 忠次	〃	本吉 總男	1998年度
〃	建部 和弘	附属図書館長	神立 春樹	
理学部長	佐藤 公行	医学部附属病院長	大森 弘之	1997年度
医学部長	産賀 敏彦	〃	荒田 次郎	1998年度
歯学部長	松村 智弘	歯学部附属病院長	村上 洋二	1997年度
薬学部長	篠田 純男	〃	佐藤 隆志	1998年度
〃	原山 尚	固体地球研究センター長	久城 育夫	
工学部長	中島 利勝	医療技術短期学部長	遠藤 浩	

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

学生部長	伊澤 秀而	事務局長	諸橋 輝雄	1998年7月～
事務局長	藤井 武	～1998年6月	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司
【幹事】				
庶務部長	厚谷 彰雄	施設部長	井内 敏雄	1997年度
経理部長	黄揚川英了	”	遠藤 久男	1998年度

運営委員会

【委員】発掘調査年度（1997年度～1998年度）

センター長（文学部教授）	稲田 孝司	
文学部教授	狩野 久	
経済学部教授	建部 和広	
理学部教授	柴田 次夫	
医学部教授	村上 宅郎	
農学部教授（調査研究専門委員）	千葉 喬三	
文学部助教授（調査研究室長）	新納 泉	
施設部長	井内 敏雄	1997年度
”	遠藤 久男	1998年度

【委員】報告書刊行年度（2006年度）

センター長（事務局長）	梶原 憲次
副センター長 （大学院文化科学研究科教授）	稲田 孝司
文学部教授	新納 泉
”	久野 修義
大学院医歯学総合研究科教授	大塚 愛二
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫
環境理工学部教授（調査研究専門委員）	沖 陽子
埋蔵文化財調査研究センター助教授 （調査研究室長）	山本 悦世
施設企画部長	入江 良広

3. 調査の経過

1998年2月16日から重機による表土掘削を開始した。掘削の対象とした造成土下部の堆積土（2層）は、大量の砂がラミナ状に混入し、日常雑器や木材などが一帯に含まれる状況を呈しており、洪水による堆積を思わせるものであった。従来調査では確認されていない土層であり、その堆積時期（近代）が注目された。

また、表土除去の作業が進行するに従って、旧建物の基礎が予想以上に残っていることが判明した。この建物基礎は、調査区の北半と南半に広く広がり、調査区の西側へと延びていた。当初見つけたものは北側の建物であり、その基礎に関しては、堅固な作りで地下に深く入り込んでいることから、撤去に伴う遺跡破壊をおそれ、ある程度残した状態で発掘を進め、調査終了後に解体・撤去して下部を確認する方針で掘削を進めた。ところが、さらに南側でも同様の基礎の存在が判明されるに至り、これ以上、基礎部分を残しての発掘は効率が悪く、遺構確認にも支障が出るとの判断から、南側に関しては撤去する方向で対応した。一方、北側に関しては、その段階で表土除去が終了していたことから、基礎の撤去は無理となり、北側のみは残した状態で発掘を進めることとなった。その後、この基礎は調査の進行に伴って約0.8m程度まで高さを増していくこととなり、調査にとって大きな支障になったことは言うまでもない。

本格的な発掘調査に入ったのは2月26日からである。ただし、南側基礎の撤去については、遺構破壊を最小限にとどめるための慎重な作業が求められたことから、撤去時期と発掘調査の進行との関係などに関して改めて計画を練り直し、当面は、作業上危険のない範囲で調査を進めることとした。最終的に、基礎が全て撤去されたのは3月中旬である。こうした2棟の建物の存在によって、調査区内は広い範囲にわたって深い攪乱を受けることとなった。

調査区南側の基礎撤去作業を行っている間に、調査区北半部において、近代～近世耕作土における水田畦畔・溝の調査を進めた。その結果、攪乱などの片付けが終了した段階で、岡山大学の前身となる岡山医科大学

が当地に建設された大正期の耕作面（ 3層 ）が姿を現した。この耕作面は、表土掘削において除去した 2層（洪水堆積層の可能性が想定される）に覆われた状況であったため、調査対象地域の中央に灌漑用水路として重要な溝が配され、畦畔・水口によって構成された水田域の状況が良好に残存することとなった。北半部では、続いて、耕作土にあたる 3層 の除去に作業を移行した。一方、南側の調査域は、依然として調査に入れない状態であった。調査区南半部の基礎の撤去ならびに造成土を除去できたのは3月18日である。その後、同地域において 3層 上面の遺構検出を行い、3月23日には同層の除去を終了した後、遺構全体写真を3月24日に撮影した。

こうした経緯を経て、 3層 下面における調査からは全面的な調査が可能となった。

3層 除去後、その下面では、調査区南端付近には中世前半に属する多数の遺構が検出される一方で、中央部に近世土坑が集中する以外に、北半部ではほとんど遺構は検出できないという状態となった。これは、4層 が本来は近世の土層であり、調査区南端部付近では、近世土層（ 4層 ）が 3層 によって削平された結果、 3層 直下に中世土層（ 6層 ）が露出した状態にあったためであるが、調査段階においては、その確認を明確にすることが出来なかった。それは、調査区に広がる多くの攪乱による土層の分断に加え、近世～中世土層の類似性の高さなどから、調査区内の土層の対応関係を直接的に把握することが非常に困難であったためである。

近世～中世土層（ 4層 ～ 8層 ）の調査では、近世の土坑・溝と中世の井戸・土坑・ピット群・溝などを検出した。中でも、調査区中央部をL字形に走る大形の溝は、撤去を控えた旧建物基礎の下部に潜り込んでいたことから、詳細な部分の確認はやや困難な状況にあったが、結果的には、数条の溝が重なり合って中世～近代に継続することが判明した。その他に、調査区の南側では、完形に近い土器や礎石らしき石を内包する大形の柱穴の存在が注目され、中世段階の屋敷地を念頭においた調査を進めるなかで、柱穴の土層断面などの記録を積極的に行った。

近世～中世土層における調査の進行は、中央部を走



a . 溝21コーナー（南から） c . 現地説明会（北西から）
b . 井戸3（北から） d . 建物基礎下調査状況（東から）

図3 調査風景

る大形の溝を境に、北側では遺構密度の低さから、掘り下げは比較的順調に進んだ。ただし、遺構の確定については、攪乱による変色あるいは上部破壊の影響もあり、古墳時代の遺構検出段階（9層）まで、その存在が把握できない場合も一部では生じることとなった。一方、近世段階に属する土坑群の検出から始まった南側の調査では、井戸やピットあるいは大小の溝がなど多数の遺構の重複が広がるなかに攪乱の影響も加わり、遺構の検出は難しさを増した。

こうした近世・中世の調査を6月中に終了した後、7月1日からは古墳時代初頭段階の土層（9層）の調査に入った。すでに、各所における壁面観察では、調査区中央部周辺での遺物集中や同北西部での竪穴住居の断面確認などがなされていたことから、9層 上面では、上層とは異なり北半部に遺構が集中する傾向を想定していた。そうした中で、井戸・竪穴住居・掘立柱建物・土器溜まりなどの集落を構成する遺構群が検出されることとなった。遺構密度は、南半部では極端に希薄であった。その他に、中世遺構の掘り残しなども、調査区東壁付近の狭小な範囲内や攪乱内で見いだすことができた。続いて、基盤層（10層）上面において掘り残しの遺構を調査し終了した。ただし、遺構が極めて希薄となっていた南半部に関しては、最終的な確認の範囲は必要な部分に限定した。

全体的な調査は8月3日に終了した。最後に、全体的調査終了後、北側建物の基礎を8月5日に撤去し、6日には基礎の下部に残っていた竪穴住居の一部あるいは中世段階の大溝について完掘ならびに記録を行い、全ての調査を終えた。

調査終了前の7月25日に現地説明会を開いた。約50名の見学者があった。

4．調査の概要

本調査においては、古墳時代初頭・古代末～中世・近世・近代の遺構が確認された。以下に、各時代ごとにそれぞれの概要を述べたい。

古墳時代初頭（図4）

検出した遺構は、竪穴住居4棟・掘立柱建物2棟・杭列1列・井戸1基・土坑7基・土器溜まり1箇所、溝4条・ピット数基の他に焼土分布域が1箇所である。遺構分布は、調査区の北西部から中央部にかけて集中的に認められ、基盤土層が高い地域に対応する。一方、地形が低い傾向を強める東南側に向けては、遺構密度はかなり低下しており、遺構の立地が地形と密接な関係を有しながら求められている。

遺構の配置は、調査区北西部に立地する竪穴住居を中心に見ると、掘立柱建物はその南東側に、そして井戸はさらにその南東側で地形がやや下降し始める位置にある。土坑・溝に関しては、形状・包含物などから機能的に分類されるが、その中で焼土を包含する土坑・溝（長さは短い）は住居の南側に集中的に分布する傾向が顕著に見られる。同地域には土器溜まりも重複しており、何らかの作業空間の存在が想定される。その他に、粘土を包含する土坑は、遺構密度の極めて低い調査区の南側に点在する。こうした状況から集落内での空間利用形態を知ることが出来る。また、遺構の相互関係も注意されるところである。調査区を南北に貫く溝・方形住居・掘立柱建物に認められる軸の方向がほぼ近い状態からは、それらの関連性が求められよう。また、方形住居を挿むように途切れる溝との位置関係、あるいは建物と溝そして焼土包含遺構群との重複関係などを考慮すると、住居を中心に、その周辺で比較的短期間の中で複数回の遺構形成が行われたと考えられる。

集落の継続期間は、遺構の重複関係あるいは形態的特徴の比較から、少なくとも2段階程度の変遷を想定することは可能であろう。出土遺物からも一部に新旧の差を見いだすことが可能である。ただし、遺構・遺物の状態から、その幅は比較的短期間であると判断される。

本調査地点に広がる集落は、調査区の西側にどの程度広がるかは未知数であるが、現段階の資料からは、竪穴

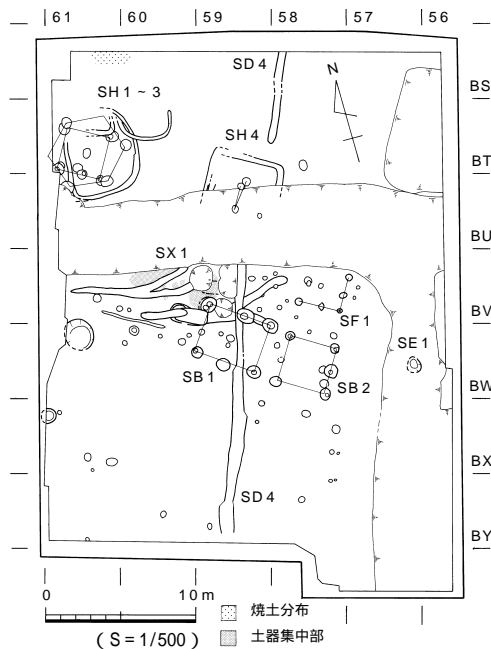


図4 古墳時代初頭遺構全体図

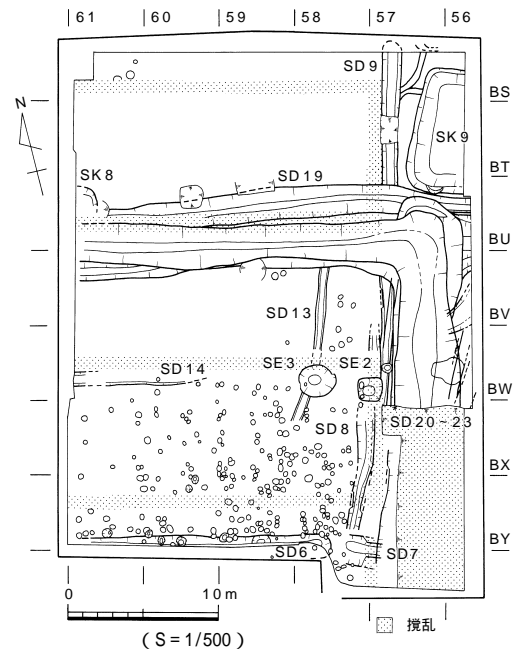


図5 古代末～中世遺構全体図

住居・掘立柱建物・井戸を中心とし、周囲に作業空間を有する比較的小規模なまとまりをもつ単位であり、ある時期には、区画された可能性を有する集落と評価しておきたい。

古代末～中世前半(図5)

本時期に属するの遺構として、井戸2基・土坑2基・溝19条のほかに柱穴が多数が検出された。実年代では、12世紀後半～14世紀前半を目安としておきたい。遺構の推移を、以下にまとめよう。

古代末には、BYライン上を概ね東西方向に走る溝が確認される。非常に明確なSD 6にSD 7が続き、一連の区画が成されていることが想定される。それ以外では、南北方向の溝(SD 8・9)が伴う可能性も位置的に求められる。同時期の柱穴は確認されない。次の段階には同溝は埋没し、やや北側に新たな溝の形成が予想される。検出された遺構は井戸2基と柱穴群である。井戸は柱穴群の分布域に対して端部となる位置に連続的に形成される。

続いて中世前半は、溝11条と土坑2基そして柱穴群が検出されている。その特徴から大きくは二段階に分けられる。

まずは、13世紀前半～中頃を中心とする時期である。溝1条が、BTラインとBUラインの間を、概ね東西方向に走る(SD19)。古代末の溝のように途切れる状態は示さず、調査区を横切る。

一方、13世紀後葉～14世紀前半では、東西方向の溝4条(SD20～23)の位置は前段階と一部で重複するような近接した状態を示すが、その規模は、幅2m程度から4m前後へと飛躍的な拡大を見せる。さらに、56ラインと57ラインの位置で南北方向に折れ曲がってL字形の溝を形成する。また、平面形では一部が張り出すよう

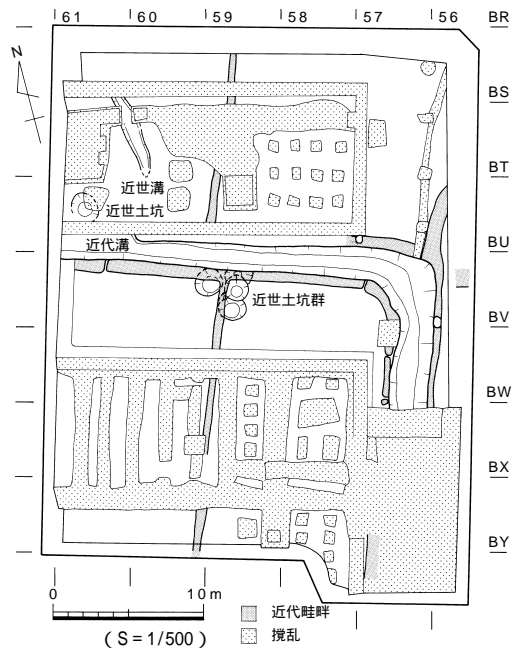


図6 近世・近代遺構全体図

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

な箇所が付随しており、その機能については、それまでの溝とはやや異なった性格を併せ持つ可能性も窺われる。土坑は、14世紀前葉に1基・14世紀前半に1基が東西溝の北側に検出される。それぞれ、調査区西端と東端に位置しており、溝との強い関連性を示す。

柱穴は調査区の南半部に集中する。地形としては高い地域に一致する。その中でも南端部付近の柱穴群のなかには、規模が非常に大形のものや、礎石状の石あるいは完形に近い椀・皿を含む場合が多く認められる。溝で区画された敷地内に建物が配され、その端に井戸が設置されるという、地形の高い位置に配された屋敷地の状況が復元される。出土遺物からは、12世紀末～14世紀初頭の時期が確認される。

以上のように、本時期は、区画溝に囲まれた屋敷地の存在が特徴である。古代末には、その位置はやや移動し、中世集落としての区画が新たに設定されている。さらに、その溝は、遅くとも13世紀末以降には、非常に大形化を示し、屋敷地としての飛躍を見せる。また、同溝からは、猿形木製品が出土している。

近世（図6）

遺構は、中世から踏襲されるL字形の大形溝が重複して2条（SD23・26）検出されるほか、土坑8基とごく小規模な溝1条があげられる。溝は溝23（16世紀末～17世紀初頭）に続いて、溝26が形成され、近代まで連続と継続する。

土坑は、L字形溝に隣接する位置にあり、南側の6基と北側の2基の二群に分けられる。前者は大形の掘り方を有する。瓦敷きあるいは曲物が遺存し、18世紀代（江戸時代中期）を中心とした遺物を包含する。一方、後者はやや小形の掘り方で曲物が遺存する。前者よりはやや新しい遺物が出土する。遺物は陶磁器が多い中で、瓦の出土量が全体的に多い点が特徴的である。

本地点は、古代～中世前半に屋敷地としての利用されていた状態が大きく転換し、近世初頭には、耕作地として利用されるようになる。

近代（図6）

遺構は、溝1条・畦畔・水口があげられる。溝は近世に形成されたL字形の溝（溝26）が継続的に使用される。その両側にやや幅広の畦畔が付随しており、そこから南北方向に走る畦畔を3条検出した。また、水口は7箇所認められる。大正期の水田景観を良好に残す。

表1 第7次調査検出遺構一覧表

a. 竪穴住居

番号	時期	上面形	長辺 / 短辺 (m)	残存柱穴本数[復元数]	壁溝	重複
1	古墳時代初頭	隅丸方形	最大6.5 / 6	0 4 4[6]	有 無 無	3回
2	古墳時代初頭	隅丸方形	-		有	不明
3	古墳時代初頭	円	2.55 / ?		有	無
4	古墳時代初頭	方	5 / ?	2	有	2回

b. 掘立柱建物

番号	時期	間×間	桁(m)	梁(m)	柱間(m)
1	古墳時代初頭	2×1	北面：4.25 / 南面：4.25	西面：3.3 / 東面：3.4	北面：2.27・1.98 / 南面：2.27・1.98
2	古墳時代初頭	2×1	西面：3.15 / 東面：3.16	北面：3.2 / 南面：3.34	西面：1.68・1.47 / 東面：1.62・1.54

c. 杭列

番号	時期	柱穴数	東西(m)	南北(m)	東西杭間(m)	南北杭間(m)
1	古墳時代初頭	5	2.8	2.3	1.5・1.3	1.2・1.1

d . 井戸

番号	時期	上面形	長辺 / 短辺(m] 復元値]	底面高(標高m)	深さ(m)	断面形
1	古墳初頭	不整円形	残0.95 / 0.75[1.1 / 0.95]	- 0.99	1.52	逆台形 - 箱形
2	古代末	隅丸方形	1.57 / 1.55	- 0.97	1.9	逆台形
3	古代末	円形	2.45 / 2.1	- 1.27	2.5	Y字形

e . 土坑

番号	時期	上面形	長辺 / 短辺(m] 復元値]	底面高(標高m)	深さ(m] 復元値]	断面形
1	古墳初頭	円形	2.17 / 1.81	0.85	0.17	皿状
2	古墳初頭	円形	1.0 / [1.0]	0.33	0.6	U字状
3	古墳初頭	楕円	0.8 / 0.56	0.75	0.27	ポウル状
4	古墳初頭	楕円	0.58 / 0.47	0.79	0.19	ポウル状
5	古墳初頭	楕円	0.7 / 0.53	0.63	0.23	逆台形状
6	古墳初頭	円形	1.0 / 0.9	0.77	0.15	皿状
7	古墳初頭	長方形	2.1 / 0.85 ~ 1.01	0.76	0.24[0.35以上]	逆台形
8	中世前半	隅丸方形	残1.9 / 残1.02	0.38	約0.65	逆台形?
9	中世前半	方形	8.2 / 残3.7	0.23	0.8	逆台形
10	近世	円形	1.9 / 1.8[1.6 / 1.5]	0.53	0.72	箱形
11	近世	円形	1.7[1.9]	0.17	1.06	Y字形
12	近世	円形	1.14 / 1.14	0.68	0.55	箱形?
13	近世	楕円形	1.56 / 1.5	0.61	0.55	逆台形 - 箱形
14	近世	円形	残1.4	0.84	0.41	箱形?
15	近世	円形	1.81 / 1.5	0.72	0.53	箱形
16	近世	円形	1.3 / 1.2	0.67	0.55	箱形
17	近世	楕円形	2.2	0.77	不明	すり鉢状

f . 溝

番号	時期	長さ(m)	幅(m] 復元値]	底面高(標高m)	深さ(m)	断面状	方向
1	古墳初頭	8.55 ~ 9.05	1.05(西) 0.5 ~ 0.55(東)	0.67	0.25(西) 0.12(東)	ポウル状	東西(分岐)
2	古墳初頭	9.0	0.35 ~ 0.5	1.01(西) 0.99(東)	0.07 ~ 0.1	皿状	東西(分岐)
3	古墳初頭	3.0	0.45 ~ 0.55	1.03	0.06	皿状	東西
4	古墳初頭	7.5(北) 18.0(南)	0.57(北) 0.7(南)	0.8(北) 0.7(南)	0.18(北) 0.16(南)	逆台形	南北
5	古墳初頭	4.3	0.15	0.88	0.46	ポウル状	東西
6	古代末	18.0	0.5 ~ 0.9[1.7 ~ 2.0]	0.62(西) 0.24(東)	0.78(西) 0.95(東)	逆台形	東西
7	古代末	2.5	1.68[約2.0]	0.83	0.45	すり鉢状	東西
8	古代末	14.0	0.7 ~ 1.2[約0.9 ~ 1.1]	0.81(北) 0.85(南)	0.4(北) 0.36(南)	ポウル状	南北
9	古代末	24.0	0.6 ~ 1.2	0.91 ~ 0.88(北) 0.7(南)	0.08 ~ 0.22	すり鉢状	南北
10	古代末?	3.6	不明	0.97(西) 1.03(東)	0.1 ~ 0.2	不明	東西
11	古代末	3.0	0.3 ~ 0.38	0.91	0.12	ポウル状	北東 - 南西
12	古代末	1.4	0.3	0.92	0.07	ポウル状	東西
13	古代末	10.0	0.5 ~ 0.7	0.94前後(北) 1.0(南)	0.15前後(北) 0.09(南)	皿状	南北
14	中世前半	9.5	[0.8]	0.93 ~ 0.96	0.17	逆台形	東西
15	中世前半	4.0	0.55 [0.7]	0.55 ~ 0.58	0.55 ~ 0.58	U字形	北東 - 南西
16	中世前半	1.5	[1.0]	0.68	0.45	逆台形	北東 - 南西
17	中世前半	不明	[1.2]	0.78	0.33	ポウル状?	北東 - 南西
18	中世前半	2.0	約1.4[1.7]	0.53	0.55	皿状	北東 - 南西
19	中世前半	27.5	1.8 ~ 1.9	0.31(西) 0.47(東)	0.55 ~ 0.78	Y字形 - 逆台形	東西
20	中世前半	15.5	4.6	- 0.32(北) - 0.15(南)	1.36 ~ 1.5	すり鉢状	東西 + 南北
21	中世前半	14.0	2.0 ~ 3.2[4.0]	- 0.05(北) - 0.1(南)	1.3	すり鉢状	南北
22	中世前半	48.0	1.5 ~ 1.55[2.0 ~ 2.2]	0.3 ~ 0.42	0.85	逆台形 + 箱形	東西 + 南北
23	中世前半 - 近世	48.0	2.0前後[約3.0](東西) 3.2 ~ 4.3(南北)	0.1(西) 0.21(東) 0.18(南)	1.0 m 前後	逆台形 + 箱形(東西) すり鉢状(南北)	東西 + 南北
24	中世前半	1.8	1.0 ~ 1.8	0.13 ~ 0.15	1.0	階段状	東西
25	近世	5.0	0.8 ~ 1.0	1.06 ~ 1.15	0.06 ~ 0.16	皿状	東西 + 南北
26	近世 ~ 近代	48.0	2.0前後	0.69	0.8	Y字形 すり鉢状 + 箱形	東西 + 南北

第2節 調査の記録

1. 調査地点の位置

本調査地点は、岡山大学鹿田地区の中では、中央やや西よりの場所にあたる（図2）。既存施設との位置関係をみると、医学部基礎医学棟、RI研究センター、附属動物実験施設、アイソトープ総合センターなどの建物に囲まれた駐車場の北東部の一角にあたり、基礎医学棟に隣接する位置となる（図7・8）。

これらの施設の中で、アイソトープ総合センターは、本センターが1990～1991（平成3）年度に発掘調査を実施している（第6次調査）ほか、附属動物実験施設では1981年度に岡山市教育委員会が立会調査を行っており、中世の遺構・遺物が確認されている。その他に、鹿田遺跡の中で弥生時代～中世の集落が継続的に営まれ、遺構・遺物の質量ともに中心的位置を占める外来診療棟・管理棟地点（第1次・5次調査地点）からは、南西に150～200mの距離にあたる。こうした環境から、中世集落の存在はいうまでもなく、弥生時代～古墳時代に遡る遺跡の状況について注目される地点であった。

発掘調査前は、良好な保存状況が予想されたが、昭和初期の図面から、東西方向の木造建物が南北に並ぶ様子が確認され、一定の破壊が危惧されることとなった。

本発掘調査域は鹿田地区構内座標BR～BY55～61区の範囲を占める（図8）。



図7 調査地点遠景

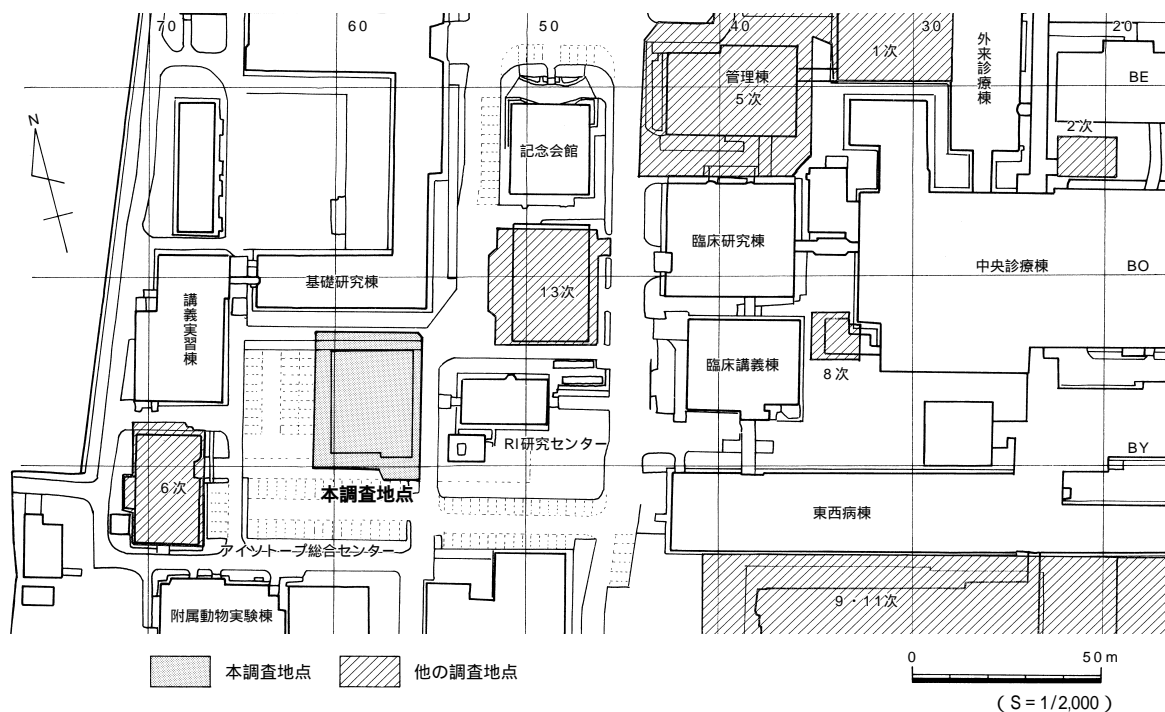


図8 調査地点位置図

2. 層序と地形

(1) 層序

調査対象地区内には、昭和期に建設された建物の基礎に伴う深い攪乱を中心に、大小の破壊が広範囲におよんでいる。さらに、中世から近世に形成される大形の遺構によって、基本土層を連続的に観察できる部分はほとんど残されていなかった。調査区壁面についても例外ではなく、北壁面以外については調査区全体を通した断面を記録することはできない状況であった。そのため、分断された土層を対応させつつ、基本土層の説明を行うこととする。なお、本調査報告書内では基本土層の表記については を付けて表す。

1層（大正期以降の造成土）: 上面は現地表面にあたる。ほぼ平坦であり、高さは標高約2.69～2.73mを示す。土層の厚さは約1m前後を測る。その多くが岡山医科大学建設時における造成土にあたる。

2層（近代）: 灰色系の粘土層であるが、場所によって暗灰色粘土、青灰色粘土、黄灰色粘土、黄灰白色粘土などの変化が認められる。また、粗砂や砂利が混在する傾向が強く、ラミナ状堆積が認められる部分も多い。部分的には細分が可能であるが、その間に時期差が求められるような違いとは言い難い。

上面は、部分的には削平で低い数値も示すが、標高1.6m前後～1.75m前後を中心とし、南壁方向に高い傾向が認められる。土層の厚さは20cm前後を測る。3層 上面に形成された畦畔・溝などの遺構を覆い尽くしている状況から、洪水に係わる堆積土の可能性が想定される。ただし、その後、上面において耕作が行われたことを否定するものではない。

包含される遺物量はコンテナ1箱（1箱28ℓ：以下略）程度が出土した。近代の陶磁器類を中心とする。

3層（近代）: 灰色土を基調とする。他と比べると比較的粘性は弱い土であり、淡い灰色の色調が特徴である。

2層 と同様に小礫を多少含む。堆積範囲は調査区全域に及ぶ。上面は、その多くで標高1.45～1.5m前後の高さに広がりを見せるが、調査区北西部については同1.4m前後まで下がる。また、下部に溝などの遺構が存在する地点ではやや低い数値となる。比高差は15cmである。土層の厚さは全体に約10cm程度で安定している。

上面では、溝・水田畦畔などが検出された。遺物はコンテナ2/3箱程度の量出土している。その内容は本土層を覆う 2層 と共通しており、近代の陶磁器を含む。以上の点から、近代の耕作関連遺構群が形成された耕作土層と評価され、地形にみる高低差は田面の高さを示すものといえよう。

また、広い範囲で下面は 4層 に接するが、南端部周辺では時期が断絶する 6層 に到達しており、本土層形成段階において、下層への削平が行われたことを窺うことができる。

4層（近世）: 緑灰褐色粘質土を中心とするが、西壁側では黄色を強め粘性がやや弱まる。全体的に鉄分の沈着が認められる。2層・3層 と同様に小礫を多少含む場合が多いが、全体には均質な土質である。堆積範囲は調査区内に広く認められるが、南端付近（BXラインとBYライン間以南）は、3層 による削平によって失われている。消失した範囲においても、本来は 6層 上の高い位置に本土層が形成されていたことは十分に予想される。現状は、そこから北側に一段下がって形成された部分が、安定的に残された状態といえる。土層の厚さは10～20cm程度である。

上面は、全体的には標高1.35m前後～1.4m前後の高さに安定した広がりを見せるが、調査区北西隅においては標高1.28mまで下がる。比高差は15cmを示す。こうした高低差は、前述したように上面が 3層 形成段階に削平されたものとする、本来の地形を直接的に現しているわけではない。しかし、調査区北西部における上面レベルの下降については、5層 ～ 10層 においてもその傾向を見いだすことができることから、本土層面でも田面が本来的に下がる地形であったと判断される。一方、下面について検討すると、前述したように 5層 のほかに 7層 に到達する部分も確認されており、下層への削平が行われたことは明らかである。

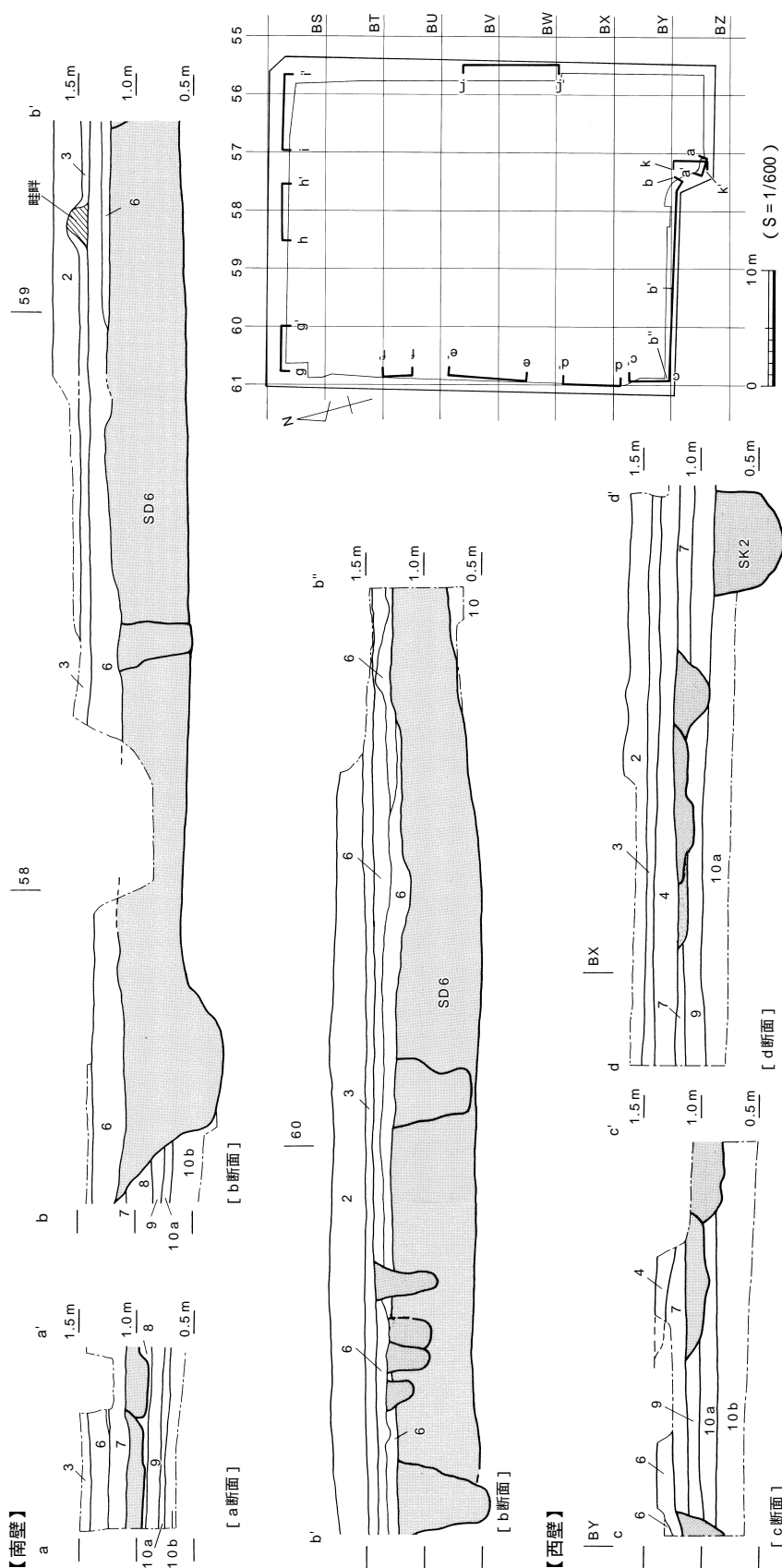


図9 調査区割りと土層断面位置

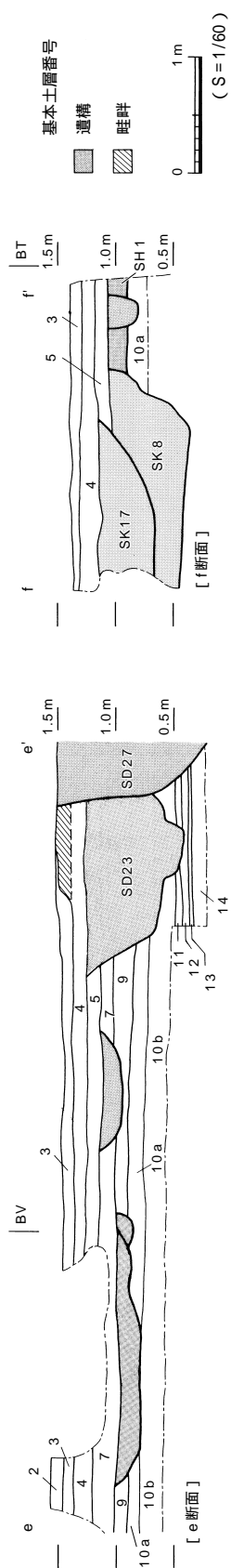


図10 調査区土層断面(1) 南壁・西壁・南壁

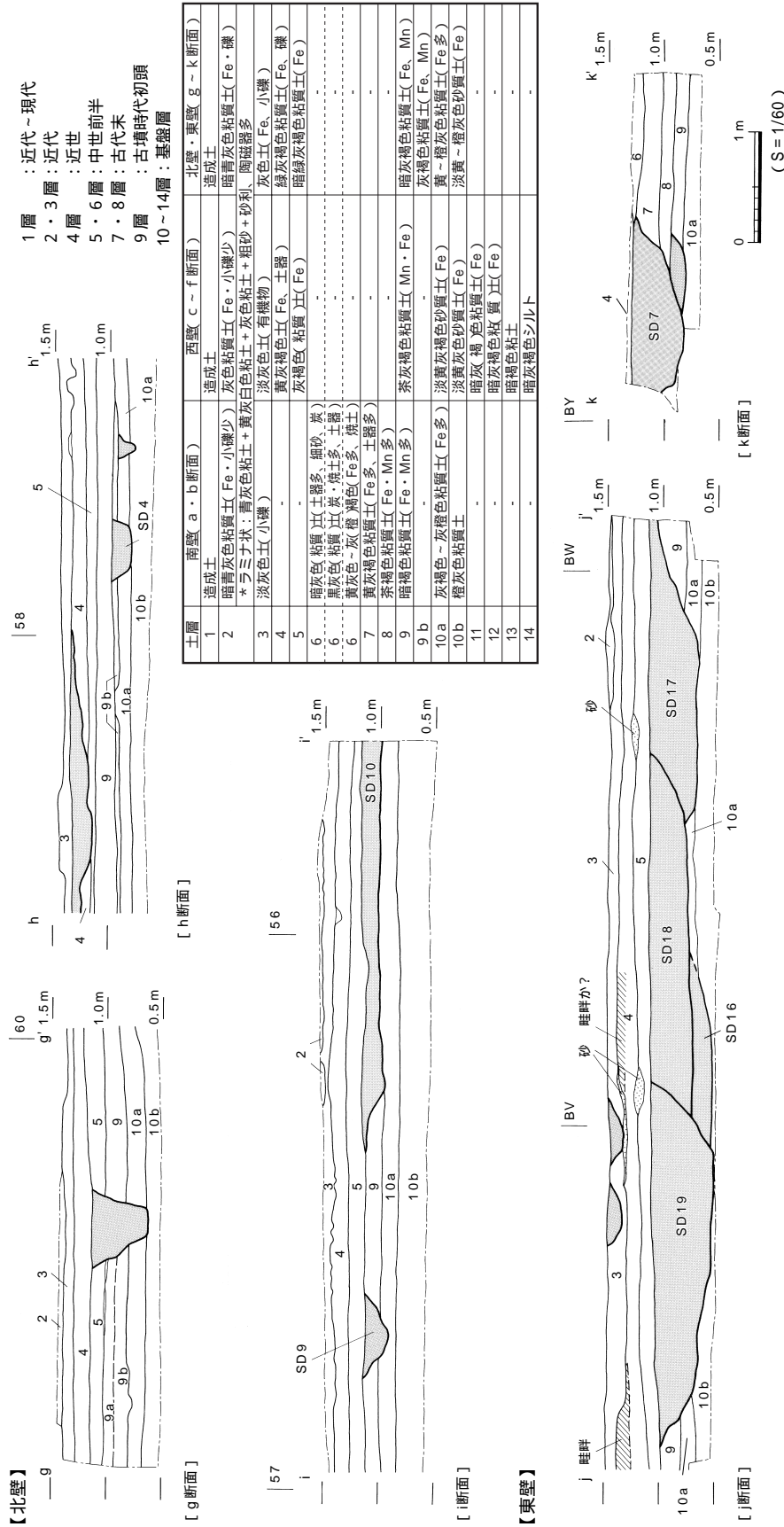
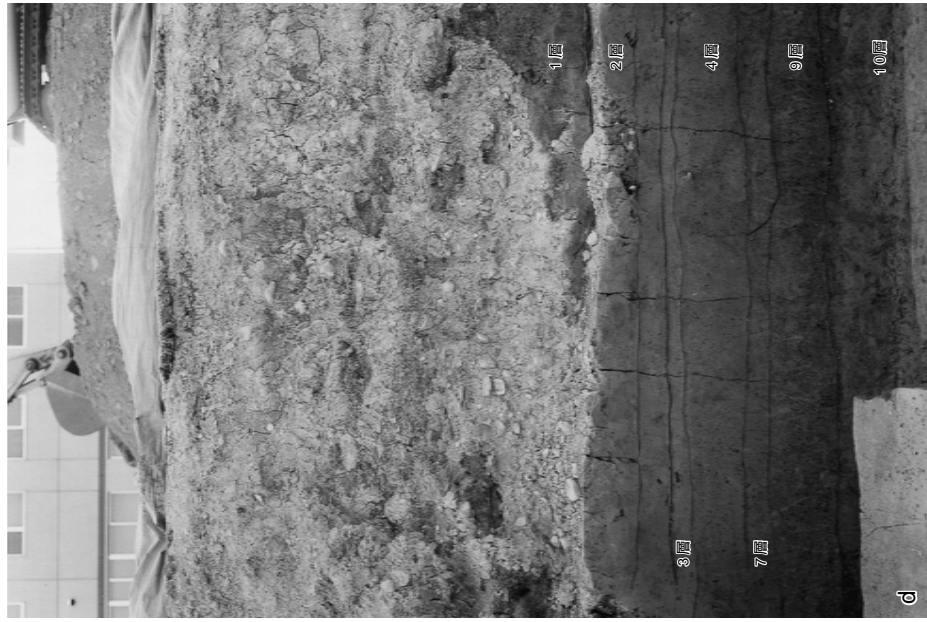


図11 調査区土層断面(2) 北壁・東壁

表2 基本土層の上面向高(標高cm)

土層	南壁 (a・b断面)				西壁 (c~f断面)				北壁 (g~i断面)				東壁 (j~k断面)				比高差
	a: 東端	59ℓ	60ℓ	60ℓ	c: 南端	BYℓ北2m	BXℓ	d':	g: 西端	60ℓ	56ℓ	57ℓ	i: 東端	BVℓ	BWℓ	k: 南端	
2	-	173	178	163	-	163	163	163	145	145	145	145	158	148	148	148	15
3	151	144	151	145	-	151	145	145	143	143	143	143	143	148	148	148	15
4	-	-	-	139	-	139	138	133	128	132	133	140	143	131	132	136	15
5	-	-	-	-	-	-	-	-	115	123	122	123	125	118	122	126	12
6	143	138	143	143	140	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	133+	-
7	126	121	108	123	123	125	123	122	-	-	-	-	-	-	-	-	10
8	93	86	108	-	-	-	-	-	103	103	113	113	113	104	110	112	92
9	81	78	103	103	103	103	98	89	81	89	95	98	100	81	79	80	27
10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25



- a. 北壁 h 断面：58ライン付近（南から）
- b. 南壁 a 断面：57・58ライン間（北から）
- c. 南壁 b 断面：59ライン付近（北から）
- d. 西壁 d 断面：BXライン付近（東から）

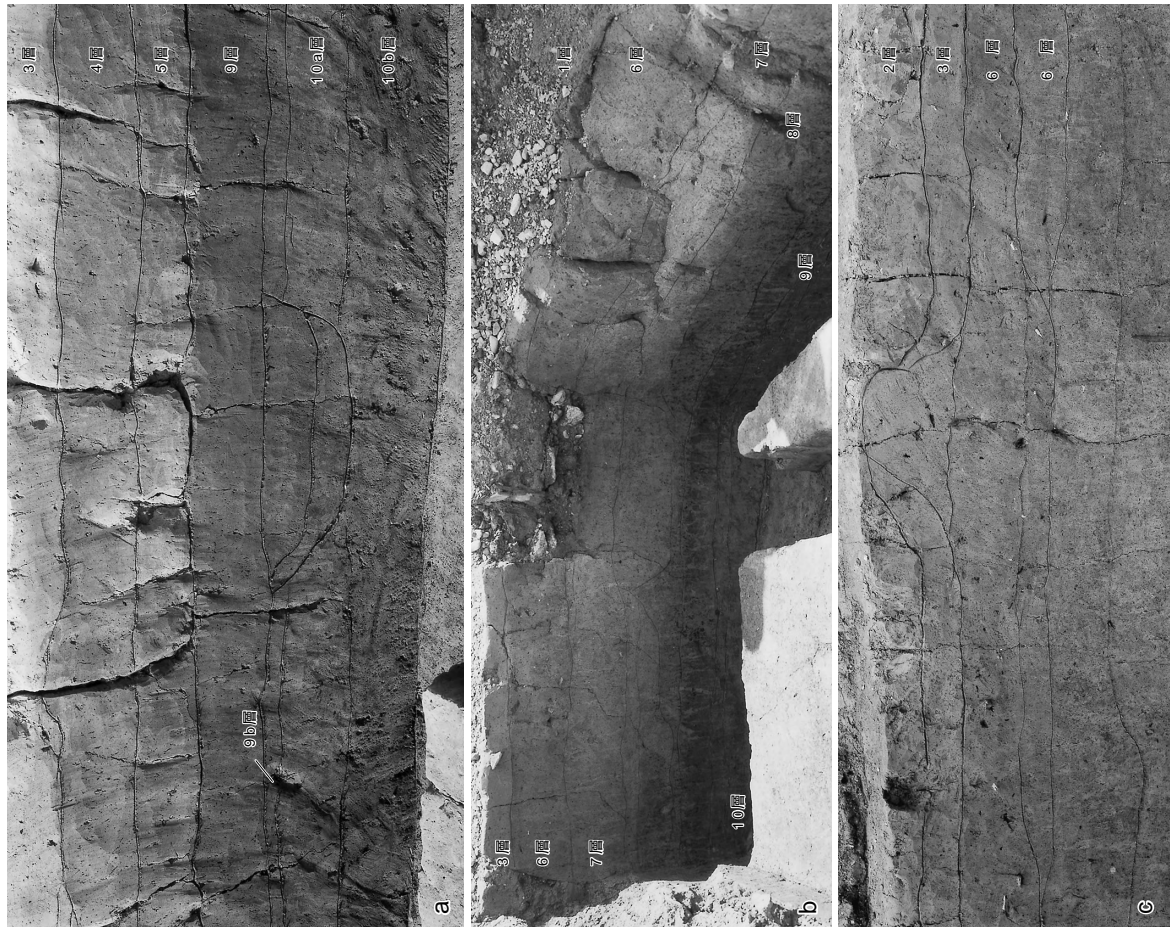


図12 調査区土層断面(3)

遺物はコンテナ3箱の量が出土しているが、近代の陶磁器を含んでおり、本土層は同時期の耕作関連土層と評価される。

5層(中世前半): 暗緑灰褐色粘質土～黄緑灰褐色粘質土が中心である。西壁面ではやや粘性が弱い灰褐色土となる。鉄分の沈着が特徴的であるが、一部でマンガンの沈着も認められる。北壁では小礫を含む。全体的に均質な土質である。4層との類似性から不明瞭な部分もあるが、本土層よりはやや暗い色調として区別した。

上面の高さは、全体的には標高1.2～1.27mの安定した広がりを見せるとともに、調査区北西部では標高1.15mまで低下する。高低差は約12cmである。土層の厚さは10～15cmが中心となる。

本土層は、4層形成による削平の影響で一部の範囲で堆積を確認することができない。堆積する範囲を平面的に確定することはできなかったが、調査区壁面あるいは遺構検出面などの検討から、中央部をL字形に走る溝の北側～東側の範囲を中心とし、溝の南側ではBVライン以北の範囲に堆積が予想される。このように4層によって一部が削平される一方で、下層に向けての削平も顕著であり、下面レベルは調査区南半に残る7層上面レベルよりも低く、時代の断絶する9層上面にまで到達する範囲も広く認められる。

また、6層が残る調査区南端付近では、本土層の上面は本来標高1.4m以上にあったことになり、残存する5層の上面高(標高1.2～1.28m)とは大きな差が生じる。本来は、その間に段差に近い比高差があった可能性が考えられる。

上面で検出される遺構は、近世に属する土坑群と中央部をL字形に走る溝群のみである。遺物は、コンテナ2箱の量が出土している。14世紀代までの遺物を中心とし、近世陶磁器類は含まれない。こうした遺物の出土状況や上面が4層(近世土層)によって削平されている点から、上面に残された近世の土坑は上層に由来する遺構と判断され、本土層は中世前半に形成されたと考えられる。実年代の目安としては14世紀を前後する時期が求められる。

6層(中世前半): 灰色系の砂質土～粘質土をベースとする土層である。炭化物・焼土・土器などの包含物が顕著に認められる場合が多く、そうした包含物の差によって細分が可能である点も、他の土層とは異なる特徴である。

上面の高さは標高1.4m～1.43mが中心である。一部に数値が低い部分もあるが、下部に深い遺構があることが影響していると考えられる。こうした数値は4層上面のレベル(標高1.35前後～1.4m前後)に近く、上部に堆積する3層の形成によって4層上面と連続した一連の面を成すことがわかる。さらに、4層あるいは5層による削平も上面レベルの比較から明らかである。こうした上層の削平のために本土層の堆積が残存する範囲は狭く、BYラインのやや北側から以南の調査区南壁周辺においてのみである。

土層の厚さは、下部に溝(東西方向に走る溝6)が存在しない部分では17cm、溝6の上部においては20～30cmを測る。土層形成初期において、同溝の上部を埋めるような経過をたどりつつ堆積していることがわかる。

細分される土層について、もう少し詳細に説明しておこう。その堆積が明瞭に観察できる南壁面の様相からは、～層の3群に大別される。層は、炭化物・焼土・土器などの包含物を含み、黒色化する特徴を示す。層は、黒灰色砂質土～暗灰色粘質土を呈し、特に土器の包含が多い傾向を示す。また、細砂の包含も認められ、砂質を強める結果となっている。群は黒灰色粘質土である。特に、炭化物と焼土の包含が顕著であり、炭層の様相を呈する。層は、黄灰色～灰褐色あるいは灰橙色の粘質土で鉄分の沈着が顕著である。炭化物の顕著な包含がない点で層とは異なるが、一部で焼土や細砂の包含が認められる。この点は上層の影響を窺わせる。上面レベルは、層で標高1.4m前後～1.43m、層では同1.33～1.42m、層は同1.31m程度を測り、全体的に上下関係を示す。

以上の特徴から、層と層は堆積順序には先後関係を持つにしても一連の堆積であり、その性格としては、例えば火災などのような被熱後の整地に伴って生じた土層の可能性が考えられる。それに対して、層は、土質

の違いに加えて、上面において確認されるピットの存在を積極的に考慮すると、**5層**とは時期的に区別されるべきであるが、ピットの存在は南壁面のみであり平面的な検出ができない点は問題として残る。現時点では、**5層**・**6層**と近い時期のものではあるが、それ以上の考察は今後の資料の増加と分析に委ねたい。

上面では中世前半期のピットが数多く検出される。出土遺物は、堆積範囲の狭小さから多くはないが、13世紀代に属するものを中心としており、同時期に形成された土層と考えられる。土地利用としては、集落内の屋敷地としての利用が想定される。

7層（古代末）：灰褐色系の粘質土を主体とする土層であるが、南東部では鉄分の沈着から黄灰褐色粘質土、南西部ではやや暗色化が進み暗灰褐色粘質土となる。上面の高さは標高1.16～1.26mを示すが、標高1.22～1.26mが中心的である。比高差は10cmである。上面の数値は **5層** 上面（標高1.2～1.26m程度）と近似しており、**4層** 形成段階における削平の影響を示す。土層の厚さは10～15cmである。

堆積範囲を平面的に確認することはできなかったが、調査区壁面あるいは遺構の検出面などの検討から、調査区の中央部を走るL字形溝で囲まれた南西側と予想される。同溝の北側～東側については **5層** による削平が深く達しており、本土層は完全に消失している。

上面では、溝の他に多数のピットが検出される。いくつかの遺構からは中世前半の遺物が出土しているが、上層からの掘削の可能性も考えられる。出土遺物は、12世紀末～13世紀の特徴を示し、その分離は判然としない。溝6との関係から古代末の土層と考えたい。集落内の屋敷地としての利用が想定される。

8層：茶褐色を強めた灰褐色系の粘質土である。鉄分あるいはマンガンが比較的多く沈着する。下層の **9層** と類似する傾向が指摘される。上層による削平や遺構による破壊などから、堆積が確認された範囲は調査区の南西部のみであり、厚さ10cm程度の堆積を見せる。

上層の高さは標高1.03～1.11mで、比高差は7cm程度であるが、極めて狭い堆積域を考えると、この数値が全体の状況を示しているかどうかは疑問である。下面レベルは標高0.9m前後である。これは直下層を形成する **9層** の中で最も低い数値であり、同層の中で最も低い地形が広がる地域に本土層が残されていることとなる。やや低い地形にあたっていたため、上層の削平がおよばなかったと理解される。

本土層に伴う遺構・遺物を確認することはできないため堆積時期の決め手に欠ける。上層との関係から古代までに形成されていたことは確かであろう。

9層（古墳時代初頭）：褐色を強める暗褐色系の粘質土で、暗褐色粘質土あるいは暗灰褐色～茶灰褐色粘質土を呈する。鉄分の他にマンガンが多く沈着する傾向が特徴である。北壁断面では灰色を強め、上層がやや暗い灰（褐色）粘質土、下層（**9b層**）は灰褐色粘質土に細分される。

調査区全域に堆積が確認されるが、上面に堆積する **5層** によって上部は削平される。上面の高さは、標高0.86～1.13mを示す中で、同1m～1.13mが中心をなし、比較的安定した数値の広がりを見せる。ただし、この数値が本来の地形を直接示すかどうかについては、**5層** 形成段階の削平を考えると注意する必要がある。やや数値が低い地域は、やはり北西隅（標高1.03m）あるいは東壁中央部付近（同1.0～1.04m）であるが、その他に、特に低い数値を示すのが南東部である（同0.86～0.93m）。この点は上層と異なる。この範囲では本土層の上部に直接堆積するのは **8層** である。両土層が接するラインの状況を分析するには十分な面積が確保できないため、**8層** による削平の有無は不明であるが、**7層**・**8層** の存在を考えると、少なくとも同地域に低い地形が広がっている可能性は高い。

調査区全体での比高差は27cmを測り、上層には見られない高低差の存在が際立つ。また、**5層** による削平を考えると、本来の高まりは、こうした数値以上であり、その差はさらに大きかった可能性も考えられる。つまり、全体としては西壁側および北壁側が高く（平均値：標高1.1m前後）、その中で調査区の中央部を北東から南西に向かって高まりが広がり、南東側に向けて低い地形（平均値：標高0.89m）へと移行行く状況が復元される。

微高地部と低位部の区別が比較的明瞭な地形が想定される。

本土層では、上層に由来する中世の遺構に加えて、古墳時代初頭に属する竪穴住居・掘立柱建物・井戸などの遺構群を検出した。主要な遺構は地形的に高い地域に集中している。遺物はコンテナ3箱程度の量が出土した。いずれも古墳時代初頭に属する遺物であり、本土層は同時期の堆積土と判断される。

10層：やや淡い灰色系の粘質土あるいは砂質土を基調とする。鉄分の沈着が顕著であり、橙色あるいは黄色を強く帯びる。粘性の違いあるいは橙色化の度合いなどから上下層（10a層・10b層）に細分が可能な場合が多い。10a層は粘性が強い傾向があり鉄分の沈着の影響から橙色化が進む。10b層は10a層よりは粘性が弱く砂質傾向を強める。全体に人工的な包含物などを含まない土層であるが、10a層上部では9層の影響からやや汚れが認められる。

上面の高さは、10a層では標高0.78～1.03m、10b層では同0.65～0.85mを測る。比高差は25cm・20cm程度である。10a層では西壁あるいは北壁側の数値（同0.9～1m）が高く、北西隅あるいは東壁～南壁（同0.8m前後）が低い。北東部から西壁に向けての高まりが想定される。10b層についても北東部から西壁へのラインが高い数値（標高0.85m）を示し、北西部および東壁で同0.65m前後、南壁では同0.75m前後と低い数値となり、高い部分の面積はさらに狭まる。

9層と比較すると、地形は北東部から西壁側が高い点は共通するが、微高地部の範囲は狭いものとなり、10a層からさらに10b層ではその傾向を強める。また、微高地と低位部のレベル差は際だつものではなく、その境は曖昧な状態であろう。全体的に、低位部の範囲が比較的広く起伏に富んだ地形が予想される。安定した微高地が発達していない段階といえよう。

10a層上面では、古墳時代初頭の遺構が検出された。これらは上層に由来するものと判断される。包含される遺物量は極めて少ない。本土層は古墳時代初頭までに形成された堆積土であり、同時期の基盤土層となっていると判断される。

以下の土層は、基盤層の堆積状況を観察するために、西壁の一部で確認した土層である。

11層：やや褐色を帯びる暗灰色粘質土で鉄分が沈着する。遺物は含まない。上面は標高0.49mに位置する。

12層：暗灰褐色粘質土で、鉄分が沈着する。粘性がやや強いが、10層に類似する。上面の高さは標高0.43mである。

13層：暗褐色粘土層であり、他の土層と明瞭に区別される。上面は標高0.38mに位置する。

14層：暗灰褐色のシルト層である。褐色の砂を含む。上面の高さは標高0.35mを測る。

（2）地形の推移

古墳時代初頭以前（14～10層）

古墳時代初頭までに堆積したと考えられる土層は、14層～10層である。その中で、13層は粘性の高い土層で黒色を強める。有機物が未分解の状態のような土層であり、湿地的環境がひろがっていた可能性が考えられる。また、12層は10層に共通性が求められるため、近似した環境であったことが予想される。

10層段階では、調査区の北東部から南西部に向けて高まりが存在する。微高地部の範囲は狭く馬の背状の様相を示す。微高地と低位部との比高差もさほど大きくない状態から、微高地の形成は不十分な状態が予想される。

古墳時代初頭段階（9層）

9層段階に入ると微高地の形成が進行する。10層段階の狭い微高地が北東から南西に走る地形を踏襲しつつ、東西方向にその微高地部を拡大することで安定した広がり形成される。一方、低位部にあたる調査区の

南東部においては地形の下降が顕著に認められ、微高地と低位部の差が明瞭な地形が復元される。

こうした地形復元に関して、上層の削平を考慮しなければならないが、中世以降の地形と比較すると、全体的に比高差が際だって大きい点に加え、復元した微高地部に主要な遺構が集中する状況から、ある程度本来の地形を反映していることが予想される。

古代末～中世前半（8～5層）

本時期の地形は、対象となる土層の多くが上層形成時の削平によって消失しているため復元は困難である。

ただし、6層について確認すると、その分布範囲は限定的ではあるが、遺構の集中域にあたること、遺物量が多く炭化物や焼土の包含も顕著であることから、調査区の南半部に集落の屋敷が広がっていたと評価されており、この状況は南東部に低位部が広がる地形を呈する9層段階の状況とは大きく異なっている。9層段階以降、微高地部の広がりが拡大し、主要遺構分布の中心位置が南側に变化していったことが想定される。

近世・近代（4～3層）

4層・3層は、地形的な高低分布・上面の比高差・層厚について共通性が高い。地形は、段差はあったとしても全体としては平坦な状態が復元される。平坦化への進行は、前段階以降急速に進むと考えられ、造成に伴う削平が、5層上面にもその影響を刻んでいる。4層段階にみられた北西部のやや低い状態も3層段階では姿を消し、平坦化が一面に進行していく状況が認められる。いずれの土層でも、比高差は15cm程度、層厚は10cm程度が確認されており、その形成過程が一連のものであったことを窺わせる。また、耕作関連遺構の存在や時期幅が大きい包含遺物からも耕作地としての土地利用が窺われる。耕作地として、3層に至るまで、下層への削平を繰り返しながら、継続的に利用される状況が復元される。

3. 古墳時代初頭の遺構・遺物

遺構は、竪穴住居4棟・掘立柱建物2棟・杭列1列・井戸1基・土坑7基・土器溜まり1ヶ所、溝5条・ピット52基が、9層～10層において検出された（図13・14）。その他に、焼土分布が1ヶ所で見られる。こうした遺構は、調査区の北西部から中央部にかけて、偏在的に分布する。その範囲は基盤土層が高い地域に一致する。一方、地形が低い傾向を強める東南側に向けて、遺構密度は極端に低下しており、地形と集落立地の関係に強い関連性を示す。

遺構の配置は、調査区北西部に竪穴住居、調査区中央部東端に井戸が位置し、その間に主要な遺構が分布する。竪穴住居を中心みると、南東側へ約10mの場所に建物、その5m東に井戸が位置する。そして、住居から南へ5～10mのあたりには、焼土を包含する不整形の遺構（土坑・溝）と土器溜まりが集中的に分布しており、何らかの作業空間の存在が想定される。さらに、その周囲には焼土を包含するが小規模で単独の遺構、あるいは粘土を包含する土坑などが点在する。このように、住居を中心に、多様な遺構が種類ごとに配され、外側に向かって希薄になる状況が抽出される。また、南北方向に走る溝の存在も注目される。同時性の問題は残るが、いずれかの住居と関連を持つことは十分に想定され、集落の区画を意識した機能を有した可能性が考えられる。このような遺構配置からは集落内での空間利用形態を見ることが出来る。

竪穴住居の平面形は隅丸方形あるいは円形のものと同方形がある。掘立柱建物2棟は主軸方向は共通するが、両棟が接する位置にあることから同時性は考えにくい。杭列については、攪乱によって確認できないが、掘立柱建物になる可能性も残る。その他の柱穴で、建物・杭列としてまとめられなかったものは多くはない。住居・建物などの遺構数に大きな変更はないと判断される。

集落の継続時期幅は、遺構の重複関係や建物の位置関係などから複数の段階が想定されるが、その中でも、作業域での小形遺構の切り合い関係の頻度の多さは、他の遺構と比較して顕著である。これは、その利用形態

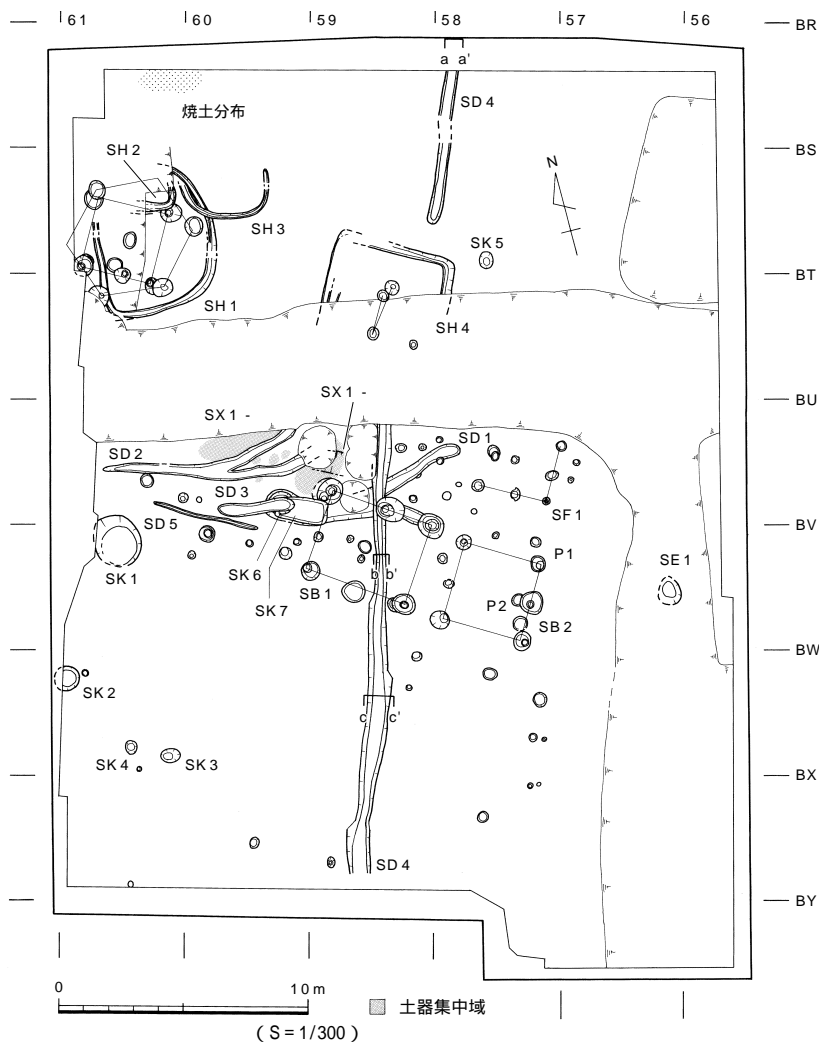


図13 古墳時代初頭遺構全体図

の違いを示すのものである。一方、出土遺物からは、特に甕の特徴に少なくとも新旧2時期の差を認めることができる。ただし、それ以外では明確な違いを抽出し段階を確立できるほどの差を示さない。こうした状況から、集落としての継続期間は比較的短期間であったと考えられる。

本調査地点に広がる集落は、遺構分布が調査区より西側にどの程度広がるかは未知数であるが、現段階の資料からは、集落としては最少の1単位を構成していると評価される。



図14 古墳時代初頭遺構全景

a . 竪穴住居

竪穴住居1（図15～18、図版8）

調査区の北西部BS～BT59～60区に位置する。検出面は標高1.05～1.08m、9層であったが、調査開始段階から、西側半分以上が後世の攪乱によって大きく破壊されており、その断面（c断面）に姿を現していた。また、一部には竪穴住居2・3が重複する。

完掘の結果、下部に古い住居の痕跡を確認することとなり、複数回の建て替えが行われた住居であることが判明した。小形の住居から大形化した隅丸方形の住居へ、そしてさらに後者においては4本柱から6本柱への建て替えがなされたと理解される。完掘段階での深さは0.45～0.5mである。以下、古い段階の住居から説明をして行く。

古段階にあたるのは、不整形な方形に近い形状をなして壁溝がめぐると判断される遺構である。同溝は新段階の住居下面で検出された。検出レベルは標高約0.8mである。南半において一部が確認されたのみであるが、長辺（南北方向）が4.7m、短辺（東西方向）は4m程度の規模が予想される。溝の幅は20～25cmで深さは5cm前後が残る。古段階に伴う土層は6・7層であり、壁溝は6層にあたる灰色粘質土で埋まる。床面は明瞭ではなく、7層がその一部となる可能性はあるが、残存率が低く床面となるような特徴も示さないため確定的とは言い難い。床面の高さは残存部分で標高0.86～0.89mを示す。共伴する柱穴は確認されない。

新段階にあたる住居は、標高1.05～1.08m、9層で検出された。西半部が大きく破壊されているため、正確な形状は確定できないが、平面の残存状況から長辺6.5m、短辺6m程度の隅丸方形の形態が推定される。古段階の住居との位置関係は、南東部の壁面を踏襲し、西側と北側に拡張されていることが、断面観察から読み取れる。本段階を構成する埋土は1～5層である。その中で床面と判断される土層は2～4層であり、少なくとも1回の建て替えが想定される。1段階の埋土が4・5層であり、2段階が1～3層にあたる。壁溝はいずれの段階でも明瞭ではない。柱穴に関しては、大きく2段階にわたる形成を見ることができるため、新1段階と新2段階として、床面・柱穴の状況を説明しよう。

新1段階では、床面（4層）は標高0.93～0.95mの位置にある。古段階の住居上を、やや汚れのある灰褐色粘質土層（5層）で埋めた後に灰色粘質土で床を形成している。マンガンの沈着が顕著である。柱穴は、床面除去後に、標高0.8～0.85m前後で検出したP1～4の4本が対応する（図17）。断面観察から、P3では床面を形成する4層上面に掘削面を確認することができる。直径は、P2が0.6×0.65mとやや小形であるが、他は0.8m前後を測る。P1～3は深さ0.5～0.55m、底面の高さは標高0.3m前後を示し、いずれも直径0.2～0.25mの柱痕跡を残しており、深くしっかりした形態を有する。それに対して、P4は深さが0.44m、底面高が標高0.4mと他よりは浅く柱痕跡も確認できなかったが、同地点が後世の杭などの影響でグライ化が顕著である点が、その違いの背景にあると判断される。柱間の距離は各2.8mを測る。これら4本の柱穴のほぼ中心に、P9が位置する。検出面は、他の柱穴よりは低く標高0.65mである。規模は直径0.53mであるが、深さが0.2mで底面は標高0.53mに位置する。非常に浅い形態という点で他とは異なる。また、埋土についても、柱痕はなく、他には見られない炭層が顕著に堆積している点も他と区別される。こうした特徴を有するP9が、本住居に共伴するかどうかは明確ではないが、住居内外に他のピットの分布が極めて少ないことや、P1～4の柱穴との位置関係から、住居の中央穴にあたる可能性が高いと判断している。

新2段階では、床面は2層と3層にあたる。2層は標高1.01mを中心に、中央部では同1.03m（c・d断面）周縁部では同0.96m（b断面）の数値を示し、中央部が高い傾向が認められる。土質は灰色粘質土である。また、量的な差はあるが全体的に焼土の包含が指摘できるほか、鉄分の沈着が顕著である。レベルが高い傾向を示す中央部において、炭化物および焼土の包含量が増加するなかで細分が可能であり（a・b断面）同位置の周辺で床の細かな作り替えが繰り返されていることが想定される。3層に関しても同様の状況が現れており（c・d断面）

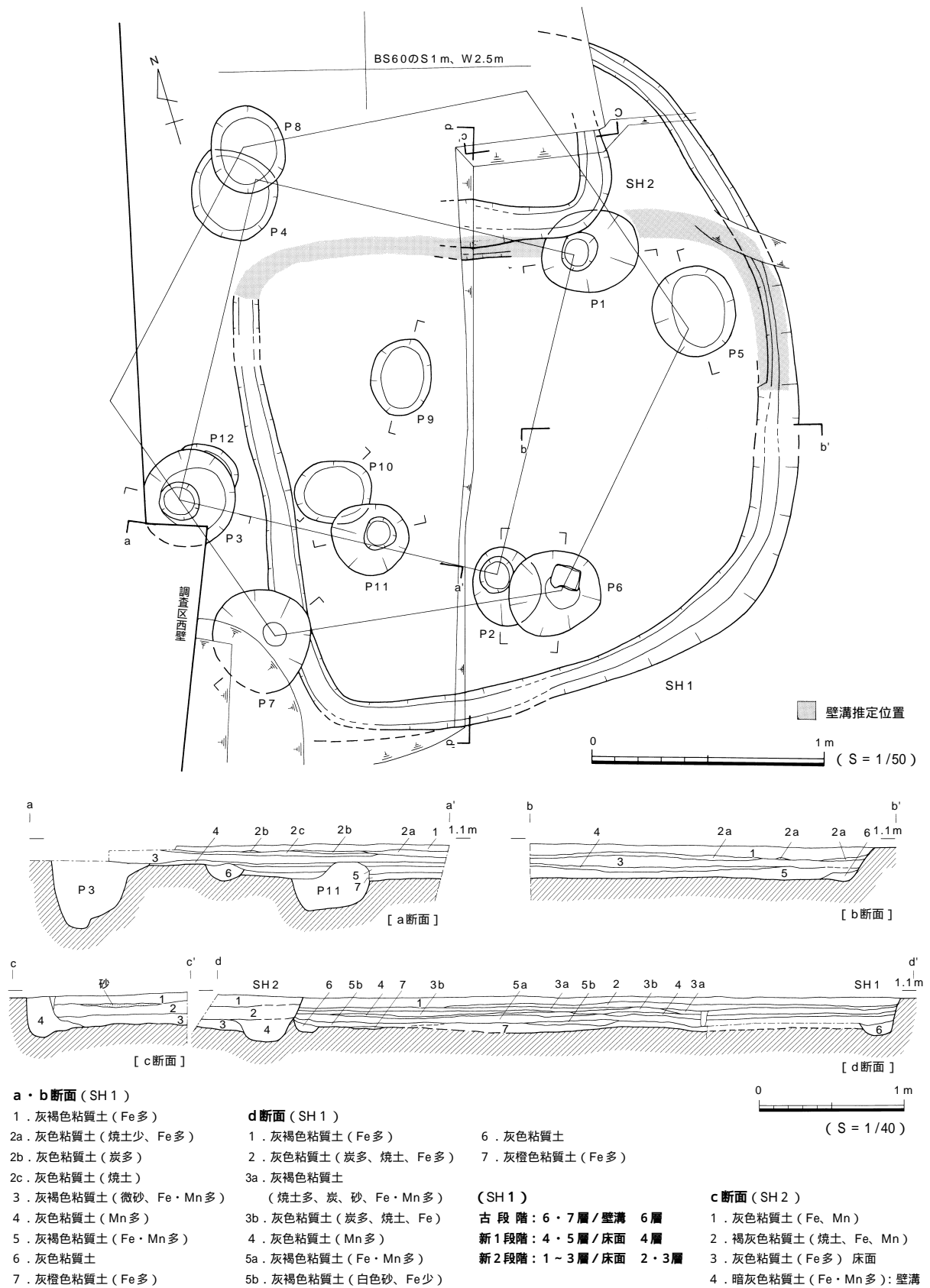
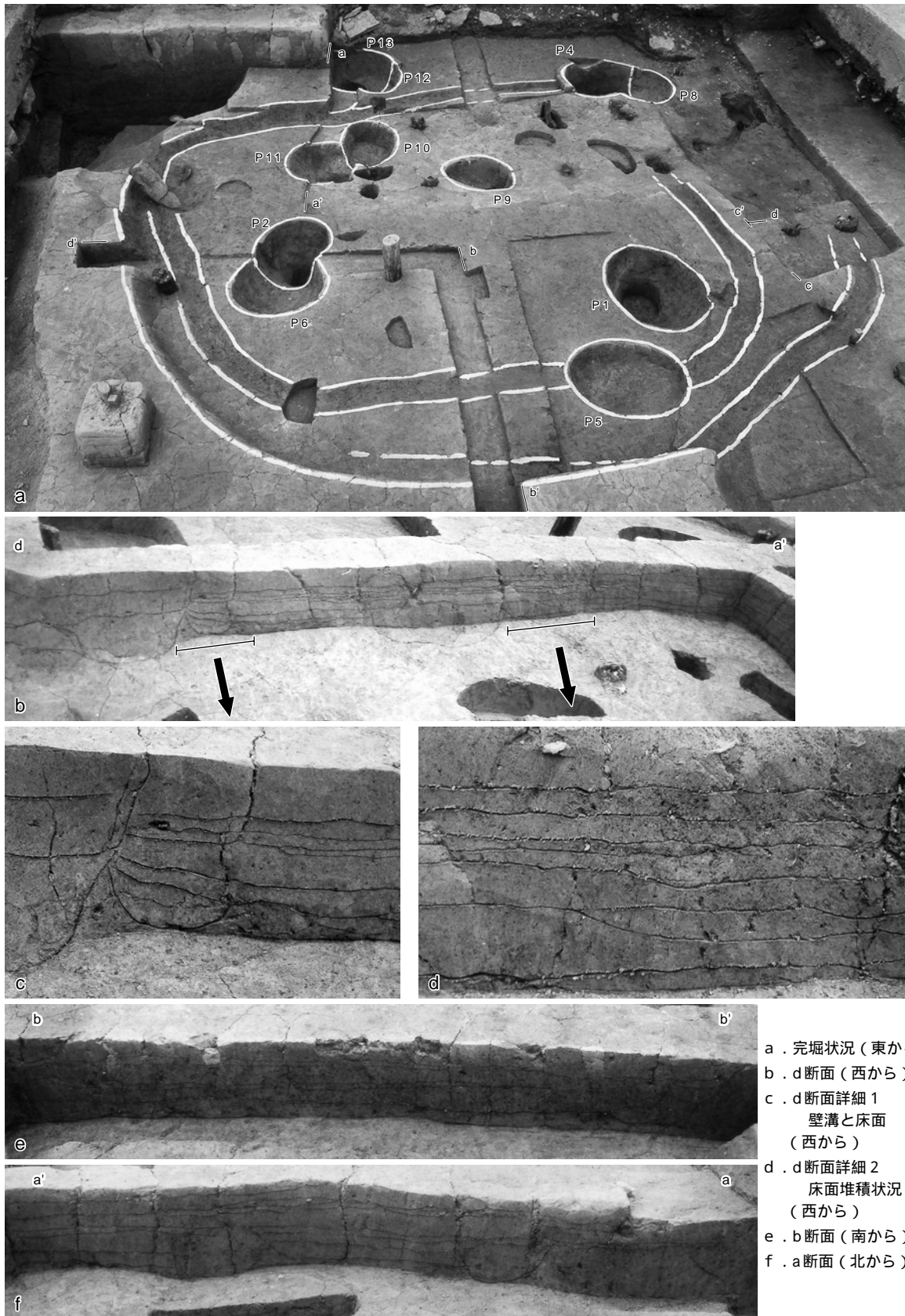
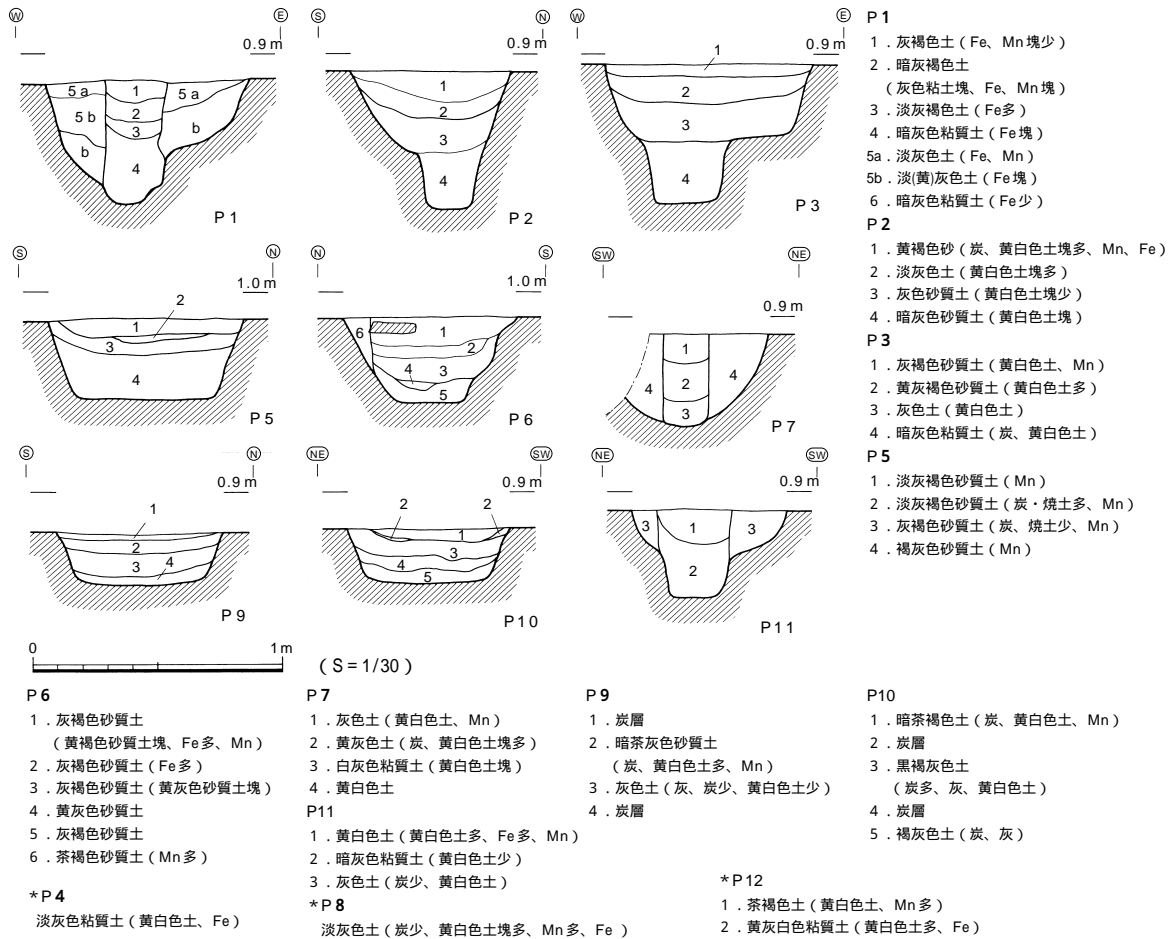


図15 竪穴住居1・2



a . 完掘状況（東から）
 b . d断面（西から）
 c . d断面詳細1
 壁溝と床面
 （西から）
 d . d断面詳細2
 床面堆積状況
 （西から）
 e . b断面（南から）
 f . a断面（北から）

図16 竪穴住居1



柱穴一覽

住居番号	本数 (復元数)	柱穴番号	検出高 (標高m)	直径 (m)	深さ (m)	底面高 (標高m)	柱痕径 (m)
新	4	1	0.78	0.8 × 0.7	0.5	0.31	0.2
		2	0.81	0.65 × 0.6	0.55	0.26	0.2
		3	0.85	0.83 × 0.8	0.56	0.295	0.25
		4	0.88 - 0.78	0.75	0.44	0.407	-
新	4 [6]	9	0.65	0.53	0.2	0.53	-
		5	0.88	0.78 × 0.7	0.32	0.57	-
		6	0.88	0.8 × 0.7	0.34	0.56	-
		7	0.8	0.85	0.36	0.43	0.17
		8	0.78	0.75 × 0.6	0.2	0.57	-
		10	0.75	0.65 × 0.55	0.22	0.53	-
		11	0.83	0.62	0.35	0.48	-

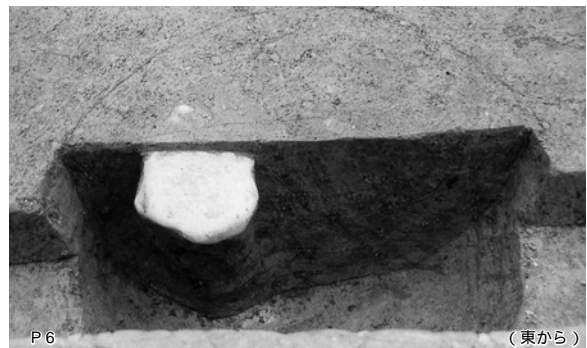
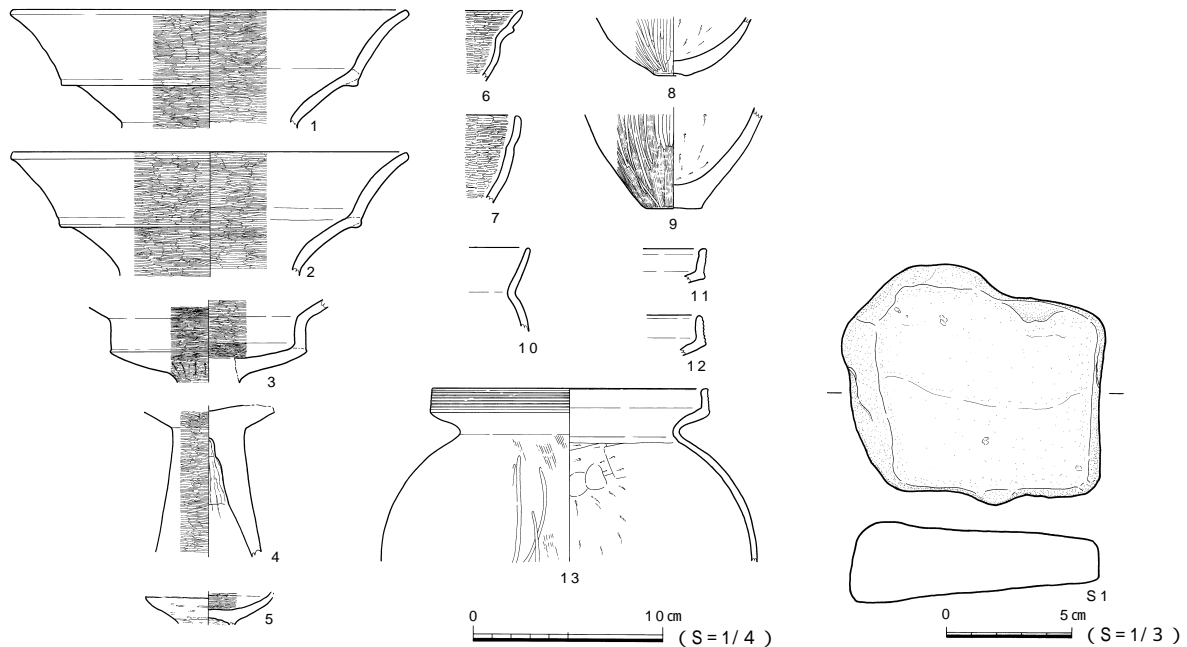


図17 竖穴住居1 柱穴

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

その特徴は2層以上に際立つ。標高0.96~0.99mに位置する3層（a・b断面）では炭化物などの包含物が認められないのに対して、中央部では細かな堆積を繰り返して3a・3b層を形成する、その堆積は標高0.97~1.03mに盛り上がる。炭化物・焼土を非常に多く含む点も特徴的で3層との違いを見せる。ただし、土層の連続性からは対応する土層であり、住居の中央部あたりで加熱作業がなされ、盛んに床面の修復が行われたと想定される。この段階に伴う柱穴はP5~8の4本が確認される。検出レベルは標高約0.8m~0.88mである。床面除去後の検出ではあるが、その位置関係から住居との関連が求められる。全体的には、直径は0.7~0.85m、深さは0.32~0.36mで、底面の高さは標高0.43~0.57mを測る。新1段階と比較すると、平面形態は共通するが、深さが浅く断面形態に大きな違いを示す（図17）。柱痕についても、P7で若干見られるが、新1段階の状況ほど際だつものではない。P8に関しては新1段階に見られたP4と同様にグライ化の影響が指摘される。以上のように、柱穴は4本のみが確認されたが、P5・6・7の距離からは柱間が2.5mを示すこととなり、そういう点も考慮して復元すると、調査区外と攪乱部にそれぞれ1本の柱穴が想定され、合計6本で構成されることとなる。柱間は2.48~2.5mとなる。P6からは扁平な石が出土しており（図17・18）、礎石の機能が想定される。

以上の他に、住居内にはP10・11・12が検出された。位置関係からは、P12はP3の下に重複することから、新2段階に伴う可能性を有する。P10は新1段階との関係を求めたP9と非常に共通した特徴を示す。P11はa断面の観察や形態から新1段階の柱穴に共通性が求められる。しかし、位置的な問題から、それ以上の性格につ



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・高杯	*21.0	-	-	密な篋磨き・丁寧な作り（内）黒斑、1/6残存	精良、砂粒極少	黒褐/明橙褐
2	土師器・高杯	*20.6	-	-	密な篋磨き・丁寧な作り（外）光沢、二次的な被熱によって暗褐色化、1/6残存	精良、砂粒極少	暗褐/橙褐
3	土師器・高杯	-	-	-	密な篋磨き・丁寧な作り・光沢、炭化物付着（外）受部篋削り後篋磨き、1/2残存	精良、砂粒極少	明橙褐・薄橙褐
4	土師器・高杯	-	-	-	（内）絞り目・ナデ（外）密な篋磨き、摩滅	精良、砂粒極少	明橙/橙褐
5	土師器・器台	-	-	-	（内）密な篋磨き・黒斑？（外）篋磨き・摩滅	精良、赤色粒	黒褐/薄橙灰
6	土師器・鉢	-	-	-	密な篋磨き、摩滅	精良、砂粒少	薄黄褐・橙褐
7	土師器・鉢	-	-	-	（内）密で単位が狭短な篋磨き（外）器壁剥落	微砂、均質	明橙
8	土師器・鉢	-	1.5	-	（内）篋削り（外）密な篋磨き、底部外面に凹部、摩滅	微・細砂、均質	橙褐
9	土師器・鉢	-	*3.0	-	丁寧な作り（内）器壁平滑・篋削り後ナデ（外）縦ハケ後篋磨き、底部篋磨き、1/3残存	微・細砂、角閃石	薄黄褐/橙褐
10	土師器・鉢	-	-	-	器壁剥落顕著、口縁部は丸く収める	微・細砂、赤色粒	黄褐/橙褐
11	土師器・甕	-	-	-	口縁描沈線8条、横ナデ、口縁端部はやや丸み	微砂、精良	暗橙褐・茶褐
12	土師器・甕	-	-	-	口縁描沈線7条、横ナデ、口縁端部は丸み（外）頸部煤付着	細砂、赤色粒・角閃石	明褐・茶褐
13	土師器・甕	*14.3	-	-	口縁描沈線8条（内）肩部押圧（外）肩・胴部縦ハケ後に篋磨き・煤付着、1/5残存	微・細砂、角閃石	黄灰褐/暗褐
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S1	礎石	194.2	208.4	64.5	3572.4	流紋岩	表裏面が平坦な礎を礎石として利用

図18 竪穴住居1・2出土遺物

いては決めがたい。

遺物はコンテナ1/3箱(1箱28ℓ)程度の量が出土した。埋土あるいは柱穴5・6から出土した土器片、柱穴6から出土した石が含まれる。土器はいずれも細～小片である。

時期は、出土遺物から古墳時代初頭の範疇として捉えられる。

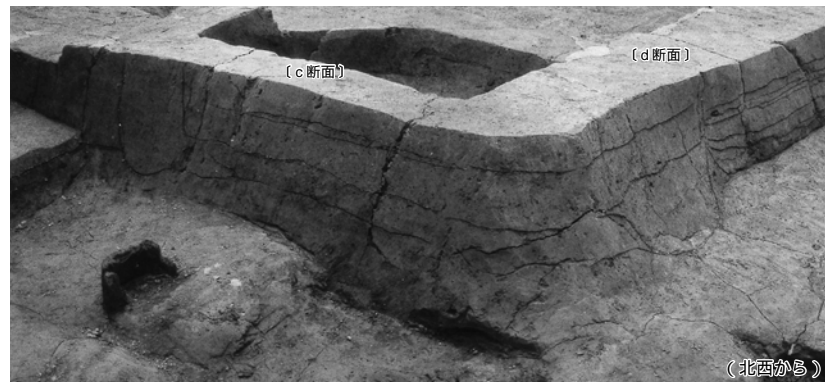


図19 竪穴住居2土層断面

竪穴住居2 (図15・18・19)

調査区の北西部、竪穴住居1に重複する状態で検出された。検出面は9層で、標高1.08mを測る。その多くが攪乱によって破壊されており、住居の南東部コーナーの一角が残存するに過ぎない。そのため、規模などの詳細は不明であるが、隅丸方形に近い平面形が推定される。深さは0.2～0.24mが残る。

埋土は灰色系の粘質土が水平堆積する。2層で焼土が包含される以外は特徴的な要素は認めがたく、床面の特定は困難である。壁溝は幅0.2～0.3mで深さ5～15cm程度が確認される。埋土は暗灰色粘質土(4層)で、鉄分・マンガンが顕著に沈着する。

出土遺物は僅か16片の甕・高杯片が認められるが、いずれも細片であるため詳細は不明確であるが、竪穴住居1と時期的な違いを見いだすことはできなかった。古墳時代初頭の時期に属すると考えられる。

竪穴住居3 (図20・21、図版7)

調査区の北西部、竪穴住居1の東側に位置する。BS59～60区にあたる。竪穴住居1の北東部コーナー上にわずかに重複する。また、本遺構の北半部についても、後世の攪乱で大きく破壊されている。検出面は標高1.04mで、9層である。

平面規模は直径2.55mの円形が復元される。壁溝(図21-4層)は幅0.2m前後、深さは5～8cmを測る。床面は、土層の堆積関係から3層上面(図21)に求められる。標高0.83～0.85mの高さである。柱穴の有無に関しては、少なくとも、竪穴住居1の古段階に見るような深いものを伴うことはないが、それより浅いものであれば攪乱による消失も考えられる。いずれにしても、竪穴住居1・4と比べると全体的に小規模な形態を示す。

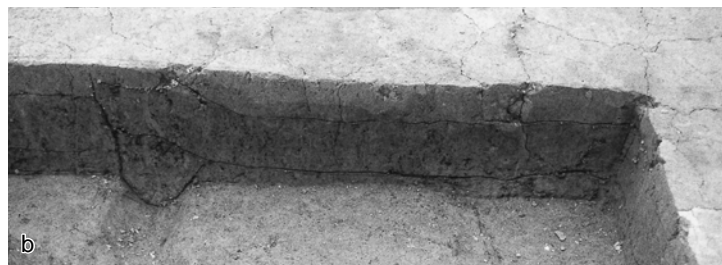
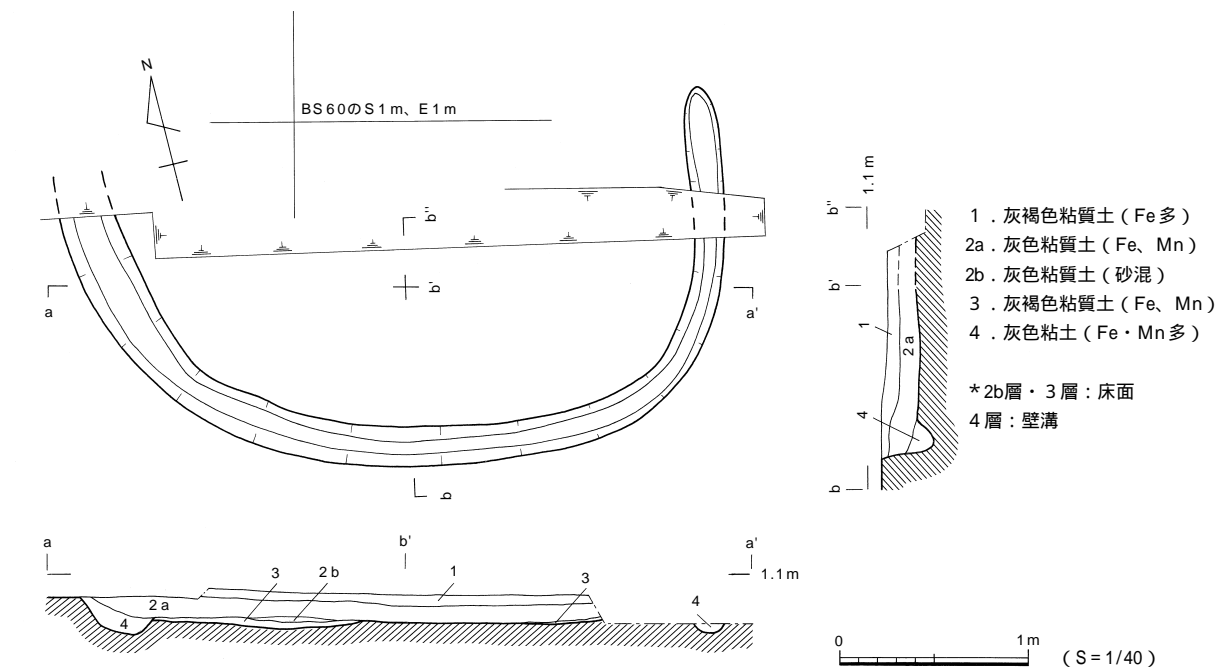
遺物は、埋土中から数片の土器と叩き石1点(図21)が出土した。土器片は細片である。

所属時期は、古墳時代初頭と考えられる。

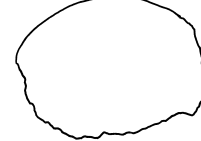
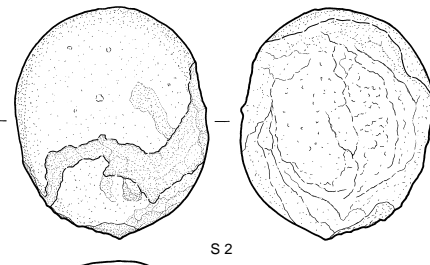


図20 竪穴住居3完掘状況

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）



a . a断面西半部（南から） b . b断面（東から）



0 5cm (S=1/3)

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
S 2	叩石	93.2	78.1	67.5	535.5	石英安山岩質凝灰角礫岩
特 徴						
裏面全体が使用によって大きく剥落						

図21 竪穴住居3・出土遺物

竪穴住居4（図22～24、図版7）

調査区の北側ほぼ中央部、BS～BT 57～58区に位置する。竪穴住居1から東に11m（中心間）、端部では4.5mの間隔を保つ。遺構の南半部は、中世溝あるいは近代の建物基礎によって大きく破壊される。検出面は標高0.85m、10a層である。また、建物の基礎除去後、10b層内にあたる標高0.4～0.61mの面において柱穴2基（図22 - P2・3）を検出した。

平面形態は一辺5mの方形住居が復元される。主軸方向（N30°E）は後述する建物とほぼ棟をそろえる。深さは約0.2mが残る。床面と考えられるのは3層・5層であり、いずれも灰褐色砂質土で砂粒が細かい特徴は一致している。炭化物などの汚れは認められない。壁溝は2層と4層に求められ、2条が復元される。柱穴は3基が検出されたが、その位置関係からP1とP2によって構成される2本柱の構造であったと判断される。この

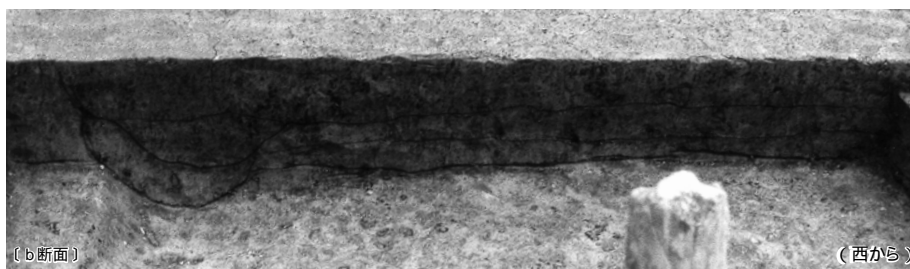
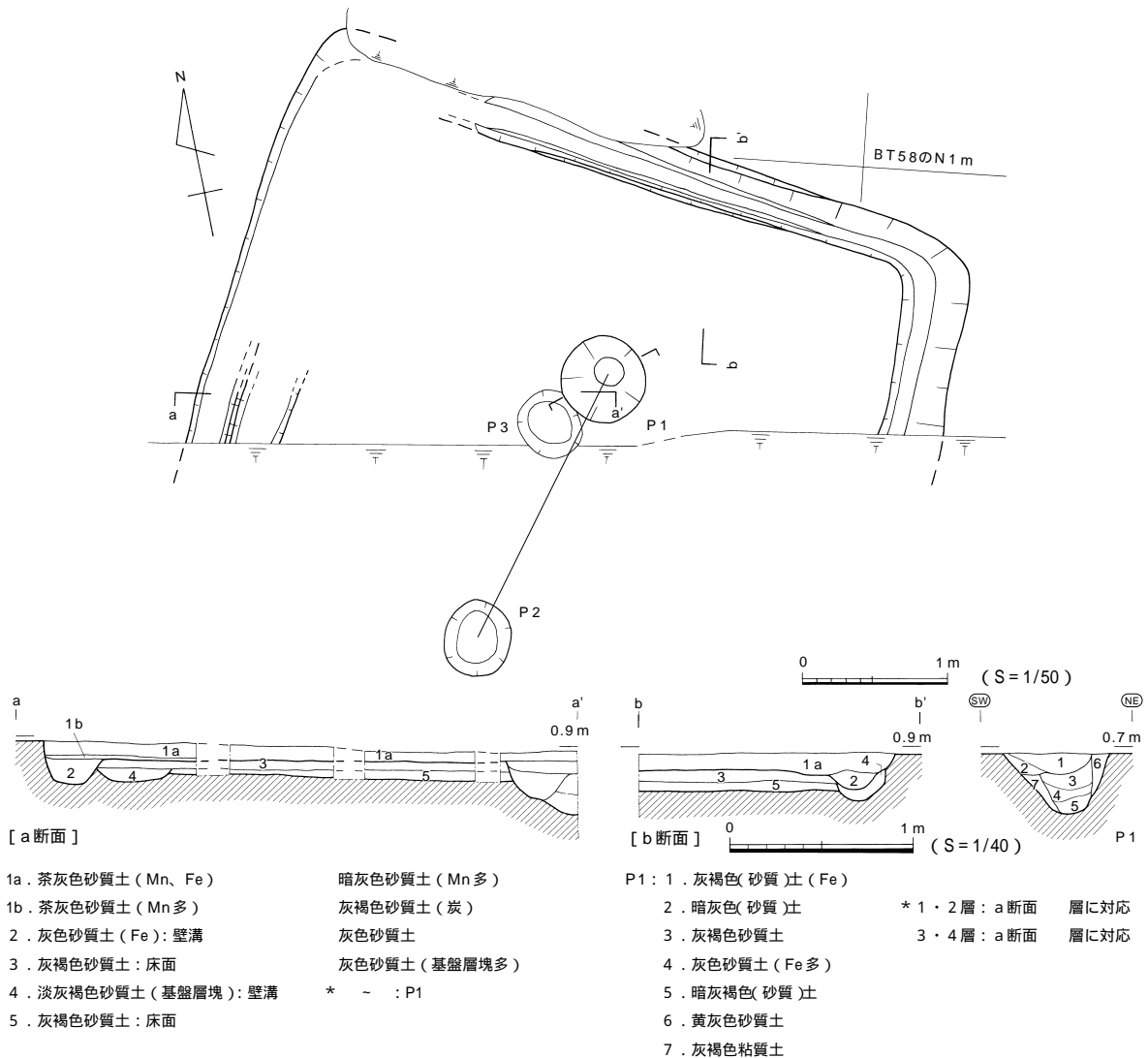


図22 竪穴住居4

ような床面・壁溝・柱穴の状況から、少なくとも1回の建て替えが想定される。古段階と新段階に分けて説明しよう。

古段階には4・5層が含まれる。床面を構成する5層上面は標高0.71~0.73mを測る。壁溝(4層)は、東側では新段階と重複するが、西側では新段階よりもやや東よりに位置することが断面観察で判明した。平面的には同溝を確認できなかったが、一辺4.7m程度の方形住居が復元される。壁溝は幅0.28~0.4m、深さ8~10cmを測る。

新段階には1~3層が含まれる。床面を構成する3層上面は標高0.78mを測る。壁溝(2層)は、東側では古

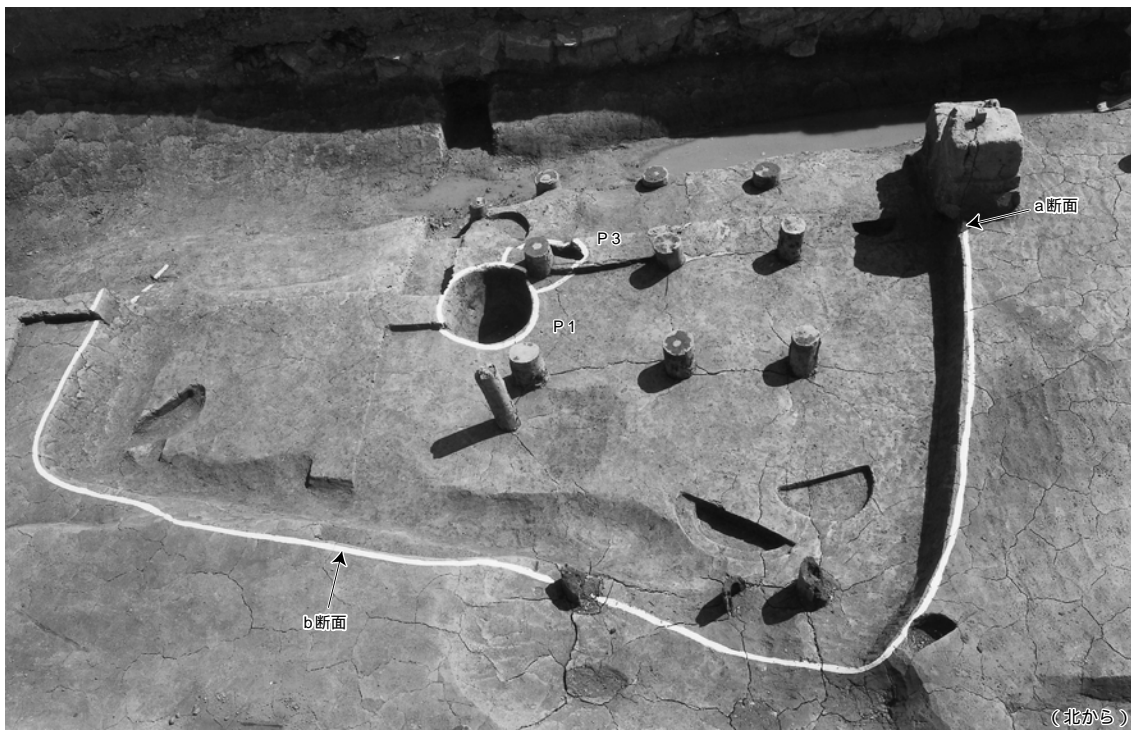
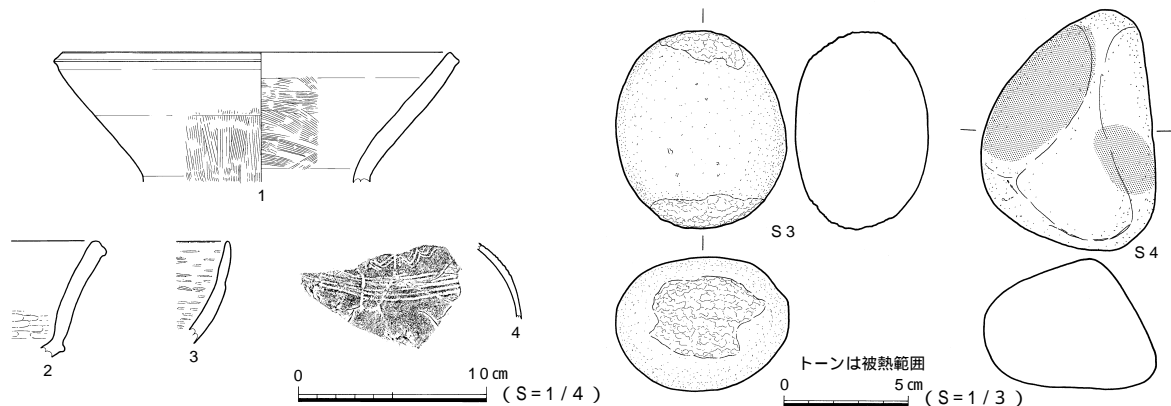


図23 竪穴住居4完掘状況



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・壺	*21.0	-	-	(内)板ナデに近いハケ後上端ナデ(外)下半縦ハケ後上半ナデ、1/4残存	細砂、均質	黄褐
2	土師器・壺	-	-	-	(内)下半に篋磨き痕・摩滅(外)丁寧なナデ	細砂、赤色粒	黄灰/灰褐
3	土師器・鉢	-	-	-	(内)横方向の篋磨き痕・摩滅(外)横方向の密な篋磨き	精良、砂粒極少	橙褐/黄褐
4	土師器・壺	-	-	-	(外)不定方向のハケ目痕・波状文と6条の沈線文、内面摩滅	微砂、均質	黄白/橙褐

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S3	叩石	79.2	67.8	53.6	412.9	流紋岩質凝灰角礫岩	円礫の両端に敲打による凹み
S4	被熱礫	70.2	97.0	52.1	459.3	流紋岩	図の左側面と右側の一部に被熱痕あり

図24 竪穴住居4出土遺物

段階の溝上に作り直されながら、西側では溝幅（約30cm程度）分が拡張され、一辺5mの方形住居に建て替えられている。

ピットは3基が確認された。それぞれの位置関係などから対応関係が想定されるのはP1とP2である。住居の中央に位置する両柱穴は直径0.5m～0.57m、底面は標高0.1～0.33mを測り、柱間は2mを保つ。P2は基礎除去後に確認されたもので詳細は不明な部分が多いが、P1では掘削面が2層上面に求められ、新段階に伴うことが判る。一方、P3は底面が0.6mと非常に浅いため他とは区別したが、住居外においてピットは極めて希薄であることを考慮すると、同住居に何らかの形で関わっている可能性は高い。

以上のように、壁溝や柱穴あるいは床面の点から建て替えがなされ、その建て替えの規模は住居を大きく改変するものではなく、古段階の状況を踏襲する形で新段階の住居が再建されたことが窺われる。一辺5m程度、2本柱の方形の竪穴住居である。

遺物は土器が約60片（13号ポリ袋1/3袋）・叩き石1点・被熱礫1点が出土した（図24）。土器の大半は細小片である。壺の中には、畿内系の土器（図24-4）が認められる。

所属する時期は古墳時代初頭である。

b. 掘立柱建物

掘立柱建物1（図25・26）

調査区の中央部、BU～BV58・59区において検出した。竪穴住居4の南4～5mの位置にあたる。検出面は標高0.88～0.93m、10層まで下がるが、本来は9層中からの掘削と判断される。

柱穴6本で構成され、桁行は北側および南側とも4.25m、梁行は東側で3.4m、西側ではやや短くて3.3mを測る2間×1間の建物である。短軸の方位ではN33°Eを示し、竪穴住居4の主軸とほぼ一致する。柱間は桁側では西側（P1-2、P4-5）で2.27m、東側（P2-3、P5-6）で1.98mを示す。

柱穴は、北側に並ぶP1～3と南側のP4～6の間に、規模などに多少の違いを見せる。前者の規模は、直径0.95～1.25m（中心は1.05m前後）、深さ0.63～0.84m（底面レベル：標高0.09～0.25m）を測り、いずれも明瞭な柱痕を残す。大形の掘り方を有し柱が深くしっかりと設置された様相を示す。一方、後者の規模は、直径0.73～0.95m（中心は0.85m前後）、深さ0.43～0.57m（底面レベル：標高0.35～0.46m）を測る。柱痕をかるうじて残しているが、規模の大きさが特徴的な前者との違いは明瞭である。

遺物はP2・3・4から甕あるいは高杯の細片が数片出土した。古墳時代初頭の時期に含まれており、本遺構の時期を示すと考える。

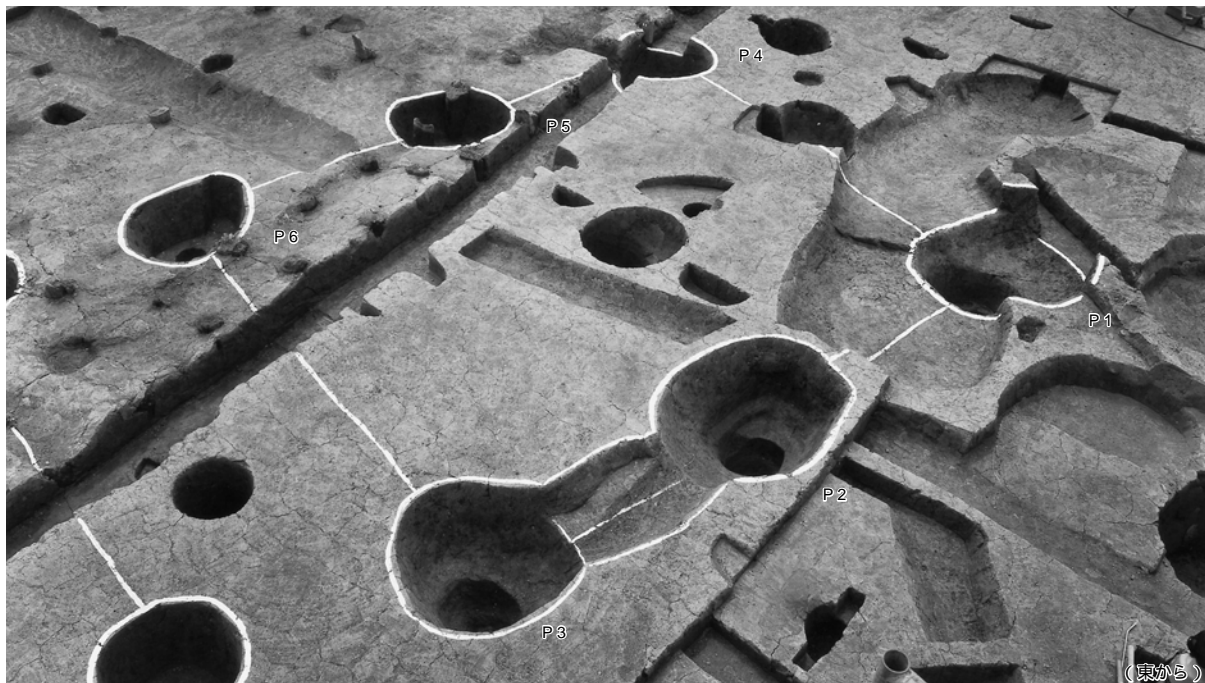


図25 掘立柱建物1 完掘状況

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

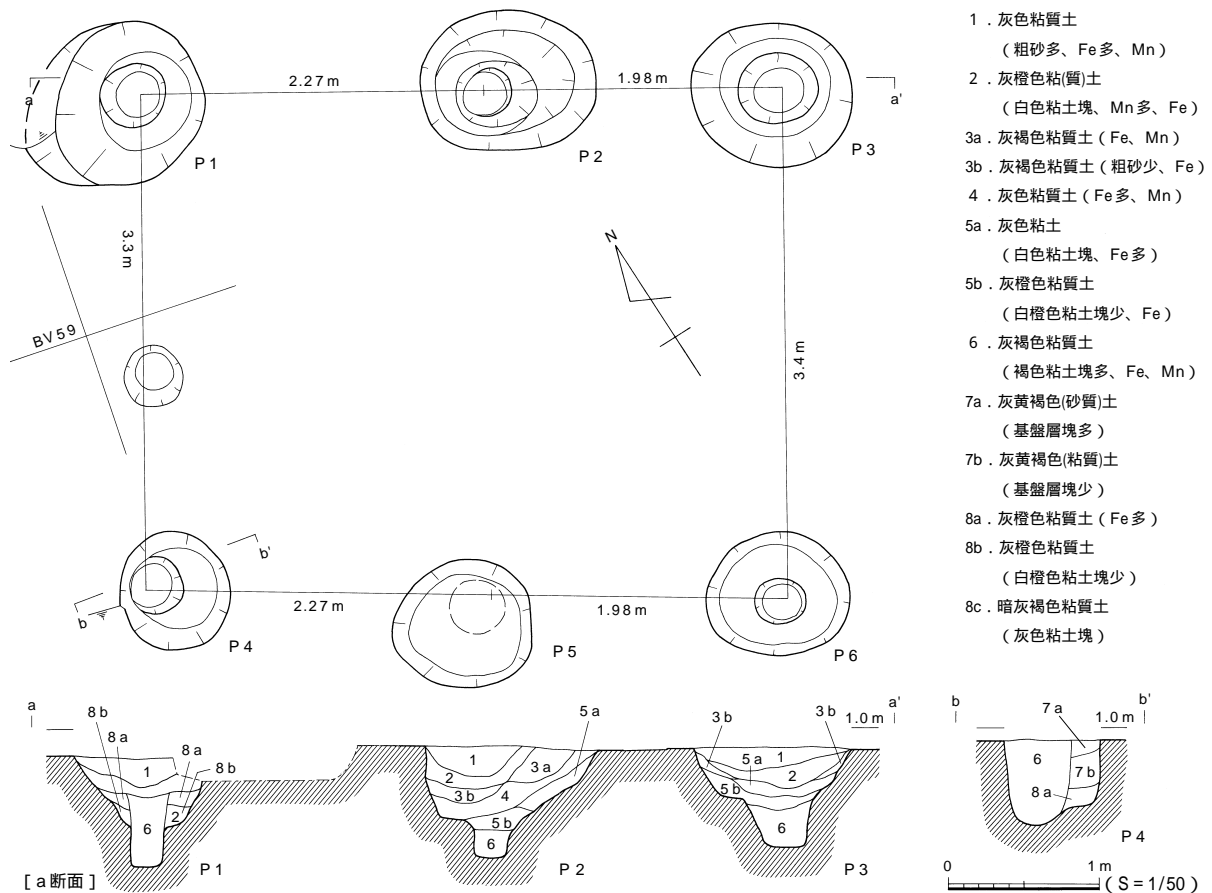


図26 掘立柱建物 1

掘立柱建物 2 (図27)

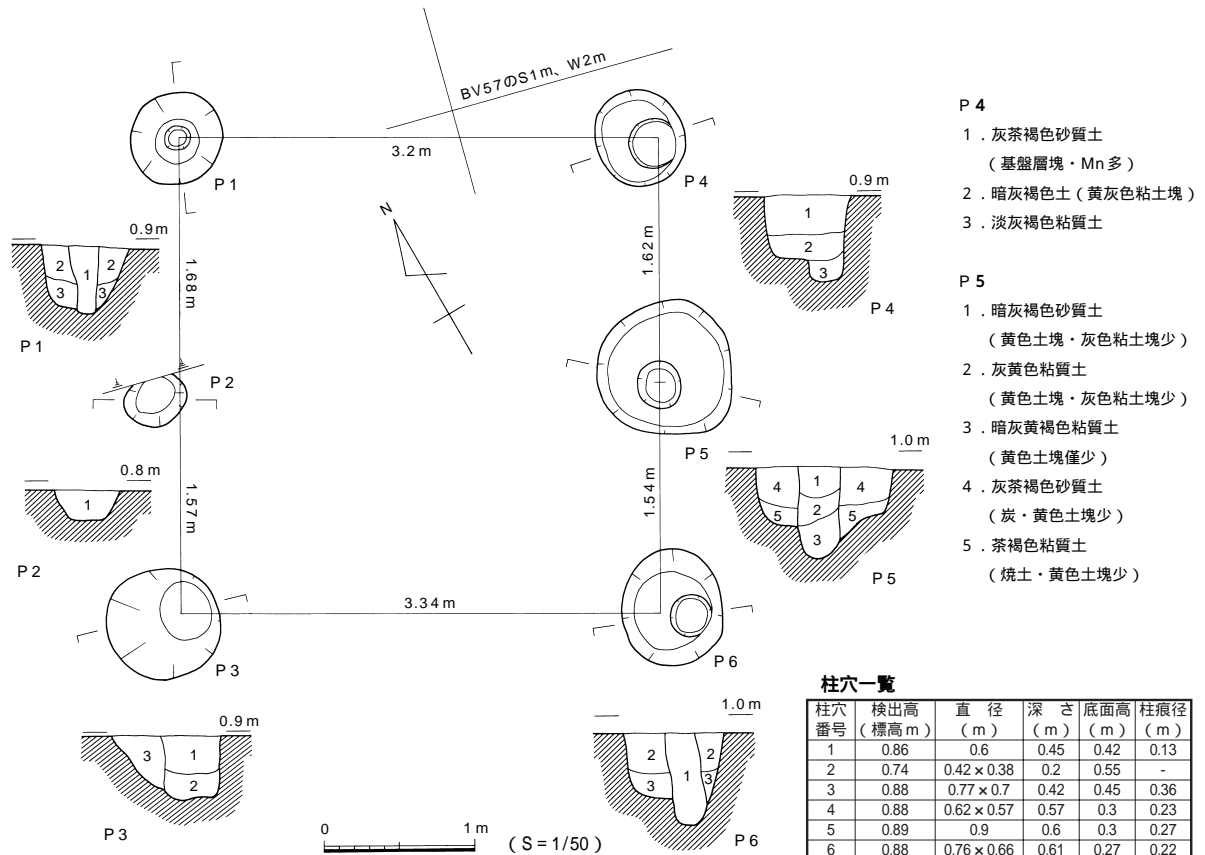
調査区の中央部やや東、BV57区で検出した。掘立柱建物 1 の東側に隣接する。両建物の柱穴間の距離はわずか0.8m前後である。検出面は標高0.86~0.89m(中心は0.88m)で、10層にあたるが、本来は 9層 中からの掘削と考えられる。

建物の規模は、柱穴が6本の可能性を考えて2間×1間の建物を想定した。主軸方向はN31°Eである。建物 1 とは数度の違いはあるが、ほぼ共通すると評価される。桁行は西側 (P1~3) で3.15m、東側 (P4~6) で3.16m、梁行は北側 (P1~4) で3.2m、南側 (P3~6) で3.34mを測る。柱間は西側 (P1~2・P2~3) で1.68m・1.57m、東側 (P4~5・P5~6) で1.62m・1.54mとなる。

柱穴は、直径0.6m~0.8m前後、深さ0.4~0.6m前後(底面レベル:0.3m~0.45m)を中心とする。大半の柱穴 (P1・3~6) では柱痕を残し、埋土には基盤土層がブロック状に包含される傾向も共通する。全体的な特徴は、建物 1 における南側柱穴列 (P4~6) との類似性が高い。その中で、P2のみは、直径0.4m前後、底面のレベルは標高0.55mの数値が表しているように、小形で浅い貧弱な形態を呈しており、検出面の低さ(標高0.74m)・規模・埋土などの点で、他の柱穴と異なる。埋土は、基盤土層塊も含まない単一層で柱痕も残さない。また、P1からP3へのラインからも、若干ずれる点も気にかかる。本遺構の柱穴と共通した特徴を持つP5との位置関係から、本遺構を構成する柱穴の可能性を考えたが、後述する杭列1および周辺に数基点在する柱穴との形態的特徴に意味を求めると、本柱穴を含めて杭列1を南側に延長させることも可能かもしれない。

掘立柱建物 1 柱穴一覧

柱穴番号	検出高(標高m)	直径(m)	深さ(m)	底面高(m)	柱痕径(m)
1	0.93	108×125	0.84	0.09	0.21
2	0.88	117×0.95	0.73	0.15	0.23
3	0.88	105×0.95	0.63	0.25	0.3
4	0.93	0.78×0.73	0.57	0.35	0.4
5	0.89	0.93×0.85	0.43	0.46	0.35?
6	0.88	0.95×0.83	0.455	0.42	0.33



- P1 1. 灰茶褐色粘質土 (炭、基盤層塊少、Mn)
- 2. 明灰褐色砂質土 (基盤層塊)
- 3. 暗灰褐色粘質土
- P2 1. 青灰褐色土 (黄白色土塊)
- P3 1. 淡灰褐色砂質土 (基盤層塊多、Mn)
- 2. 灰黄褐色粘質土 (灰色土塊・基盤層塊・炭少)
- 3. 暗灰褐色粘質土 (黄色土塊少): グライ化
- P6 1. 暗灰黒褐色粘質土 (基盤層塊僅少)
- 2. 暗灰褐色砂質土 (灰白色土塊・基盤層塊少)
- 3. 灰黄褐色粘質土 (基盤層塊少)

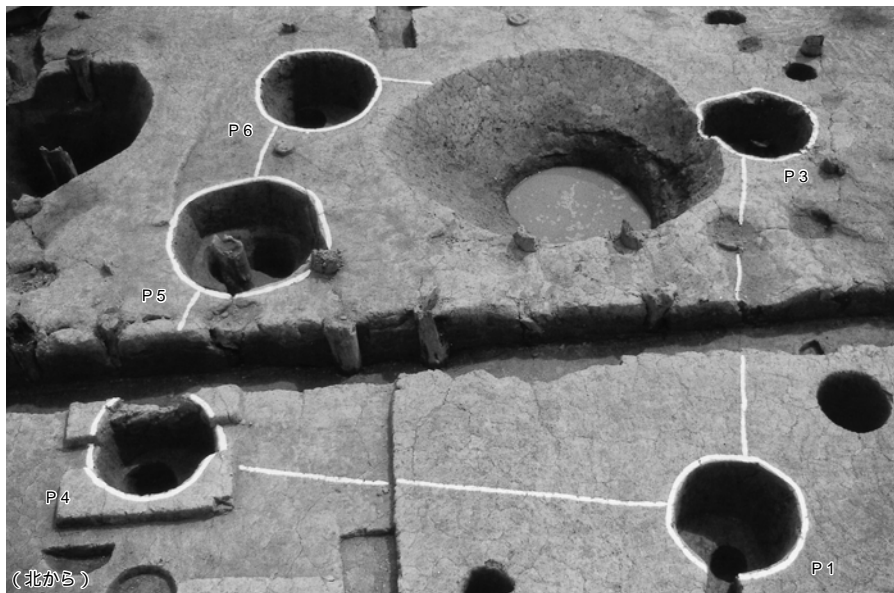


図27 掘立柱建物2

掘立柱建物1との関係は建物間の距離が近すぎる点から、その存在時期に先後関係が考えられる。しかし、全体的特徴は類似しており、その差は近接した連続的なものであろう。

本遺構の時期は出土遺物がないため不明確であるが、遺構の諸関係から古墳時代初頭に属すると判断される。

c . 杭列

杭列1（図28）

調査区の中央部やや東より、BU57区に位置する。掘立柱建物2の北側に隣接する。両遺構の柱穴間の距離は1.5m前後である。検出面は標高0.76～0.93m（中心は0.86m前後）でレベル的には10層にあたるが、本来は9層中からの掘削と考えられる。北側は中世の大形溝23による攪乱が深く及ぶ。

P3をコーナーにおき、北方向と西方向に直交した列という位置関係を示す柱穴5本（P1～5）によって構成される杭列が考えられる。南北軸の方向は、N29°Eを示し、掘立柱建物1とほぼ一致する。

規模は、P1～3によって構成される南側列で2.8m、P3～5によって構成される東側列で2.3mを測る。杭の間隔は、前者は西から1.5m・1.3m、後者は南から1.1m・1.25mの距離を保つ。

柱穴規模は、直径0.3m～0.5m前後、深さ0.15～0.42m（底面レベル：0.4m～0.6m前後）を示す。また、柱痕が明瞭ではなく、認められないものもある。前述した掘立柱建物の柱穴に比べると、全体的に小形で貧弱な傾向は否めない。

位置関係から確実性の高い5本の柱穴を取り上げたが、その他にも同一遺構となる可能性を示す柱穴が点在する。本遺構の南側では、BV区P1・同P2が約2mの間隔で東側の南北列のライン上に位置する（図13）。建物2のP2もBVP2から東へ90°振ったライン上にあっており、本遺構と結びついて矛盾はない。北側では攪乱の存在を考慮すると、本遺構の北端がさらに北側に伸びることも否定できない。このように本遺構は南北に広がる可能性を含む。

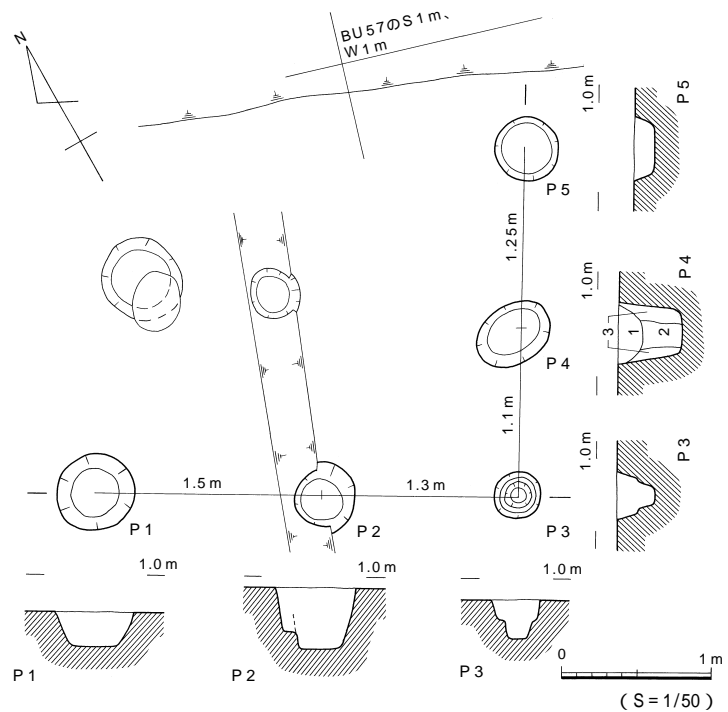
遺物は出土していないため詳細は不明であるが、所属時期は検出面や周囲の遺構などから古墳時代初頭と判断される。

d . 井戸

井戸1（図29～34、図版1・10）

調査区東端の中央付近、BU56区で検出された。西半部は溝21～23によって破壊された上、南半部には溝24が重複するなど、西半部～南半上部を大きくめぐり取られているが、深く掘り込まれた下半部は本来の状況をとどめていた。検出面は、中世遺構の完掘壁面において確認したため、9層に予想される本来の掘削面からはかなり下がる10b層、標高0.23～0.53mとなった。

上面形は、南北0.95m・東西0.75mを測る不整円形が残されているが、本来は少なくとも1.1m×0.95m程度の



柱穴一覧

柱穴番号	検出高 (標高m)	直径 (m)	深さ (m)	底面高 (m)	柱痕径 (m)
1	0.84	0.5	0.22	0.53	-
2	0.93	0.47	0.4	0.53	0.18
3	0.86	0.3	0.26	0.6	0.18
4	0.89	0.52×0.38	0.42	0.43	0.18
5	0.76	0.43	0.15	0.63	-

- P1：灰色土（Fe多）
- P2：灰褐色砂質土（基盤層塊）
- P3：暗灰褐色土（青灰色土塊多、Mn多）
- P4：1. 暗青灰色土（焼土・炭少）
2. 暗青灰色粘質土
3. 灰茶褐色土（Mn）
- P5：灰色土（炭、黄白色土塊）

図28 杭列1

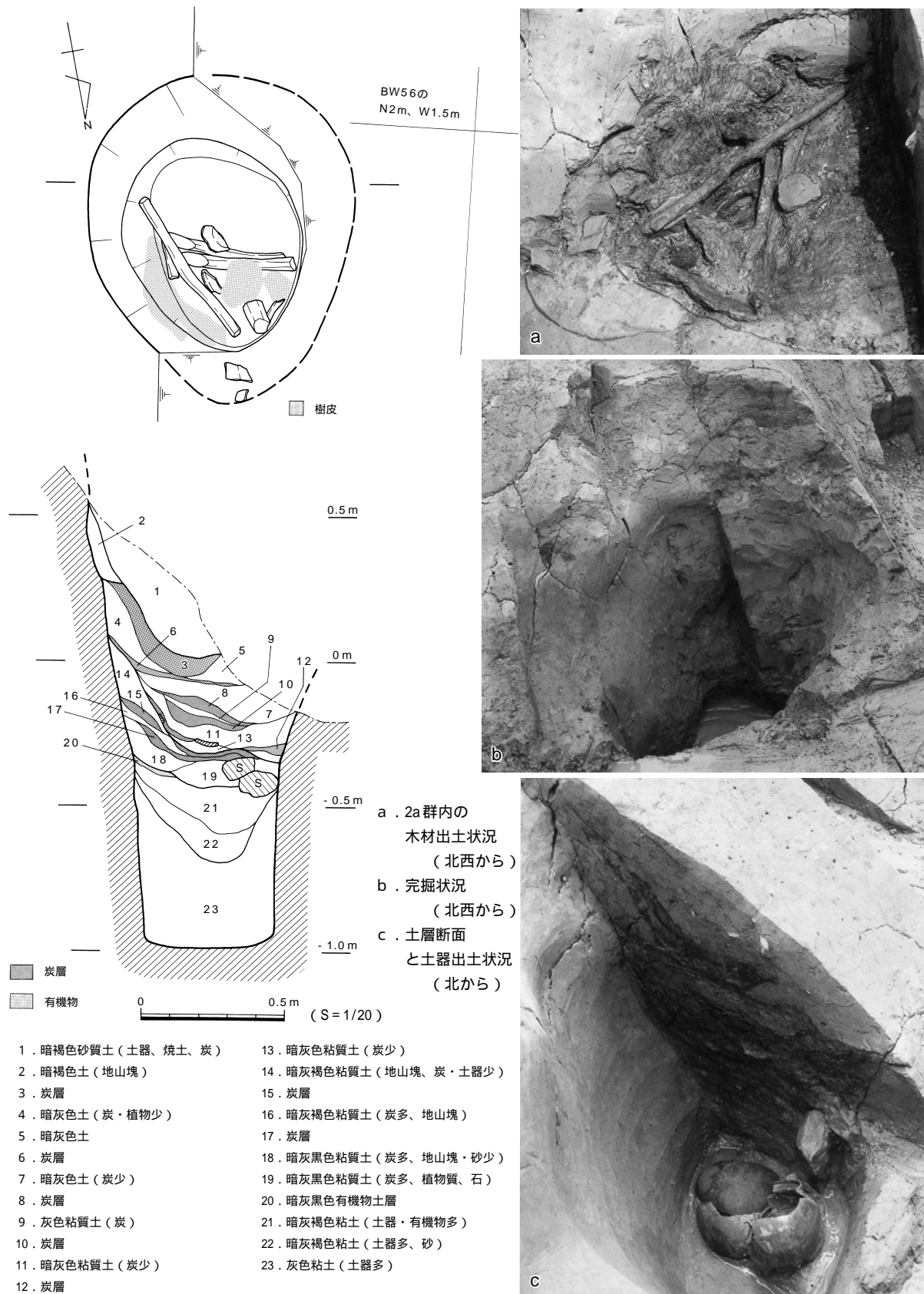


図29 井戸1

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

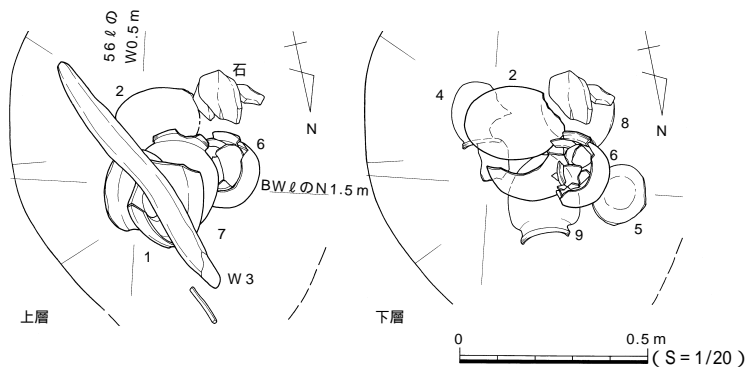


図30 井戸1 遺物出土状況

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	特徴
W 1	板材	(8.75)	5.0	1.15	サカキ	柱目、断面台形状に側縁、下縁を加工
W 2	加工木	(14.8)	3.9	3.4	-	全体に湾曲、何かの把手か？
W 3	杭	(43.9)	3.2	3.2	-	自然木の先端を加工して利用、全体に樹皮残存

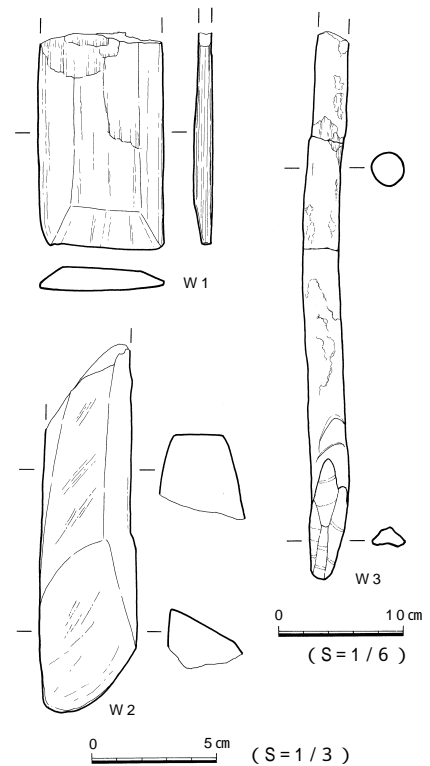
図31 井戸1 出土遺物(1) 木製品

円形の形態が復元される。底面は標高 - 0.99 m に位置し、0.65 × 0.5 m の不整形円形を呈する。上面からの深さは1.52 m を残す。断面形は筒状の逆台形を呈する。

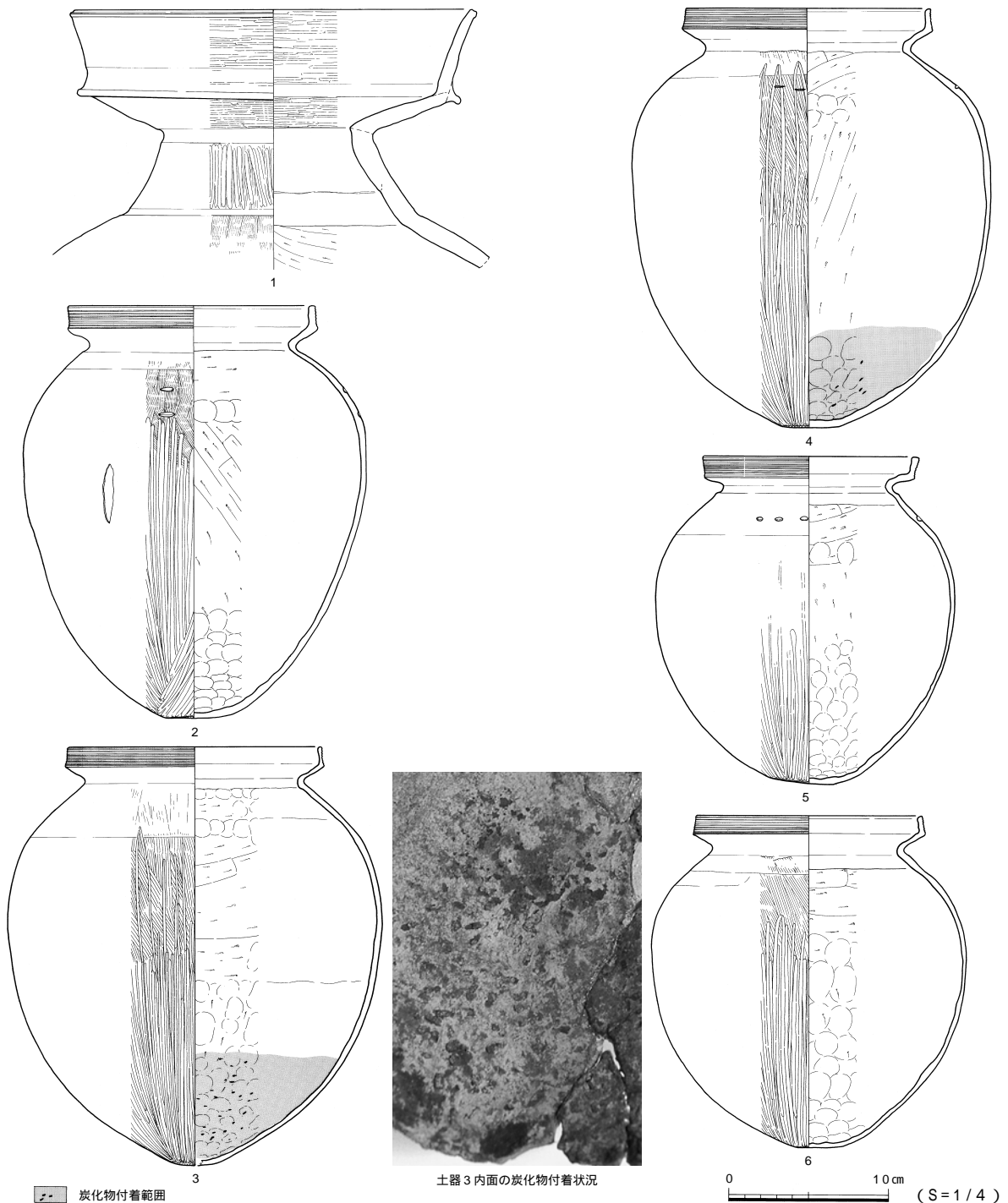
埋土は、23層に細分したが、その包含物などの内容から四群に大別される。

1群は1～2層である。暗褐色土で砂質が強い。土器・焼土・炭化物を包含する。土器は小片が多く、炭化物も分散的であるが、焼土の包含は他の土層には認められない。底面は標高3 cm 付近にある。

2群は3～19層である。炭化物を包含する土層あるいは炭化物土層の存在が特徴であり、それに加えて、非常に薄い土層が互層構造を持ちながら堆積する点も注目される。それらは、炭化物層に挟まれる形で堆積する土層が、炭化物をほとんど含まない(暗)灰色土あるいは粘質土



である2a群(3~14層)と、炭化物を多く含む暗灰褐色あるいは暗黒灰色粘質土である2b群(15~19層)の上下にまとめられる。2a群は35cm程度の厚みを有し、下面は標高-0.3m付近に求められる。木の枝や加工材



炭化物付着範囲

土器3内面の炭化物付着状況

0 10 cm (S=1/4)

番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調:内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・壺	24.8	-	-	(口)ナデ後密な篋磨き(頸外)縦ハケ後篋磨き(頸内)横ナデ(胴外)ハケ、やや摩滅	微砂、均質、角閃石	薄黄灰/明橙褐
2	土師器・甕	15.5	4.6	25.7	口縁描洗線7条(外)ハケ後篋磨き・煤付着、縦3.7cm横0.6cmの穿孔、横1.0cm縦0.3cmの刺突2ヶ所	微砂、均質、角閃石	暗褐/薄黄灰
3	土師器・甕	*16.0	*3.1	*26.1	口縁描洗線8~9条(内)底部炭化穀物(外)煤・肩部に吹きこぼれ痕、3/5~1/8残存	微~細砂、均質	鈍い黄褐/黒
4	土師器・甕	15.4	3.6	26.6	口縁描洗線8~9条(内)底部炭化穀物・煤付着(外)肩部にタタキ面、横0.7cm縦0.1cmの刺突2ヶ所	微~細砂、赤色粒	暗褐/灰
5	土師器・甕	13.5	4.0	20.4	口縁描洗線9~10条(外)肩部にタタキ面・煤付着・上半摩滅、横0.5cm縦0.2cmの刺突3ヶ所	細砂、均質	暗灰褐/黄灰
6	土師器・甕	14.0	2.8	20.7	口縁描洗線7~8条(内)篋削り後押圧(外)ハケ後密な篋磨き、煤付着、口縁1/6欠	微~細砂、均質	茶褐/黒褐

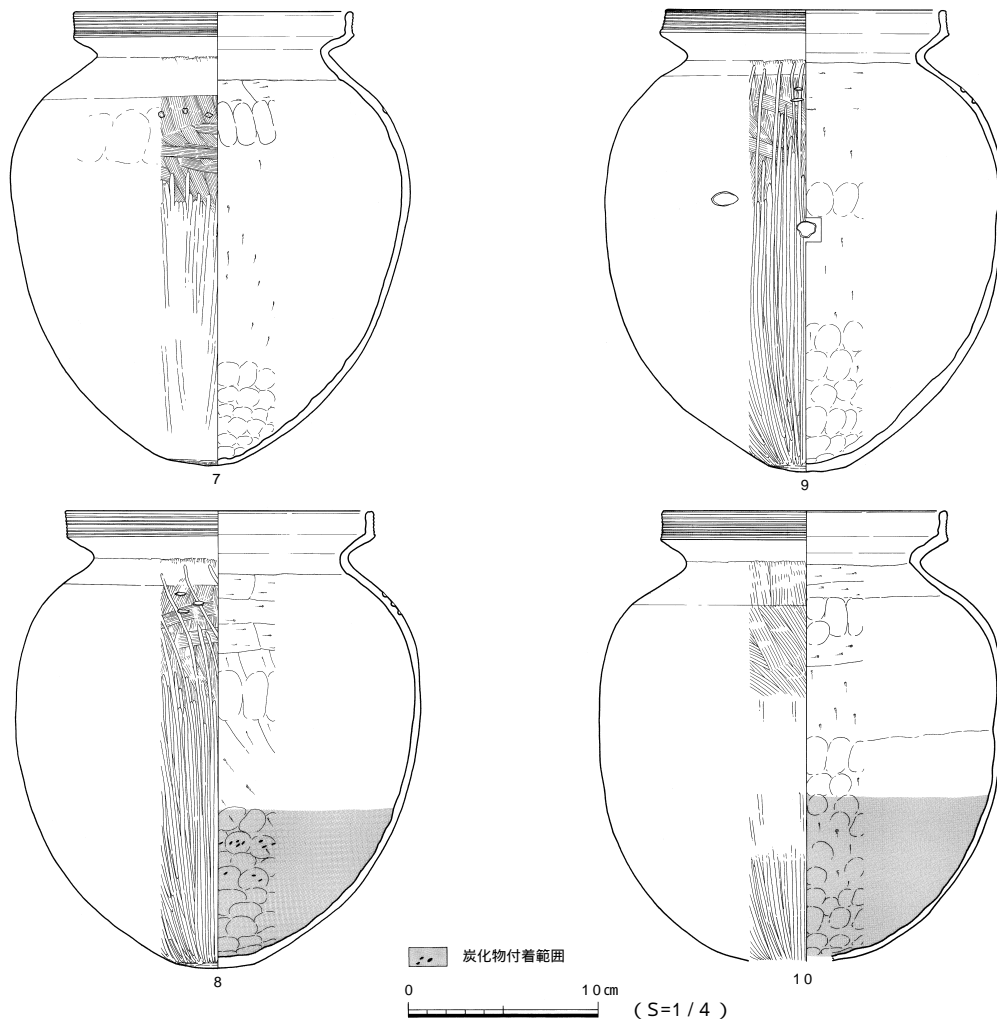
図32 井戸1出土遺物(2)

のほかに土器の小片が散布し、さらに、周辺に広がる樹皮によって井戸の全面が覆われるような状況が確認された（図29 - a）。2 b群では15cm弱の厚みが認められる。下面は標高 - 0.44 m 付近にある。2 a群下面から出土した遺物に続いて、2 b群では一辺10～15 cmの角礫・壺の口縁（図32 - 1）さらに3群以下に続く甕群の上部が姿を現す。2群の最下層にあたる19層では3群の特徴となる植物遺体の包含が残る。

3群は20・21層で、植物遺体の包含が特徴である。1群と2群の境と同様に、中央部において4群に向かって深く落ち込むような堆積を示し、土層の厚さは15 cm程度となる。同位置での下面レベルは標高 - 59 mを測る。また、上面つまり2群との境には植物遺体が層状に堆積する（20層）。遺物は完形の甕あるいは大形の甕片が4群から連続的に認められる。

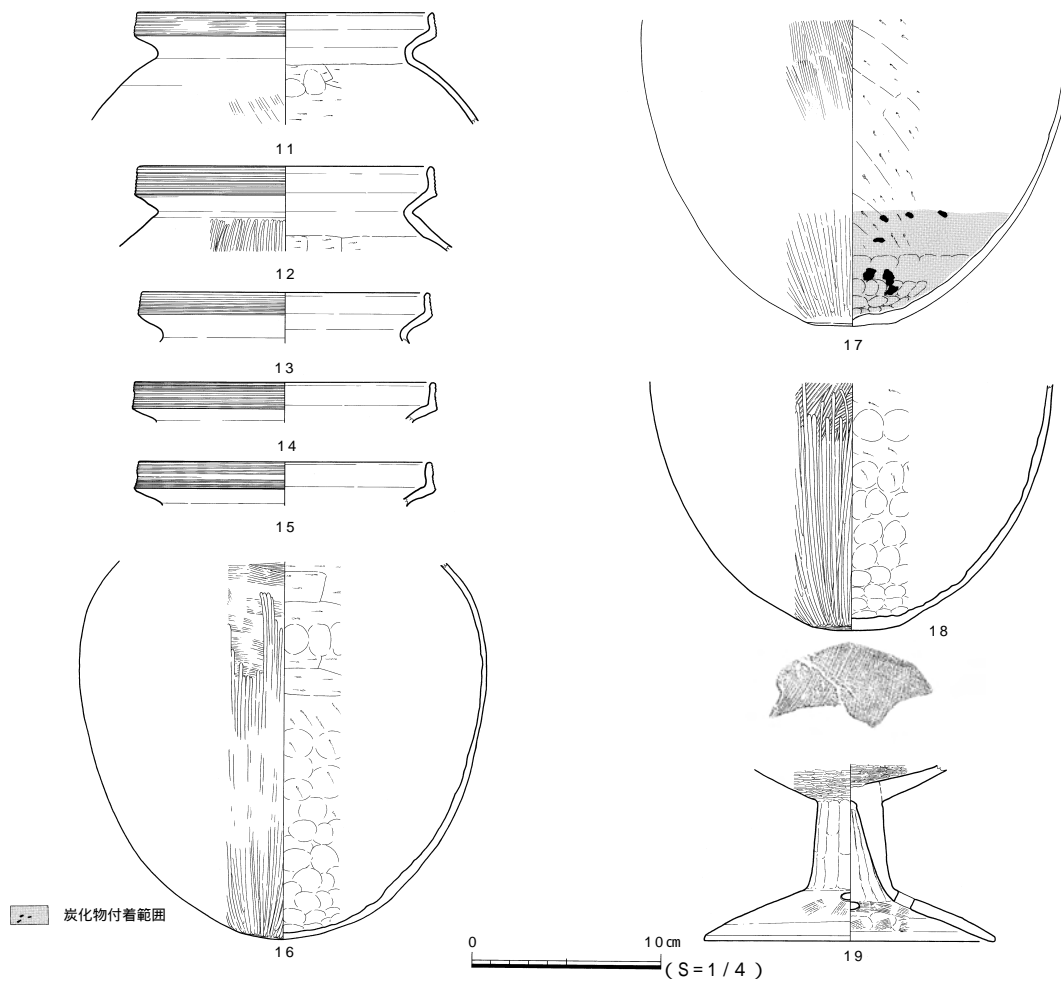
4群は22・23層である。灰色系の粘土層の堆積で、大形破片あるいは完形の土器が含まれる以外に際だった包含物を有さない点が特徴である。土器は底面から重なり合って上層に続く。

以上の状況から、埋没過程を復元してみよう。井戸廃棄段階において、数個体の甕が底部におさめられ、さらにその上にも甕が重ねられていく。その過程においては4群の堆積を伴う。一定の土器を納めた段階に大量の植



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
7	土師器・甕	14.4	3.8	24.0	口縁描沈線7条（内）篋削り痕少・炭化物（外）八ヶ・煤多、径0.3cm程の刺突3ヶ所、器壁厚手	微～細砂、均質	暗褐
8	土師器・甕	16.2	4.1	24.2	口縁描沈線7条（内）底部に炭化穀物（外）八ヶ後磨き、横0.6cm縦0.2cmの刺突3ヶ所・煤多	微～細砂	暗褐
9	土師器・甕	14.8	3.9	24.4	口縁描沈線6条（内）篋削り後板ナデ（外）穿孔（1.5×0.8cm）2ヶ所・刺突2ヶ所、底部器壁厚、煤	微砂、均質	暗褐
10	土師器・甕	15.0	-	-	口縁描沈線8～9条、器壁薄（内）炭化穀物（外）八ヶ後磨き・煤多、2/3残存	細砂、均質	黄橙～黒/黄褐

図33 井戸1出土遺物(3)



番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色 調 : 内 面 / 外 面
		口 径	底 径	器 高			
11	土師器・甕	*15.5	-	-	口縁柳描沈線7条(内) 篋削り後押圧(外) 摩滅・煤付着、口縁端部は平坦、1/3残存	細砂、均質	橙褐 - 黒褐
12	土師器・甕	*15.3	-	-	口縁柳描沈線7条(外) 密な縦の篋磨き・煤付着、1/3残存	細砂、均質、石英粒	黄橙褐
13	土師器・甕	*15.2	-	-	口縁柳描沈線6~7条、丁寧な横ナデ、1/4残存	微 - 細砂、均質	薄黄
14	土師器・甕	*16.0	-	-	口縁柳描沈線10条、丁寧な横ナデ(外) 煤付着、1/4残存	微 - 細砂、均質	鈍い黄灰 - 暗褐
15	土師器・甕	*15.8	-	-	口縁柳描沈線9条、丁寧な横ナデ(外) 煤付着、1/4残存	微砂、均質、角閃石	黒茶褐/黒褐
16	土師器・甕	-	*4.5	-	(内) 篋削り後下半押圧(外) 細かいハケ後密な篋磨き・煤付着多い、1/4残存	微砂、均質	褐 - 黒褐
17	土師器・甕	-	4.7	-	(内) 篋削り後下半押圧・炭化物の小塊付着(外) 下半篋磨き・上半ハケ・煤付着多、胴部上半2/3欠	微 - 細砂、均質	暗褐
18	土師器・甕	-	4.5	-	(内) 篋削り後押圧(外) 幅広く深いハケ後密な篋磨き・煤付着(底部外) 横ハケ	微砂、均質、赤色粒	薄茶灰 - 暗褐
19	土師器・高杯	-	*15.1	-	(内) 脚部絞り目・ハケ(外) 篋削り後密な篋磨き・摩滅・黒斑、円孔4ヶ所、1/2残存	微 - 細砂、赤色粒	明橙褐

図34 井戸1出土遺物(4)

物が井戸に投棄され、3群の形成が進む。そして最終段階に角礫が置かれ、2b群の堆積が始まる。この段階に土器はまだ姿を見せているが、その後、炭化物の大量投棄が始まる。最後に炭化物層を形成するような行為で遺物の埋納は終了する。2b層の形成である。その上面では、木材や樹皮によって全面が覆われる。その後は、炭層と比較的汚れない土層を交互に埋めていき、最後に大量の炭層で覆うことによって2a群が形成される。さらに炭化物よりは焼土を伴う行為へと変化し1群を形成し、最終的な埋没へと進む。

このように、井戸廃棄において、祭祀的な行為がいくつかの段階を追って、内容を少しずつ違えながら行われていることが想定される。

遺物は壺1点・甕17点・高杯1点があげられる。完形あるいはそれに近い甕は9点にのぼり、その多さが際立つ。甕の内部に炭化物の付着を残すものが多く、穀物粒が確認されるものを含む。壺は頸部～口縁部のみで、頸部以下の破片は確認されない。頸部下端も整っており、この形状で使用されたことも十分考えられる。

所属時期は、出土遺物から古墳時代初頭が想定される。

e . 土坑

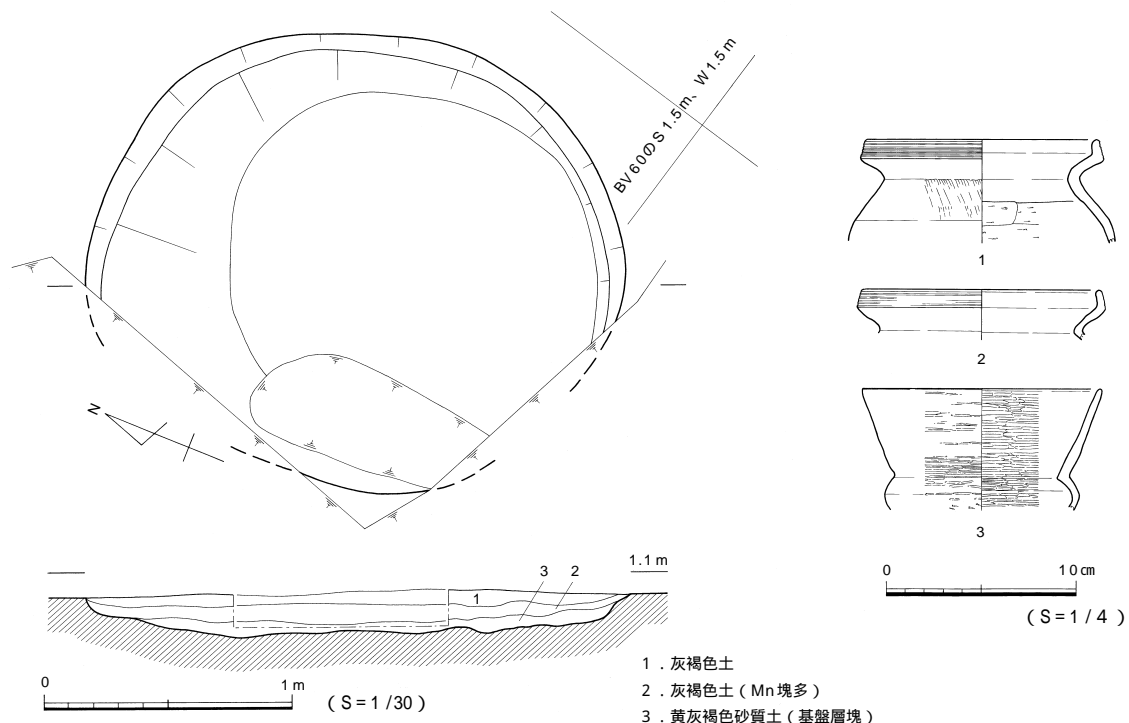
土坑1（図35）

調査区の西端中央部にあたるBU・BV60区に位置する。竪穴住居1の南約8m付近である。標高1m、9層で検出された。西側あるいは南側の一部は調査時の側溝によって破壊される。

平面形は2.17m×1.81mを測る円形である。底面は標高0.85mに位置し、直径1.5m前後の円形を示す。深さは検出面から0.17m程度であり、全体に広くて浅い形態である。断面形はやや凹凸のある皿状を呈する。

埋土は三分しているが、その大半はマンガンの沈着が顕著で、その差によって細分した1・2層で占められる。一方、底部には基盤土層に類似した砂質土の3層が上層とは区別される堆積を見せる。しかし、土坑の性格を考える上で特徴的なものは見いだせない。

出土遺物は少なく、細～小片である。壺・甕・高杯・鉢・埴など多種にわたる破片が40片程度含まれる。所属する時期は古墳時代初頭である。



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法 他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・甕	*12.4	-	-	口縁柳描沈線6条（外）斜方向のハケ・摩滅、器壁厚い、1/7残存	細砂、均質、石英粒	薄黄褐～橙褐
2	土師器・甕	*12.0	-	-	口縁柳描沈線5条摩滅顕著、煤付着、1/4残存	微～細砂	橙褐～暗褐
3	土師器・埴	*12.5	-	-	（内）密な篩磨き（外）密な篩磨き・摩滅、胴部下半に篩削り痕、1/5残存	精良、水漉粘土	薄黄褐～橙褐

図35 土坑1・出土遺物

土坑2（図36）

調査区の西端部、やや南よりにあたるBW60・61区に位置する。検出面は10a層、標高0.85mであるが、西壁面の土層では同0.9m前後まで上昇する。西半分は調査区外に伸びるため確認できない。

平面形は直径1mの円形が復元される。底面についても、標高0.33mにおいて直径0.65～0.7mの円形が求められる。深さは検出面から0.6mであり、U字形に掘り込まれた深めの形態を示す。

埋土は六分しているが、それぞれの特徴は以下ようになる。1層は上層である7層に類似する。2・3層は鉄分の沈着度合いの差による細分であり、一連の堆積土層と言える。4層は炭化物が薄層状に堆積している土層であり粘性がやや強い。5層は粘土がブロック状に含まれる。6層は明瞭な包含物が認められない比較的均

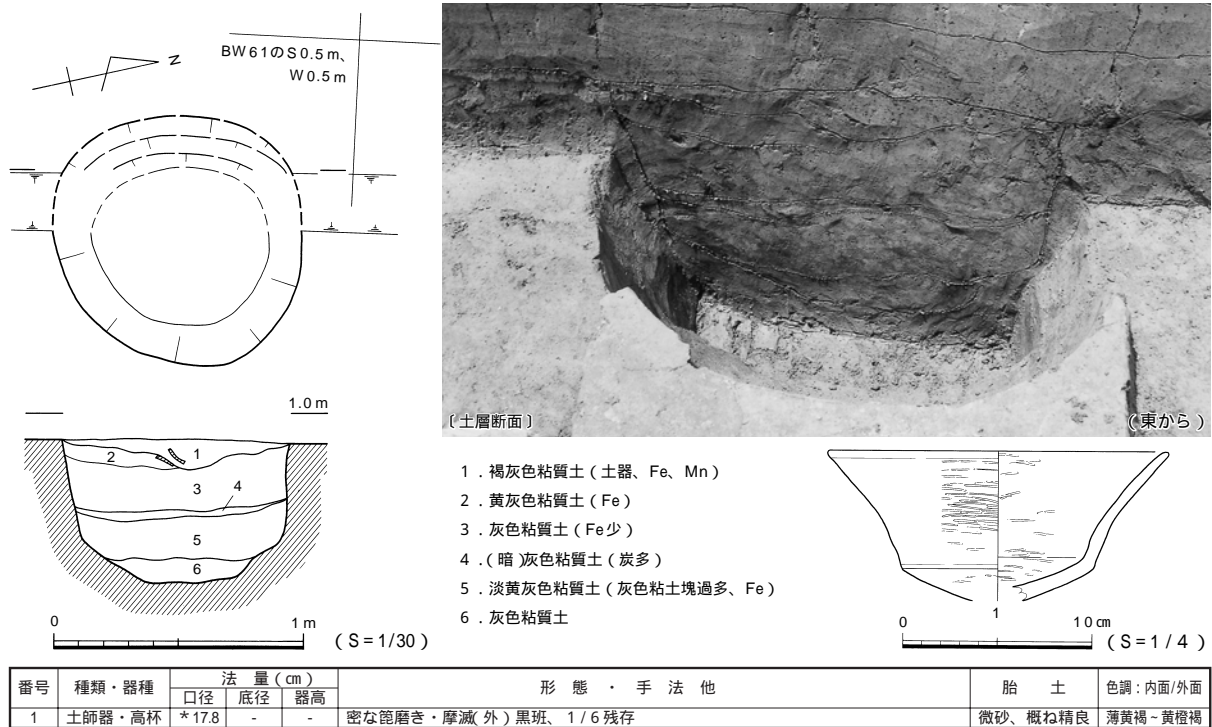


図36 土坑2・出土遺物

質な土層である。こうした特徴から、6層は使用段階の堆積土の可能性が考えられるほか、埋め土と評価される5層が堆積後、やや湿地的な状況を経て最後に1層の流入土で覆われるという埋没過程が復元される。

出土遺物は小片3片のみである。図化した高杯片や検出面から、本遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

土坑3 (図37)

調査区の南西部にあたるBW60区に位置する。土坑2の南東約4m付近である。検出面は標高1.02m、9層下半であったが、検出時に中心的な埋土である粘土を削り込んでいたことから、本来の掘削面が9層上面にあがることは十分予想される。

平面形は東西0.8m・南北0.56mを測る楕円形である。底面は標高0.75mに位置し、深さは検出面から0.27mであり、掘り方断面はボウル状を呈する。埋土で特徴的なのが1層の粘土層である。鉄分の沈着が多少認められるが、白色の強い灰色の粘土は比較的純度が高い。下層(2層)では、粘土の包含はわずかであり、鉄分の多さや焼土ブロックが特徴である。粘土の存在が土坑の性格を考える上で重要となろう。

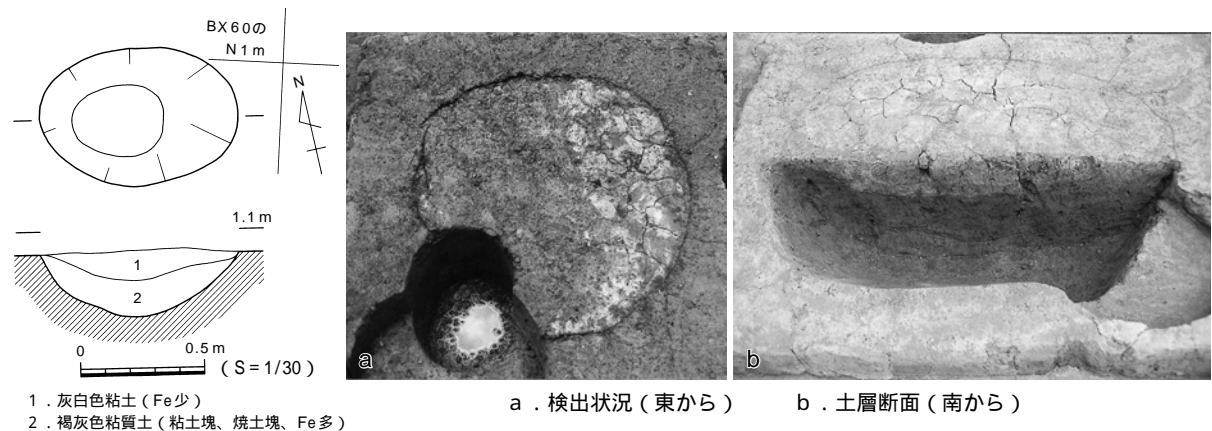


図37 土坑3

出土遺物は皆無であるが、検出面から本遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

土坑4（図38）

調査区の南西部にあたるBW60区に位置する。土坑3の西側約0.8mにあたり、近接している。検出面は標高0.99m、9層 下半であったが、検出時に中心的な埋土である粘土を削り込んでいたことから、本来の掘削面は9層 上面にあがると予想される。

平面形は南北0.58m・東西0.47mを測る円形あるいは楕円形を呈する。底面は標高0.79mに位置し、深さは0.19mである。掘り方断面はボウル状を呈す。

埋土で特徴的なのが1層の粘土層である。白色を強めた灰色粘土で、鉄分の沈着が多少認められるが、比較的純度の高い粘土の堆積である。2層・3層は、鉄分の沈着度合いと粘性の問題で細分したが、粘土ブロックを多少包含する点では共通する。土坑3の2層に類似する。

以上のように、本土坑は形態面あるいは埋土などほとんどの特徴において土坑3と共通しており、同様の機能を有した土坑といえる。本地点周辺において、粘土を利用した何らかの作業が行われていた可能性を示唆するものである。

出土遺物は認められないが、検出面などから、所属する時期は古墳時代初頭と判断される。

土坑5（図39）

調査区の北東部にあたるBS57区に位置する。竪穴住居4の北東コーナーから東へ0.6m程度の距離である。検出面は標高0.88m、10a層 である。

平面形は南北0.7m・東西0.53mを測る楕円形を呈する。底面は標高0.63mに位置し、直径0.26～0.3mの円形を示す。深さは検出面から0.23mであり、掘り方断面形は緩やかな逆台形である。検出面では、炭化物と焼土の分布が0.8×0.6mの範囲に顕著に認められ、さらに、その北東側周縁部では炭化物のみが分布しており、全体としては1m×0.8m程度の広がりを確認することができる。

埋土は5層に細分しているが、堆積状況や土層の特徴から1～3層と4・5層に大別される。

前者は1・2層と3層に分けられる。1・2層は黒灰色の粘性が強い土層であり、炭・焼土の包含が顕著である。炭層あるいは焼土層といえるほどの量が認められる。両土層の細分は炭化物と焼土の包含率の差によるもので、1層では焼土の方が、2層では炭化物の方が、それぞれ優位にある。一方、3層は、包含される炭化物は際だって多いわけではなく、むしろ基盤土層がブロック状に包含されている点に特徴がある。炭化物の包含とその影響による暗色化を除くと、下層の4・5層との類似性が指摘される。

後者（4・5層）は砂質の強い黄色系の土層であり、両土層ともに基盤土層が粒状に包含される点で類似する。全体には汚れは少なく基盤土層に近い。また、1～3層が4・5層の堆積を切り込んだラインを示している点から、両土層が本土坑の使用に直接関わるとするならば、1回の掘り返しがあったこととなるが、もう一つの解釈として、4・5層は基盤層へのしみこみ的な作用で形成された土層という可能性も残る。

以上の状況から、本土坑は加熱作業に係わる遺構であることが窺われる。そして作業に伴う土層が1・2層さらには上面を覆う炭化物・焼土の分布を形成したと評価される。

出土遺物は小～細片の数点が含まれる。図化可能な土師器鉢（図39-1）あるいは検出面などから、本遺構の所属時期は古墳時代初頭と考えられる。

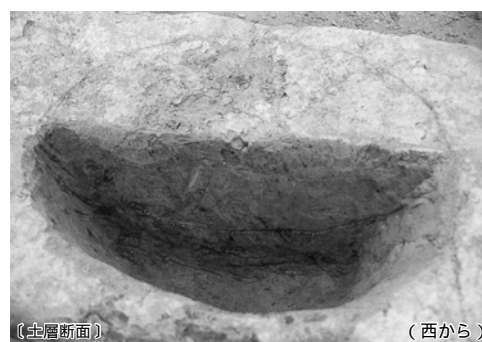
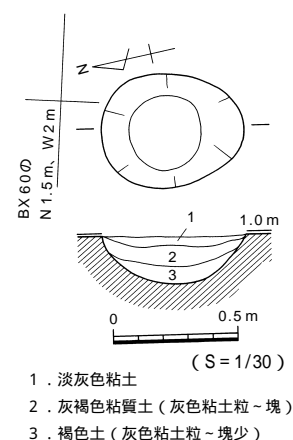


図38 土坑4

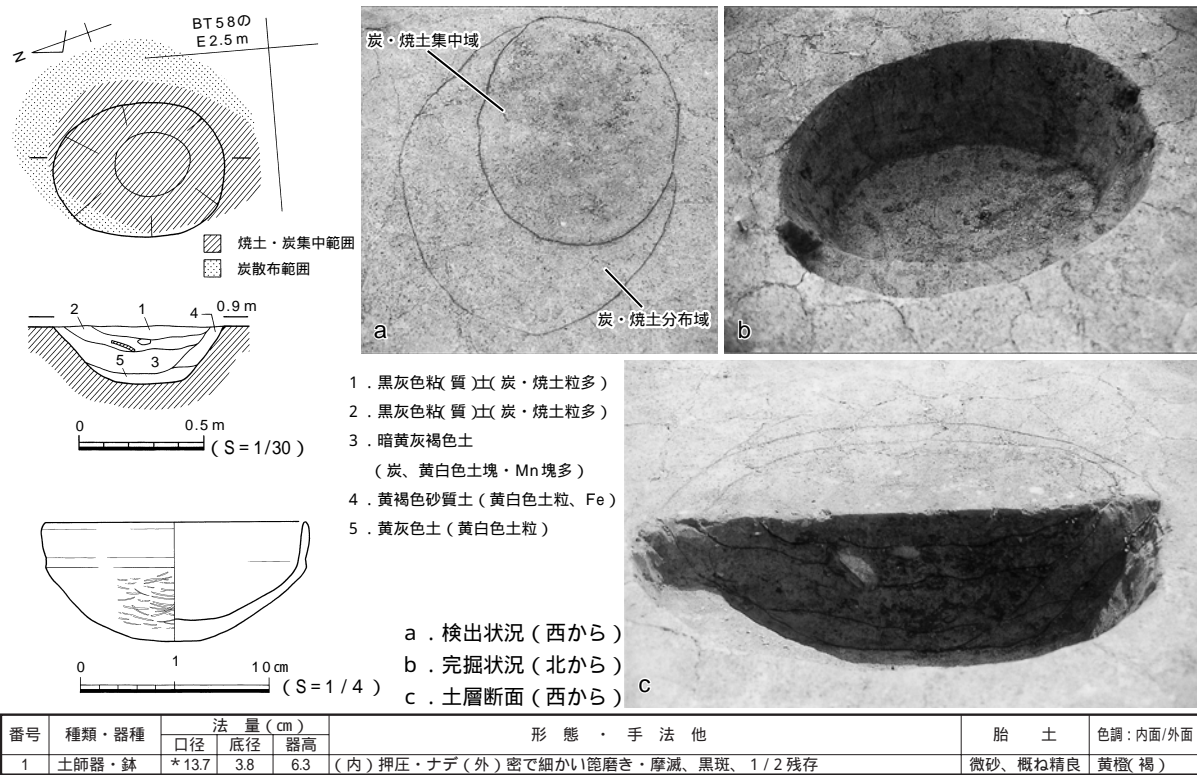


図39 土坑5・出土遺物

土坑6 (図40)

調査区の中央部やや西よりにあたるBU59区に位置する。溝1の西端部に重複し、土坑7・溝3の下部にあたる。竪穴住居4の南約5m付近である。検出面は標高0.93m、10a層である。

平面形は直径1~0.9mの円形を呈する。底面は標高0.77mに位置し、深さは検出面から0.15mを測る。掘り方断面形は皿状に近い。4分される埋土は上・下層に大別される。上層は暗灰色系の土層で、1層に焼土塊が集中する点が特徴である。下層は黒灰色土であり、3層に炭化物を多く包含する。こうした堆積状況から、炭化物が堆積した後、焼土塊が上層に投棄されるという過程が復元され、本土坑が加熱作業に係わる遺構であることが窺われる。

本土坑と溝1の関係は、両遺構の位置関係と同溝においても焼土の集中が認められる点から、同一遺構の可能性も残す。ここでは、本遺構が平面的に完結する可能性が高いことから別遺構としたが、両遺構間の関連性の高さを指摘しておきたい。

出土遺物は皆無であるが、本遺構は、検出面から古墳時代初頭に属すると考えられる。

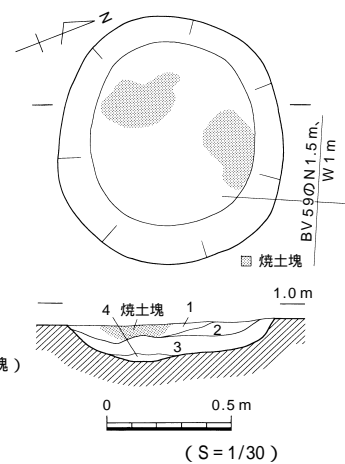


図40 土坑6

土坑7（図41）

調査区の中央部やや西よりのBU 58・59区に位置する。竪穴住居4の南側である。遺構の重複が顕著に認められる場所にあたる。本土坑の上部には溝3、下部には溝1が位置し、さらに西端部は既述した土坑6が下部に重複する（図42）。

検出面は標高0.99m、9層 下半である。平面形は東西2.1m、南北0.85～1.01mを測る長方形を呈する。底面は標高0.76mに位置し、1.87×0.68～0.82mの長方形を示す。深さは検出面から0.24m（一部では0.35m）であり、掘り方断面形は逆台形である。

埋土は四分しているが、淡灰色系の上層（1・2層）と暗灰色系の下層（3・4層）に大別される。鉄分あるいはマンガンの沈着差などによる細分が可能である。全体に特徴的な包含物などは確認されておらず、溝1あるいは土坑6の埋土とは違いを見せる。土層はいずれも水平堆積を示す。

出土遺物は僅かに高杯・鉢の小片を数点含むが、口径を復元できて図化できるものはない。

本土坑の時期は、遺物あるいは検出面から古墳時代初頭と考えられる。

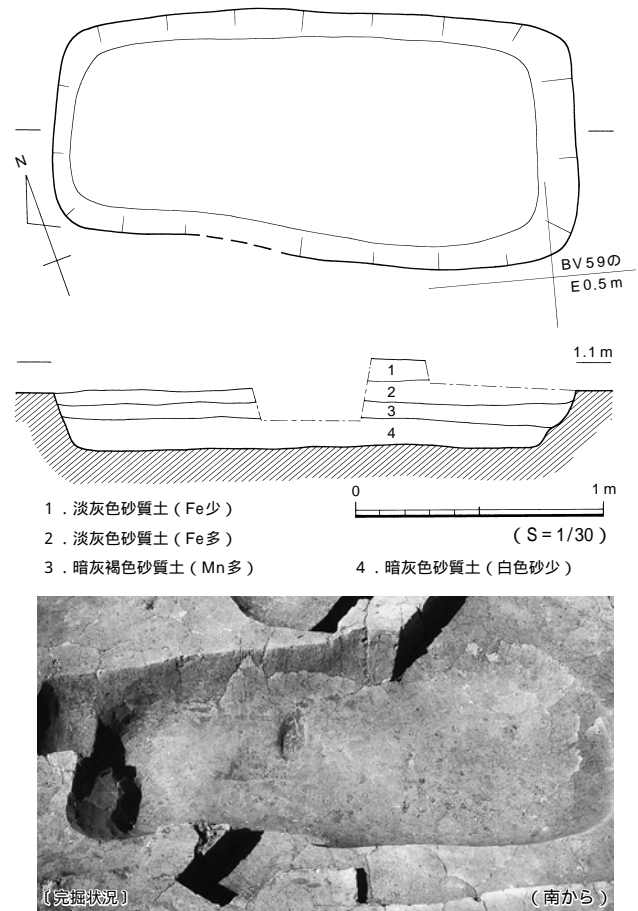


図41 土坑7

f. 溝

溝は 9層 10層 において5条を検出した。1条（溝4）は調査区中央部を南北に走る。他の4条（溝1～3・5）は両端部が収束する短いものであり、その内3条（溝1～3）は浅い不整形な形態を有し、土坑に近い点で前者とは明瞭に区別される。また、その分布は集中する傾向もあり、共通した形成要因が予想される。

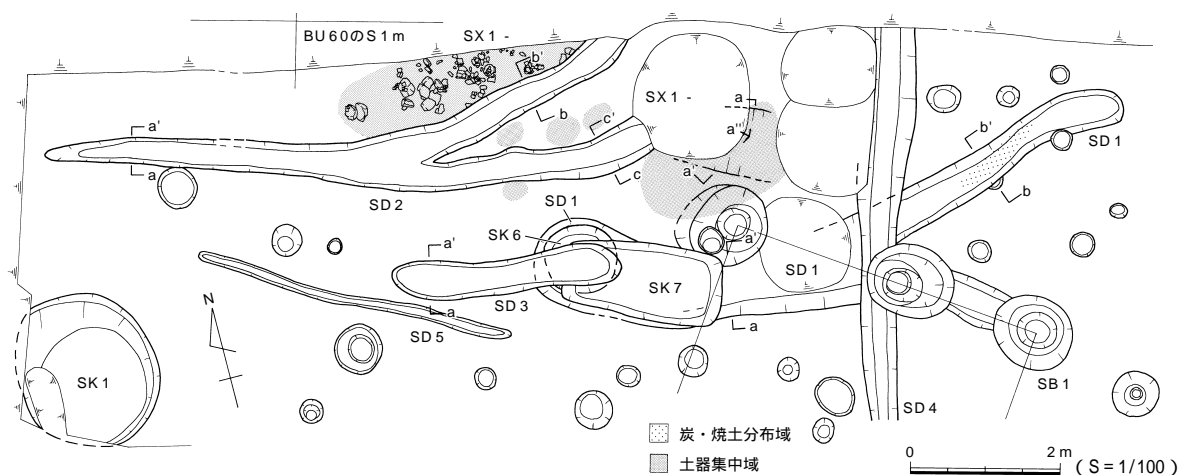


図42 BU 59区周辺遺構分布図

溝 1 (図42・43)

調査区の中央部、BU 57～59区に位置する。土坑 6・7、溝 3・4、それに加えて掘立柱建物 1 の柱穴が上部に重複する。検出面は西側では標高0.91～0.93 m、東側では同0.79 m で、いずれも 10a層 にあたる。

平面形態は、東西方向にやや弓なり状を呈しながら伸びる。東半分では二股(北側と南側)に分岐する可能性がある。長さは、東西約 8 m、幅は、分岐部を挿んで、西半部分が1.05 m、東側が0.5～0.55 mを測る。分岐部の状態は、溝 4 によって破壊されているため不明である。底面は標高0.67 mに位置し高低差は認められないが、検出面からの深さは西半部で0.25 m、東側で0.12 mとなる。これは検出面の高低差が影響したものである。ポウル状の断面形を呈す。

埋土は灰褐色系の土層であるが、1層に炭化物・焼土を含む点が特徴である。b断面の位置では、その包含が顕著であり焼土層を形成する。平面的にもそうした分布状況を確認することができる。

本溝は形態の特徴が溝 2 と共通する。また、焼土・炭化物の分布からは加熱作業の存在を想定することもできる。それは、重複する土坑 6 との関係を探らせる。こうした状況から、本地点、つまり竪穴住居 4 の南側周辺において加熱作業が行われていた可能性が考えられ、溝 2 あるいは本溝のような不規則な溝状遺構は、水路というよりはそうした作業に伴う遺構と評価できそうである。

遺物は出土していないため、本遺構の詳細な時期は不明であるが、遺構の重複関係などから、古墳時代初頭に属すると想定される。

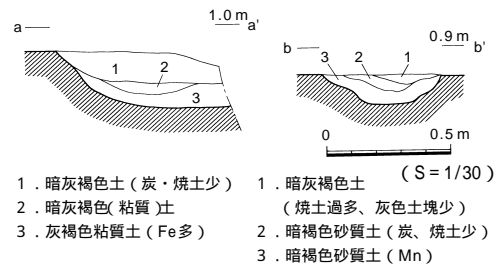
溝 2 (図42・44)

調査区の中央部西よりにあたり、BU 59～60区で検出された。検出面は標高1.08～10.9 m、9層 である。土器溜まり 1 の上部に位置する。東端部の状態は、中世溝群あるいは近世土坑による破壊で不明である。

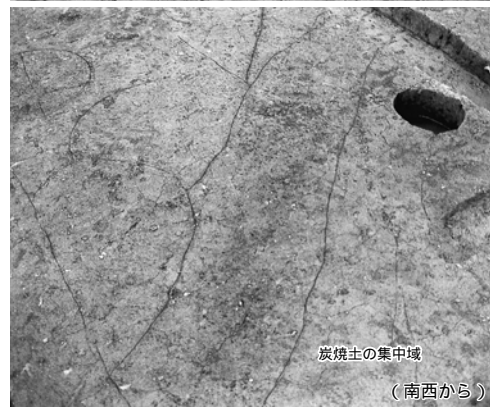
平面形態は東半部が二股に分岐する。全長は、東端部が溝 4 以东には確認されないことから、9 m程度と推定される。幅は0.35～0.5 mで、底面は西半部で標高1.01 m、東半部で同0.99 mを測り、東へ若干の下がりを示す。深さは0.07～0.1 mである。断面形は皿状といえよう。全体に小形で不規則な溝状遺構と評価される。

埋土は灰色系の粘性の強い粘質土であり、一部では黄色を帯びる色調も認められる。埋土中には遺物が包含されるが、下部に位置する土器溜まり 1 に由来する遺物の混入と考えられる。

所属時期は、遺構の重複関係や出土遺物などから古墳時代初頭と想定される。

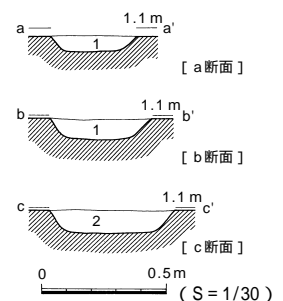


- 1. 暗灰褐色土(炭・焼土少)
 - 2. 暗灰褐色(粘質)土
 - 3. 灰褐色粘質土(Fe多)
- 1. 暗灰褐色土 (焼土過多、灰色土塊少)
 - 2. 暗褐色砂質土(炭・焼土少)
 - 3. 暗褐色砂質土(Mn)



a . a断面(東から) c . 検出状況(南西から)
b . b断面(東から)

図43 溝 1



- 1. 灰色粘(質)土 (基盤層塊少、Fe、Mn)
- 2. 黄灰色粘(質)土 (基盤層塊少、Fe、Mn)

図44 溝 2 土層断面

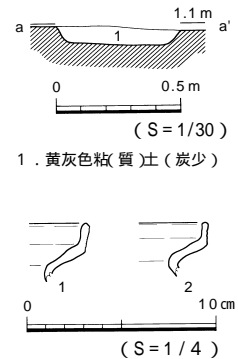
溝3（図42・45）

調査区中央部やや西よりの位置で検出した。BU59区である。東半は溝1・土坑6・7に重複する。検出面は標高1.09mで、9層にあたる。全体的には東西方向を示し、長さは3.03m、幅は0.45～0.55mを測る。底面は標高1.03mに位置し、検出面からの深さは0.06mと非常に浅い。断面形は皿状を呈する。

埋土は黄灰色の粘性がやや強い粘質土である。際だった包含物は認めがたいが、全体的形態の特徴や位置関係から、溝1と同様の機能を有する可能性が指摘される。

遺物は甕・鉢片が約50片出土しているが、いずれも細～小片である。

本遺構は遺物の時期などから古墳時代初頭に属すると想定される。



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師器・甕	-	-	-	口縁柳描沈線9条：浅い、横ナデ	細砂、石英・角閃石	鈍い橙
2	土師器・甕	-	-	-	口縁2条の沈線が残存、横ナデ	細砂、均質	薄黄橙～橙

図45 溝3土層断面・出土遺物

溝4（図13・46）

調査区中央部、58区を概ね南北方向に走る溝であるが、北側と南側に分かれて検出された。別遺構の可能性もあるが、検出レベルや位置関係、規模あるいは底面レベルなどの状況から一連の溝と捉えて報告する。検出面は標高0.85～0.88mで、10a層にあたる。

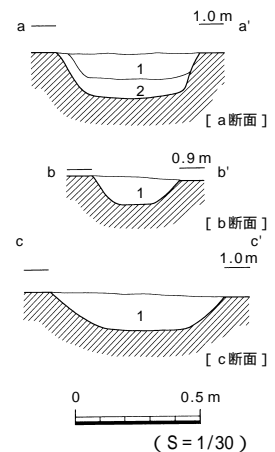
北溝は、調査区の北壁面から南に約7.5mの位置まで伸びて収束する。BR～BS57～58区である。北壁面において、幅は0.57m、底面は標高0.8mに位置する。9層下面、つまり10a層上面に確認される掘削面は標高約0.9mに位置しており、深さは0.18mを測る。断面形は逆台形を示す。埋土は二分される。上層がやや暗い色調であるのに対して、下層は鉄分の沈着が顕著である。全体に粘性が強い。また、こうした両土層の層界ラインの状況からは、溝の掘り返しが行われた可能性も考えられる（図46 - a断面）。

一方、南溝は、調査区の中央付近から調査区の南壁へと伸びる。BU～BX58区である。北端部は中世溝などによる破壊で不明であるが、竪穴住居4の位置では確認されないことから、底面レベルから考えてBUライン付近で収束する可能性が高い。

残存する長さは約18mである。幅は0.7m、底面は標高0.76mに位置し、検出面からは0.16mの深さを有する。断面形は、やや緩やかな逆台形を呈する。埋土は淡い灰褐色の砂質土であり、基盤土層がブロック状に含まれる。

北溝と南溝は、規模や形態面については共通するが、埋土の点でやや違いを見せる。粘性の違いについては、南東側に向かって地形が下降する傾向があることが影響している可能性が高く、機能面の違いとは考えにくい。ただし、北溝で見られた上下層の関係が南側では確認されていない点は、管理面での違いを示しているのかもしれない。

両溝の間隔は7m程度で、その間には竪穴住居4が位置する。同住居の検出面は、他の住居が9層であるのに対して、本溝と同じ10層である。また、住居の主軸方向と溝の走行方向（北溝：N22°E、南溝：



- a・b断面
 1. 暗灰色粘質土（焼土粒、Fe）
 2. 灰褐色粘土層（Fe多）
 c断面
 1. 淡灰褐色砂質土（黄白色土塊）



図46 溝4土層断面

N 19°E) が概ね近い方向である点も注目されるが、両遺構の関連性については断定できない。本溝の機能を考えると、区画を意識した役割も一つの可能性として想定しておきたい。

遺物は土師器の細片が8点あるのみである。本溝の時期は古墳時代初頭と想定される。

溝5 (図42)

調査区の中央部西よりの、BU59~60区に位置する。本遺構の北側には土坑・溝・ピットが集中する。

検出面は標高0.93m、10a層にあたるレベルである。W 62°Nの方向に走る。両端部は緩やかなカーブを描きながら収束しており、全長は4.3mを残すのみである。幅は0.15m、底面の高さは標高0.88mにあり、深さは0.46mである。断面形はボウル状を示す。埋土は、黄灰色粘質土で炭化物が僅かに含まれる単一土層である。

非常に小規模な溝であるという特徴に加えて、その走行方向が掘立柱建物1・2あるいは竪穴住居4の東西方向の軸とほぼ一致している点や、同時期の土坑・溝・ピットなどの遺構が集中する地域の中でも南端部付近に位置している点は、本遺構の性格を考える上で参考になる。こうした周囲の遺構との位置関係から、何らかの区画に関連するような機能が考えられる。

遺物は出土していない。所属時期は、検出面や周辺遺構の関係などから判断して、古墳時代初頭と想定される。

g . 土器溜まり

土器溜まり1 (図42・47~52、図版2・7・9)

調査区の中央部西半、BU58~59区に広がる。溝4以西において、BUラインからBVラインの間で、東西方向に遺物の集中的な分布が認められた。上部には、溝2のほか大形の中世溝あるいは近世土坑など多数の遺構が重複しているため、分布域の北側あるいは東側の端部は確認できない。また、分布範囲内においても遺物の分布が分断された状況にあることから、それらが一連のものであるか、あるいは別遺構によるものかの判別を直接的に行うことはできなかった。

遺物は、標高約1.1m前後で検出された。溝2の検出段階にはすでに姿を見せていた。同溝は、本遺構の分布域と主軸を一致させるように上部に形成されている。

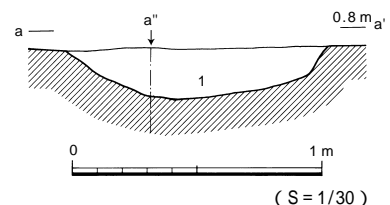
遺物の分布は、溝2が重複することで分断された範囲(土器溜まり1-)と溝1と溝2の間(土器溜まり1-)の2ヶ所に大別される。両範囲の間は近世土坑による破壊で分断されているため、両集中域の関係を明確にすることは出来なかった。

土器溜まり1- では、遺物の堆積は標高1.11m~1.03mの間に確認される。ほぼ同一面に揃った状態で、幅1m程度の帯状の広がりを見せる。掘り込みについては、完掘段階に、若干北側に地形が下がる傾向を見いだすことはできたが、遺物出土レベルにおいて、それに伴うラインを検出することはできなかった。

土器溜まり1- は、土器溜まり1- の分布域に接するが、帯状のラインからは、やや南にはみ出すような分布域となる。同範囲には掘立柱建物1の柱穴(P1)が下部に位置し、本遺構上部を覆う点から、同遺構との関連も考えられる。また、分布範囲内にある近世土坑の壁面では、標高0.93mから0.2mの深さを有する掘り方が確認される。幅は約1m、底面は標高0.73mに位置し、断面形は浅い皿状を呈する。埋土中には土器が多く包含される。遺物の分布は連続的である。単独の遺構かどうかについては、平面的に残存部分が狭小であるために、断定的な判断は困難である。土器溜まり1- についても、土器溜まり1- と同様に明確な掘り方は確定できない。

遺物は、土器溜まり1- 全体でコンテナ9箱分(1箱28ℓ)の量が出土している。

土器溜まり1- に包含される器種は、壺・甕・高杯・鉢・大形鉢・



1 . 灰褐色粘質土 (土器・Fe・Mn多)

図47 土器溜まり1- 土層断面

小形器台・埴・脚台部のほか、土錘1点と石錘1点があげられる（図49～51）。

壺は、大形器種では破片が1点（図49-5）含まれるのみで、その比率は低い。掲載以外の土器には、壺あるいは大形鉢の破片が10点程度含まれる。甕は、在地に特徴的なもの（同-5～17）が大半を占めるが、他に、くの字口縁の甕（同-18・19）が数点含まれる。いずれも外面に叩き調整が施される。前者の甕では、口縁端部の幅あるいは沈線の状態・胎土・内面調整などの特徴から多少の分類も可能であり、多様性が存在することを窺わせる。甕の量は、掲載遺物以外の破片がコンテナ1箱分（1箱18ℓ）程度認められる。高杯は、二重口縁のものが2点確認される（図50-23・24）。その他の未掲載分の破片はコンテナ1箱（1箱18ℓ）程度である。鉢は、碗形態と甕形態に分けられる上、その中でも形態的なバラツキを見せる。搬入土器としては、壺（図49-3）あるいは甕（同-18～20）が指摘される。

土器溜まり1 - では、土器溜まり1 - よりも遺物量は少なく、図化可能な大きさに復元される遺物も少ない。器種は壺・甕・高杯・鉢・大形鉢・蓋、そして砥石1点である（図51・52）。掲載遺物以外には、壺の破片

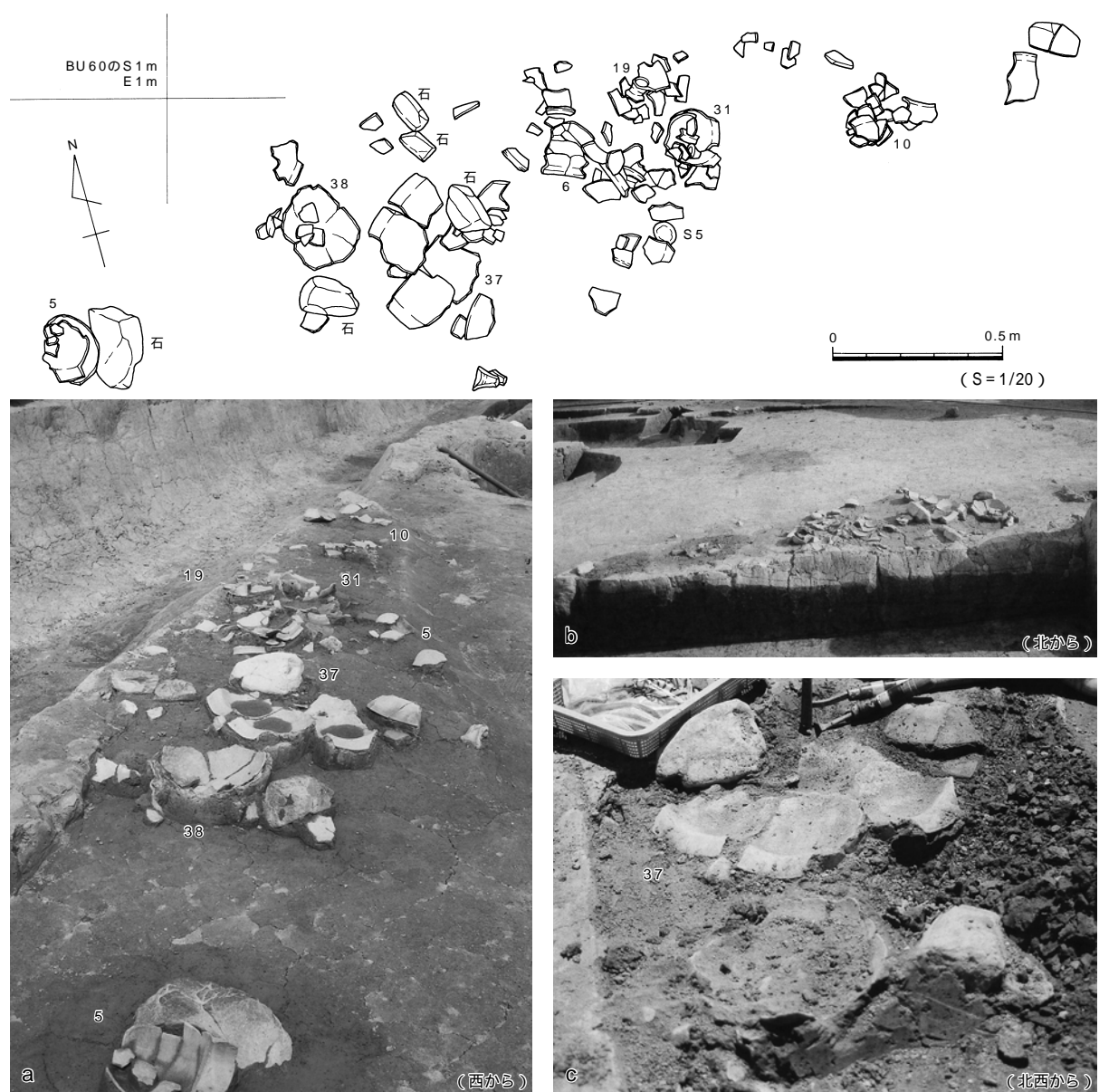


図48 土器溜まり1 - 遺物出土状況

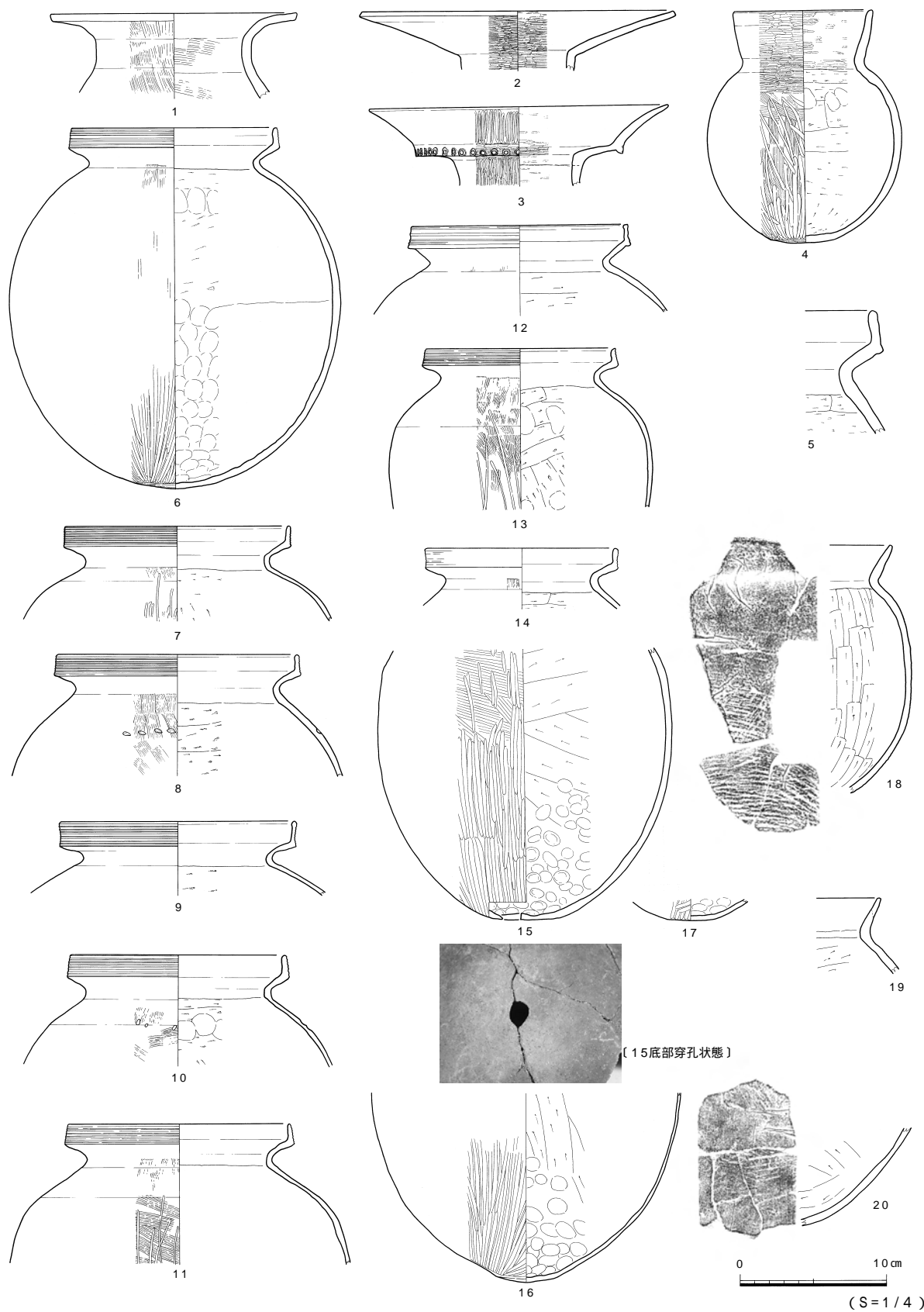


図49 土器溜まり1 - 出土遺物(1)

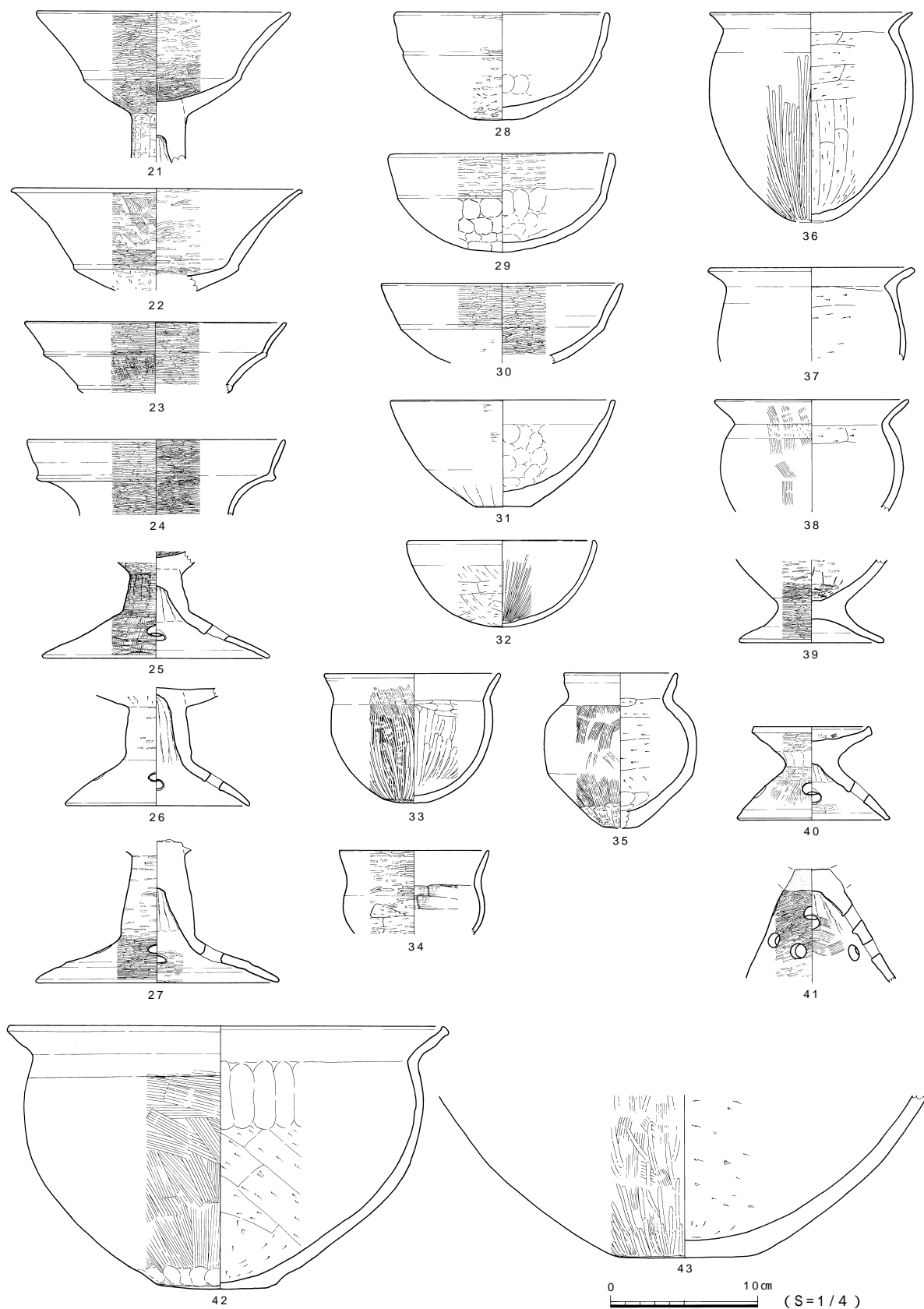
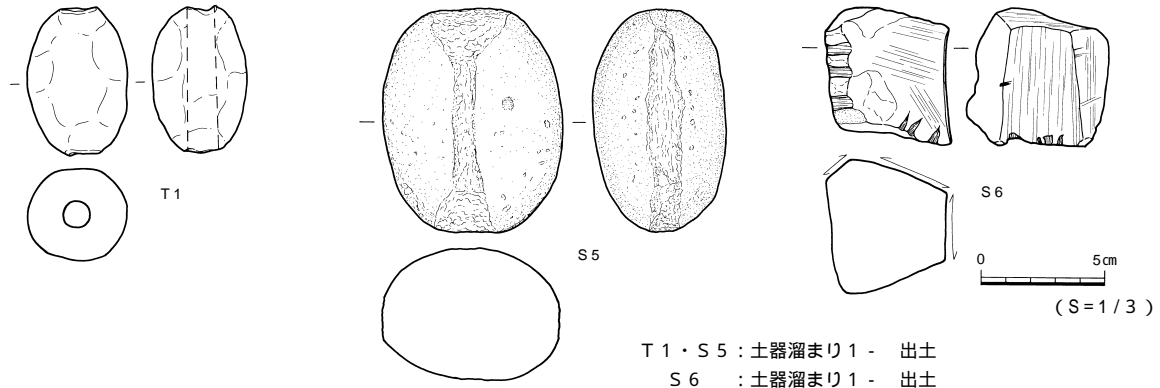


図50 土器溜まり1 - 出土遺物(2)



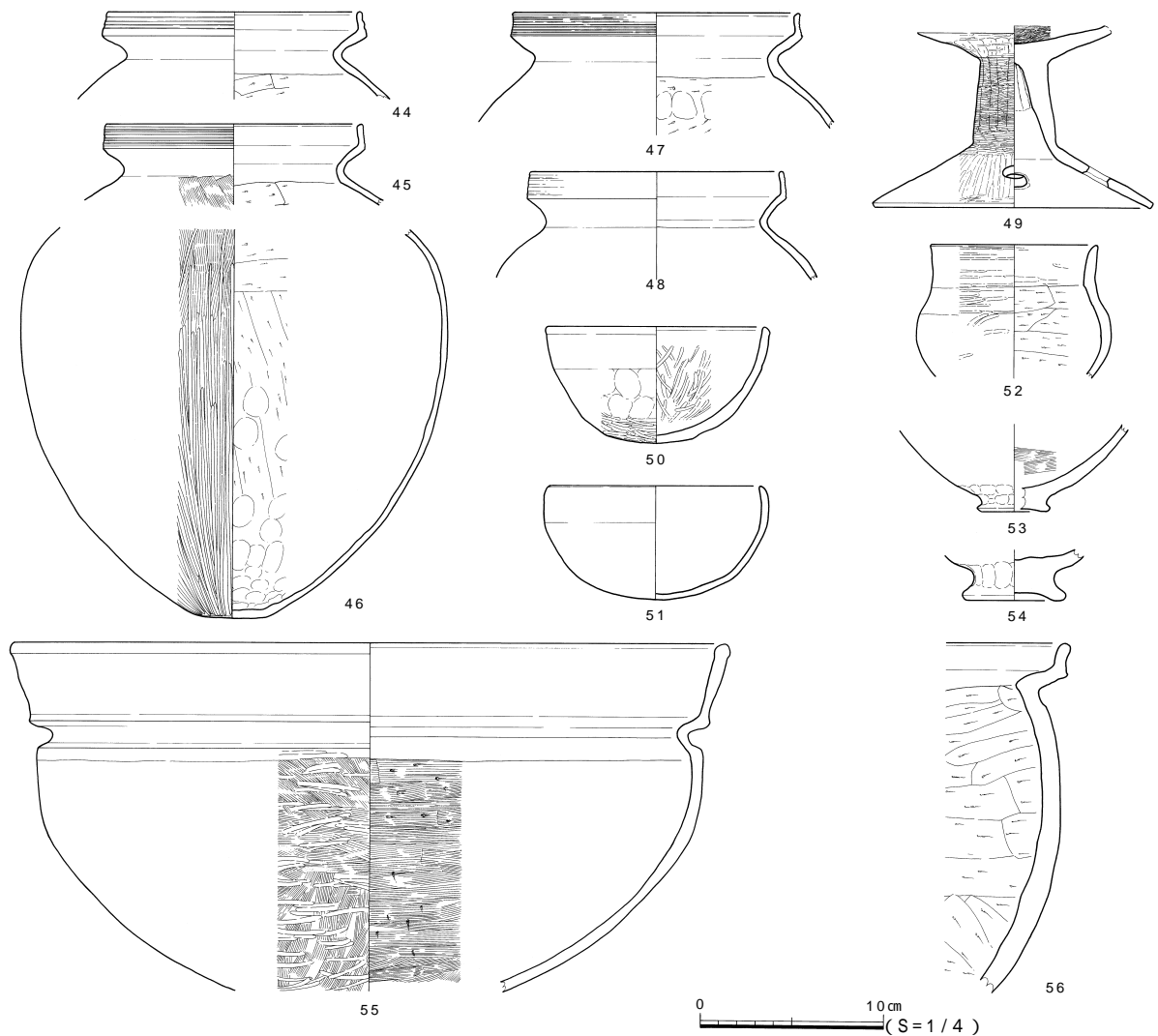
番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色 調 : 内 面 / 外 面
		口径	底径	器高			
1	土師器・壺	*16.6	-	-	(内) 深い横ハケ・器壁剥落 (外) 縦ハケ後粗いナデ、1/3 残存	粗砂、石英粒	橙褐～暗褐
2	土師器・壺	*21.2	-	-	密で細かく丁寧な磨き、口縁端部は面を持ちシャープな作り、2/5 残存	微砂、精良	黄褐～黄橙褐
3	土師器・壺	*20.3	-	-	(内) 細かい磨き・摩滅・粘土接合痕 (外) 密で細かい磨き、口縁下端に竹管文、1/4 残存	精良	薄橙褐～暗橙褐
4	土師器・壺	*9.6	*4.3	15.8	(内) 口縁磨き後ナデ・胴部削り (外) 口～頸部と底部磨き・胴部ハケ後磨き、1/2 残存	微砂、砂粒多	薄黄褐～明橙褐
5	土師器・甕	-	-	-	(口) 横ナデ (内) 削り後ナデ (外) 胴部縦ハケ後ナデ	微砂、均質	薄黄茶灰
6	土師器・甕	*14.0	*5.6	*24.6	口縁柳描沈線7条 (内) 削り後押圧 (外) ハケ後磨き・摩滅・煤付着、1/4 残存	微～細砂、均質	薄黄白灰～暗褐
7	土師器・甕	*15.4	-	-	口縁柳描沈線8条 (内) 削り (外) ハケ・磨き・煤付着、1/3 残存	微～細砂、赤色粒	薄灰褐～薄黄灰
8	土師器・甕	*16.2	-	-	口縁柳描沈線7条刺突4ヶ所、煤付着、二次的被熱、1/3 残存	微～細砂、均質	薄灰褐～暗褐
9	土師器・甕	*16.2	-	-	口縁柳描沈線9条 (内) 削り後ナデ、器壁剥落、1/4 残存	微～細砂、均質	薄黄灰褐
10	土師器・甕	*14.5	-	-	口縁柳描沈線6条 (内) 削り後押圧 (外) ハケ・刺突3ヶ所・摩滅、1/3 残存	細砂、均質	薄橙褐
11	土師器・甕	*15.0	-	-	口縁柳描沈線8条 (内) 削り後押圧 (外) ハケ後磨き・頸部は後ナデ、1/3 残存	細砂、赤色粒	黄灰褐～橙褐
12	土師器・甕	*14.8	-	-	口縁沈線4条 (内) 削り (外) ハケ目?・摩滅顕著、1/5 残存	微～細砂	暗黄褐/暗黄褐
13	土師器・甕	*13.0	-	-	口縁柳描沈線6条 (内) 削り後押圧 (外) ハケ後磨き、2/5 残存	細砂、均質	橙褐
14	土師器・甕	*13.2	-	-	口縁柳描沈線6～7条 (内) 削り後押圧 (外) ハケ・器壁剥落、口縁端部は平坦、1/5 残存	微～細砂、赤色粒	黄橙褐
15	土師器・甕	-	5.2	-	(内) 胴部削り後底部付近押圧 (外) 胴部ハケ後磨き、底部に焼成後穿孔 (径1.3cm)	細砂	暗褐/暗橙褐
16	土師器・甕	-	4.0	-	(内) 胴部削り後底部付近押圧 (外) 磨き・黒斑 (底外) 押圧後横方向磨き	細砂	灰褐/暗褐
17	土師器・甕	-	3.0	-	(内) 押圧 (外) 磨き・黒斑	微～細砂	灰褐/暗褐
18	土師器・甕	-	-	-	(内) 削り (外) 下半平行タタキ・上半ナデ	細砂、砂粒やや多	灰褐～暗灰
19	土師器・甕	-	-	-	(内) 削り (外) 口縁の押圧痕明瞭・粘土接合痕	微～細砂	淡褐/黒褐～暗褐
20	土師器・甕	-	-	-	(内) 削り (外) ナデ・タタキ・黒斑、19と同一個体	微～細砂	淡褐/暗褐
21	土師器・高杯	*17.3	-	-	密な磨き (脚内) 絞り目 (脚外) 縦方向の削り、丹塗り、1/3 残存	微砂、均質	赤橙 丹塗、乳白
22	土師器・高杯	*19.7	-	-	ハケ後磨き (内) 口縁部はハケ無し (外受部) 削り痕、摩滅、丹塗り、1/3 残存	微差、精良	赤橙 丹塗、薄橙
23	土師器・高杯	*17.7	-	-	(内) 密な磨き (外) 粗い縦ハケ後密な磨き、摩滅、丹塗り?、1/7 残存	微差、精良	黄橙褐
24	土師器・高杯	*17.3	-	-	細かい横磨き、二次的変色、1/2 残存	微砂、精良	橙茶褐/暗橙褐
25	土師器・高杯	-	*15.1	-	(内) 磨き・脚部絞り目 (外) 削り・ハケ後磨き、円孔2ヶ所 (径0.9cm) 残存、1/3 残存	微～細砂、赤色粒	暗褐～黄橙褐
26	土師器・高杯	-	12.3	-	(外) 削りりと磨き痕跡 (脚内) 絞り目、器壁剥落顕著、円孔4ヶ所 (径0.7cm)	微～細砂、均質	明橙褐
27	土師器・高杯	-	*16.2	-	裾部に段が廻る、(裾部) 磨き (脚柱内) 絞り目、二次的変色、円孔 (径1.3cm) 3ヶ所、1/3 残存	細砂、均質	薄黄灰褐
28	土師器・鉢	*14.1	3.5	7.3	(内) 押圧 (外) 削り後細かい磨き、口縁端部はやや平坦、摩滅顕著、1/4 残存	微～細砂、均質	橙褐
29	土師器・鉢	14.7	-	6.7	(口) 密な磨き (脚) 整形時の叩出しによる面・押圧痕、二次的変色	微～細砂、黒色粒	薄黄灰/暗褐 変色
30	土師器・鉢	*16.3	-	-	緻密で丁寧な磨き、摩滅、1/8 残存	微砂、均質、精良	橙褐
31	土師器・鉢	*15.2	*3.9	7.1	(内) 押圧・ナデ (外) 削り・ハケ・ナデ痕・黒斑、摩滅、1/4 残存	細砂、均質	黄褐～暗褐
32	土師器・鉢	*12.5	-	5.8	(内) 細かい磨き (外) 削り後ナデ、摩滅、器壁薄く丁寧な仕上げ、1/8 残存	微砂、概ね精良	黄橙
33	土師器・鉢	*11.8	3.1	8.8	(内) 放射状の磨き・ナデ・底部摩滅 (外) ハケ後磨き、底部に黒斑、口縁部5/6欠	細砂、砂粒やや多	明橙褐/暗褐 変色
35	土師器・鉢	*7.5	*2.3	10.5	(内) 削り (外) 縦ハケ・下端部削り、器壁厚手、口～頸部3/4欠	微～細砂	薄黄灰～橙褐
34	土師器・鉢	*10.0	-	-	(内) 板ナデ (外) 削り磨き、摩滅、二次的変色、1/3 残存	微～細砂、均質	薄黄灰/暗褐
36	土師器・鉢	*13.7	-	14.2	(内) 削り (外) ナデ後磨き・下半に黒斑、二次的変色、1/3 残存	微～細砂、均質、精良	薄黄灰
37	土師器・鉢	*13.6	-	-	(内) 削り (外) ナデ、摩滅、1/6残存	微～細砂、角閃石	薄黄灰
38	土師器・鉢	*12.4	-	-	(内) 削り (外) ハケ、摩滅顕著、1/5残存	微～細砂、均質	明橙褐～橙褐
39	土師器・台付鉢	-	*9.2	-	(内) 密な磨き (下に工具痕・脚部ナデ (外) 細密な磨き、摩滅、二次的変色、1/3 残存	微～細砂、均質	薄橙褐/暗褐 変色
40	土師器・器台	7.8	*9.8	6.3	(内) ハケ・ナデ・絞り目 (外) ハケ・磨き、円孔 (径1.2cm) 4ヶ所、脚1/2欠	微～細砂、精良	橙褐/暗褐 変色
41	土師器・器台	-	-	-	(内) 杯部磨き・脚部絞り目後ハケ (外) 磨き、円孔 (上段4ヶ所・下段8ヶ所)	微～細砂、均質	明橙褐/暗褐 変色
42	土師器・鉢	*29.3	*7.2	17.8	(内) 削り・ナデ (外) ハケ・下端押圧、1/3 残存	微～細砂、均質	薄橙灰
43	土師器・壺	-	*9.0	-	(内) 削り (外) 縦ハケ後粗い磨き (底外) 横位のハケ、摩滅、黒斑、1/5 残存	細砂、均質	薄橙茶灰～黄灰
T 1	土鍾	長5.9、幅4.0、厚3.8	-	-	管状土鍾、押圧とナデによって整形、黒斑、重量82.4g	微～細砂、均質	薄橙褐

図51 土器溜まり1 - 出土遺物

が1点、大形壺あるいは鉢が10片程度、甕は胴部片がコンテナ1/2箱分(1箱18ℓ)、高杯・鉢が小片で80片程度含まれる。

両土器溜まりの時期は、出土遺物の比較から、土器溜まり1 - に関しては甕のバラツキから時期幅を見ることが出来るが、全体的には古墳時代初頭の範囲内におさまると考える。

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
44	土師器・甕	*13.6	-	-	口縁沈線2条(内) 篋削り(外) ナデ、摩滅、1/5 残存	細砂、均質、砂粒多	薄黄褐
45	土師器・甕	*13.9	-	-	口縁柳描沈線8条(内) 篋削り(外) ハケ、口縁端部は平坦、1/5 残存	細砂、均質、砂粒多	薄黄褐～褐
46	土師器・甕	-	3.4	-	(内) 押圧・篋削り(外) 縦ハケ・篋磨き(底外) 篋磨き、黒斑、煤付着	細砂、均質	黄褐～暗褐
47	土師器・甕	*15.6	-	-	口縁柳描沈線8条(内) 篋削り後一部押圧(外) ナデ、器壁剥落、1/2 残存	細砂、均質	灰褐/黒褐
48	土師器・甕	*14.0	-	-	口縁柳描沈線6条口縁端部は丸み、摩滅著しく調整不明、1/3 残存	細砂、砂粒多	薄橙褐
49	土師器・高杯	10.1	15.0	10.0	密な篋磨き(受部外) 篋削り痕(脚内) 絞り目・ナデ、二次的変色、円孔(径1.2cm)4ヶ所	微砂、均質	薄橙褐/暗褐 変色
50	土師器・鉢	11.7	-	6.4	(内) 押圧・篋磨き(外) 整形時の押圧後下半篋磨き、口縁端部に平坦面	細砂・均質	黄褐～暗褐
51	土師器・鉢	*11.3	-	6.2	器壁平滑、摩滅顕著	微砂・均質	薄黄～灰褐
52	土師器・鉢	*9.0	-	-	(内) 篋削り(外) 篋磨き、1/3 残存	細砂・均質	褐～黒褐
53	土師器・鉢	-	*3.4	-	(内) ナデ・横ハケ(外) 押圧・ナデ・摩滅、黒斑、底部上げ底、1/4 残存	微砂・均質	明橙褐
54	土師器・鉢	-	*5.3	-	押圧・ナデ、底部上げ底、摩滅1/3 残存	微砂・均質	橙褐～暗褐
55	土師器・鉢	*38.7	-	-	(内) ハケ(外) ハケ後粗い篋磨き(口) 横ナデ、丹塗り、1/5 残存	細砂・均質	暗褐/明橙赤褐 丹塗
56	土師器・鉢	-	-	-	(内) 篋削り(外) 斜～縦位のハケ(口) 横ナデ、黒斑	細砂・均質	黒灰/黄褐

図52 土器溜まり1 - 出土遺物

4. 古代末～中世の遺構・遺物

本時期に属する遺構として、井戸2基・土坑2基・溝19条のほかに柱穴約250基があげられる。実年代では、12世紀後半～14世紀前半を目安としておきたい。

古代末には、BYライン上を概ね東西方向に溝6が走る。さらに、東には溝7が続き、一連の区画が設定され

ていることが窺われる。両溝の端部はそれぞれ収束する。ただし、同時期の柱穴は確認されない。次の段階に同溝は埋没し、やや北側に新たな溝の形成が予想される。検出された遺構は井戸2・3と柱穴群である。井戸は柱穴群の分布域に対して端部となる位置に連続的に形成される。

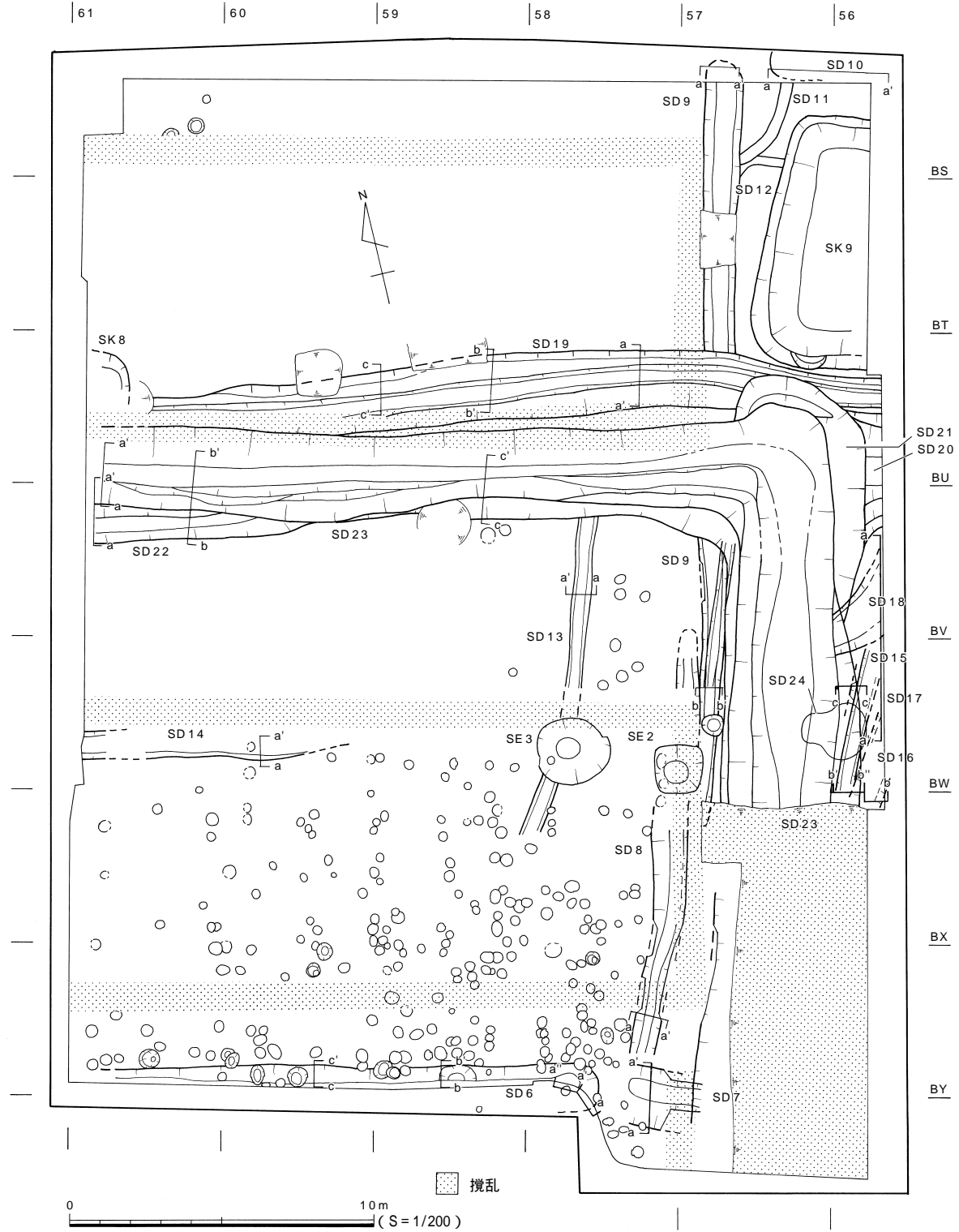


図53 古代末～中世遺構全体図

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

中世前半には、中央部を概ね東西方向に走る溝（溝19）が特徴となる。さらには、その溝はL字形に形態を変化させて大形の溝（溝20～23）へと変貌し、閉鎖性の高い屋敷を創出する。同溝では、一部が張り出すような部分が付随しており、溝の機能について、それまでの溝とはやや異なった性格を併せ持つ可能性も窺われる。土坑は、14世紀前葉と14世紀前半にそれぞれ1基が東西溝北側の脇に併設される。特に、後者は大形である。両土坑の機能は、水の管理との関連も考えられ、溝の一部となる可能性も高い。

調査区の南半部に集中する柱穴には、規模が非常に大形のもの、礎石状の石あるいは完形に近い椀・皿を含むものが多い。出土遺物からは、12世紀末～14世紀初頭の時期が確認される。

以上のように、本時期は、区画溝に囲まれた屋敷地の存在が特徴である。古代末にその位置はやや移動し、中世集落としての区画が新たに設定される。さらに、その溝は、遅くとも13世紀末以降には、非常に大形化も示しつつ、屋敷地を大きく囲むように閉鎖性を強めるなど、溝としても屋敷地としても飛躍を見せる。また、同溝からは猿形木製品が出土しており、流通拠点の存在を窺わせる。



図54 古代末～中世遺構完掘状況

a . 井戸

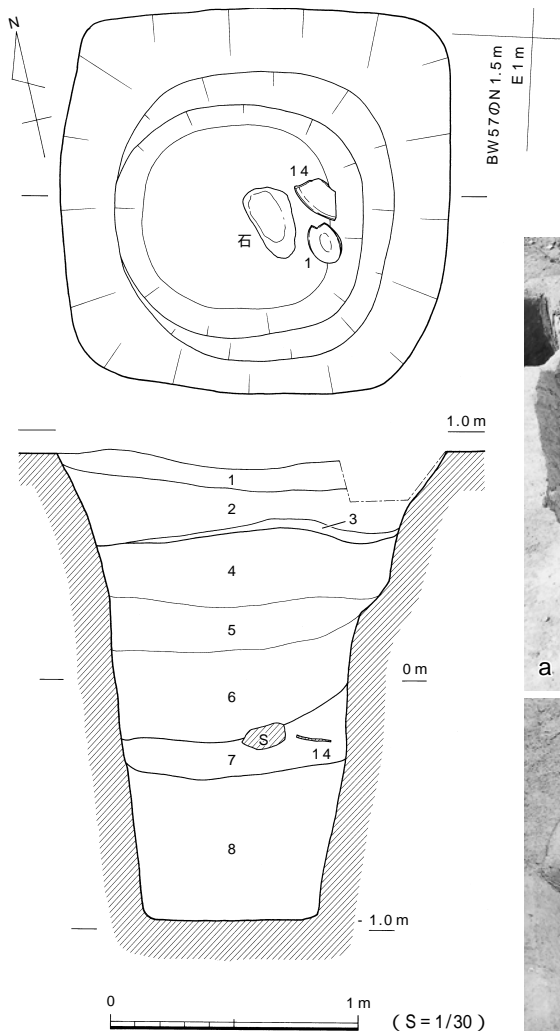
井戸 2 (図55 ~ 57、図版 3・4・8)

調査区の中央から南東より、BV56・57区で検出した。攪乱あるいは溝8が上部に重複する。検出面は9層下半、標高0.9m付近であるが、本来の掘削面は、重複遺構や基本土層との関係を考慮すると6層である可能性が高い。

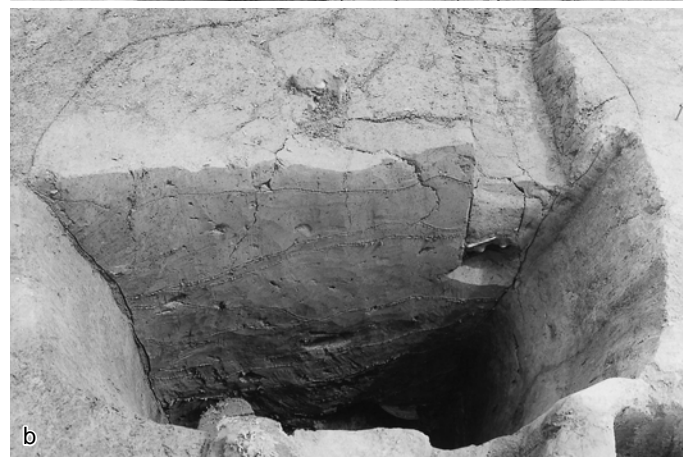
上面形は1.57m × 1.55mの隅丸方形を呈する。底面は標高 - 0.97mに位置し、0.76 × 0.74mの円形を呈する。上面からの深さは1.9mを残す。断面形は、標高0.33m付近から上方にやや広がりをもつ逆台形である。

埋土は8層に分層したが、その特徴から三群に大別される。1群(1~3層)では、1・2層の類似性が高く焼土を含む。2群(4~6層)は色調の濃淡によって細分したが、基本的には灰褐色系の粘質土として共通する。3群(7・8層)は粘性の強い一群である。7層は焼土の他に炭化物が多く含まれ、出土遺物も大形である。同層上面付近には全体が煤で覆われた焼け石(図57-S7)・ほぼ完形の土師質土器椀(図57-1)・すり鉢

(同-14)片がそれぞれが1点出土した(図56)。標高 - 0.27m付近である。包含物が際だって多いわけではないが、本井戸の中で、何らかの祭祀的行為を考案させる土層といえよう。最下層の8層は、粘土の中に砂が混在しており、使用段階の堆積土の可能性を有す。



- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 青灰褐色砂質土 (焼土、土器) | 7. 暗灰黒色粘質土 |
| 2. 青灰色土 (焼土、土器) | (炭化物多、焼土、 |
| 3. 暗褐色土 (土器) | 大形土器片、焼石) |
| 4 ~ 6. 暗灰褐色粘質土 | 8. 暗黒灰色粘土 (砂多) |



a . 完掘状況 (北から) b . 土層断面 (南から)

図55 井戸 2

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

出土遺物はコンテナ1箱（28ℓ）の量がある。吉備系土師質土器碗、土師質土器杯・皿・鍋・竈片、瓦器碗の底部あるいは白磁碗の小片が含まれる。その中で、吉備系土師質土器碗1点、皿3点、東播系須恵器鉢1点は、いずれも7層から出土している。出土量は、1群（上層）で最も多いが小～細片であり、2群（中層）では量も少なく細片である。それに対して、3群（下層）からは、点数はやや少ないが比較的大形の遺物が多い。焼け石2点も確認される（図57 - S7）。

本遺構の時期は、古代末～中世初頭（12世紀末）にあたる。

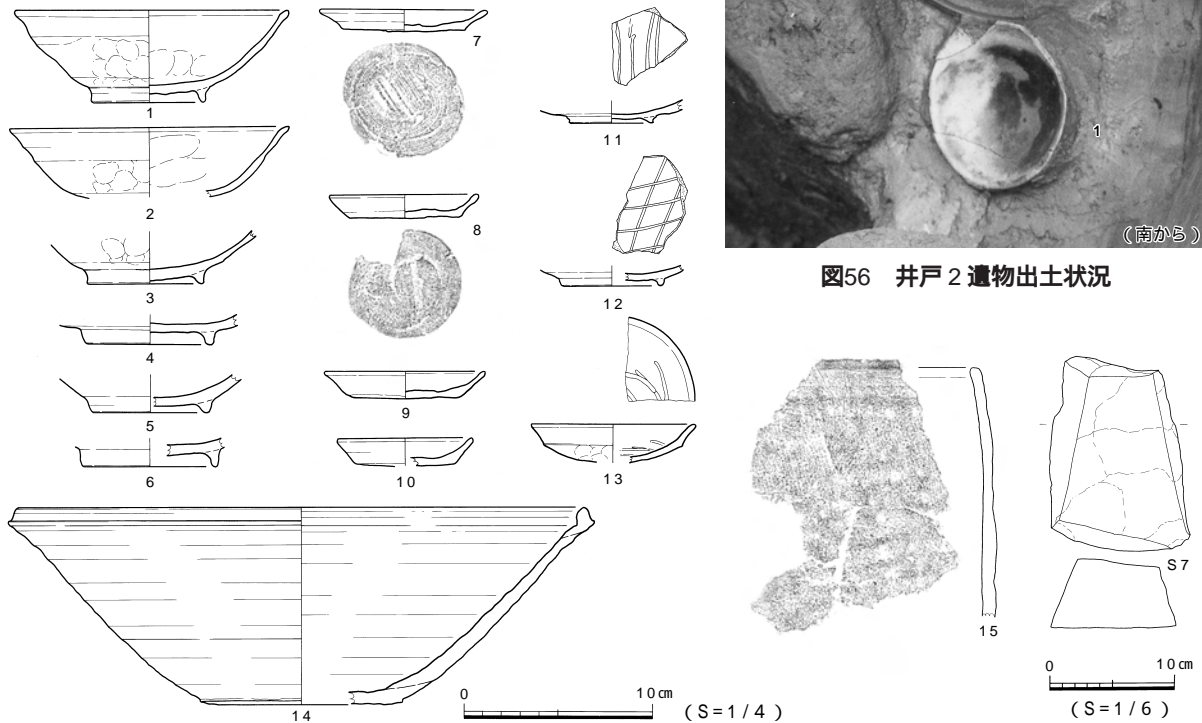


（南から）



（南から）

図56 井戸2 遺物出土状況



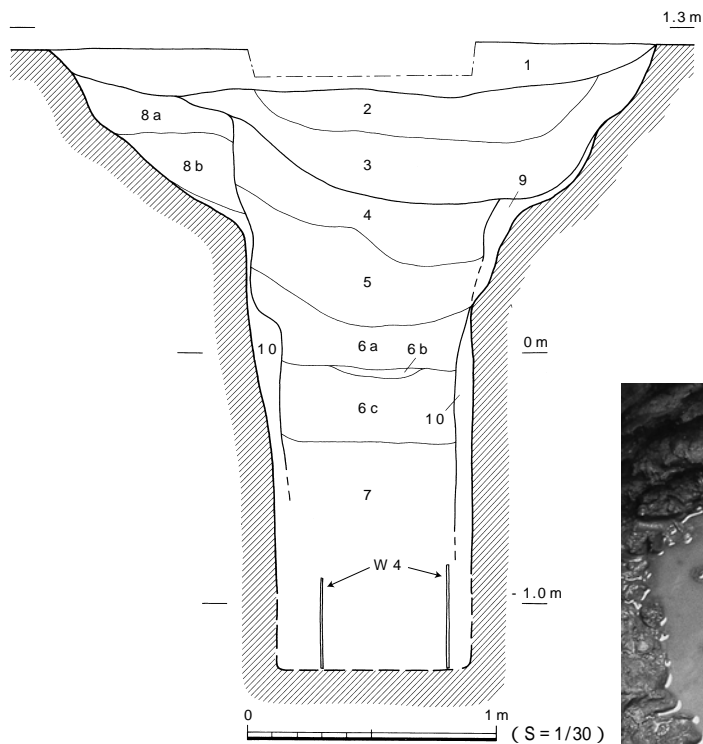
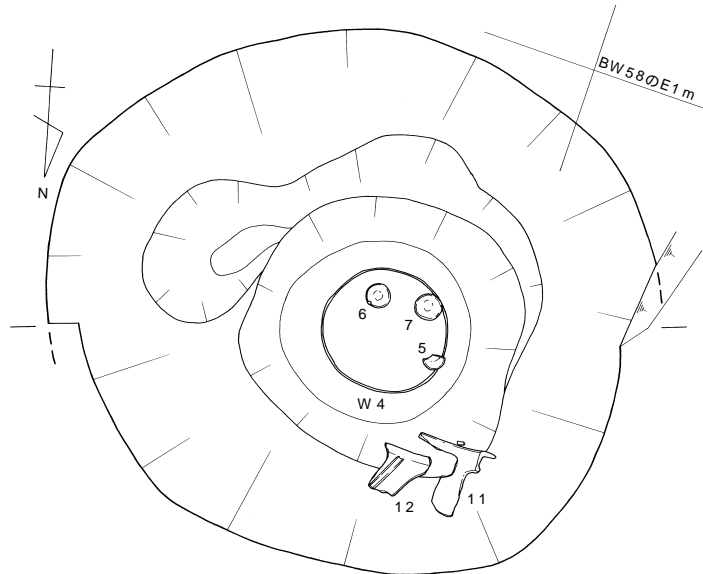
番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・碗	14.4	5.8	4.9	(口)横ナデ(内)ナデ・下半押圧・炭素吸着(外)押圧・被熱(高台内)ひび割れ、口縁1/4欠	微砂、均質、石英	薄黄灰白
2	土師質・碗	*14.7	-	-	(口)横ナデ(内)ナデ(外)押圧、1/3残存	微砂、均質、赤色粒	薄黄灰白～灰白
3	土師質・碗	-	6.0	-	(内)ナデ(外)押圧・ナデ(底)厚く下方にたむむ	微砂、均質	薄黄灰白～灰白
4	土師質・碗	-	6.4	-	(内)ナデ・重ね焼き痕(外)ナデ・底部仕上げナデ	微砂、石英粒顕著	薄黄灰白
5	土師質・碗	-	*5.9	-	(内)ナデ・甕磨き痕？(外)ナデ、器壁厚め、1/3残存	微砂、均質	薄灰白
6	土師質・碗	-	*6.9	-	ナデ、1/3残存	微砂、均質	薄黄灰白
7	土師質・皿	*8.9	6.4	1.2	横ナデ(底)内面仕上げナデ・外面甕切り後板目痕、口縁部1/4残存	細砂、均質	薄橙茶灰
8	土師質・皿	7.8	5.8	1.3	横ナデ(内)底部仕上げナデ(外)甕切り後板目痕	微砂、均質	薄灰白
9	土師質・皿	*8.4	*5.6	1.5	横ナデ(内)底部仕上げナデ(外)甕切り未調整、1/3残存	微砂、概ね精良	灰白～薄黄灰白
10	土師質・皿	*7.2	*5.2	1.5	横ナデ(内)底部仕上げナデ(外)甕切り後ナデ、1/3残存	微砂、概ね精良	薄褐～黄灰
11	瓦 器・碗	-	*4.2	-	(内)ナデ・平行の暗文(外)ナデ(高台)低く一部つぶれる・端部は平坦、1/3残存	微砂、精良	暗灰～灰黒
12	瓦 器・碗	-	*5.0	-	(内)ナデ・格子目の暗文(外)ナデ(高台)低く断面台形状・端部は平坦、1/4残存	微砂、精良	灰～黒灰
13	瓦 器・皿	*8.6	*7.3	-	(内)ナデ・同心円状の暗文(外)押圧(口)横ナデ、1/4残存	微砂、均質	暗褐～黒灰
14	須恵器・鉢	*29.0	*10.7	*10.5	横ナデ(底外)ナデ(内下半)自然釉、口縁端部やや肥厚、1/5残存、「東播系」	細砂多	灰～青灰
15	土師質・竈	-	-	-	縦方向の板ナデ・押圧、煤付着、摩滅	細～粗砂、赤色粒	橙褐～暗褐

番号	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	特 徴
S 7	加工痕のある石材	15.5	11.6	5.4	1247.7	流紋岩	全面を打ち欠き整形、被熱、全面煤が付着

図57 井戸2 出土遺物

井戸3 (図58~62、図版3・4・10)

調査区のほぼ中央部、BV57区で検出した。検出面は標高1.23m、4層下面であるが、本地点では7層にあたる可能性が高い。



- | | |
|---------------------------------|----------------------|
| 1. 淡灰褐色砂質土
(炭・焼土少、灰色・明褐色粘土塊) | 6b. 暗灰褐色粘土 (炭少) |
| 2. 淡灰褐色砂質土 (粗砂・炭・焼土少) | 6c. 暗灰褐色粘土 (土器) |
| 3. 暗灰褐色砂質土 (粗砂・炭・焼土少) | 7. 暗灰褐色粘質土 (下半は砂多) |
| 4. 暗灰褐色土 (炭・焼土少) | 8a. 明灰褐色土 |
| 5. 暗灰褐色粘質土 | 8b. 明灰褐色土 (炭・焼土・土器少) |
| 6a. 暗灰褐色粘土 (土器) | 9. 暗灰色粘土 |
| | 10. 灰色粘土 |



遺物出土状況

a. 竈 (南東から) b. 皿 (北から) c. 曲物 (北から)

図58 井戸3

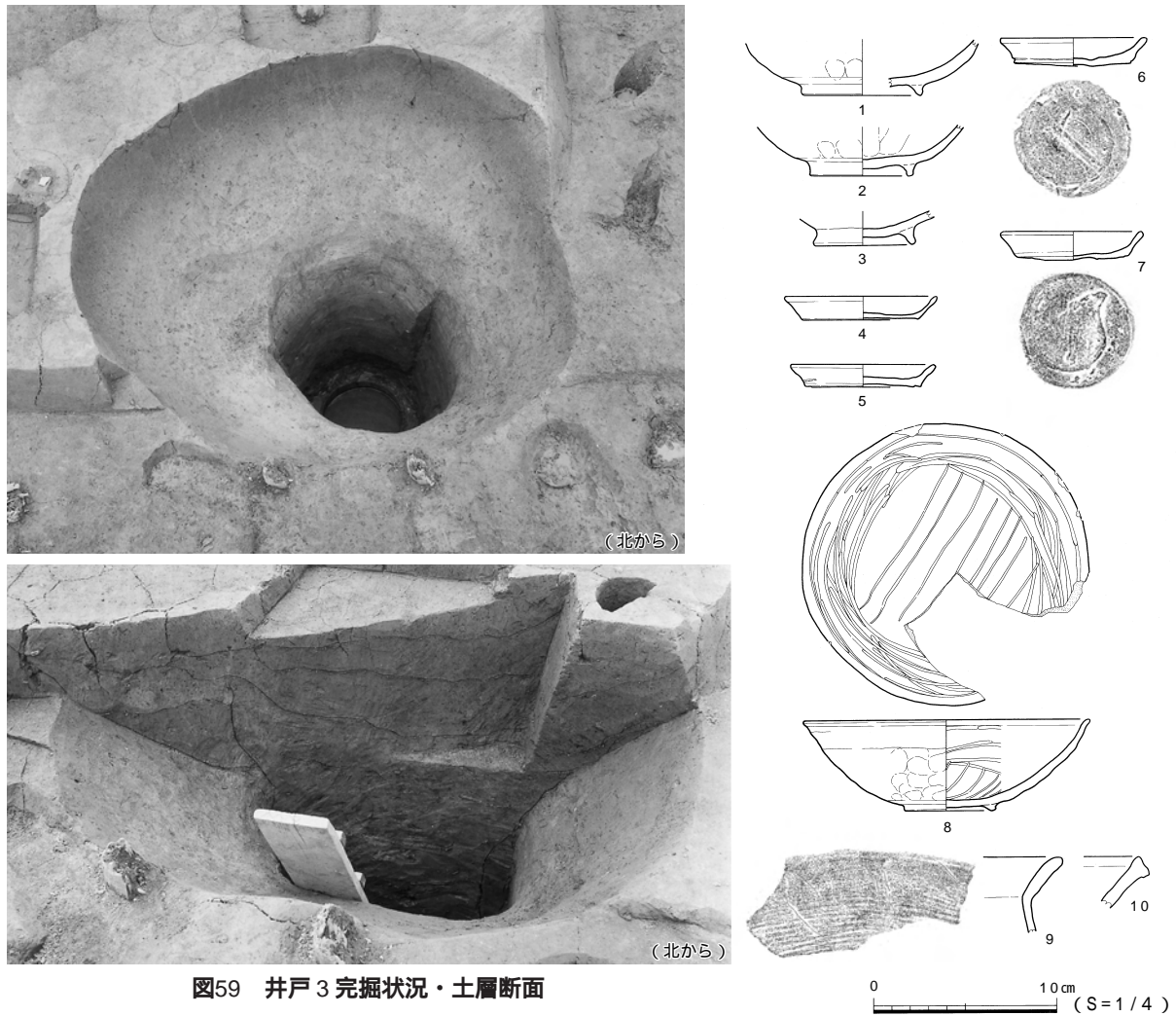


図59 井戸3完掘状況・土層断面

番号	種類・器種	法 量 (cm)			形態・手法他	胎 土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	-	*6.3	-	(内)ナデ(外)押圧・ナデ(高台)低く断面三角形形状、器壁厚い、摩滅、1/5残存	微砂、均質	薄黄白～白灰
2	土師質・椀	-	5.2	-	押圧・丁寧なナデ、重ね焼き痕(高台)断面乳頭状	微砂、均質	黄灰白
3	土師質・椀	-	5.3	-	押圧・ナデ(高台)断面三角形形状(底部)下方にたわむ	微砂、均質	黄白
4	土師質・皿	8.2	6.2	1.3	横ナデ(底外)篋切り後ナデ、器壁薄い、摩滅	微砂、砂粒少	薄黄白
5	土師質・皿	*7.8	*6.3	1.2	横ナデ(底外)篋切り後板目痕、1/3残存	微砂、均質	薄黄灰
6	土師質・皿	8.0	6.4	1.7	横ナデ(底外)篋切り後板目痕	微砂、均質	黄橙灰
7	土師質・皿	7.8	6.0	1.6	横ナデ(底外)篋切り未調整、ロク口左回転	微砂、赤色粒	黄橙白
8	瓦 器・椀	15.6	4.8	5.0	(内)ナデ・平行と同心円状の暗文(外)押圧(口)横ナデ、重ね焼き痕、4/5残存	精良	淡黒灰 断面 灰
9	土師質・鍋	-	-	-	(内)横ハケ(外)縦ハケ・煤付着(口)横ナデ	細砂、角閃石	黄褐～暗褐
10	須恵器・鉢	-	-	-	横ナデ、内面に黄緑色自然釉が飛沫状に付着、「東播系」	微～細砂、均質	青灰

図60 井戸3出土遺物(1)

上面形は東西2.45m・南北2.1mを残すが、北半部が攪乱で破壊されていることから、本来は直径2.5m前後の円形が復元される。底面は標高 - 1.27mに位置し、0.77×0.72mの円形を呈する。上面からの深さは2.5mを測る。断面形は、下半部の筒状部が標高0.18m付近から上方に向かって大きく広がるY字形を示す。底面には、直径約0.5mの曲物(W4)が据えられている。埋土の観察から、井戸側の存在を窺うことができる(図58)。底面は湧水砂層を深く掘り下げており、現在、豊かな湧水が見られる。

埋土は、12層に分層しているが、その特徴から3群に大別される。

1群(1～3層)は、井戸廃棄時の最終段階に上部を埋めた土層群である。比較的明るめの灰褐色を示し、砂質が強く、炭化物・焼土・土器などを散在的に含む点に特徴がある。さらに1層と2・3層に細分され、1層では包含物に粘土塊が加わるのに対して、2・3層では粗砂の包含が少量認められる。また、堆積ラインは2～5

層がレンズ状にくぼむのに対して、1層下面は水平ラインを形成している点も2・3層との違いである。1層は埋没後の流入土的な性格が想定される。3層下面は標高0.63mを測る。3層からは比較的大形の甕片が出土した。標高0.68m付近の位置である。掘り方が上方に広がる肩部付近に乗るような状態であった(図58)。

2群(4~7層)は井戸側内を埋める堆積土である。いずれも暗灰褐色の土層で、粘性や包含物から細分される。4・5層はやや粘性が弱く下面ラインは3層と共通した特徴を見せる。6層は粘性が強い土層である。6a・6c層はいずれも土器を包含するが、特に標高-0.14~-0.35mの位置で完形あるいは大形破片の皿3点がまとまって出土した点は注目される(図58)。同位置は6c層下面~下半にあたり、同層の形成初期に置かれたことが窺われる。6層は炭化物の包含が特徴的な6b層の存在で細分したが、基本的には同一の性格を有する土層群と判断され、この2群(6層)段階に、祭祀的行為が行われたと考えられる。7層は、特に下半において砂の混入があることから粘性がやや弱く軟質となる。底面では扁平な円盤が1点出土した。

3群(8~10層)は井戸形成時における井戸側の裏ごめ土あるいは井戸側を示す土層の可能性をもつ。上部の開放部に堆積する8層は粘性が弱く、8b層では炭化物などの包含物が少量認められる。一方、下半の筒部に堆積する9層・10層は粘性が強い粘土層となる。10層は掘り方との幅が6cm程度であり、曲物に接する部分も確認されることから、井戸側の木質痕跡の可能性も考えられるかもしれない。

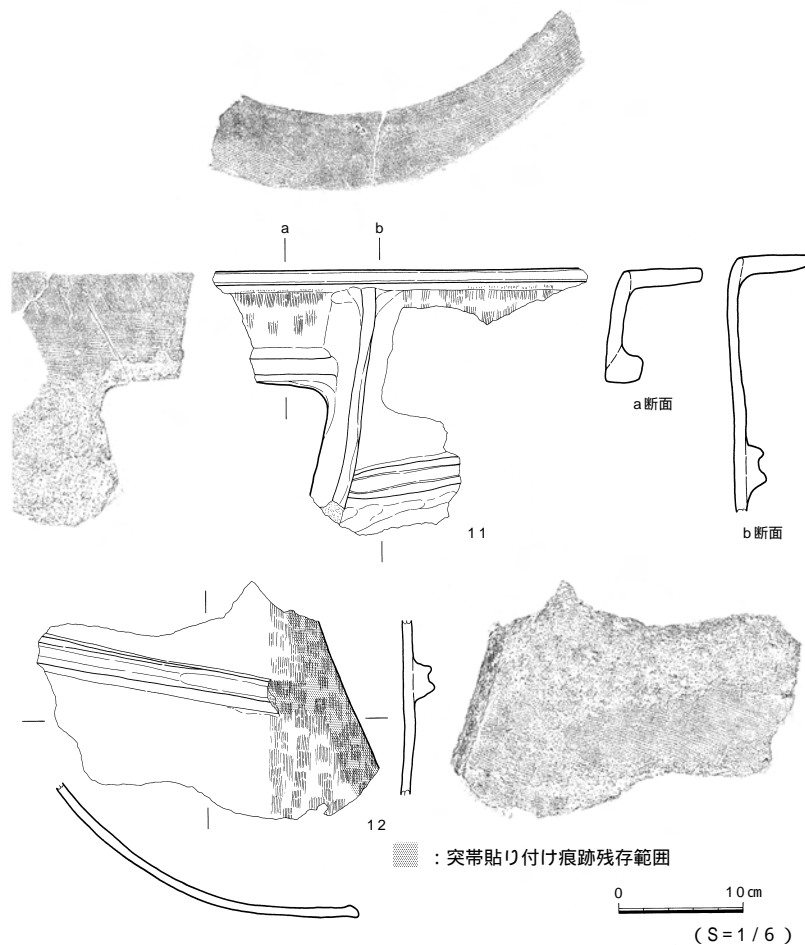
以上のように、本遺構は円形の井戸側を有し、底面に曲物を設置した井戸であり、廃棄過程において、底部付

近で皿を使った祭祀的行為を行った様子が残されている。ただ、最終段階に入る甕についてはその評価は、断定しがたい。

出土遺物はコンテナ1箱(28ℓ)の量がある。土師質土器碗・杯・皿・鍋・甕の他、瓦器碗・東播系すり鉢を含む。皿・瓦器碗は保存率が高いが、それ以外は細~小片である。

木器は、完形の曲物と、別個体の曲物側板片が2点出土した。前者ではその付属品として添え木4点・楔2点が組み合わされる。添え木は底部の木釘穴が側板と合わせて通っていることから、底板をはずして転用する以前から付属していたことがわかる。

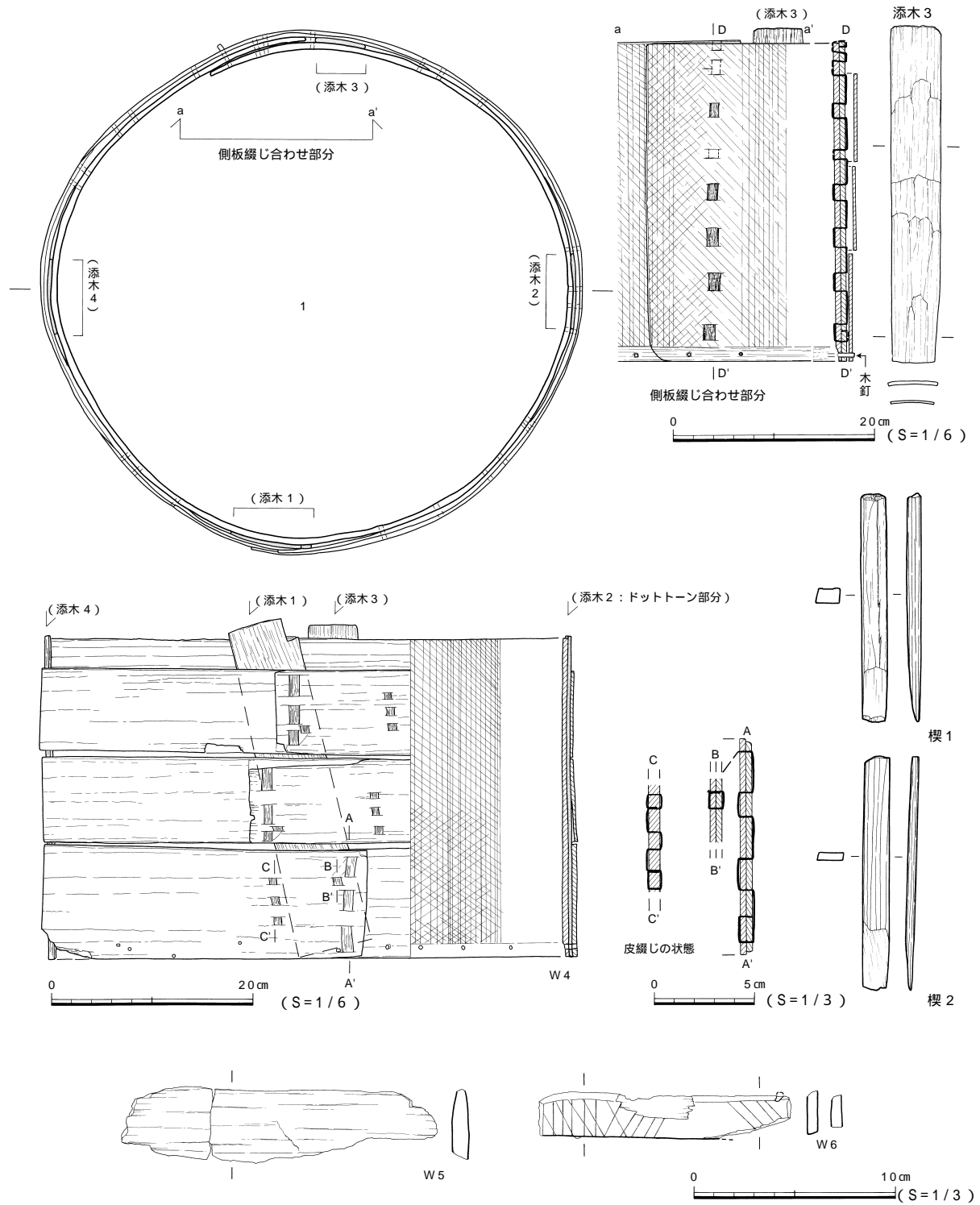
本遺構の埋没時期は、古代末~中世初頭(12世紀末~13世紀代初頭)と判断される。



番号	種類・器種	法量(cm)	形態・手法他	胎土	色調:内面/外面
11	土師質・甕	-	(内)横ハケ・中段部は二次的被熱で器壁剥落のためハケ消失・上半に煤付着、焚口側縁はナデ(外)縦ハケ・焚口や胴中位に貼付突帯・突帯剥落痕明瞭、釜口に幅広の貼り付け底、上面はハケ仕上げ	細~粗砂、斜長石・石英	黄褐/暗褐
12	土師質・甕	-	(内)被熱により器面剥落、一部で縦ハケ確認(外)縦ハケ、貼付突帯はナデ	細~粗砂	茶褐-黒褐/黄茶

図61 井戸3出土遺物(2)

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W 4	曲物	50.8	31.6	側板 0.6 タガ 0.4	ヒノキ	側板は1枚、3段のタガで補強、側板とタガの間の4ヶ所に板の添木を挿入、添木2の長さ33.5cm、幅4.8cm、厚さ0.3cmである、最下段のタガに現状で30箇所釘孔、保存処理時に楔2点を検出、楔1は長さ11.3cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm、板目材、楔2は長さ11.6cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、征目材
W 5	曲物	(12.2)	(2.1)	0.6	スギ	格子目のケビキ線
W 6	板材	(15.7)	(3.6)	0.85	マツ属	征目板

図62 井戸3出土遺物(3) 木製品

b. 土坑

土坑8 (図63)

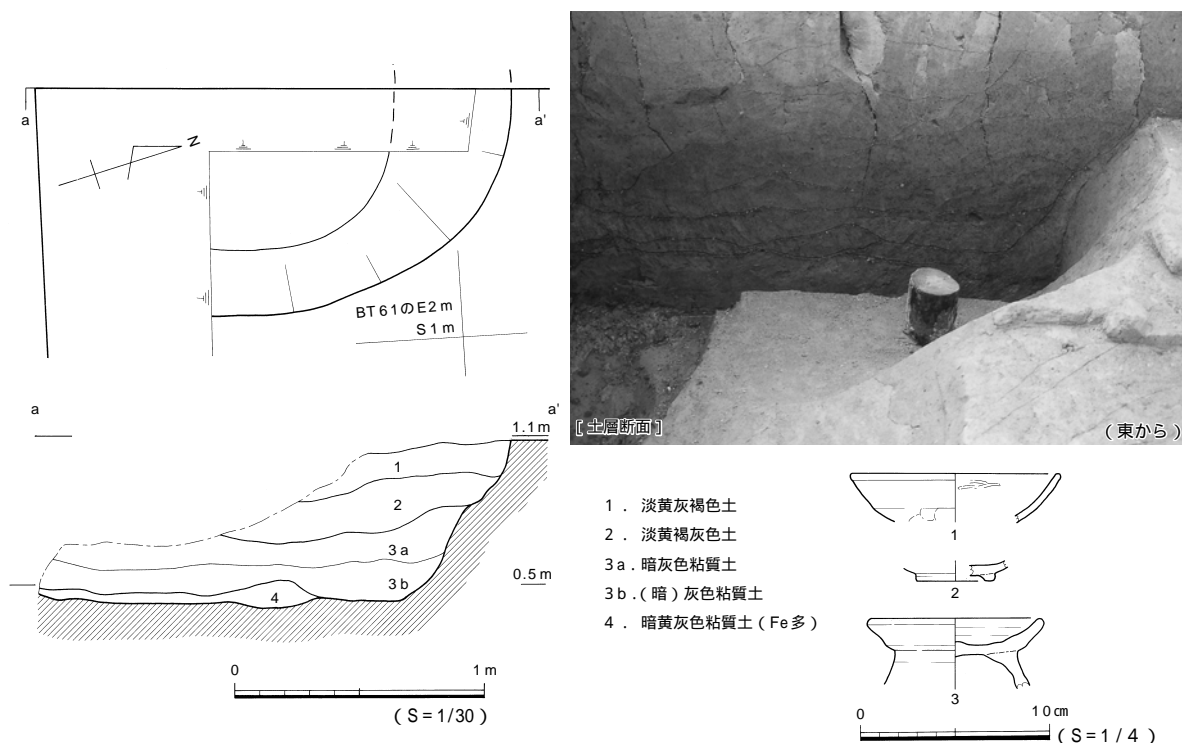
調査区北西部、西壁に接した位置に検出された。BT 60区である。南側部分は近世土坑16・17によって大きく破壊され、西側部分は調査区外に続く。調査を行うことができた部分はわずかであったため、調査区西壁の断面観察が中心となった。平面的な検出は標高1.03m、5層 下面で行った。同地点では9層 上面にあたる。平面形態は南北1.9m・東西1.02mの残存が確認された。丸みを見せるラインから隅丸方形が予想されるが、確定的ではない。底面は標高0.38mに位置し、南北1.4m・東西0.65mが残存する。広くて平坦な底面が想定される。深さは約0.65mである。掘り方の立ち上がりは急峻で比較的直線的である

埋土は大きくは四分されるが、全体的に水平堆積に近い状態を示し、際だった包含物は認められない。上層(1・2層)は明るく色調を示す黄褐色系の土層である。下層(3・4層)は、粘性が強い暗めの色調を示す点で上層とは区別される。最下層の4層には鉄分の沈着が顕著である。

遺物は20片程度が出土している。内訳は、吉備系土師質土器碗の破片が10数点と、土師質土器台付き皿1点、鍋片1点、白磁碗片1点、亀山焼きを含む須恵器甕片2点程度である。全体に細～小片であり、量も少なく、本土坑の機能に直接かかわるような状況とは言い難い。

本土坑の機能については、急峻な掘り方断面形態・水平堆積で汚れがなく下層が粘性を強める埋土の状況、遺物の少なさなどの点で、土坑9との共通性を示す。一つの解釈として水の管理に関連する土坑と考えることもできるが、残存部が少ないため、大形溝の端部を示す可能性も視野に入れておかなければならないであろう。

所属する時期は古い遺物(図63-3)も含まれるが、吉備系土師質土器碗の形態から、おそくとも14世紀前葉までに埋没した遺構と判断される。



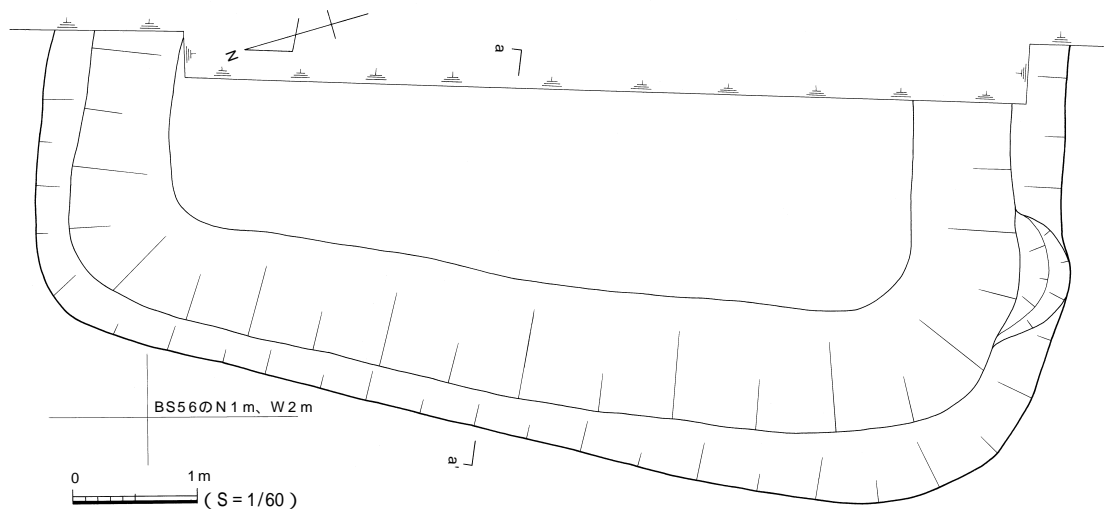
- 1. 淡黄灰褐色土
- 2. 淡黄褐色土
- 3a. 暗灰色粘質土
- 3b. (暗) 灰色粘質土
- 4. 暗黄灰色粘質土 (Fe多)

番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色 調 : 内 面 / 外 面
		口径	底径	器高			
1	土師質・碗	*10.8	-	-	(内) 丁寧なナデ・一部粗い篩磨き (外) 押圧・ナデ、1/6 残存	微砂、精良	灰白
2	土師質・碗	-	*4.0	-	ナデ・二次的被熱 (高台) 低くつぶれ端部は平坦、1/3 残存	精良	黄灰/黒褐
3	土師質・台付皿	8.8	-	-	横ナデ、ロク口方向左、器壁厚手	微砂、砂粒やや多	乳白-黄灰白

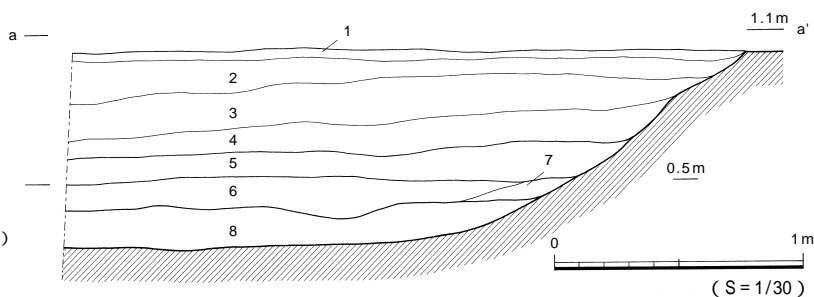
図63 土坑8・出土遺物

土坑9（図64・65、図版3・9）

調査区の北東部、BR～BT 55～56区に位置する。検出面は標高1.02m付近、5層下面である。同地点では、9層上面にあたる。本遺構は調査区東壁外に向かって続いているため、全体を確定することはできない。残



1. 淡灰褐色(粘質)土(砂・灰色粘土塊少)
2. 暗灰褐色(粘質)土(砂・灰色粘土塊少)
3. 灰褐色土(砂・灰色粘土塊少)
4. 暗灰褐色(粘質)土(砂・灰色粘土塊少)
5. 暗灰褐色土
6. 暗灰色粘土
7. 灰褐色粘質土(砂・灰色粘土塊少)
8. 明茶褐色砂質土(砂・灰色粘土塊多、有機物少)



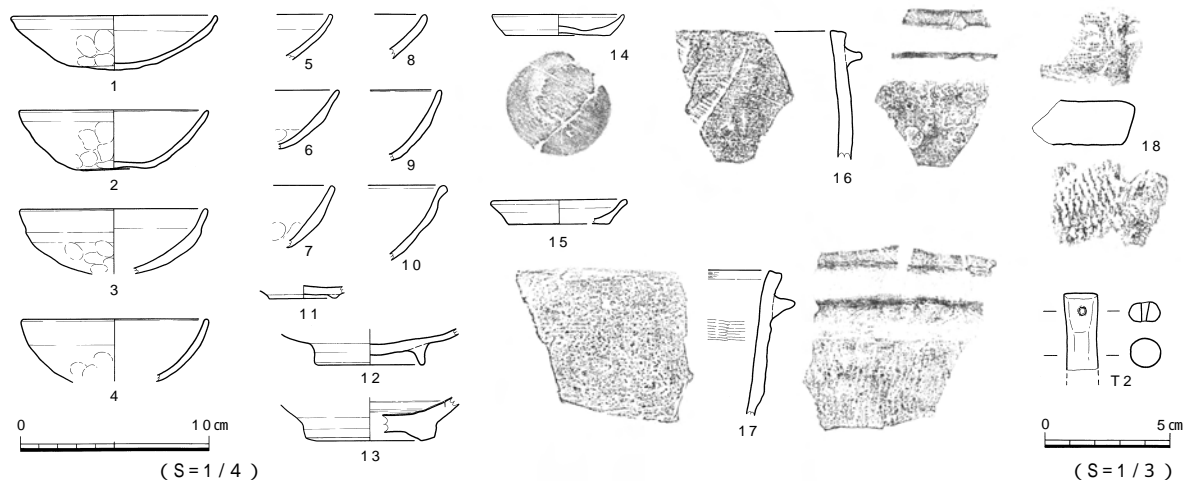
a. 完掘状況（北から） c. 土層断面（北から）
b. 完掘状況（南東から）

図64 土坑9

存形状からは、南北8.2mの直線的なラインを有する方形の形態が想定される。東西方向は3.7mを残すのみで、本来の長さは不明である。底面は標高0.23mに位置し、南北5.9m、東西2mの平坦面を呈す。深さは検出面から0.8mを測る。掘り方断面形は、概ね緩やかな逆台形といえる。

埋土はいずれも水平堆積を示す。それらは、やや砂質を帯びて灰色粘土をブロック状に含む灰褐色系の1～4層、特別な包含物を見ない5層・6層、砂を多く含む砂質が強く灰色粘土をブロック状に含む茶褐色系の8層の3群にまとめられる。8層は他の土層とは明瞭に区別される土層であり使用段階の堆積土層、そして、壁際の一部にのみ堆積する7層は崩落土のような一時的な堆積土と捉えられる。5・6層は、粘性あるいは色調面で差を見せるが、地下水によるグライ化などの影響を考慮すると、その差に形成上の違いを見いだすことはできない。6層以上に関しては、徐々に埋まっていく過程での堆積土と判断されるが、5・6層形成段階と1～4層形成段階では、包含物の違いからその環境に差があった可能性が考えられる。

以上のように、本遺構の特徴は、規模・形態面では深く大形で直線的な形状である点、水平堆積の埋土、最終的な堆積土以外では際だった包含物を含まない点・最下層で砂や有機物を含む点などがあげられる。こうした状況から、貯水のような水の管理にかかわる機能を窺うことができる。また、本土坑設置地点は、溝で区画された屋敷地の外側にあっており、決して地形の高い位置とは言い難い。こうした配置も水利との関係を考慮する上で矛盾しない。他の遺構との関係をみると、出土遺物から同時期の溝と考えられる溝20・21とは接するような位置関係を保つ。同位置付近には、本土坑の肩部に、幅50cm程度の幅で、南側から土坑コーナーに向けての傾斜を作り出したような状態にある窪みが1ヶ所確認されており、具体的な機能について論じるには材料が不足しているが、南側に接するような溝との関連を考える上で注目される。いずれにしても、本土坑が水利関連の機能を



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	10.9	3.6	2.4	(内)丁寧なナデ(外)押圧・ナデ(底外)押圧・ナデ、2/3残存	微砂、精良	乳白/淡茶白
2	土師質・椀	*9.9	4.3	3.2	(内)丁寧なナデ(外)押圧・ナデ(底外)やや凹む、1/3残存	微砂、均質	乳白-灰白
3	土師質・椀	*10.0	-	-	(内)丁寧なナデ：工具痕(外)押圧・ナデ、1/6残存	微砂、均質	黄白
4	土師質・椀	*9.9	-	-	(内)丁寧なナデ(外)押圧・ナデ、全体的に摩滅、二次的被熱?、1/8残存	微砂、均質	乳白-暗褐
5	土師質・椀	-	-	-	(内)丁寧なナデ(外)押圧・ナデ・指紋付着	精良	薄黄白
6	土師質・椀	-	-	-	押圧・ナデ	微砂、均質	薄黄白
7	土師質・椀	-	-	-	(内)丁寧なナデ・全面に煤(外)ナデ、器壁厚手	精良	灰褐-黒
8	土師質・椀	-	-	-	(内)押圧・ナデ(外)丁寧なナデ・平滑、器壁厚手	精良	灰白
9	土師質・椀	-	-	-	押圧・ナデ(内)一部磨き?、器壁やや厚手	微砂、砂粒やや多	灰白
10	土師質・椀	-	-	-	(内)ナデ(外)押圧・ナデ・部分的に磨き	微砂、砂粒やや多	乳白-黄白
11	土師質・椀	-	3.1	-	(内)丁寧なナデ(高台)低短で一部つぶれる	微砂、概ね精良	薄黄白-灰白
12	土師質・椀	-	6.4	-	ナデ、(内)飛沫状の煤	微砂、石英粒	乳白
13	白磁・椀	-	5.5	-	(内)見込みに沈線・施釉(釉)透明度高い(高台)露胎・斜めに削り出し	精緻	灰白(釉)薄灰緑
14	土師質・皿	6.9	5.5	1.1	横ナデ、(底外)篋切り後板目痕	微砂、均質	浅黄橙
15	土師質・皿	*6.9	*5.3	*1.3	(外)横ナデ(底外)篋切り後ナデ?、器壁摩滅、1/8残存	微砂、赤色粒	橙
16	瓦質・羽釜	-	-	-	(内)横ハケ(外)ナデ・押圧・煤付着	細砂、砂粒やや多	黄褐-黒褐
17	瓦質・羽釜	-	-	-	(口)横ナデ(内)横ハケ(外)縦ハケ・羽部下全面煤	微砂、赤色粒	茶褐-黒褐
18	須恵質・平瓦	-	-	-	(内)平行タタキ(外)布目(側縁部)切り離し後ナデ	粗砂	灰白
T2	土鍾	長(3.1)、幅1.4、厚1.2			棒状土鍾、上端付近に穿孔、全体ナデ、重量53g	微砂、精良	黄橙

図65 土坑9出土遺物

有していた可能性は高いと判断されよう。また、前述した土坑8との類似性も指摘しておきたい。

中世の遺物としては、数点の完形に近い大形破片と120片程度の小～細片が出土した。遺物の内訳は、約半数（約60片）が吉備系土師質土器椀の破片である。一部に13世紀代（図65 - 9・10・12）の遺物を含むがいずれも小片であり、中心は14世紀前半に属する。その他に、土師質土器皿15片・鍋約10片・竈10数片、白磁碗2片、亀山焼きと備前焼約10片、瓦1片、土錘1点（図65 - T2）などが認められる。完形に近い大きさの遺物は吉備系土師質土器椀2点（図65 - 1・2）と皿1点（同 - 14）がある。これらの椀は出土位置が他の遺物とは離れており、それらとは異なった要因で埋没した可能性も窺われる。

こうした遺物の状況から、本土坑の時期は14世紀前半、遅くても中頃までに埋没したと考えられる。

c. 柱穴（図66～70、表3・4、図版3・7～9）

3層あるいは4層除去後、多数の柱穴が検出された。6層あるいは7層にあたる面である。全体で249基を記録した。その分布は、BR60区の3基を除くと、全て溝に区画された調査区南西部に限定されるが（図53）その中でも粗密が存在することが顕著に表れている（表4）。特に柱穴が集中するのはBW～BX区である（図66）。一方、BVラインとBWライン間を東西方向に走る溝14以北から57ラインと58ライン間を南北に走る溝13の西側では、全く分布しない空間が認められる。このように柱穴の分布は、溝との密接な関連を示すものであり、溝の区画が建物の配置と強く結びついていることを窺わせる。そして、後世の攪乱の影響を考慮しても、溝14と同一ライン上に並ぶ井戸2・3から南側、BWライン以南に数を増していくことは明瞭である。

柱穴の規模は、その多くが直径30cmを中心とした23～40cmの幅におさまるが、それを超える直径40～60cmの

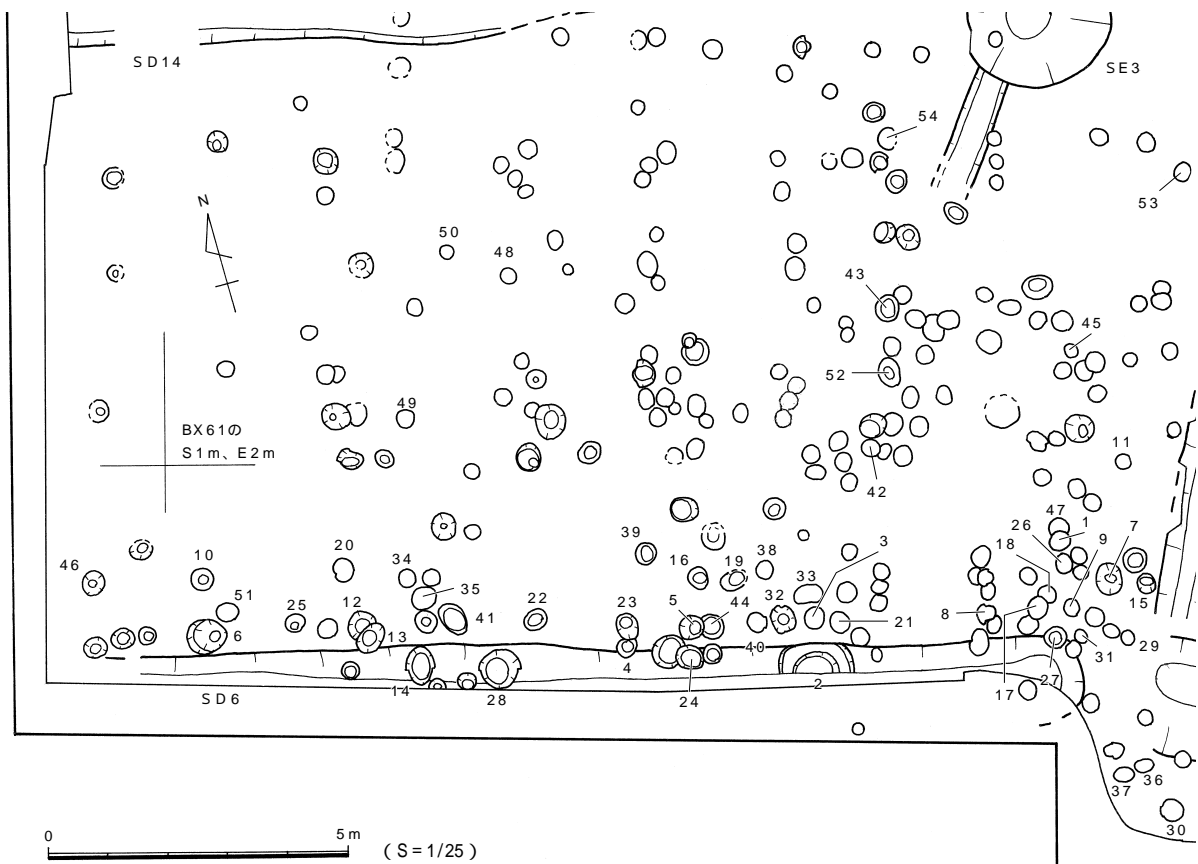


図66 古代末～中世の柱穴群分布状況

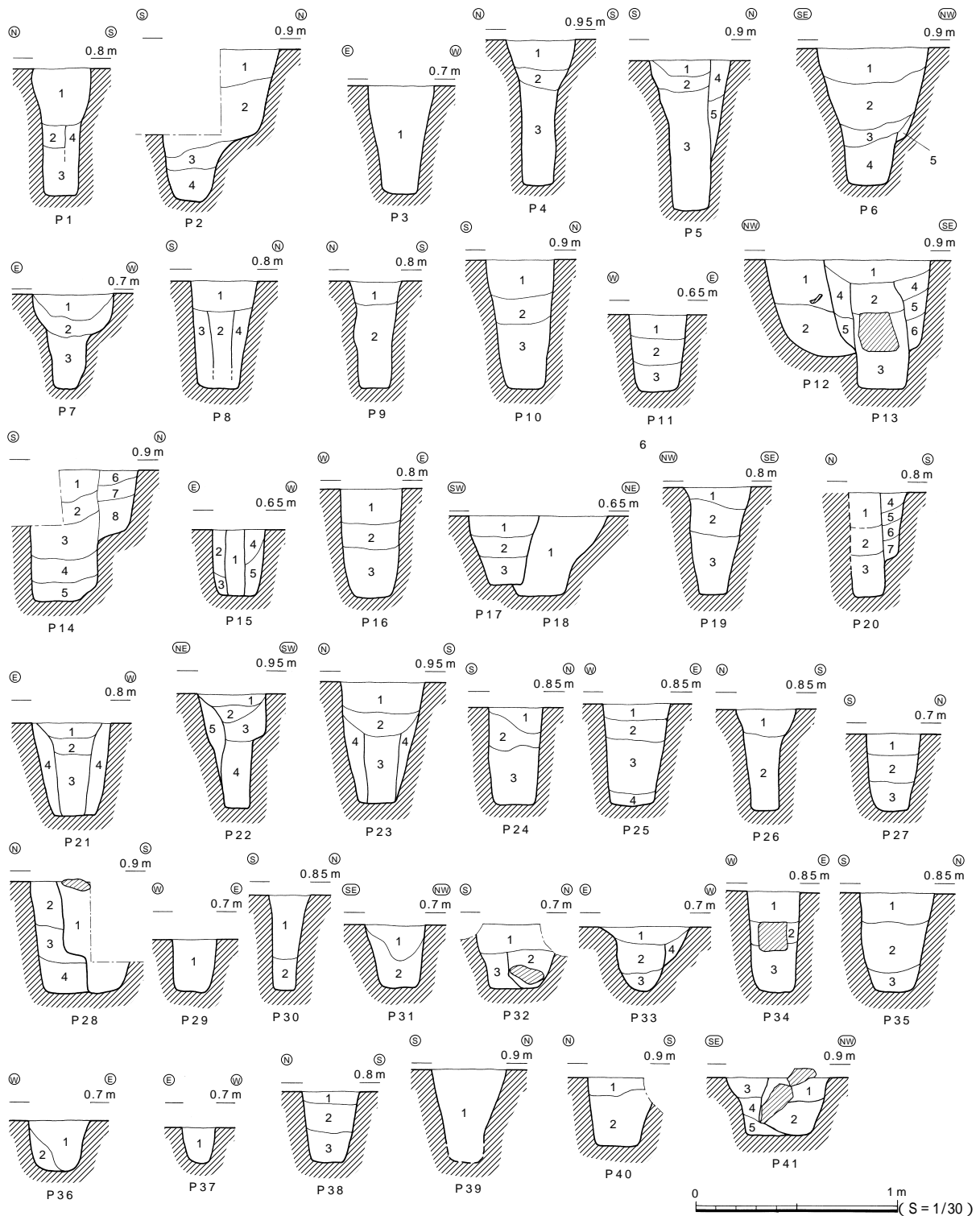


図67 古代末～中世の柱穴土層断面

大形柱穴がBX区を中心に分布する。また、底面のレベルからの分類も可能である(図67)。A群は底面高が標高0.1m前後(0.05~0.17m)で深い形態(図67-P1~6)、B群は底面が同約0.2m(同-P7~11・13~16)、B群は同0.23m(同-P18~21)、C群は同0.27~0.36m(同-P12・17・22~37)、D群は同0.4~0.55m(同-P38~41)である。A・B群では大形柱穴を含むほか、底面レベルが集中する傾向が強く、C・D群に認められ

表3 柱穴内土層注記一覧

番号 (区)	層	土層(包含物)	番号 (区)	層	土層(包含物)	番号 (区)	層	土層(包含物)	番号 (区)	層	土層(包含物)	
1 (BX57)	1	暗灰色土	11 (BX57)	1	暗褐色砂質土(炭、焼土)	20 (BX60)	1	淡灰色土	28 (BX59)	1	灰茶褐色粘質土	
	2	灰褐色土(灰色粘土塊)		2	暗褐色砂質土(炭)		2	灰色粘質土 (淡青灰色粘土粒少)		2	淡灰褐色土	
	3	暗褐色土		3	灰褐色砂質土		3	暗灰色粘土		3	暗灰褐色土	
	4	暗褐色粘質土	12 (BX60)	1	暗灰褐色粘質土 (茶褐色土塊少)		4	淡灰色土(淡青灰色土粒)	4	暗褐色土 (暗茶褐色土粒、焼土)		
2 (BX58)	1	淡褐色土(灰色粘土粒少)		2	暗褐色土		5	淡黄灰色土(淡黄白色土粒)	29(BX57)	1	暗褐色砂質土(炭、焼土)	
	2	灰褐色土(灰色粘土粒少)		3	暗灰褐色土(黄白色粘土粒)		6	褐色土(淡黄白色土粒、炭)	30 (BY57)	2	暗褐色砂質土(炭、焼土)	
	3	暗灰褐色粘質土	4	暗灰色土	7		暗褐色粘質土 (淡黄白色土粒、炭)	3		暗褐色粘質土		
4	暗灰褐色粘質土	13 (BX60)	5	暗茶褐色砂質土 (黄褐色土粒、礫)	21 (BX58)	1	淡褐色粘質土 (灰褐色土塊少)	31 (BX57)		1	暗灰褐色土(炭、土器)	
3(BX58)	1		暗灰褐色土	6		灰褐色土(黄褐色土塊)	2	淡灰褐色粘質土 (灰褐色土塊少)	32 (BX58)	2	暗褐色粘質土(土器)	
	2		灰褐色砂質土 (灰色粘土塊少)	7		暗茶灰色土	3	灰褐色粘質土 (灰褐色土塊少)		1	淡褐色土(灰色粘土粒少)	
	3	暗褐色土(灰色粘土塊少)	8	茶灰色土(Mn多)		4	灰褐色粘質土	2		灰褐色土(礫・礎石)		
4 (BX59)	1	灰褐色砂質土 (灰色粘土塊少)	14 (BX60)	1		淡黄緑灰色土 (炭、黄白色土粒少)	22 (BX59)	1	暗灰褐色粘質土	33 (BX58)	1	淡褐色土(灰色粘土塊)
	2	暗灰褐色土(灰色粘土塊少)		2		淡黄灰色土(炭、黄白色土塊)		2	暗灰褐色土(灰褐色土塊少)		2	淡褐色土(灰色粘土塊)
	3	暗褐色土		3		灰褐色土(炭、黄白色土塊少)		3	灰褐色粘質土 (灰褐色土塊少)		3	暗褐色粘質土
	5 (BX59)	1		灰褐色砂質土	4	暗灰褐色土(黄白色土塊多)		4	灰褐色粘質土		34 (BX60)	1
		2		灰茶褐色砂質土 (灰色粘土粒少)	5	淡黄灰色粘質土		5	暗褐色粘質土	2		灰褐色土(礫・礎石)
3	灰茶褐色土(灰色粘土粒少)	6		明黄緑灰色土	23 (BX59)	1	暗灰褐色粘質土	3	暗褐色粘質土			
4	暗褐色土	7		淡黄緑灰色土		2	暗灰褐色土(灰褐色土塊少)	4	灰褐色土			
5	茶褐色粘質土	8		緑黄灰色土		3	暗褐色土(灰褐色土塊少)	5	暗褐色粘質土			
6 (BX60)	1	淡黄灰褐色砂質土 (黄褐色土粒多)	15 (BX57)	1	淡茶褐色砂質土(焼土)	24 (BX59)	1	暗褐色土(灰褐色土粒少)	35 (BX60)	1	青灰色土	
	2	暗茶灰色砂質土 (黄褐色土粒)		2	灰褐色砂質土(炭、焼土)		2	灰褐色土(灰色土粒少)		2	暗灰褐色粘質土	
	3	黄灰色砂質土(Fe多)		3	暗灰褐色砂質土(焼土)		3	暗灰色土(灰色土粒少)		3	黄灰色砂質土	
	4	黄灰色粘質土		4	暗灰褐色土		4	暗茶褐色粘質土	36 (BY57)	1	暗灰褐色砂質土(炭、焼土塊)	
	5	暗灰黄色土		5	暗褐色土		5	暗褐色土	2	暗褐色粘質土		
7 (BX57)	1	灰褐色砂質土	16 (BX59)	1	淡褐色土(灰色土塊少)	25 (BX60)	1	暗褐色土(灰褐色土粒少)	37(BY57)	1	暗灰褐色砂質土(炭、焼土)	
	2	暗灰褐色砂質土 (灰色粘土粒)		2	灰褐色粘質土 (灰色粘土粒少)		2	暗灰褐色土(灰褐色土粒)		1	淡褐色土	
	3	暗灰褐色土(灰色粘土粒)		3	暗灰褐色粘質土		3	茶灰褐色土		2	暗灰褐色土(灰色粘土塊少)	
8 (BX58)	1	淡褐色砂質土(粗砂)	17 (BX57)	1	暗灰褐色土(灰褐色土塊少)	26 (BX57)	1	暗褐色土	38 (BX58)	3	暗灰褐色粘質土 (灰色粘土塊少)	
	2	暗灰褐色砂質土(粗砂)		2	灰褐色土		2	暗灰褐色土		1	灰褐色土	
	3	灰褐色粘質土		3	暗褐色土		4	(黄)灰色粘土		40 (BX58)	1	灰褐色土
	4	暗褐色粘質土		4	暗褐色土		1	暗褐色土		2	暗褐色土(灰色粘土粒)	
9 (BX57)	1	暗灰褐色土(土器)	18(BX57)	1	暗褐色土	27 (BX57)	2	暗灰褐色土	41 (BX59)	1	灰茶褐色粘質土(灰色粘土粒少)	
	2	暗褐色土		1	灰茶褐色土(灰色粘土粒少)		1	暗灰褐色砂質土		2	暗褐色土	
10 (BX60)	1	黄灰色粘質土	19 (BX59)	2	暗茶褐色粘質土 (灰色粘土粒少)	28 (BX57)	2	暗灰褐色砂質土(灰色土粒少)		3	淡灰色土	
	2	灰褐色土		3	暗茶褐色土		3	暗灰褐色土 (灰色土粒少、土器)		4	暗茶褐色土	
	3	暗茶灰色粘質土					5	暗灰褐色土		5	暗灰褐色土	

る数値のバラツキの大きさは違いを示す。しかし、現状では、各群について、分布上の偏在性は認めがたい。

柱穴の埋土は全体的に共通性が高く、柱痕部分と考えられる堆積が確認されることが多い(図67)。柱痕部分には灰色あるいは灰褐色粘土粒あるいはブロックを含む傾向が認められる(表3)。遺物を包含する柱穴も比較的多い。その多くは小～細片であり埋め土中の混入と判断されるが、11基の柱穴において完形あるいは完形に近い大形の破片が出土した(図68・69)。遺物は中層～上層のレベルに置かれた状態を示す場合がほとんどである(図68)。遺物は基本的には1点のみが出土し、土師質土器碗(図69-1～4)・杯(同-5)・皿(同-6～11)、瓦器皿(同-12)などがあげられる。こうした遺物には、何らかの祭祀的行為が想定されよう。

土器以外に注目されるものとして、10基の柱穴で確認された中形～大形の礫があげられる(図70、図版8)。

表4 各別柱穴数

60区	59区	58区	57区	56区	55区	
3	0	0	0	0	0	B R 区
0	0	0	0	0	0	B S 区
溝						
0	0	2	3		0	B U 区
1	4	10	8		0	B V 区
9	20	38	24			B W 区
13	26	44	36			B X 区
		1	7			B Y 区

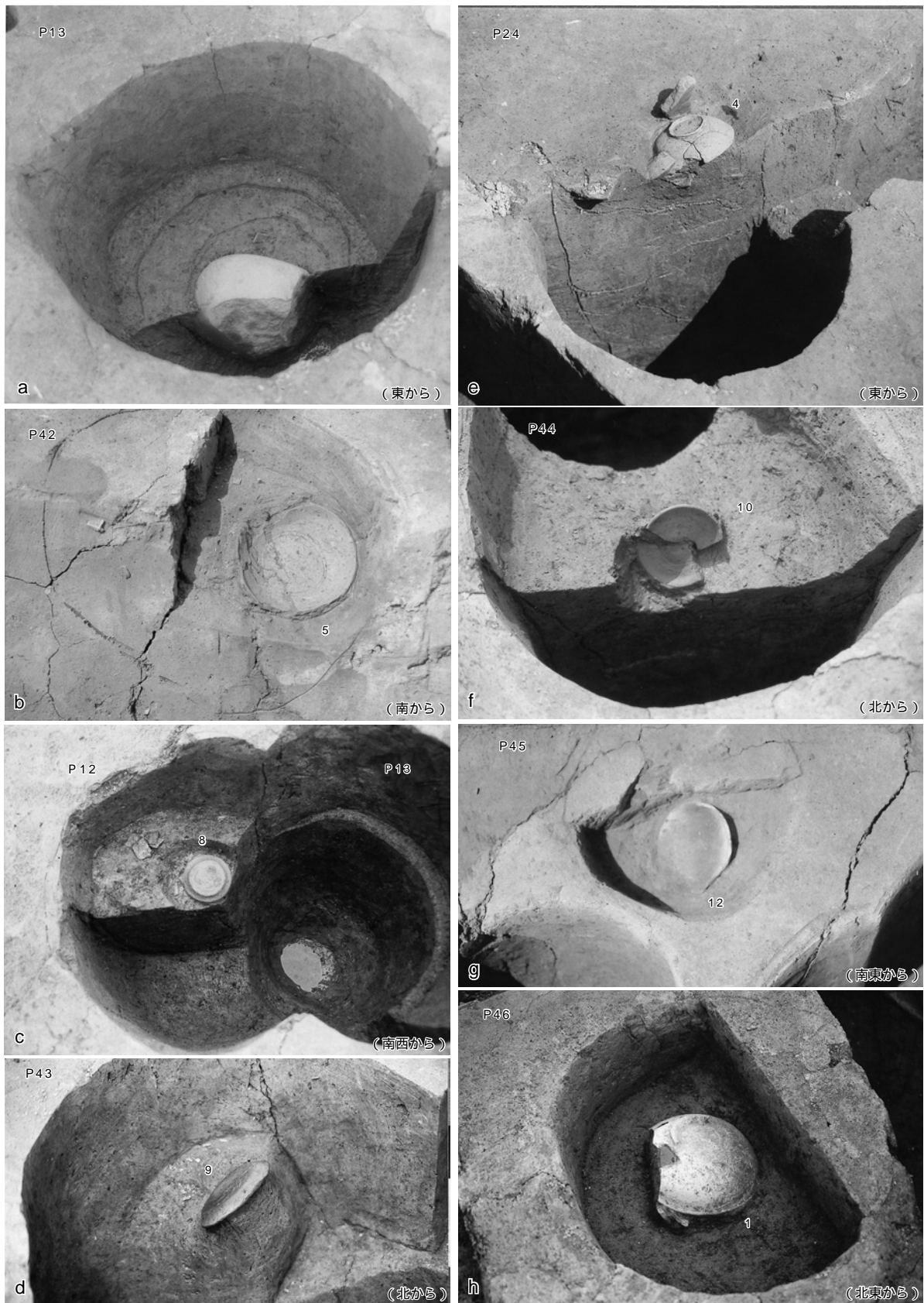


図68 柱穴内遺物出土状況

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

その中で、同時に皿を共伴する柱穴は1基（P44：BX58区）である。いずれの礎も柱穴の下面あるいは中層の位置する（図67）。大きさは15～25cmで、粗割りによって面を整えている。全体的な形状は多様であり規格性は認めがたいが、被熱痕が認められる場合が多い。礎石の役目が想定される。

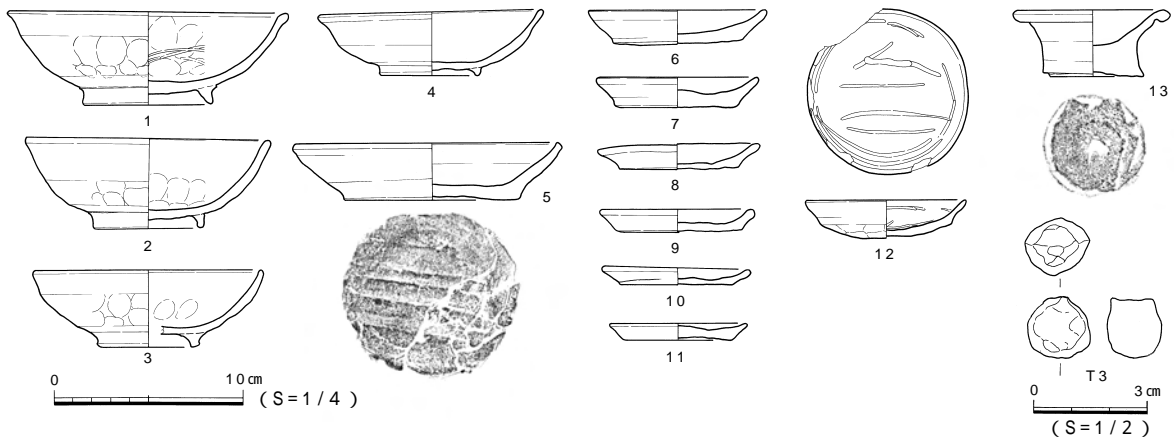
こうした祭祀的行為が想定される柱穴あるいは礎石状石を有する柱穴の分布状況を確認しておこう（図66）。

椀が内部に置かれた柱穴はP24（BX58区）・P46（BX60区）・P47（BX57区）、杯はP42（BX58区）、皿はP12（BX59区）・P43（BW58区）・P44（BX58区）・P45（BW57区）・P48（BW59区）・P49（BX59区）・P50（BW59区）があげられる。皿を有する柱穴の多さが際だつ。それらの分布は、椀出土柱穴がBX区に限定的で57・58・60区に各1基あるのに対して、皿はBW区を中心にBX区にも広がっており、器種による分布の違いが見いだされる。また、礎石状加工石を有する柱穴は、BW57区（P53）・BW58区（P52・54）・BX58区（P32・44）・BX59区（P13・34・41）・BX60区（P10・51）に分布する。特にBX区に集中し、椀の出土柱穴域と重複する傾向が指摘される。

その他の遺物では、P4（BX59区）出土の砥石・P3（BX58区）出土の釘・P12（BX59区）出土の不明土製品が注目される（図69・70、図版7・9）。土製品（T3）は皿・脚台（図69-8・13）と共伴する。土玉状の一部に小さな突起部が作り出されているが、本来の具体的な姿を復元することはできない。

柱穴群の時期は、出土遺物あるいは重複関係を有する溝との関係から、古代末～中世前半におさまる。その時期幅のなかで柱穴の分布や内容に、時期的な違いが現れてはいないことから、断絶などによって集落構成が大きく変化するわけではなく、屋敷地は継続的に営まれたと判断される。

また、屋敷地内では、大形で底面の深い柱穴、礎石状加工石を有する柱穴、祭祀的行為に伴うと考えられる遺物を包含する柱穴、そういった柱穴が、BX区を中心に集中的に分布する傾向があることから、具体的には、調

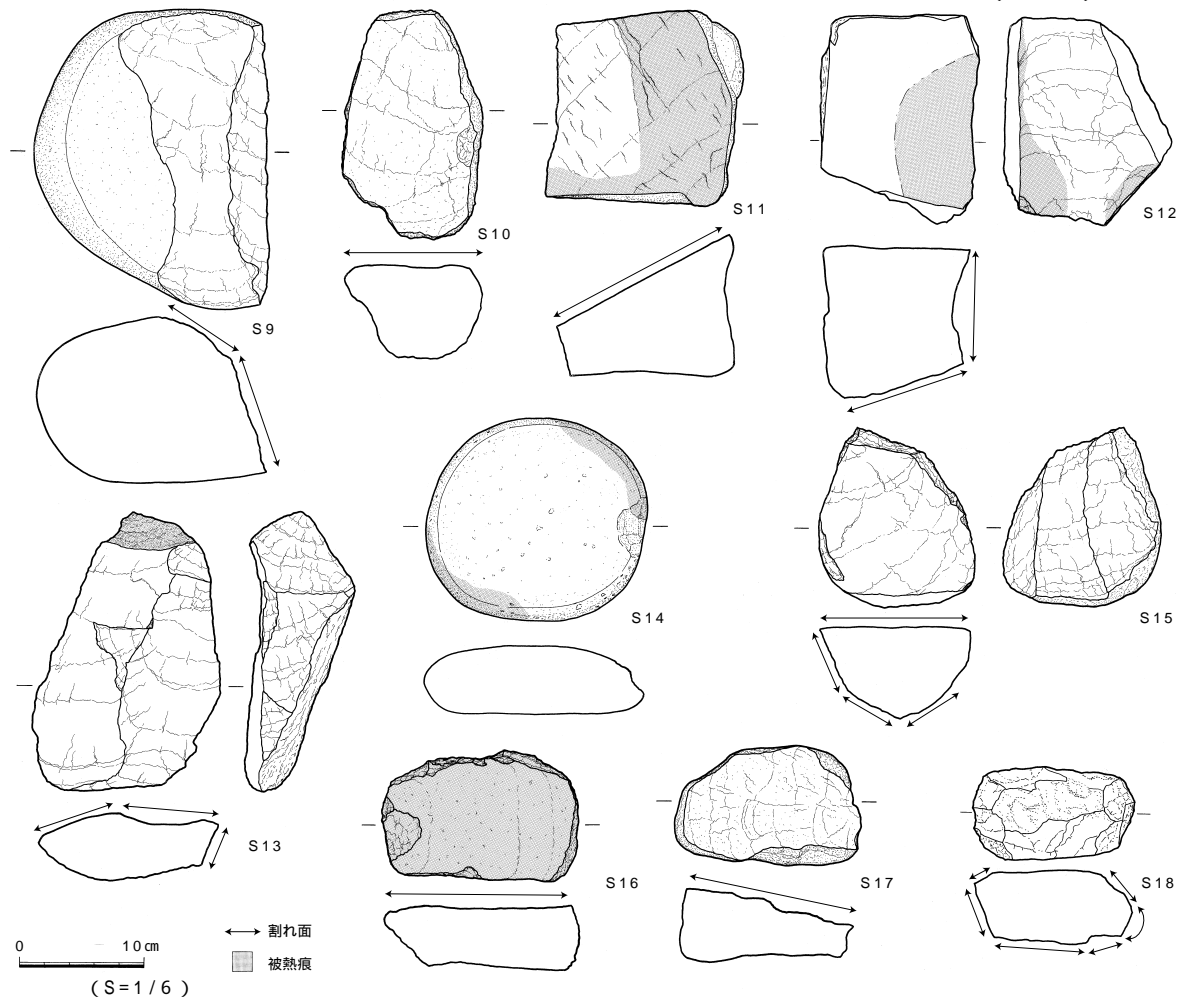
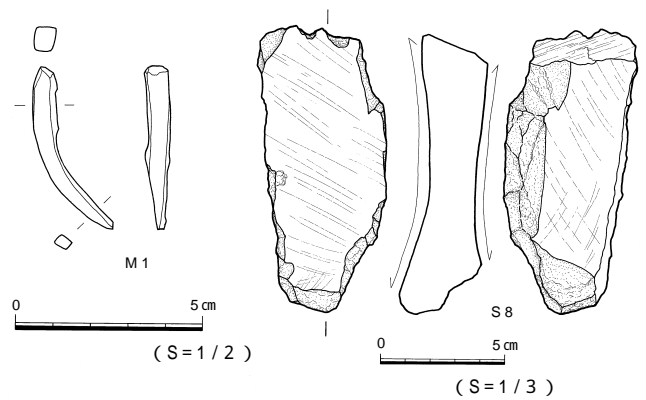


番号	ピット番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色調：内面/外面
			口径	底径	器高			
1	P46	土師質・椀	14.8	6.7	4.9	(内)ナデ後一部籠磨き・重ね焼き痕(外)押圧(口)横ナデ、高台1/2欠	微砂	淡橙白/橙白
2	P47	土師質・椀	13.0	5.4	4.7	押圧・ナデ(内)煤、口縁一部欠	微砂	淡黄白-白灰/黄白
3	P47	土師質・椀	12.0	4.1	4.1	押圧・ナデ(口)横ナデ、2/3残存	微砂	黄灰白
4	P24	土師質・椀	11.9	5.1	3.4	(内)ナデ後一部籠磨き・重ね焼き痕(外)ナデ・押圧	微砂	淡黄茶灰/淡茶灰
5	P42	土師質・杯	*13.7	*9.1	*3.0	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、剥落顕著、口縁一部欠	微砂	黄茶灰
6	P48	土師質・皿	9.3	6.8	1.3	丁寧な横ナデ(底外)籠切り後丁寧なナデ、口縁一部欠	微砂	黄橙茶/橙茶
7	P49	土師質・皿	*6.4	4.8	1.2	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、口縁7/8欠	微砂	淡橙
8	P12	土師質・皿	8.6	6.2	1.3	横ナデ(底内)押圧(底外)籠切り	細砂、赤色粒	乳白灰
9	P43	土師質・皿	8.2	6.5	1.2	丁寧な横ナデ(底内)横ナデ後静置ナデ(底外)籠切り	微砂	黄茶灰/橙茶灰
10	P44	土師質・皿	7.8	5.9	1.0	横ナデ(底外)籠切り後粗いナデ	微砂	乳灰白
11	P50	土師質・皿	*7.1	5.8	0.9	横ナデ(底内)ナデ(底外)籠切り	微砂	明橙褐
12	P45	瓦 器・皿	8.5	2.7	1.9	(内)暗文：粗(外)横ナデ・押圧	微砂	暗灰/暗灰
13	P12	土師質・台付皿	*8.3	5.9	3.5	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、口縁一部欠	微砂	淡灰白
T3	P12	不明土製品	長1.6、幅1.7、厚1.5			いびつな球状、特に上端に小突起状の凹凸あり、ナデ、重量2.6g	微砂	淡橙

図69 柱穴出土遺物(1)

査区の南側方向に、より大形の建物が建つ可能性が指摘される。さらに、こうした建物の柱穴では椀を伴う傾向も窺われる。

後世の攪乱などが影響して、柱穴を個別の建物にまとめられなかったが、井戸2・3の南側、BWライン以南の空間に建物が配置されること、そして、調査区の南端付近から南方向に中心的な建物が存在した可能性が高い。



番号	ピット番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質/石材	特徴
M1	P2	釘	4.7	0.6	0.6	-	鉄	角釘、一部曲がる、錆膨れ
S8	P4	砥石	115.5	49.5	34.2	221.9	流紋岩	表裏・端面に研磨による摩滅
S8	P13	粗割礫	241.8	187.2	133.7	9680.0	閃緑岩	巨大な円礫を粗割
S10	P32	粗割礫	185.0	111.6	75.5	1998.6	花崗岩	礫を粗割り、平坦面をつくりだす
S11	P34	粗割礫	156.8	143.5	115.0	3754.2	流紋岩質凝灰角礫岩	巨大な礫を粗割り、平坦面をつくりだす、被熱
S12	P51	粗割礫	168.2	121.2	123.5	3757.4	流紋岩	巨大な礫を粗割、角柱状に加工、被熱
S13	P41	粗割礫	226.5	145.0	74.2	2256.8	花崗閃緑岩	角礫を粗割り、板状に加工、被熱
S14	P10	砥石	162.0	176.2	55.3	2316.7	流紋岩質凝灰角礫岩	表裏面が平滑な円礫を利用、被熱
S15	P52	粗割礫	144.1	121.5	73.5	1748.3	花崗閃緑岩	礫を粗割り、平坦面をつくりだす、被熱
S16	P53	粗割礫	105.5	152.8	60.5	1253.6	花崗岩	礫を粗割り、平坦面をつくりだす、被熱
S17	P44	粗割礫	148.0	97.2	59.8	1107.7	石英斑岩	礫を粗割り、平坦面をつくりだす、被熱
S18	P54	粗割礫	131.1	74.0	58.6	759.6	石英安山岩	礫を粗割り、平坦面をつくりだす

図70 柱穴出土遺物(2) 石器・金属器

d . 溝

溝6（図53・71～73、図版3・4）

調査区南端において、58ラインの東約2.5m付近を東端部とし、調査区を東西方向に走る溝として検出された。BX～BY57～60区のBYライン上にほぼ一致する。検出にあたっては、本溝の上部を覆っていた炭化物を多く包含する6層中から検出を試みたが、最終的には、同層除去後、7層上面において確認した。東端部付近では、同面においても依然として6層から続く炭化物などの汚れが特に顕著であった。検出レベルは、本溝の北側肩部で標高1.38m前後、やや低い東端部付近で同1.13mを測る。また、58ライン以西において本溝内に位置することとなった調査区南壁面（図71-d）では、標高1.2m～1.26mに本溝の上面が求められる。このように、場所によって遺構掘削上面レベルに高低差が生じることとなった。その原因としては、遺構上部を覆う6層が10数cmの厚さで本溝内に落ち込んでいる状況が確認されており、本溝が完全に埋没する段階での地面の起伏に一因があるのではないかと考えている。

溝は長さ約18mが調査区内に残るが、西に向かって調査区外へ伸びる。幅については、溝の南側部が調査区外となるため正確な数値を把握することはできないが、0.5m～0.9mの残存部に加え、断面観察などから2m前後が推測される。底面は、西から東に向かって標高0.62mから0.5m、そして東端部では一段下がって同0.24mを測る。しかし、調査区南端ラインは本溝を斜めに横切っており、端部下面で計測されたレベルは溝の底面を正確に捉えられているわけではない。そうした点を考慮すると、全体的には標高0.5m前後にその位置が求められる。深さは0.8m前後、断面形は急峻な立ち上がりの逆台形が復元される。一方、東端部では深さは1m程度となっており、西側に延びる流路部分から落ち込む状態が平面的にも確認されている。そして、急峻な立ち上がりをもって東部分は収束する（図71-b）。

埋土は、1群（上層）・2群（下層）・3群（最下層）に大別される。

最下層となる3群はa断面に確認される14・15層にあたり、本溝の東端部において長さ1.2m程度の範囲にのみ、その堆積が認められる。全体に鉄分の沈着が認められるが、炭・焼土などの包含はなく均質な土層を示す点は1・2群と異なる。標高0.24mに位置する底面は、b・c断面では3群の堆積が確認されないため、西側溝から一段下がるような状況を見せる。その差は25～30cmを測る。これは、両断面位置が溝の北側に偏っているため、3群の堆積部分からはずれている可能性も高く、その有無については断定できない。

下層にあたる2群は本溝全体に堆積が確認された。a断面の10～13層・b断面の5～7層・c断面の4層が対応する。底面レベルは、前述したように、東から標高0.49m（a断面）・0.5m（b断面）・0.63m（c断面）を測るが、c断面が底部に達していないことを考えると、標高0.5m前後に求められよう。堆積土は、a断面の様相から炭化物と焼土の包含が特徴的であり、多量の炭化物を含む上半（10・11層）と焼土が多い下半（12・13層）に分けられる。その他に、完形あるいはそれに近い大形破片の椀などが集中して出土する点も際立っており、こうした特徴から、3群とは区別される。

上層となる1群は、2群と同様に溝全体に堆積する。a断面の1～9層・b断面の1～4層・c断面の1～3層が含まれる。a断面では、包含物が比較的少ない1・2層、焼土・小礫・土器を多く含む3～6層、焼土・小礫を多少含むが際だつほどではない7～9層にまとめられる。下面は、a断面で標高0.73m～0.83m、b断面で同0.78m、c断面で0.8mを測る。a断面の1・2層は非常に薄い土層であり流入土的な性格が、そして3～6層と7～9層の関係は、後者が一定の堆積をした後に焼土など多くの包含物を含む前者によって溝が埋められたと想定される。こうした炭・焼土などの包含物は、3ヶ所の断面をみると、溝の中央部に堆積する傾向が強い。

以上の状況から、本遺構の埋没過程を復元してみよう。

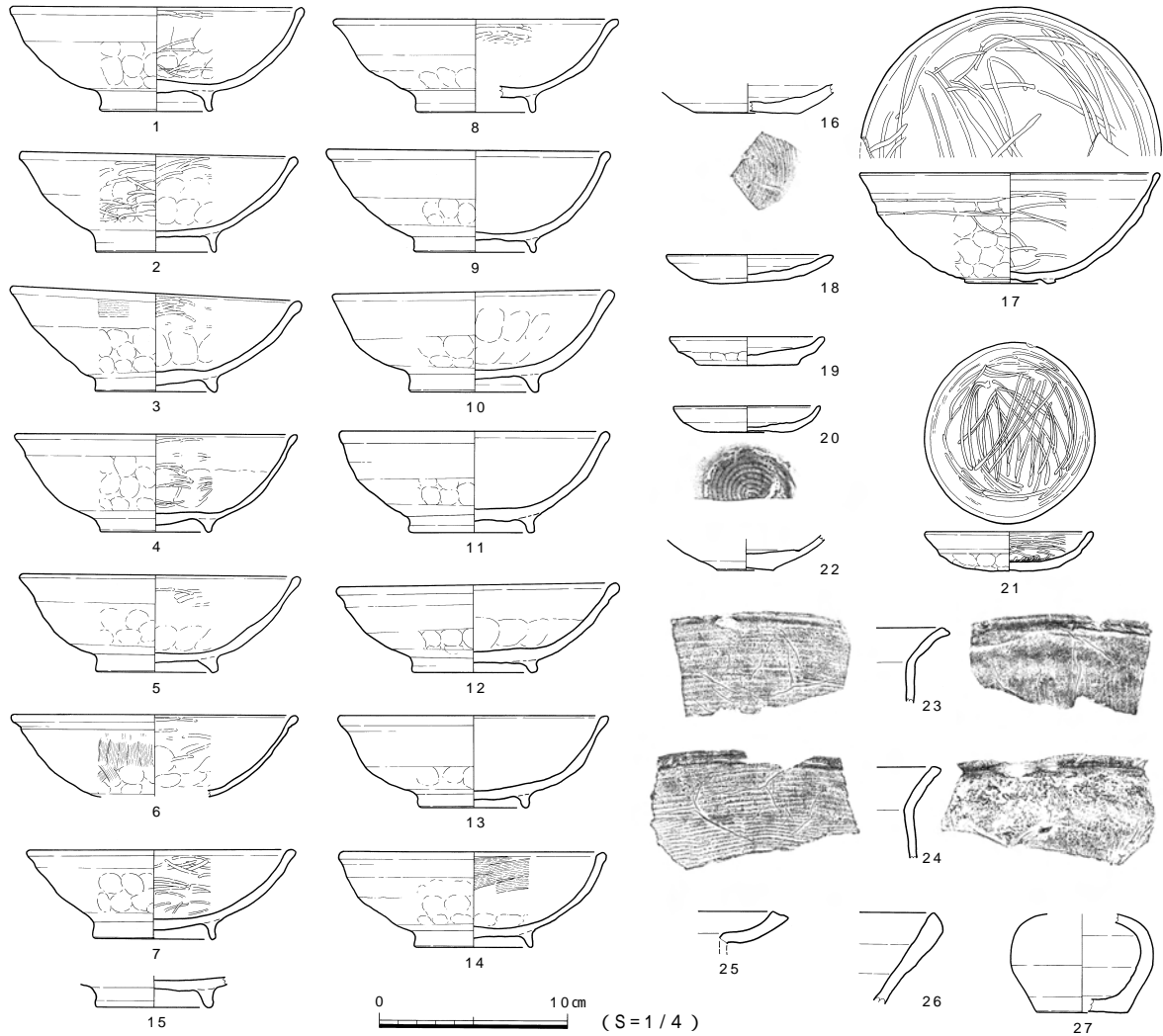
まず、溝の最古段階では、3群の堆積を伴う下層溝が形成されている可能性がある。ただし、部分的な堆積である可能性も残っており、現時点では、資料不足で断定することはできない。次の段階となる2群の堆積は、底



図71 溝6

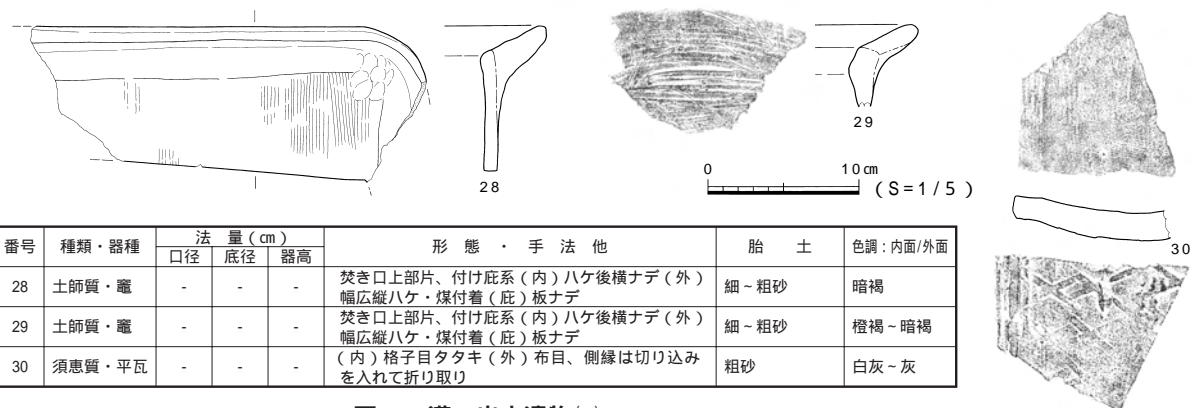
面の高さが標高0.5m付近で高低差の少ない溝を、焼土粒を多量に含む土層の上部を大量の炭化物が埋めるとい
 う形で進行する。同群の堆積にあたっては、被熱を窺わせる埋土内の包含物に加え、b断面の7層下面では熱の
 影響と思われる硬化面が確認されており、被熱痕跡を強く残す。その後、1群の堆積においても、焼土などが上

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）



番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色 調 : 内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*15.7	*5.6	5.6	(内) 丁寧なナデ・一部磨き・下半押し(外) 押し(口) 横ナデ、1/3 残存	微砂、均質	薄黄白 - 薄橙白
2	土師質・椀	14.9	6.2	5.2	(内) 丁寧なナデ・一部磨き・下半押し(外) 押し・粗い磨き、平滑で丁寧な作り	微砂、均質、石英著	乳白 - 薄黄白
3	土師質・椀	15.5	6.1	5.3	(内) 丁寧なナデ・一部磨き・下半押し(外) 押し・ナデの工具痕、二次的被熱、摩滅	微砂、均質	乳白/薄橙白
4	土師質・椀	*15.0	*5.6	5.2	(内) ナデ・一部磨き(外) 押し(口) 横ナデ後端部磨き、丁寧で薄手な作り、1/3 残存	微砂、均質	薄灰白/薄黄白
5	土師質・椀	*14.9	6.1	5.2	(内) 丁寧なナデ・下半押し(外) 押し後縦ナデ(口) 横ナデ・3/4 欠	微砂、概ね精良	乳白/橙白
6	土師質・椀	*15.3	-	-	(内) 丁寧なナデ・一部磨き・下半押し(外) 押し後縦ナデ、器壁薄手、1/4 残存	微砂、均質	薄黄白 - 灰白
7	土師質・椀	15.3	6.2	4.8	(内) 丁寧なナデ・粗い磨き・重ね焼き痕(外) 押し・底部に亀裂(口) 横ナデ、厚手	微砂、均質	乳白
8	土師質・椀	*15.2	*6.0	5.0	(内) 丁寧なナデ・一部磨き(外) 押し・ナデ・中央で屈曲、摩滅、1/3 残存	微砂、均質	乳白 - 薄橙白
9	土師質・椀	15.1	6.2	5.5	(内) 丁寧なナデ・重ね焼き痕(外) 押し・ナデ、二次的被熱	細砂、砂粒多	白灰/薄橙
10	土師質・椀	14.9	6.6	5.4	押し・ナデ、底部に亀裂、摩滅、器壁厚手	微砂、均質、概ね精良	薄黄白 - 薄橙白
11	土師質・椀	14.4	6.1	5.4	(内) 丁寧なナデ・重ね焼き痕(外) 押し・ナデ、摩滅、器壁厚手、3/4 残存	微砂、均質	黄白
12	土師質・椀	15.1	6.2	4.7	(内) 下半押し後丁寧なナデ(外) 押し(口) 横ナデ・端部肥厚、器壁厚手、摩滅	微砂、石英	乳白 - 薄橙白
13	土師質・椀	*14.4	*5.7	4.9	(内) 丁寧なナデ(外) 押し(口) 横ナデ、身部中位で屈曲、摩滅、3/4 - 1/3 残存	微砂、均質	薄黄白 - 薄橙白
14	土師質・椀	*14.2	6.1	5.1	(内) 板ナデ・底面押し・重ね焼き痕(外) 押し後ナデ、粘土接合痕、摩滅、1/3 残存	微砂、均質	乳白 - 薄黄白
15	土師質・椀	-	6.0	-	ナデ	微砂、均質、精良	乳白
16	土師質・椀	-	*5.8	-	横ナデ(底外) 糸切り	精良	灰 - 青灰
17	瓦 器・椀	*16.0	*4.4	5.9	(内) ナデ・粗い磨き・暗文(外) 押し後一部磨き、1/2 残存	精良	黒 断面 黄白
18	土師質・皿	8.9	5.9	1.5	横ナデ(底外) 篋切り後丁寧なナデ、摩滅	微砂、赤色粒	薄橙褐
19	土師質・皿	*8.2	*5.4	1.5	(内) 横ナデ・仕上げナデ(外) 横ナデ・下半押し(底外) 篋切り後ナデ、1/3 残存	微砂、赤色粒	薄橙褐
20	土師質・皿	*7.8	*4.9	1.4	横ナデ(底外) 糸切り、外面に自然釉が飛沫状に付着、1/2 残存	微砂、均質	灰
21	瓦 器・皿	9.0	7.6	2.1	(内) ナデ・同心円状や平行の暗文(外) 押し(口) 横ナデ	微砂、均質	灰黒 - 黒
22	白 磁・皿	-	*3.0	-	ナデ(内) 見込部に沈線・中央に磨り痕(底外) 篋切り後ナデ・露胎、内外面施釉	精緻	薄緑白
23	土師質・鍋	-	-	-	(内) 横ハケ(外) 縦ハケ後口縁部はナデ・押し	微砂、均質	薄黄白 - 黄灰
24	土師質・鍋	-	-	-	(内) 横ハケ 上半幅広・下半幅狭・炭化物付着(外) 縦ハケ後押し、煤付着	粗砂	暗褐
25	瓦 質・鍋	-	-	-	(内) 横ナデ(外) ナデ・押し・煤付着	微砂、均質	黄灰 - 白灰/黒褐
26	須恵器・鉢	-	-	-	横ナデ	微砂、均質	灰 - 青灰
27	須恵器・小瓶	-	4.9	-	横ナデ(底外) 篋切り後板ナデ、外面に自然釉が飛沫状に付着、1/3 残存	微砂、均質	暗赤灰/灰

図72 溝6 出土遺物(1)



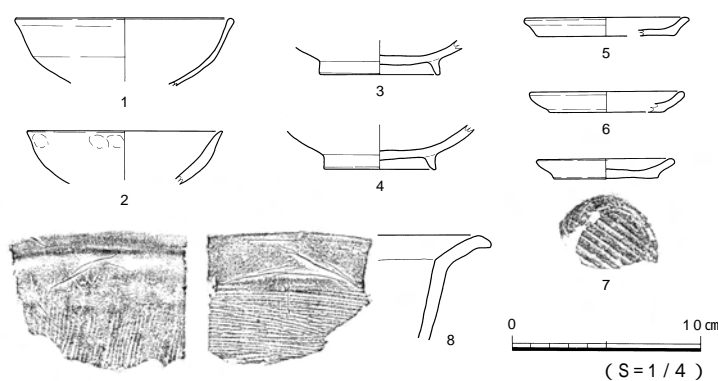
番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
28	土師質・甕	-	-	-	焼き口上部片、付け底系（内）ハゲ後横ナデ（外）幅広縦ハゲ・煤附着（底）板ナデ	細～粗砂	暗褐
29	土師質・甕	-	-	-	焼き口上部片、付け底系（内）ハゲ後横ナデ（外）幅広縦ハゲ・煤附着（底）板ナデ	細～粗砂	橙褐～暗褐
30	須恵質・平瓦	-	-	-	（内）格子目タタキ（外）布目、側縁は切り込みを入れて折り取り	粗砂	白灰～灰

図73 溝6出土遺物(2)

半に多量に含まれる。さらに、その上部を覆った1層は、比較的早い段階で上面が沈下したと考えられる。そして最終的には、炭化物を多く含む汚れた土層（6層）が、その凹みを完全に埋め尽くし、溝の上部周辺を中心として厚く堆積する。

こうした堆積を生み出した背景には複数回に及ぶ溝の掘削、そして、顕著な被熱痕跡に関しては、例えば火災の発生後の整地作業などが考えられ、遺構の埋土あるいは周辺に広がる土層の形成に大きな影響を与えた可能性が想定される。

本溝からはコンテナ2箱分（1箱28ℓ）の遺物が出土した（図72・73）。ほぼ完形の5点を含む土師質土器碗（図72-1～15）は、個々の遺物の保存率あるいは量的にも出土遺物の中心を占める。その他の遺物で完形となるものは、土師質土器皿1点（同-18）と瓦器皿1点（同-21）のみである。瓦器碗は1/2程度の残存率である（同-17）。その他に、須恵器碗、白磁皿、鍋、甕、瓦などを含むが、いずれも小片である。未掲載遺物は、小～細片が全体でポリ袋1～2袋（13号）程度があげられる。土師質土器碗は篋磨きの有無などの特徴から新・旧の2群に分けられる。いずれにも完形品が含まれ、出土量も差を示さないことから、どちらかの混入とは考えにくい。また、それらの中で完形品に注意して出土位置を確認すると、下層からは篋磨きが残る古いタイプ（図72-2～4）が出土する傾向が指摘されることから、溝の埋設時期は少なくとも2段階あると判断される。



番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・碗	*11.8	-	-	（内）ナデ（外）押圧・ナデ、1/5残存	細砂	淡白褐
2	土師質・碗	10.4	-	-	（内）ナデ（外）押圧・ナデ、1/6残存	微砂	淡白褐～暗灰褐
3	土師質・碗	-	6.4	-	（内）丁寧なナデ（外）ナデ	微砂、精良	灰褐～褐灰
4	土師質・碗	-	*6.1	-	（内）丁寧なナデ・粘土接合痕（外）ナデ、1/2残存	微砂、精良	淡灰褐
5	土師質・皿	*8.8	*7.4	1.1	横ナデ（底外）篋切り、1/5残存	微砂、精良	淡橙
6	土師質・皿	*8.2	*6.3	1.1	横ナデ（底外）篋切り後押圧、1/5残存	微砂、精良	淡褐白
7	土師質・皿	*7.3	*5.6	1.1	横ナデ（底外）篋切り後板ナデ、1/3残存	微砂、精良	淡褐
8	土師質・鍋	-	-	-	（口）横ナデ（胴）内面：横～斜めハゲ・外面：縦ハゲ	微～細砂	淡茶褐/淡黄褐

図74 溝6周辺 6層 出土遺物

溝7（図53・75）

調査区南東部、BX～BY56～57区において、BYライン上を東西方向に走る溝が復元される。溝6とは約1mの間隔をもって同じライン上に位置する。ただし、57ラインの東側では、溝23あるいは現代の共同溝設置工事によって消失している。

平面的な検出は基礎の下部にあたる部分で標高0.9m、9層であったが、一部に残された土層断面からは標高1.33～1.28mの7層上面に掘削面を求めることができる。残存長は東西方向に約2.5mである。

本遺構の上部には僅かに4層の堆積が認められる。同土層は、調査区南端部付近において6層を削平して形成される状況が西壁面でも確認されており、それに対応するラインが本溝上にあたることからわかる。

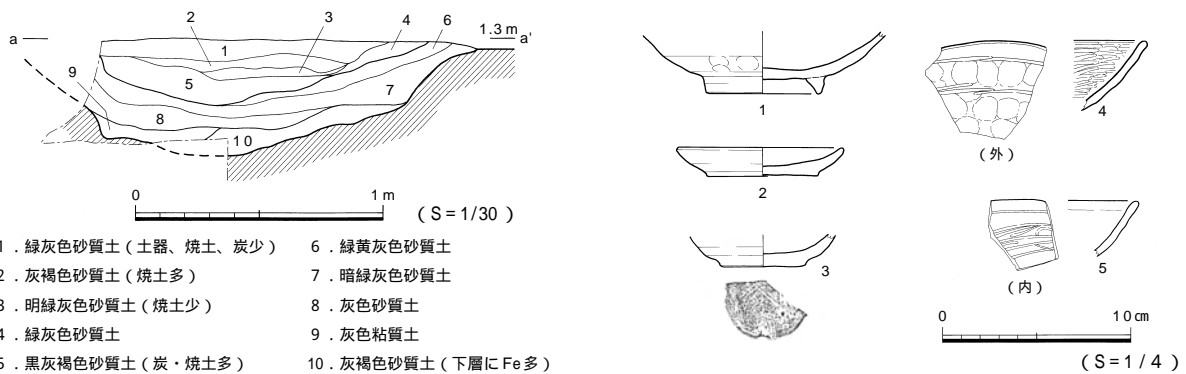
溝の幅は検出面で0.9m、土層断面上面で1.68mが残存するが、本来は2m程度が復元される。底面は標高0.8m前後に位置し、深さは約0.45mである。断面形は緩やかなすり鉢状を呈する。

埋土は、上層と類似する1層、焼土あるいは炭化物を包含する点が特徴的な2～5層、際だった包含物が認められない砂質土である6～8層、粘質土である9層以下の四群にまとめられる。5層の下面は標高1.03m、溝の底面となる10層の下面は同0.8m前後に求められる。

こうした底面レベルあるいは焼土・炭化物を包含する埋土の特徴を、本溝と同一ライン上で西側に位置する溝6と比較すると、本溝は溝6の1群に対応すると判断される。炭化物の集中土層に注目して細分した1～5層（上層）は溝6の1～6層（a断面：以下略す）に、6～8層そして9・10層（下層）が溝6の7～9層に対応する。それぞれの底面レベルは、下層の下面ではほぼ一致するが、炭化物等が包含される上層では本溝の方が10cm程度高い位置を示す。このように、本溝も溝6と同様に、焼土あるいは炭の堆積によって埋没したことが見て取れるなど、両溝の関連性の高さが窺われる。その他に、位置関係からは溝8の存在も注目されるが、同時に機能したかどうかについては決め手に欠ける。

遺物は30片程度が出土した。掲載した遺物（図75）は、その中でもやや大きめの破片であり、それ以外は小～細片が占める。土師質土器碗・皿・鍋・甕、瓦器碗、須恵器碗などの破片である。一部の遺物には若干の時期差が認められ、器種構成あるいは時期幅などは溝6との内容と矛盾しない。ただし、全ての遺物が本溝の機能した時期を直接示すかどうかは、完形品などを含まない小片であることから注意する必要がある。

本溝の埋設時期は、出土遺物の特徴に加え、溝6の下層部分が本溝には確認されない点を考慮し、溝6の上層、つまり新しい段階に求められる。古代末に考えたい。



- 1. 緑灰色砂質土（土器、焼土、炭少）
- 2. 灰褐色砂質土（焼土多）
- 3. 明緑灰色砂質土（焼土少）
- 4. 緑灰色砂質土
- 5. 黒灰褐色砂質土（炭・焼土多）
- 6. 緑黄灰色砂質土
- 7. 暗緑灰色砂質土
- 8. 灰色砂質土
- 9. 灰色粘質土
- 10. 灰褐色砂質土（下層にFe多）

番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・碗	-	5.6	-	(内)丁寧なナデ・重ね焼き痕(外)押圧・ナデ、器壁平滑	微砂	乳白～黄白
2	土師質・皿	8.6	5.8	1.5	横ナデ(底外)篋切り後ナデ後板目痕	精良	黄橙
3	須恵器・碗	-	*4.5	-	横ナデ(底外)糸切り、1/2残存	微砂、均質	灰
4	瓦器・碗	-	-	-	(内)横方向の密な篋磨き(外)押圧後一部篋磨き	微砂、均質	乳白～黄灰
5	瓦器・碗	-	-	-	(内)ナデ後暗文(外)押圧・ナデ	精良	灰～暗灰

図75 溝7・出土遺物

溝8 (図53・76)

BV ~ BY 56 ~ 57区で検出された。検出レベルは標高1.2m前後、4層 下面であり、6層・7層 に対応する。調査区の南東部、57ライン付近を南北方向に走る溝であるが、攪乱などによって上面が破壊される部分が多く、本来の姿を残す部分は少ない。北端部にあたるBV区では東側に溝9が接する。

溝の長さは約14mを測る。北端部と南端部は検出が困難な状況になることから、徐々に浅くなって収束する形態と判断される。幅は0.9~1.1mが想定される。底面レベルは標高0.81~0.85mに収まるように、同0.83m前後で推移する。深さは0.36~0.4mを測る。掘り方の断面形はボウル状を呈する。

埋土は、灰褐色砂質土で炭化物・鉄分を多く含む1層、茶褐色系の粘質土である2・3層、土質は2・3層に類似するが色調が暗い黒茶褐色土でマンガンを多く含む点で区別される5層、の3群に大別される。1層は流入土の可能性が高く、2層以下が使用段階あるいは埋没段階の土層である。

遺物は小~細片が30片程度出土したのみである。土師質土器椀・皿・鍋の小片が20数片のほか瓦器椀片、竈片が含まれる。詳細な時期は不明確であるが、古代末の可能性も残す。

周辺溝との関係では、底面レベルは前述した溝6の1群・溝7の底部と共通した数値を示す。本溝南端部も両溝間の途切れた位置に接する点も注目される。しかし、埋土の違いもあり、その関係は流動的である。

本溝は、両端が収束し底面レベルにほとんど差が認められない点、あるいは溝6・7など周辺遺構との位置関係などから、水路的機能よりは区画溝の要素が強いと評価される。

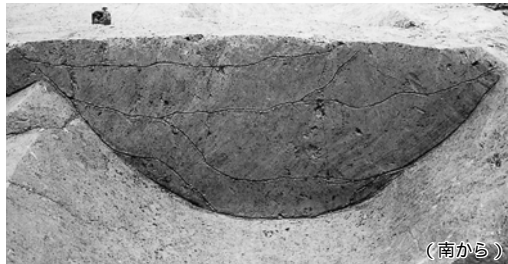
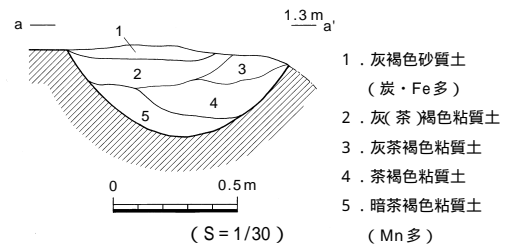


図76 溝8土層断面

溝9 (図53・77)

調査区の北東部、BR ~ BV 56区で57ラインの東約1.5mの位置を南北方向に走る。北壁面~BWラインで確認される。BTラインからBUラインの南2mまでの約6mの間は溝19・22・23によって大きく破壊され、さらに、BWライン以南は近・現代の工事で破壊される。

遺構の上面は、調査区北壁面での土層観察からは、標高1.13m、5層 下面で、9層 上面に求められる。しかし、多くの攪乱による分断によって場所ごとに検出レベルは異なる。北側部(溝19以北)では標高1.03m前後、南側部(溝22以南)では標高1.02~0.92m、さらに南端部では東側に走る溝と近接することや攪乱の影響で検出が困難となり、最終的に標高0.78mまで下げた段階で存在が確認された。

溝の残存長は約24mである。幅は、北側部で1.1~1.2m、南側部で0.6~0.7m、南端部で0.6mを測る。検出面の差を勘案すると、本来は北側部程度の規模が推定される。ただし、調査区北壁面では幅0.8mへと、直接つながる北側部から急速に縮小しており、北壁部に溝の端部があたる可能性を予想させる。

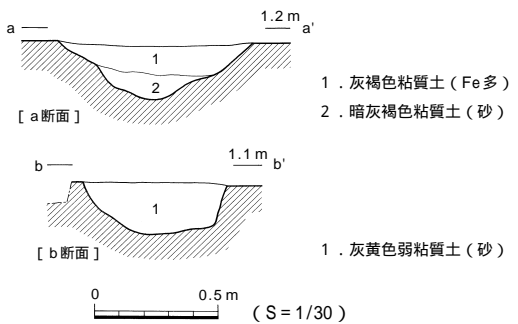


図77 溝9土層断面

底面レベルは、調査区北壁面では標高0.91 m、北側部で同0.88 mから0.83 mへと南に下がり、南側部で0.83 m前後、南端部では同約0.7 mとなり、全体に南に下降する。特に、南端部付近で傾斜がきつくなる可能性もあるが、調査部分が狭小であることから詳細な状況は不明である。深さは、検出面の違いから0.2～0.08 mまでの幅がある。北側で0.15～0.2 m、北壁面では0.22 mであることから、0.2 m前後の深さが復元される。断面形は丸みをもった逆台形あるいは凹凸のあるすり鉢状を呈する。

埋土は北端では二分されるが、南側では単一層として捉えられた。全体的に粘性をもつ土層で、北側では下半にそして南側では全体に砂を含むのが特徴である。遺物は土師質土器の小～細片が約10片含まれる。

断面形・埋土の状況から、溝8との類似性が高く、その位置関係から区画溝の役割も想定される。所属時期は遺構の関係も考慮すると、古代末、12世紀末の中で理解される。

溝10（図53・78・79）

調査区北壁面で確認された。BR 55～56区である。56ラインの西2.1 mから東側にかけて位置するが、調査区北側溝内で収束し調査区内には広がらない。上面は 5層 下面、つまり 9層 上面の標高1.13～1.18 mに求められる。

長さは3.6 mを測る。底面高は東部分では標高 1.03 mであるが、最も深い西端部では同0.97 mとなり収束する。深さは0.1～0.2 mである。埋土は暗灰褐色粘質土の単一土層で、鉄分・マンガンの沈着が顕著である。遺物は出土していない。それ以上の詳細は不明であるが、形状・検出面などから古代末（～中世初頭）の溝と判断した。

溝11（図78）

調査区の北東部、BR 56区で検出した。検出高は標高 1～1.03 m、 5層 下面、つまり 9層 上面である。BSラインの北0.5 mの位置で溝9にとりつき、そこから緩やかにカーブしながら調査区北壁面に至る。

長さ3 m、幅0.3～0.38 mが残る。底面は標高0.9 m前後で推移し、深さは0.12 mを測る。断面形はボウル状を呈す。埋土は灰褐色土で灰色土をブロック状に含む。遺物は出土していない。

本溝は、位置関係から溝9あるいは溝10との関係が注目されるが、埋土の違いもあり、直接的に結びつける材料は少ない。小規模な水路としての機能が予想される。

所属時期は検出面あるいは周辺遺構との関係から古代末と考えられる。

溝12（図78）

調査区の北東部、BR 56区で検出した。溝11と同地点で溝9と重複する。溝11との先後関係は検出段階には同溝の下部であったが重複部分が少なく確定的とはいえない。

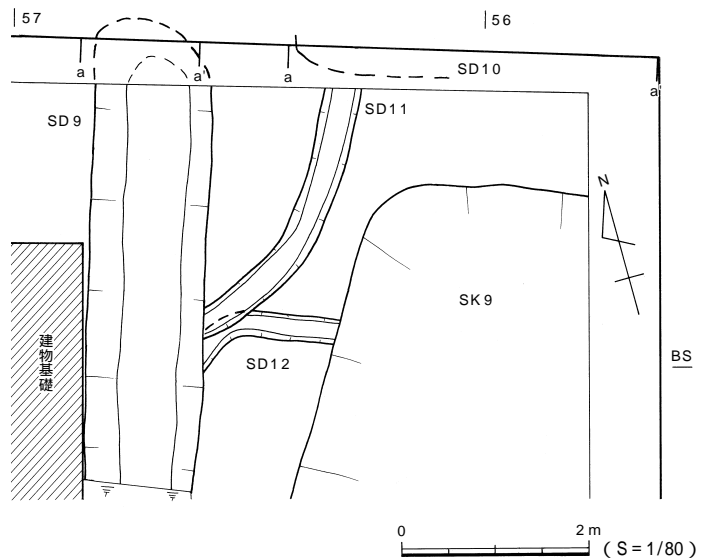
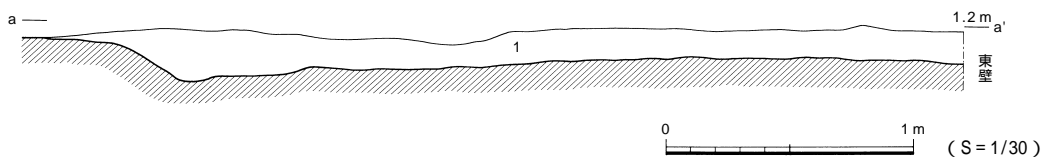


図78 溝9～12



1. 暗灰褐色粘質土 (Fe・Mn多)

図79 溝10土層断面

方向は溝11とは異なり東に伸びるが土坑9の破壊で消失する。検出レベルは標高0.99mで 5層 下面である。長さ1.4m、幅0.3mが残る。底面は標高0.92mに位置し、深さは僅か0.07m程度である。断面形はボウル状を呈する。埋土は暗灰色土の単一土層であり、溝11と同様に灰色粘土塊を含む。遺物は出土していない。所属時期は検出面あるいは周辺遺構との関係から古代末と考えられる。

本溝は溝11との共通性が高く、同様に小規模な水路としての機能が予想される。

溝13 (図53・80)

調査区の中央部付近を南北方向に走る。検出面は標高1.04~1.1m、4層 下面である。7層 あるいは9層 上面にあたる。北側は溝22・23によって破壊され、同溝群より北側では検出されていない。南側では一部で井戸3が重複し本溝を分断する。南端部はBWラインから2m付近で浅くなり消失する。

長さは約10mが残存する。幅は、一部で0.7mを測るが0.5~0.6mが中心である。底面は、北側で標高0.94m前後、南端部では同1mを測り、南側に向かってやや上昇する。深さは、北側で0.15m前後、南側では0.09mと浅くなる。断面形は皿状を呈し、埋土は黄灰色系の粘質土である。

遺物は古墳時代初頭の小片が30片程度含まれる以外は、須恵器小片が2点あるのみである。やや新しい時期の可能性もあるが、時期決定には困難である。

所属時期は、こうした出土遺物や遺構の重複関係などから古代末と想定される。

溝14 (図53・81)

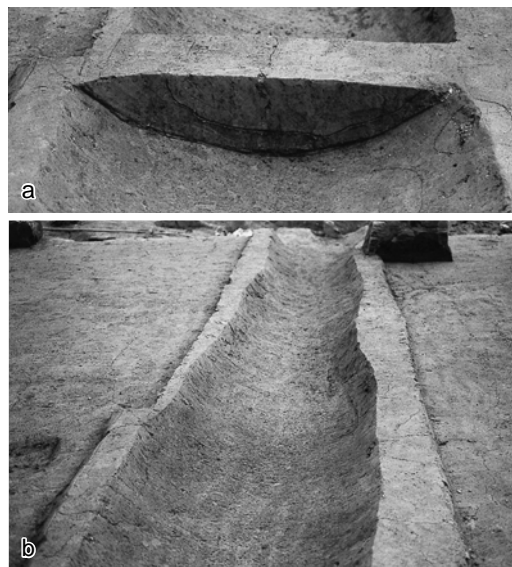
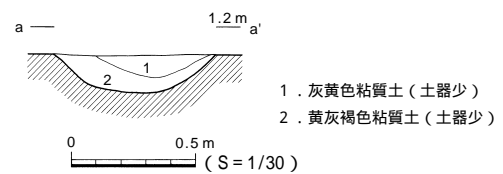
調査区の中央部、BVラインの南約2m付近を東西方向に走る。東西に広がる攪乱の肩部において検出された。随所に近代の建物基礎による攪乱部が及ぶため、残存部分は59ライン以西に限定され、全体像は不明な部分が多い。検出レベルは標高1.08~1.13mである。4層 下面、7層 にあたる。ただし、もう1層上層まで(約10cm程度)上昇する可能性を残す。

残存する長さは9.5mである。溝の幅は0.8m前後が復元される。底面は標高0.93~0.96mに位置し、深さは0.17mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は黄灰色粘質土(1層)が厚く堆積し、灰色砂質土(2層)が底面に薄い土層を形成する。本溝は、東西に走るラインが柱穴群の集中域の北端にあたることから、区画溝として性格が想定される。また、底面における砂質土の堆積を積極的に評価するならば、水の流れも考えられるが、残存部が少ないため、断定することはできない。

遺物は、古墳時代の混入遺物を除くと、土師質土器の細片(椀・皿・鍋)約10片と須恵器の小片2片が出土している。

本遺構の所属時期は中世前半と考えられる。



a. 土層断面(北から) b. 完掘状況(北から)

図80 溝13

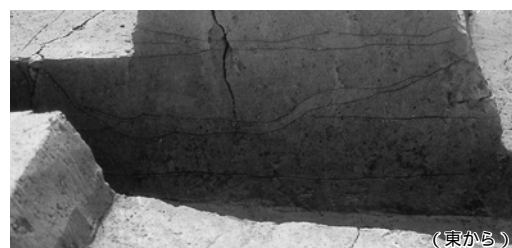
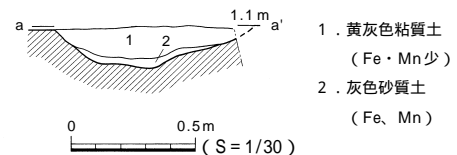


図81 溝14土層断面

溝15（図53・82～84）

調査区東端中央部、BV 55～56区において検出された。溝16～18が重複する。BWライン以南は現代の共同溝設置による破壊によって消失する。溝の上面は、b断面から標高1.14m、5層 下面に求められるが、その残存範囲が調査区端と溝21・23との間という非常に狭い範囲であったことが影響し、平面的な検出は標高0.78mの10a層 中まで下がることとなった。

北端は調査区東壁から北東方向に向けて調査区外へ伸びる。残存する長さは約4mである。その方向は北東-南西を示し直線的に走る。幅は約0.55mが平面的に確認されたが、壁面観察から本来は約0.7m前後が復元される。底面は北端で標高0.55m、南端で同0.58mを測るが、狭い範囲の計測であり、これが流路方向を示すものかどうかは確定的ではない。深さは0.55～0.58mが復元される。断面形はU字形に近い。

埋土は南端部（b断面）で5層に分層される。全体には鉄分の沈着が顕著である。上層（1～3層）は褐色系の土層、下層（4・5層）は灰色系の土質でやや粘性が強い傾向がある。両者間に一度の掘り返しの可能性を求めることもできる。東壁（a断面）で確認された6層は最下層であり、b断面の下層に対応すると考えられる。c断面では、上層に対応する土層を確認したが、その中での細分は困難であり、また、下層については調査区の東壁面際にあたる側溝による破壊で消失している。

遺物は土師質土器の小～細片が6点出土した。吉備系土師質土器碗を含む。所属時期は、遺構の重複関係・出土遺物から中世前半と想定される。

溝16（図53・82・84）

調査区東端中央部、BV～BW 55区に位置する。溝15の東側上部に重複しつつ、溝17によって溝の北側肩部が破壊される。また、BWライン以南は現代の共同溝設置によって破壊される。遺構の確認は、調査区東壁土層断面（a断面）とBWライン上の土層断面（b断面）で行った。遺構の上面は標高1.11～1.14mに求められる。5層 下面、9層 上面にあたる。

溝15の東側に平行して北東-南西方向に直線的に走る可能性が窺われる。調査区端部の極めて狭い範囲に位置したこともあって平面的な検出はほとんどできなかったが、長さはa断面とb断面との間1.5mが、そして、幅は約1mが復元される。底面は標高0.68mに位置し、深さは0.45mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は褐色系の粘質土で、明瞭に区別される。鉄分・マンガンの沈着が多い。

遺物は出土していないが、遺構の重複関係などから中世前半と想定される。

溝17（図53・82・84）

調査区東端中央部、BV 55区の東壁面において確認された。溝15・16上に重複する一方、溝18あるいは溝21・23によって大きく破壊される。残存範囲の狭小さこうした遺構の切り合いから平面的な検出を行うことはできず、東壁面のみ観察となった（a断面）。上面は標高1.13m、5層 下面、9層 上面に求められる。

溝の幅は約1.2m程度が推定される。底面は標高0.78m、深さは0.33mを測る。断面形はボウル状の可能性はあるが明確ではない。長さおよび方向については確定できない

埋土は、灰色系の粘質土（1・3層）を中心とする。両土層間には褐色粘質土である2層が非常に薄く部分的に堆積する。2層以外は鉄分あるいはマンガンの沈着が顕著である。

遺物は出土していないが、遺構の重複関係などから中世前半と想定される。

溝18（図53・82～84）

調査区東端中央部、BU～BV 55区において確認された。溝15・17上に重複しており、同地域に集中する溝群（溝15～18）の中では最後に形成された溝である。

調査区東壁面と溝21・23の間に僅かに残される。検出面は標高0.78mで10a層であったが、東壁面では同0.98～1.11mの5層 下面、9層 上面に求められる。平面的検出が長さ2mという短さのため、その方向

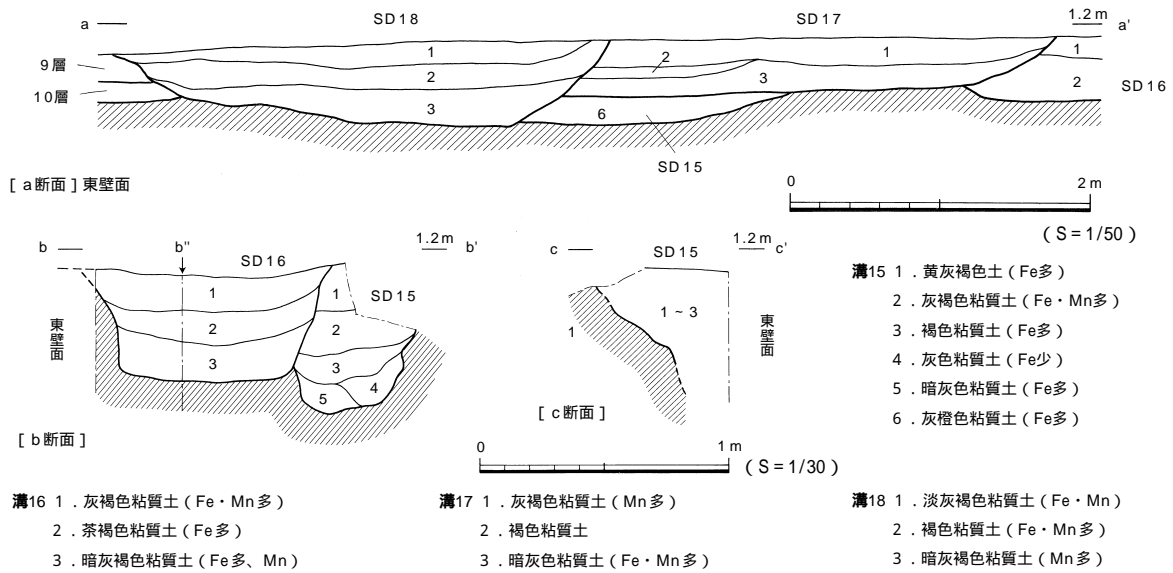


図82 溝15～18土層断面



図83 溝15・18完掘状況

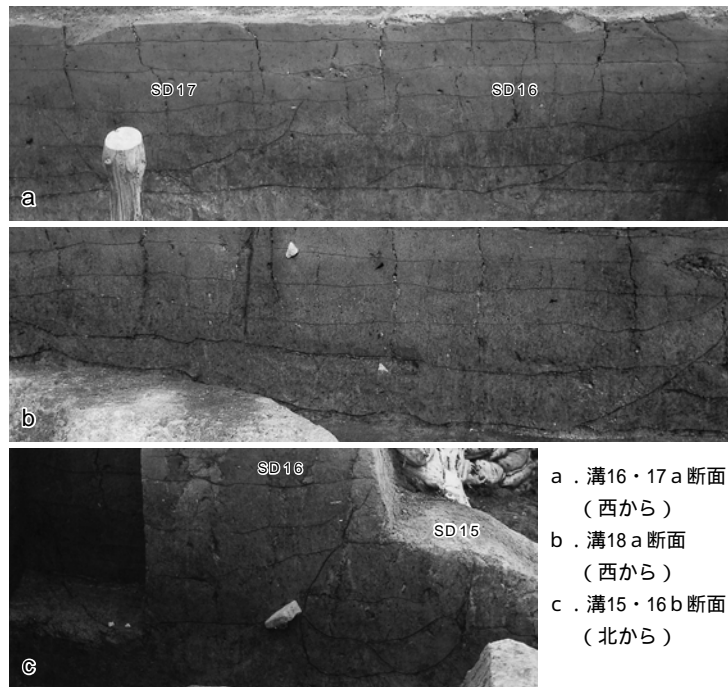


図84 溝15～18土層断面

の確定は困難であるが、溝15・16よりはかなり東に振った状況が想定される。幅は約1.4mが面的に確認されたが、少なくとも1.7m程度は復元される。底面は標高0.53mに位置し、深さは0.55mを測る。断面形は皿状に近い。埋土は褐色系の粘質土で、下半(2・3層)にはマンガンの沈着が特に顕著である。

遺物は土師質土器の小～細片15片、そして瓦1片を含む。所属時期は、遺構の重複関係などや出土遺物から中世前半と想定される。

溝19（図53・85～87、図版3・4・7）

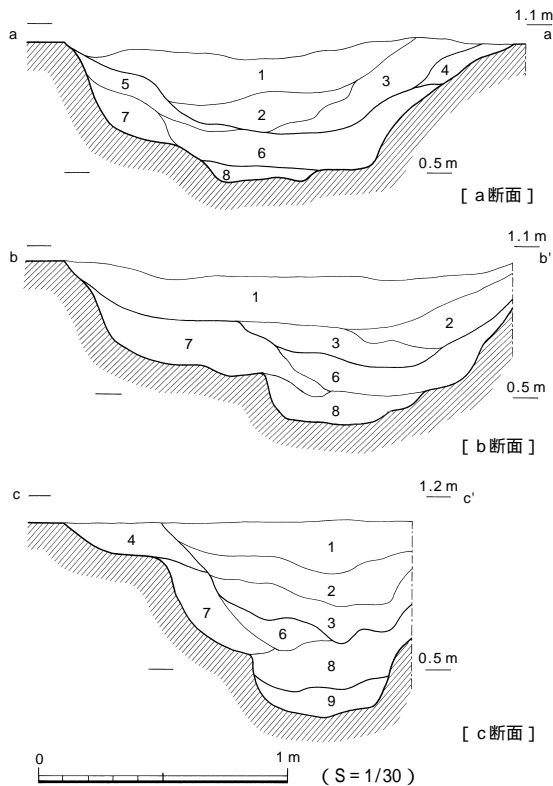
調査区の中央部、BTラインとBUライン間を東西方向に走る。BT 55～60区に位置する。南側の肩部は溝23あるいは建物基礎によって破壊される。東端部（57ライン以東）では、一部で溝21が上部に重複し、溝20とは肩部が近接する（図85）。検出レベルは標高1.03～1.08m、5層下面で9層上面にあたる。

溝の長さは、調査区の西端から東端に及んでおり、調査区内では27.5mを測る。幅は1.8～1.9mである。底面レベルは、西側で標高0.31m、東側で同0.47mを測り、西に向かう傾斜が確認される。深さは、0.55m～0.78mを示す。断面形はY字形あるいは凹凸のある逆台形を呈する。

埋土は、色調・土質の特徴から、灰色系の砂質土である1～4層、やや粘性を強めた5～7層、色調が暗く粘性の強い8・9層の3群にまとめられる。上層部には全体的に鉄分の沈着を見るが、特に顕著なのは3層・7層・9層であり、各土層群の下面近くに対応する。こうした土層群の存在あるいは鉄分沈着土層が各土層群の下面に形成される点、各土層群の堆積ラインの状態などから、本溝には複数回の掘り返しが



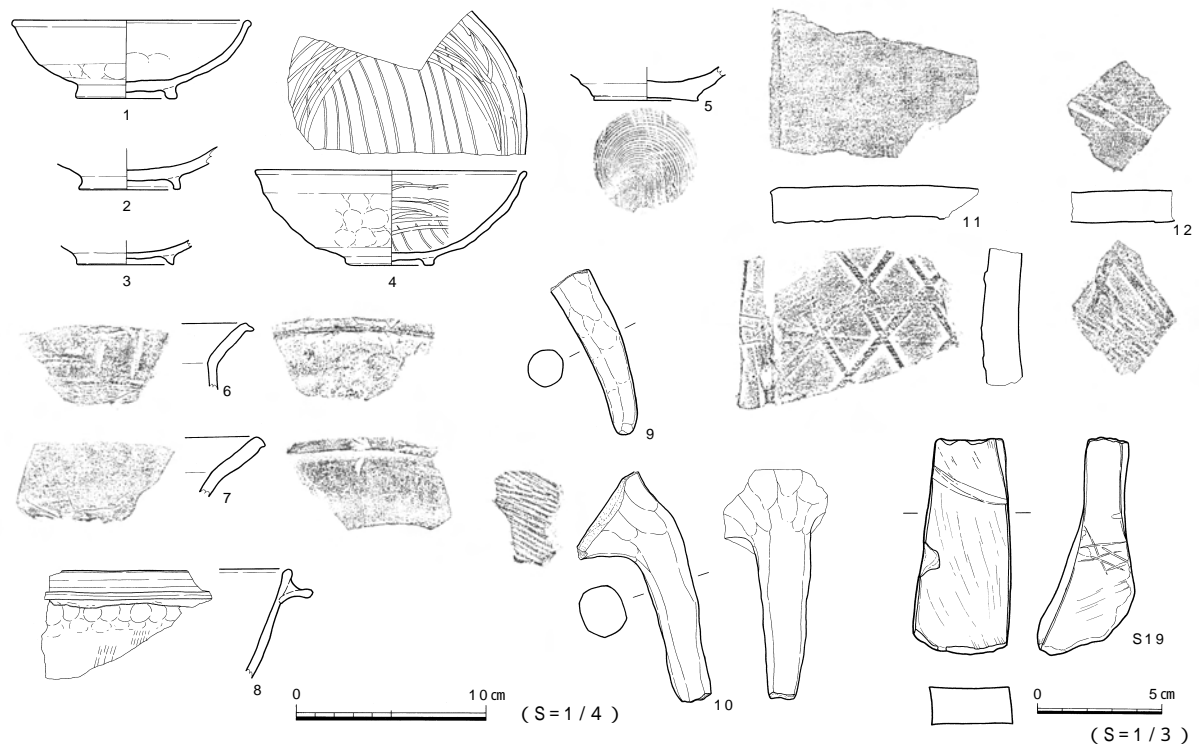
図85 溝19東端部完掘状況



- | | |
|------------------|---------------------------|
| 1. 灰褐色砂質土 (Fe) | 6. 灰色～暗灰色粘質土 |
| 2. 灰褐色(砂質)土 (Fe) | 7. 灰色(砂質)土～暗灰色(粘質)土 (Fe多) |
| 3. 灰色砂質土 (Fe多) | 8. 灰色粘質土～黒灰色粘土 |
| 4. 灰色砂質土 (Fe) | 9. 暗灰色粘土～粘質土 (Fe多) |
| 5. 灰色粘質土 | |



図86 溝19土層断面



番号	種類・器種	法 量 (cm)			形態・手法 他	胎 土	色調: 内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*12.6	*5.1	4.1	(内) 押圧・ナデ、煤付着 (外) 押圧 (口) 横ナデ、二次的被熱、1/5 残存	微砂、均質、赤色粒	暗茶褐/ 底 黄灰
2	土師質・椀	-	5.2	-	ナデ、摩滅	微-細砂、赤色粒	薄黄白
3	土師質・椀	-	5.1	-	ナデ、摩滅	微-細砂	薄橙白
4	瓦 器・椀	*14.3	*3.6	5.0	(内) ナデ・暗文 (外) 押圧・重ね焼き (口) 横ナデ、1/2 ~ 1/6 残存	微砂、均質	灰/暗灰
5	須恵器・椀	-	5.4	-	横ナデ (底外) 糸切り・板目痕・緯襷き痕	精良	灰 - 青灰
6	土師質・鍋	-	-	-	(内) 横ハケ・口: 横ナデ (外) 縦ハケ後押圧・煤付着	細砂、砂粒やや多	褐/黒褐
7	土師質・鍋	-	-	-	(内) 横ナデ (外) 縦ハケ後押圧・煤付着	微砂、均質	橙褐/暗茶褐
8	瓦 質・鍋	-	-	-	(内) 丁寧なナデ (外) 押圧・板ナデ・羽部下に煤付着	細砂、均質	灰
9	土師質・鍋脚	-	-	-	押圧・ナデ、断面ほぼ円形	微砂、均質、赤色粒	橙褐
10	土師質・鍋脚	-	-	-	(内) 横ハケ (外) 押圧・ナデ・上半被熱	細砂、赤色粒	薄橙褐
11	須恵質・平瓦	-	-	-	(内) 格子目タタキ (外) 布目、側縁部は切り離しの後にナデ	細砂、均質	白灰 - 灰
12	須恵質・平瓦	-	-	-	(内) 格子目タタキ・一部平行タタキ? (外) 布目	細-粗砂	灰

番号	器 種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石 材	特 徴
S19	砥石	86.7	38.5	40.9	132.3	流紋岩	表・側面に研磨による摩滅、線状痕

図87 溝19出土遺物

あったことが想定される。機能としては、全体的特徴から、水路としての機能を有すると判断している。ただし、同時に土地区画の役割を有していたことは十分に考えられる。

遺物はコンテナ1箱(1箱28ℓ)の量が出土している(図87)。混入遺物を除くと、包含される器種は吉備系土師質土器椀(100片)・土師質鍋(45片)が量的にはほぼ同量で中心を占める。その他に瓦2片、竈小片20片、瓦器椀1片・皿1片、須恵器椀1片、須恵器片18点、瓦質鍋2点、青磁数片、そして砥石1点があげられる。いずれも小～細片であるが、吉備系土師質土器椀・瓦器椀(図87-1・4)は比較的保存率が高い。

本溝の埋設時期は、瓦器はやや古い時期を示すが、その他の遺物からは中世前半、13世紀中葉を中心とした時期が想定される。

溝20～23の推移(図53・89)

溝20～23は、ほとんど同一位置に重複して形成された溝群である。これらが埋設した時期は、中世前半の終わり、13世紀末～14世紀前半を中心としており、埋土の近似性や位置関係あるいは形状から連続的な使用を窺うことができる。ここでは、これらの溝の推移とそれぞれの関係を概略した上で、個々の溝について説明を行うこととする。

古い段階の溝は、検出面が 5層 下面となる溝20・21である。溝20はBUラインを中心とした調査区東壁が

ら西に向けて本調査区内に入り込む。そして56ライン付近から、南側のラインはほぼ直角に方向を転換して南に向かう。一方、北側のラインは北西方向（BTライン方向）に大きくカーブし、北側に張り出すような膨らみを見せる。溝21は、その上部に位置しており、BTライン～BWラインにおいてその存在が確認される。溝20の南北方向を示す部分の上部にすっぽりと重複する状態である。北端部は比較的急峻なラインで立ち上がるが、部分的には階段状の斜面が形成される。

両溝は、幅約4m、深さ1.3m以上という大形の規模を保つ。底面は標高0m以下（溝20：標高-0.15～-0.32m、溝21：同-0.05～-0.1m）という非常に低いレベルにあり、掘り方ラインも比較的急峻なすり鉢形あるいはポウル形であるという形態上の共通性を示す。さらに、底面あるいは最下層から出土した遺物については、現状では、時期差を見出すことは困難である。位置もほとんど重複する点などから、連続して使用され、同様の機能を有すると評価される。

両溝の重複関係については、平面的には切り合い関係を認めたが、溝20の検出は溝21の掘り下げ中であつたため、上半部において明確な土層の切り合いは確認されていない。下半の埋土についても、遺構の性格上、明瞭は差を求めることは困難である。僅かにe断面とf断面で上層の状況に違いが看取され、別遺構としての平面的検出に追従する要素を得ることができるが、これも溝端部のみと比較である点は問題を残す。ここでは検出時の認識を重視して別遺構としたが、同一溝あるいは溝20の一部改修なども想定可能な範囲に十分含まれる点を指摘しておこう。いずれにしても、前述したような共通性の高さから極めて関連の深い溝であることは確かであり、埋土の観察による両溝の切り合い関係がやや不明瞭である点は注意しておきたい。また、両溝が機能した段階あるいは溝21の段階に、西に向かう溝の有無については溝23の存在によって確認することはできないが、存在する可能性を高いと考えている。

次の段階は5層 上面に対応する溝22そして溝23である。形態が明瞭な溝23について述べると、同溝はBUラインに沿って東西方向に走り、57ラインと58ライン間でほぼ直角に南方向に走行方向を転換し、L字形の溝を形成する。南北方向の部分は溝21に重複する。一方、溝22は溝23の南側～西側に一部が残されるのみで詳細は不明であるが、少なくとも東西方向部分では溝23の軸よりはやや北東に振れる状況が認められ、溝23の段階に若干方向を修正していることがわかる。

溝23では、溝の幅は東西方向部分で3m弱・南北方向部分で3～4m前後が確認される。深さは約1m前後を測る。底面は標高0.2m前後に求められ、前段階と比較するとレベルは高くなっている。全体的な規模の点ではやや小形化が進む傾向があるが大きな違いとは言いがたい。断面形態は、東西方向部分では逆台形の底部に箱形の水路を有す。こうした形態的特徴は、a断面（図90）などの観察から溝22でも共通する。さらに、その特徴は最終的には近代におよぶ溝26にも継続する。

14世紀前半あるいは近世の遺物が溝23から出土していることから、自ずと機能した時期が想定されよう。埋土の堆積状況からは、複数回におよぶ掘り返しが確認される点も、長期間の使用と矛盾しない。

以上のように、溝20・21の段階と溝22・23の段階では、溝の方向に関して一部変化を見いだすことができるが、溝の位置・規模などの基本的な特徴に大きな変化は認めがたい。同位置における連続的使用が長期間におよぶ点に注目したい。13世紀中頃に遡る溝19の位置を踏襲するかのような配置は、同ラインが中世集落において重要な区画として認識されていたことを示す。

溝20（図88～93、図版3）

調査区の東端のほぼ中央部、BT・BU55区において、溝21・23を完掘中に、調査区東壁から西方向に向かって検出された。検出レベルは、標高0.95m前後であるが、調査区東壁面から、上面を標高1.13mに求めることができる。5層 下面にあたる。

平面的に検出が可能であつたのは、調査区東壁から1～1.5m程度の範囲である。本溝は調査区東壁（BUラ

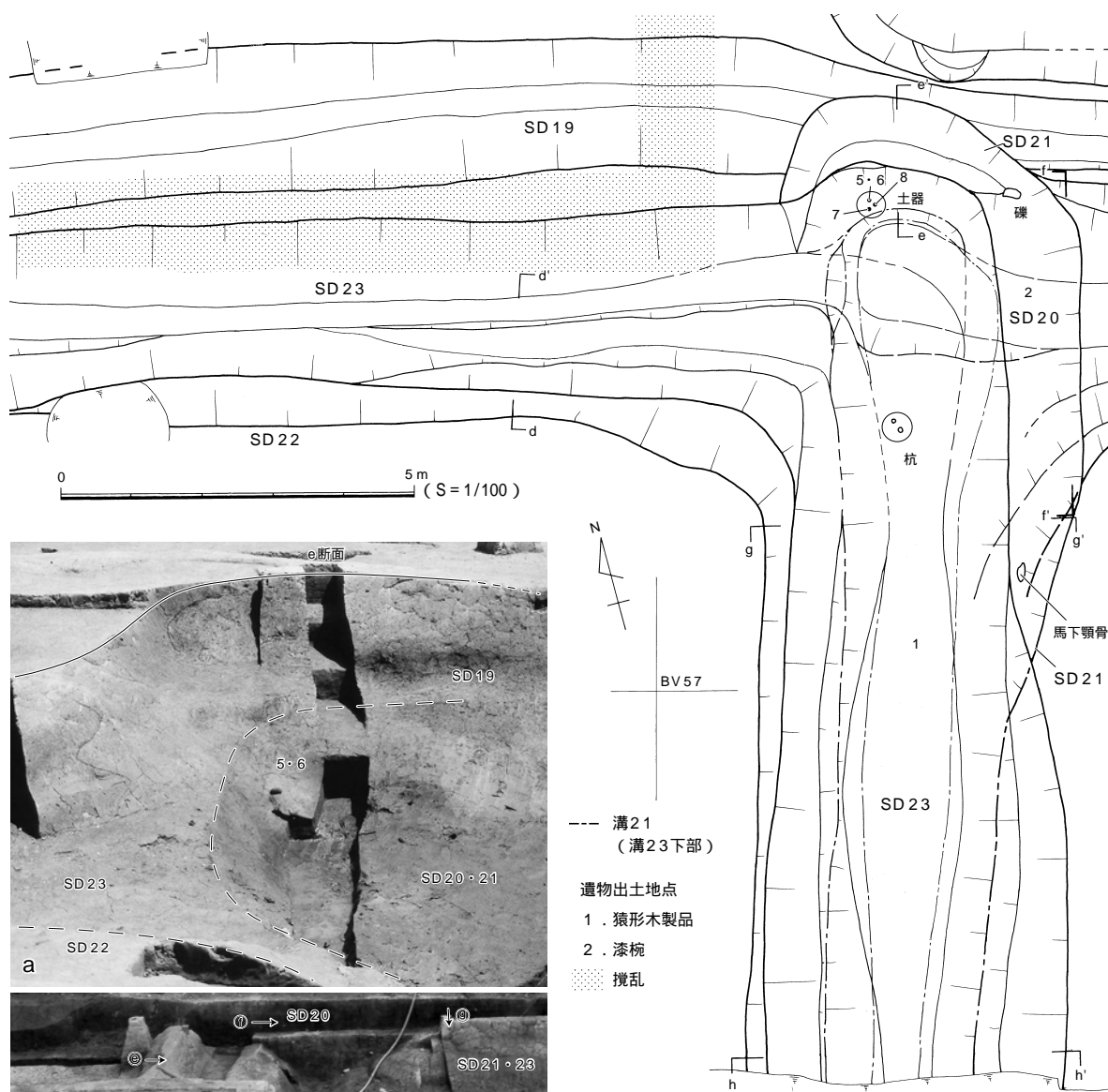
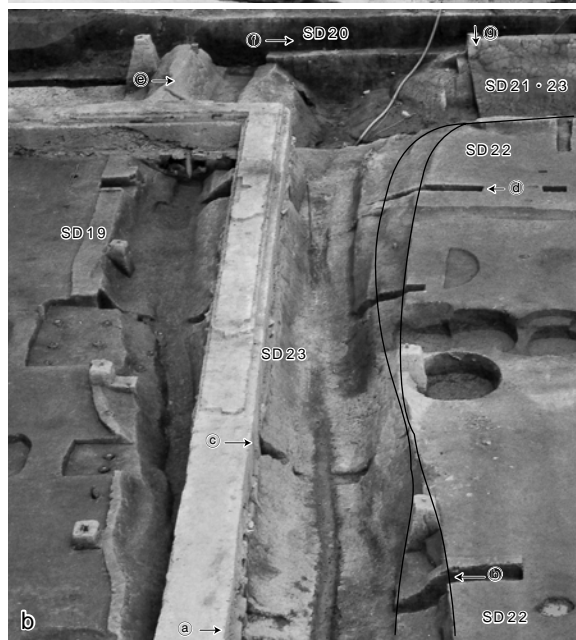


図88 溝20~23



a . コーナー部 (南から) b . 東西流路部分 (西から)
c . 溝21・23南半 (南から)

図89 溝20~23完掘状況

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

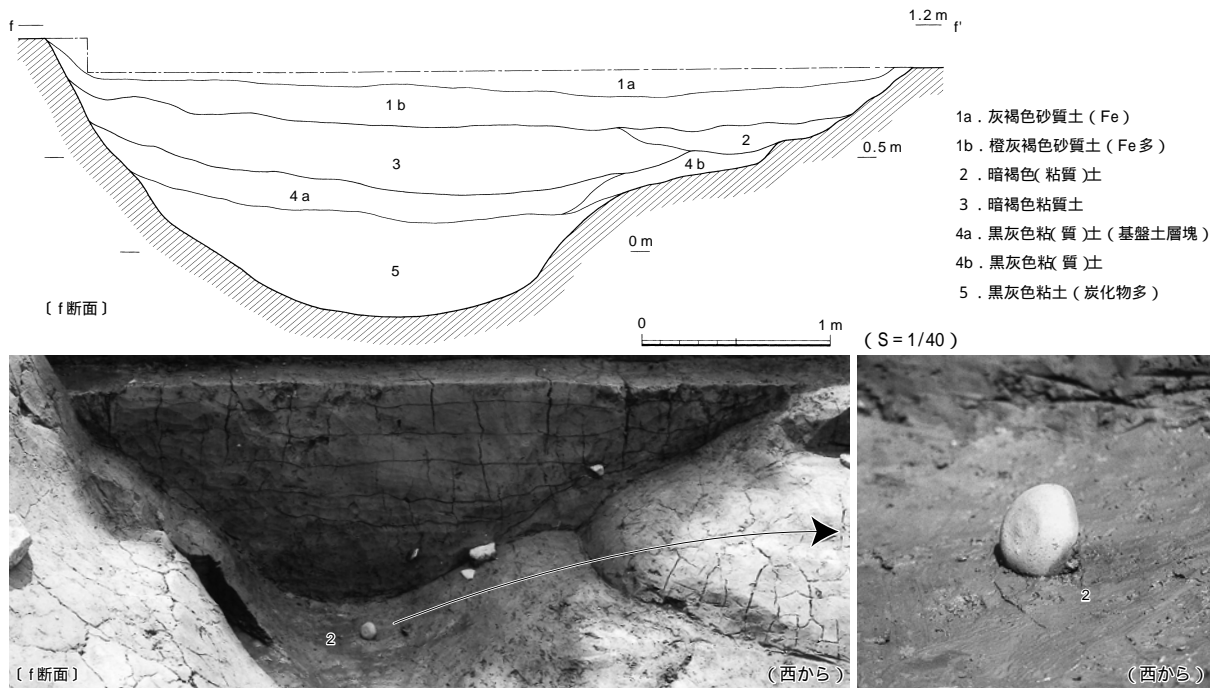
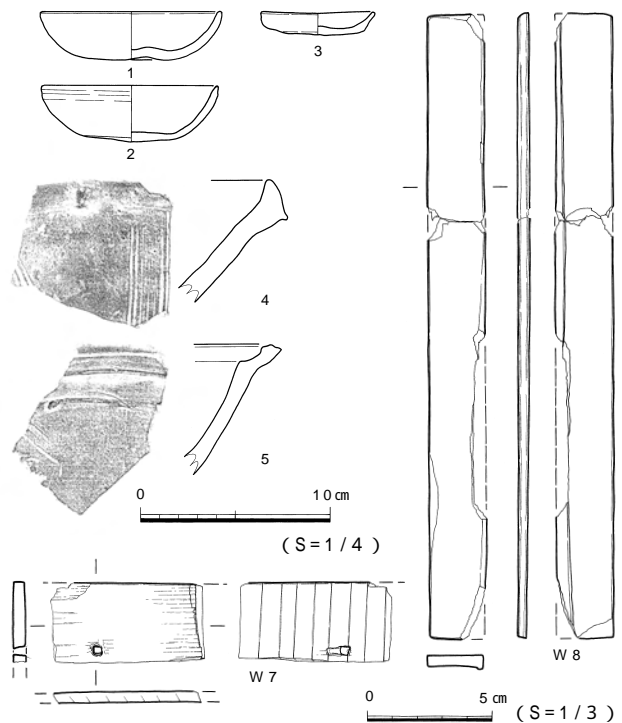


図90 溝20土層断面・遺物出土状況

イン付近) から西方向に伸びて本調査区に入り、さらに南側肩部は南方向に屈曲するようなカーブを示しており、流路が南北方向へ転換する様子を示す。また、北側肩部ラインは北側のBTライン方向に張り出すようなカーブが平面的に検出された。e断面(図92)の下部には本溝の堆積を認めることができることから、溝21と同位置に北側への張り出しが復元される。南北方向部分については、溝21・23の存在によって明瞭に確認することはできないが、土層堆積状況あるいは埋土の特徴などからその存在が想定される。ただし、本溝と溝21の埋土の区分は同様の機能を有する溝の堆積土であることから、その差は不明瞭であり、それぞれの範囲の確定は流動的である。

調査区東壁の土層観察から、本溝の幅は4.6m



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	9.6	4.0	2.6	(内) 丁寧なナデ(外) ナデ(底外) 押圧・ナデ、1/2 残存	微砂、精良	淡橙褐
2	土師質・椀	9.3	4.6	3.0	(内) 丁寧なナデ(外) ナデ(底外) 押圧・ナデ(口) 横ナデ	微砂、精良	淡褐～黄褐
3	土師質・皿	6.0	3.2	1.3	ナデ(底外) 籠切り後粗いナデ、7/8 残存	微砂、精良	淡橙褐～橙
4	備前焼・播鉢	-	-	-	(内) ナデ・卸目2ヶ所(外) ナデ、口縁下部押圧	細砂、堅緻	灰/暗紫灰～赤褐
5	瓦質・鍋	-	-	-	(内) 横ナデ(外) やや粗い横ナデ・煤付着	微砂、精良	灰/黒
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	特徴	
W 7	曲物側板	(6.5)	3.2	0.5	スギ	柱目板、斜め方向に刻み目、下端に釘穴	
W 8	札状木製品	26.2	2.3	0.6	スギ	割り材、両端側面を面取りして加工	

図91 溝20出土遺物

が求められる。底面は北端部あるいは東部分のe・f断面(図90・92)で標高-0.32m、南部分のg・h断面で(図93)同-0.15mを測り、東に向けての流れが想定される。深さは、1.4m前後~1.5mを測り、断面形はすり鉢状を基本とする。

埋土をf断面(図90)で観察すると、色調から褐色系の上層(1~3層)と黒灰色系の下層(4・5層)に分けられる。さらに土質から、上層は砂質の強い1・2層と粘質土となる3層、下層はやや粘性の弱い粘質土である4層と、粘性の強い粘土で炭化物を多く含む5層とにそれぞれ細分される。全体的に際だった包含物は認められない。各土層の堆積ラインも自然堆積を思わせる。

出土遺物は吉備系土師質土器椀、土師質皿、備前焼、瓦質鍋、土師質竈などで、大半は小~細片である。溝21・23と分離が困難なものが約20片、本溝に共伴するのは8片である。その中で、ほぼ完形の土師質土器椀1点(図91-2)は屈曲するコーナー付近の底面(f断面:5層)において、ほぼ直立した状態で出土した(図90)。その他に、曲物片・板材などの木製品(図91)が、やはりコーナー付近の粘土層内に認められた。

本溝の埋設時期は、溝底面で出土した土師質土器椀などから14世紀前半の中に求めることができよう。その他の遺物も矛盾しない。

溝21(図88・89・92~96、図版3・9・11)

BT~BW55・56区、溝23の南北方向部分の下部に検出された。検出面は標高0.98~1.13mで5層下面にあたる。平面的な検出状況から溝20埋没後の構として報告するが、先述したように両溝の関連性は高く、必ずしも別遺構として分離できない可能性も高い。

北端部は溝23の端部から北側に約1mの地点に求められる(図92-e断面)。残存する長さは、南北方向に約14mを測る。溝の平面ラインは、西側は比較的直線的に伸びるが、東側は溝20のコーナー部にあたるBT区においては、東側に大きくふくらみ溝20の上部に重複する。そのため、溝の幅はBUライン以南では2m前後が溝23の下部に残るのみであるが、BT区では約4mに及ぶ。こうした状況から、本来は4m程度の幅が推定される。底面は標高-0.05~0.1mの位置に認められ、南に向かって下降する可能性が想定される。深さは1.3m前後である。断面形は、南北方向の流路部分ではすり鉢状を呈するが、北端部では直線的で急峻な壁面が階段状に形成される。

最も残存率の高いe断面(図92)では、埋土は上・下層に大別される。上層(1~3層)は緑灰色系あるいは明るい色調を示す土層群である。1~3層の細分は顕著に成される。1層は砂質土層で流入土のな性格が予想される。3層には砂の包含が特徴的である。下層(4・5層)は暗灰色系の粘性の高い土層で、特に最下層の5層には有機物の堆積が見られ、色調も黒色~暗色を強める。こうした土層の堆積状況は溝20に類似しており、同様の利用形態が想定される。また、2層・3層あるいは4層の下面ラインは逆台形状を示し、それが重複するように残されており、溝端部において掘り返しが頻繁に行われていることを窺うことができる。溝の管理あるいは機能の一端を示すものである。

遺物は、土器・土製品ではコンテナ2箱(1箱28ℓ)の量があげられる。土師質土器椀・皿と土師質鍋・瓦質鍋がほぼ同量で中心を占めるほか、亀山焼・備前焼の破片が各10数片、東播系すり鉢片1点、瓦6片、竈20片、土錘2点などを含む(図95・96)。大半が小片であるが、一部に完形の皿などを含む。木製品では猿形木製品・漆塗り椀・板材(図96)その他に焼け石1点があげられる。特に、猿形木製品は特筆に値する。

土師質土器皿4点(図95-5~8)は北端部斜面に沿うように、最下層(図92-e断面5層)からまとめて出土した。その内、完形品の2点(同-5・6)は重なり合い、溝20と同様に、斜めに傾いている(図89)。木製品では、漆塗りの椀(W15)が溝20と溝21の取り付け部(杭BU56周辺)において、暗~黒灰色系の粘土層から出土した(図89)。本溝の最下層(e断面5層・g断面4層)にあたると判断しているが、溝20の最下層(e断面5層)の可能性も残る。また、猿形木製品(W9)は、BVライン付近の溝中央部において曲物の底板

（W14）とともに取り上げられた（図89）。漆椀と同じく暗灰色系の粘土層からの出土であるが、レベル的には本溝の底面よりは高く、溝23との境部にあたる（g断面3層）。その他に、動物遺体として馬の下顎骨があげられる。同骨は、猿形木製品の東側、本溝の東壁斜面に張り付くように検出された（図89・94）。出土レベルは標高0.74mを測り、上層（g断面2層）に含まれことから、溝廃棄時に伴うものであることが想定される。猿形木製品とは平面的にもレベル的にも近接する位置関係を有する点は、その使用状況を考える上で注目される。

本溝の埋没時期は、無高台の土師質土器椀の特徴から、14世紀前半を中心とした時期が想定されるが、機能していた時期は13世紀まで遡る可能性が考えられる。溝20と明瞭な差はなく、連続的な使用が窺われる。

溝22（図53・88・89・92～94）

溝23の南側～西側に沿って検出された。BU～BV56～60区である。同溝と同様のL字形の形状を呈する。検出面は、平面的には標高1.08mまで下がる部分もあるが、全体的には標高1.17～1.28mであり、調査区西壁面からも標高1.27mの5層上面に求められる。溝23によって多くが破壊されているため全体の形状を示す部分は残っていない。しかし、本溝は東西方向の角度が同溝よりは若干北寄りに振れているため、59ライン付近以西では比較的残存率が高い。

溝の規模・形態などの特徴が推定できるのは、調査区西壁面（図92-a断面）のみである。溝の幅は1.55mが残存しており、2m程度の規模が復元される。底面は標高0.42m（a断面）・同0.3m（b断面）に位置し、深さは0.85m前後を測るが、それ以外では残存部が少ないため確認されない。断面形は、逆台形の底部に箱形の水路が付随する。掘り方壁面は直線的である。

a断面では、埋土は褐色あるいは黄緑色を帯びる色調で粘性がやや弱い上層（1～3層）と灰色系で粘性の強い下層（4～6層）に大別され、さらに下層は褐色が強く粘性が若干弱い4層・5層と暗灰色で粘性の強い6層に細分される。上層と下層の堆積は、掘り返しによって生じた上層溝と下層溝の埋土となり可能性が高く、両溝の底面あたる3層では鉄分の沈着が、6b層では基盤土層のブロック状の包含が顕著である。

本溝は、その位置などの諸特徴から、特に溝23との強い関連性を持つことが予想される。

出土遺物は混入遺物を除くと、吉備系土師質土器椀あるいは皿などが20～30片含まれるのみである。時期が判別できるのもは鎌倉時代の遺物である。

本溝の時期は、遺構の重複関係や検出面などから、14世紀前半の可能性が考えられる。

溝23（図53・88～89・92～94・97～99、図版3・5～9）

検出面は標高1.18～1.28mを測り、5層上面に対応する。調査区の中央部、BUライン上を東西方向に、そして、BT・BU56区において南に方向を変えて南北方向に走る。BT～BU56～60区・BV～BY55～56区である。溝20～22がすべて埋没した後に構築される。上部には溝26が重複する。

溝の長さは、調査区の西壁と南壁においてその存在が確認されることから、東西方向部が24m、その東端部で屈曲した後、南北方向に向きを転換して24m、全体で48mが調査区内に残る。溝の幅は、東西方向では、北側の肩部を建物基礎撤去後の下部調査において確認した結果、約3mの規模が復元される。一方、南北方向では3.2～4.3mの幅を示す。その数字の大きい南端部では断面形態が崩れた状態を見せる（図93-h断面）。東西方向よりはやや規模が拡大する傾向があるが、際だったものではない。底面は、東西方向では西端部（図92-a断面）で標高0.1mと低いが、b断面からd断面にかけては標高0.17～0.21m、さらに、南北方向ではg断面（図93）で同0.21m、南端部（同-h断面）で同0.18mと全体的に安定した数値が保たれる。このように、走行方向に関しては、西端部への下降が認められる。その他に若干の数値変化から、コーナー部を境に西方向・南方向への流れが考えられるが、必ずしも明瞭とは言い難い。深さは全体的には1m前後を測る。断面形は、東西溝部分では急峻な立ち上がりを見せる逆台形の底部に箱形の水路が付随しており、溝22と類似する。水路部分の幅は0.45～0.7mである。それに対して、南北方向部分では緩やかなすり鉢状～ボウル状を呈する。

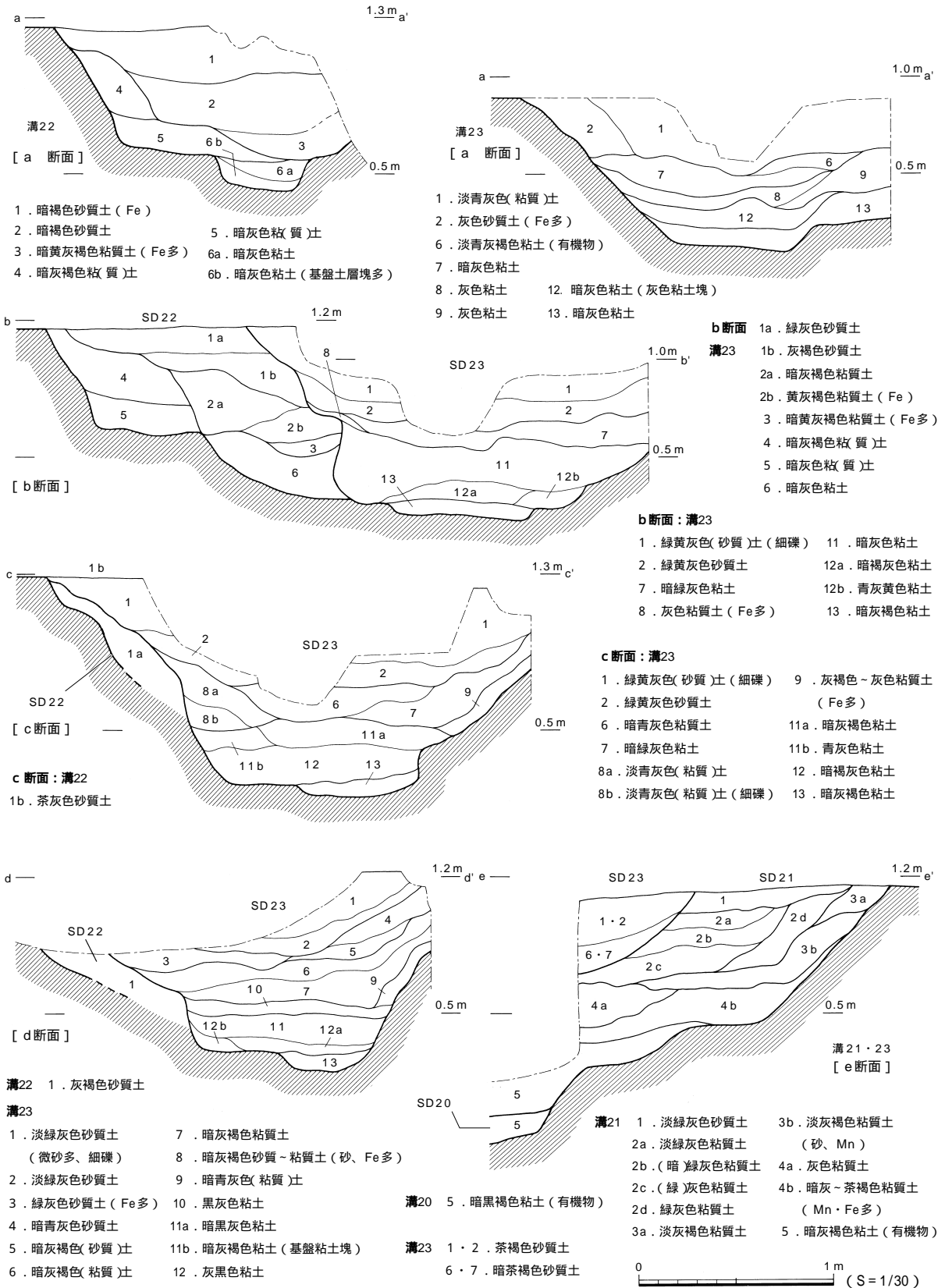


図92 溝20～23土層断面(1)

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

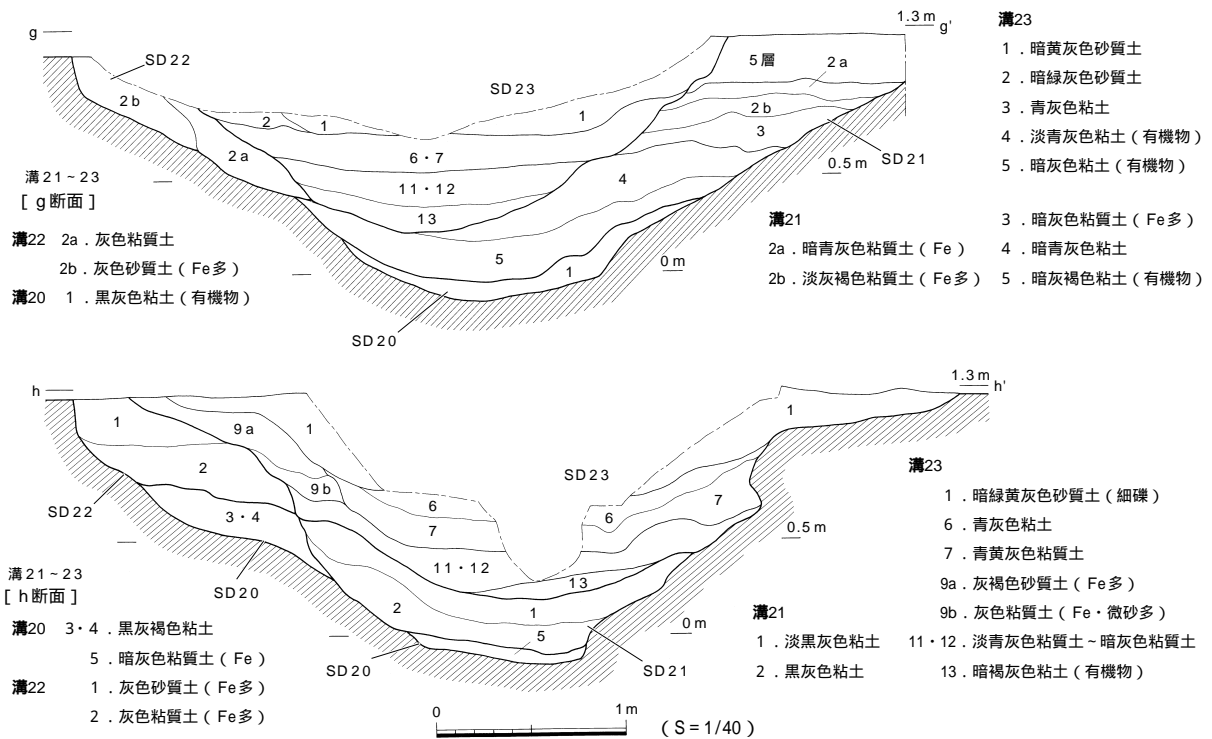


図93 溝20~23土層断面(2)

このように、東西方向からほぼ直角に南に曲がって走る溝であるが、コーナー部では北側への張り出しが若干認められる(図92 - e断面)。ただし、平面的には攪乱によって分断されており、前述の溝21・22との関係は明確とは言い難い。少なくとも、北への張り出しは溝20・21のように際だったものではないであろう。

埋土については、最も基本的な土層堆積が確認されるd断面(図92)で検討しよう。埋土は、それぞれの特徴から上層と下層に大別され、さらに上層は3群に、下層は2群に細分される。

上層は1~5層で構成される。その中で1群となる1・2層は、緑色あるいは黄色を帯びる淡灰色系の砂質土で、両層の類似性は高い。最終的に溝全体を覆う埋土として堆積する。2群となる3~5層はやや褐色を帯びる部分をもつ砂質土で、コーナー付近(d断面)にのみ堆積が確認される。ただし、e断面1・2層に限っては、このd断面4・5層に対応する土層としての可能性があり、コーナー部分における溝の張り出しを北側へ約0.4m程度もつと判断した。しかし、両断面の土層は直接に連続して確認はできなかったため、e断面1・2層は溝22の埋土となる可能性も残る。3群は6・7層で構成される。灰色系を中心とする粘土~粘質土で、両土層の類似性は高い。上層溝の底部となる。底面レベルは西端で標高0.38m、他では同0.5~0.54mとほとんど一定し、南端のg断面で同0.43mとなる。コーナー部での段差はなく、両端部が下降するという溝の状況が窺われる。

下層は8~12層にあたる。その中で1群となる8・9層は灰色系の砂質土~粘質土(一部では粘土)を中心とする。8層は溝の北側に堆積する。2群は10~12層である。暗色あるいは黒色を帯びる灰色粘土であり、最下層の12層では有機物の包含が認められるが、全体に類似性が高い。

各群の関係については、掘り返しなどの要因も考慮されるべきであろうが、個別具体的な指摘は困難である。ただ、特に東西方向において分層数が多い点は、使用時期幅の長さを考えると、溝さらえなど様々な溝の管理に伴う行為が繰り返し成された様子を示していると考えられる。

出土遺物量はコンテナ5箱(1箱28ℓ)におよぶ。土師質土器碗・皿・鍋・竈、備前焼・亀山焼、瓦、陶磁器類など多数の種類を含む(図97~99)。下層2群の最下面からは土師質土器碗(図97 - 5)が出土する。点数は

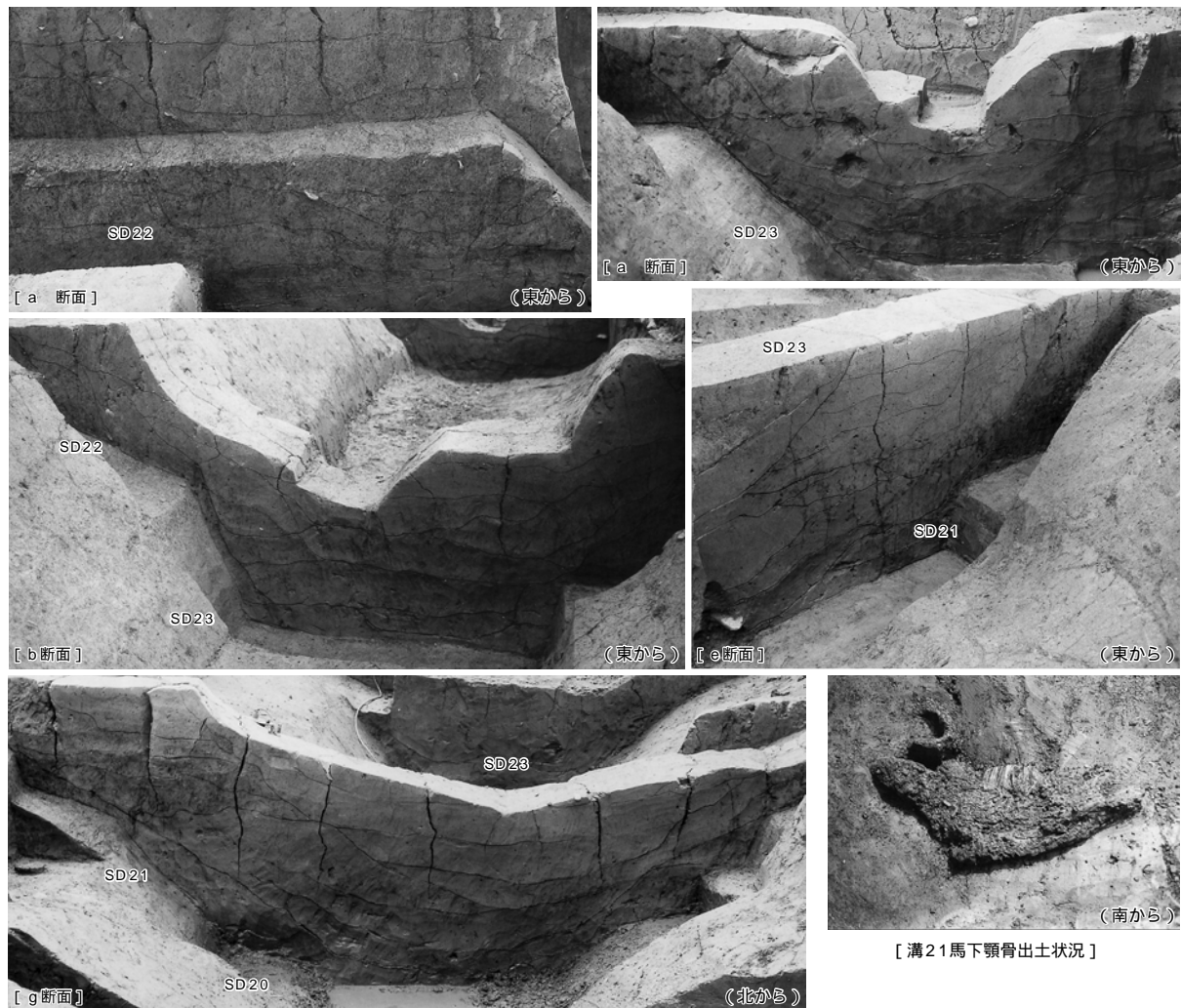


図94 溝20～23土層断面(3)・遺物出土状況

少ないが溝の最古段階の時期を示すと考えられる。上層からは近世陶磁器・瓦の出土が特徴的である。

本溝の埋没時期は、14世紀前半（～中頃）そして近世が想定される。

溝21・23出土遺物の特徴（図95～99、図版3・5～9・11）

ここで、溝21・23出土遺物の中で、土師質土器・陶磁器類・瓦・木製品・土製品・石器など注目される遺物に関して特徴をまとめておこう。

溝21では土師質土器の特徴と猿形木製品そして漆塗り椀について説明を加えよう。

土師質土器椀は高台が極めて低平で小形化したもの（図95 - 1）無高台で底部が押圧によって若干凹んでいるもの（同 - 3・4）がある。皿（同 - 5～10）においても、口径8cm前後で底部成形が押圧とナデで調整されるタイプ（同 - 5～8）と、口径約7cmで底部篋キリのタイプ（同 - 9・10）の2タイプが認められる。前者は無高台の椀との共通性が高く、底部篋キリ技法で成形される皿と明らかに区別される。また、2点の皿（同 - 5・6）の底部には篋記号が記される。1点の皿（同 - 7）では調整後に口縁部の一ヶ所をヘラ状工具で切っており、灯心の固定部を成形したとみられる。

猿形木製品（W9）はカヤを材として、烏帽子を被るニホンザルをかたどっている。烏帽子は朱と黒漆で横縞模様を描き、サルの顔・尻も朱塗りのうえ、黒漆で目・鼻・口、体毛を描いている。両腕の位置に径0.5cmの穿孔があり、棒や紐を通して腕としていたことが窺える。基部底面にも径0.5cm・深さ1.0cm程の孔を穿つ。この

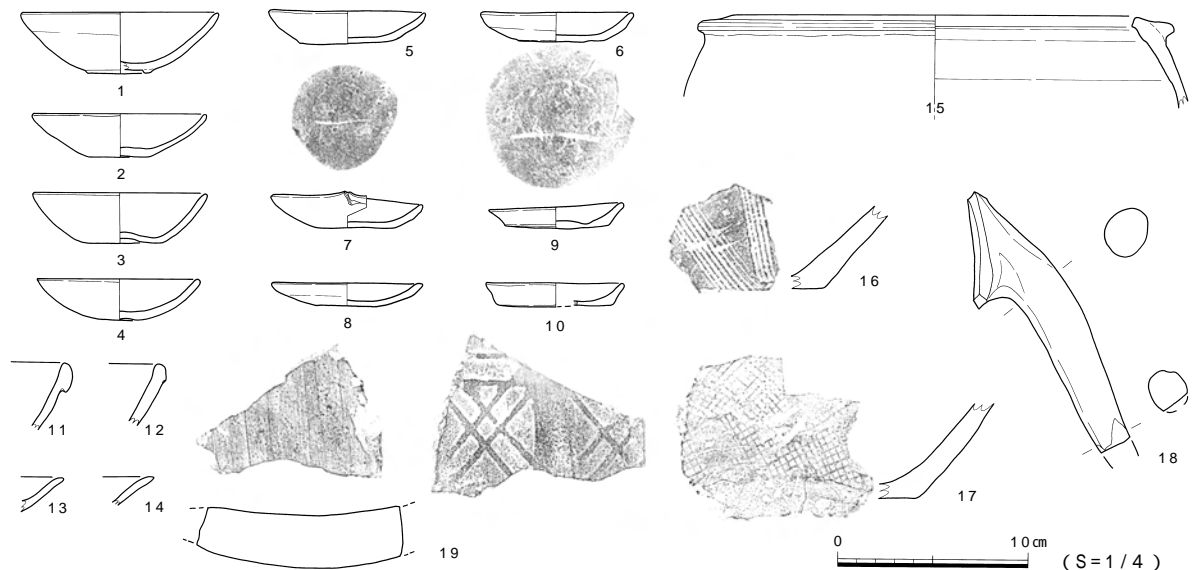
第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）

孔には棒を差し込んだものとみられ、孔の周辺に擦痕が認められる。こうした特徴から、W9は基部の孔に棒を差し込み、棒で動かした人形と考えられる。サルは既の守り神とも言われており、一方で縁起物として猿回しを演じることが知られている。「くぐつまわし」は、全国の市などを巡業していく専門職民のひとつであり、W9はその「くぐつまわし」が使用する人形と考えられる。

本木製品に近接して出土した馬の下顎骨が出土している溝の祭祀に関わるものであると、これまでの例からもうかがえる。これに近い出土位置から猿形木製品（W9）が出土することは祭祀に伴う遺物としての意味も求められるかもしれない。漆塗り椀（W14）はカツラ属を材とする割りもので、外面全体に黒漆、内面に赤漆を塗布している。模様は認められない。

溝23では、輸入陶磁器・国産陶磁器・瓦・土製品を取り上げよう。

陶磁器類は、10世紀代に属する緑釉陶器椀（図97-12）あるいは12世紀代の白磁合子（同-13）・碗（同-14）といった古手のものから、16世紀末～17世紀初頭の天目椀（同-17）・美濃瀬戸皿（同-18）、18世紀代の肥前染付椀（同-22）まで、かなりの時期幅が認められる。備前焼などの中世陶器（図98）では、器種としては圧倒的に播り鉢が多く、その他にわずかに甕・壺・灯明皿が含まれている。播り鉢にも14世紀代のもの（図98-27・28）から、18世紀代のもの（同-36・37）まで幅がある。産地についてはその多くが備前焼であるが、一部には関西系播り鉢が含まれる（同-36・37）。堺が明石産である。瓦はコンテナ約1箱分が出土している。やはり、中世

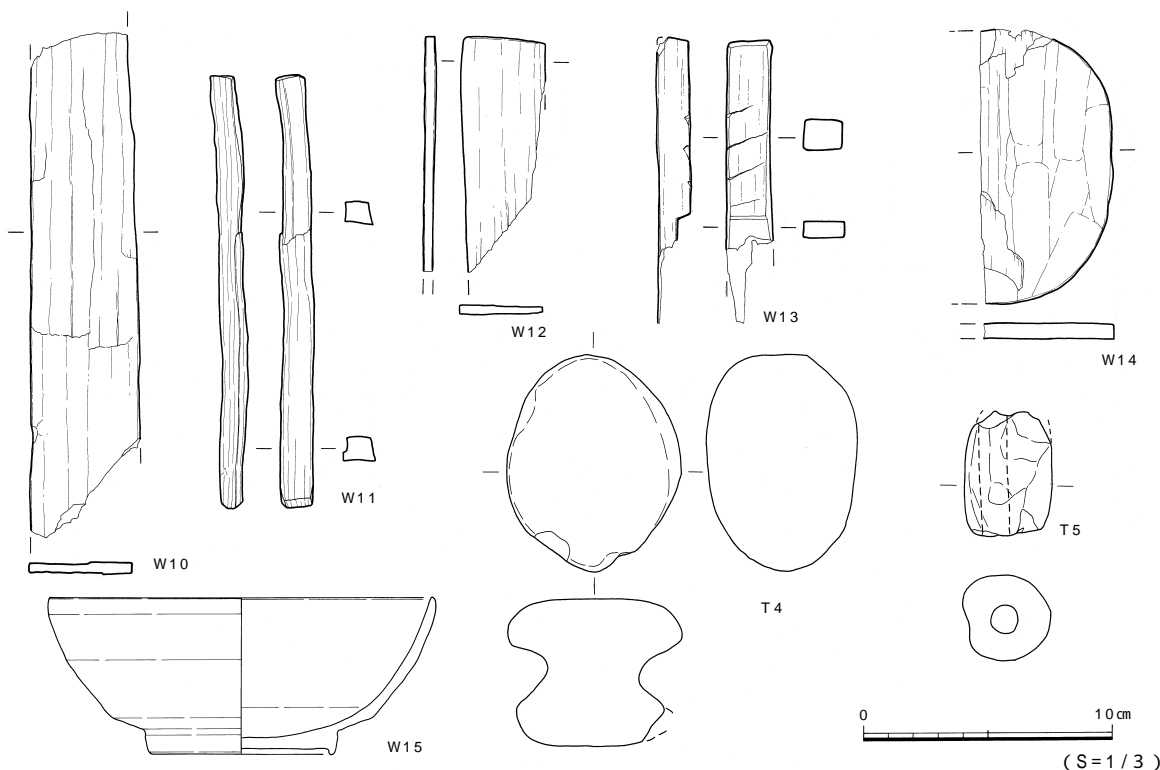
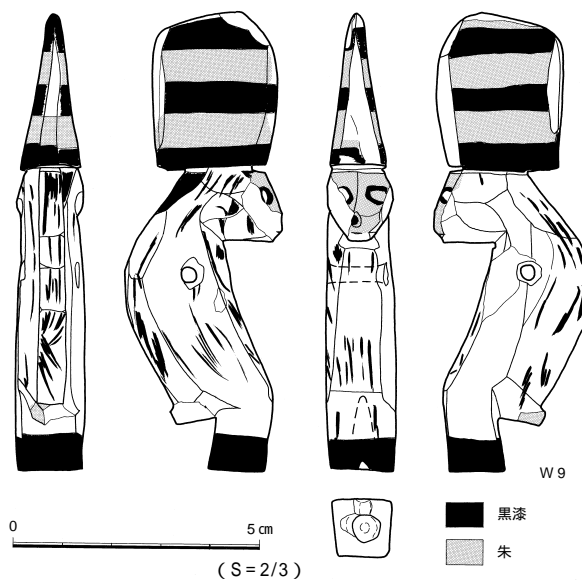


番号	種類・器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 他	胎 土	色 調 : 内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*10.4	*3.3	*3.3	(内)丁寧なナデ(外)ナデ、高台は低小、1/3残存	微砂	淡黄褐
2	土師質・椀	*10.8	*4.9	*2.3	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)籠切り後ナデ、1/4残存	微砂	淡黄褐
3	土師質・椀	*9.2	*4.2	*2.6	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧、1/5残存	微砂	淡橙褐
4	土師質・椀	8.6	1.6	2.2	(内)籠磨きに近い丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧	微砂・精良	淡黄褐
5	土師質・皿	8.2	4.5	1.8	(内)丁寧なナデ(外)ナデ・押圧(底外)籠切り後ナデ・籠記号	微砂	淡橙/淡橙褐
6	土師質・皿	8.0	4.5	1.6	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)籠切り後押圧・ナデ・籠記号	微砂	淡黄褐
7	土師質・皿	8.1	3.8	1.9	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)押圧・ナデ、外面1ヶ所に籠切り(灯心固定用?)	微砂	淡橙-橙
8	土師質・皿	*8.1	*3.1	*1.2	(内)丁寧なナデ(外)ナデ(底外)籠切り後ナデ、1/5残存	微砂	黄褐
9	土師質・皿	7.1	5.5	1.3	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、器高に歪みあり	微砂	褐白
10	土師質・皿	*7.2	*6.0	1.3	横ナデ(底外)籠切り後ナデ、1/4残存	微砂	淡黄褐
11	白磁・碗	-	-	-	ナデ後施釉、外面下方は露胎、白磁碗 類か	精緻	灰白(釉)淡オリブ
12	白磁・碗	-	-	-	器表面に砂粒付着、全面施釉、つくりはやや粗い	精緻	灰白(釉)灰
13	青磁・碗	-	-	-	全面施釉	精緻	灰(釉)淡オリブ
14	白磁・皿	-	-	-	内面下方は露胎	精緻	灰白(釉)白灰
15	瓦 質・鍋	*21.0	-	-	(内)横ナデ・体部下半は斜め籠削り後ナデ(外)ナデ、1/4残存	微砂、長石多数	暗灰黒
16	備前焼・播鉢	-	-	-	(内)横ナデ・8条1組の放射状目目(外)横ナデ(底外)粗いナデ	微砂	暗茶/淡橙茶褐
17	龜山焼・甕	-	-	-	(内)横-斜めの粗いナデ(外)格子目タタキ(底外)粗いナデ	微-細砂	淡灰/黒灰
18	土師質・鍋	-	-	-	三足鍋の脚部(内)横ナデ(外)ナデ	微砂、精良	淡灰
19	瓦 質・平瓦	*8.9	*11.3	2.7	(内)横ナデ(外)格子目タタキ	微砂、精良	暗黒

図95 溝21出土遺物(1)

～近世までの時期幅がみられる。格子目タタキ (図99 - 47)、布目痕 (同 - 48) を残すもの、18世紀代 (同 - 50) のものが認められる。

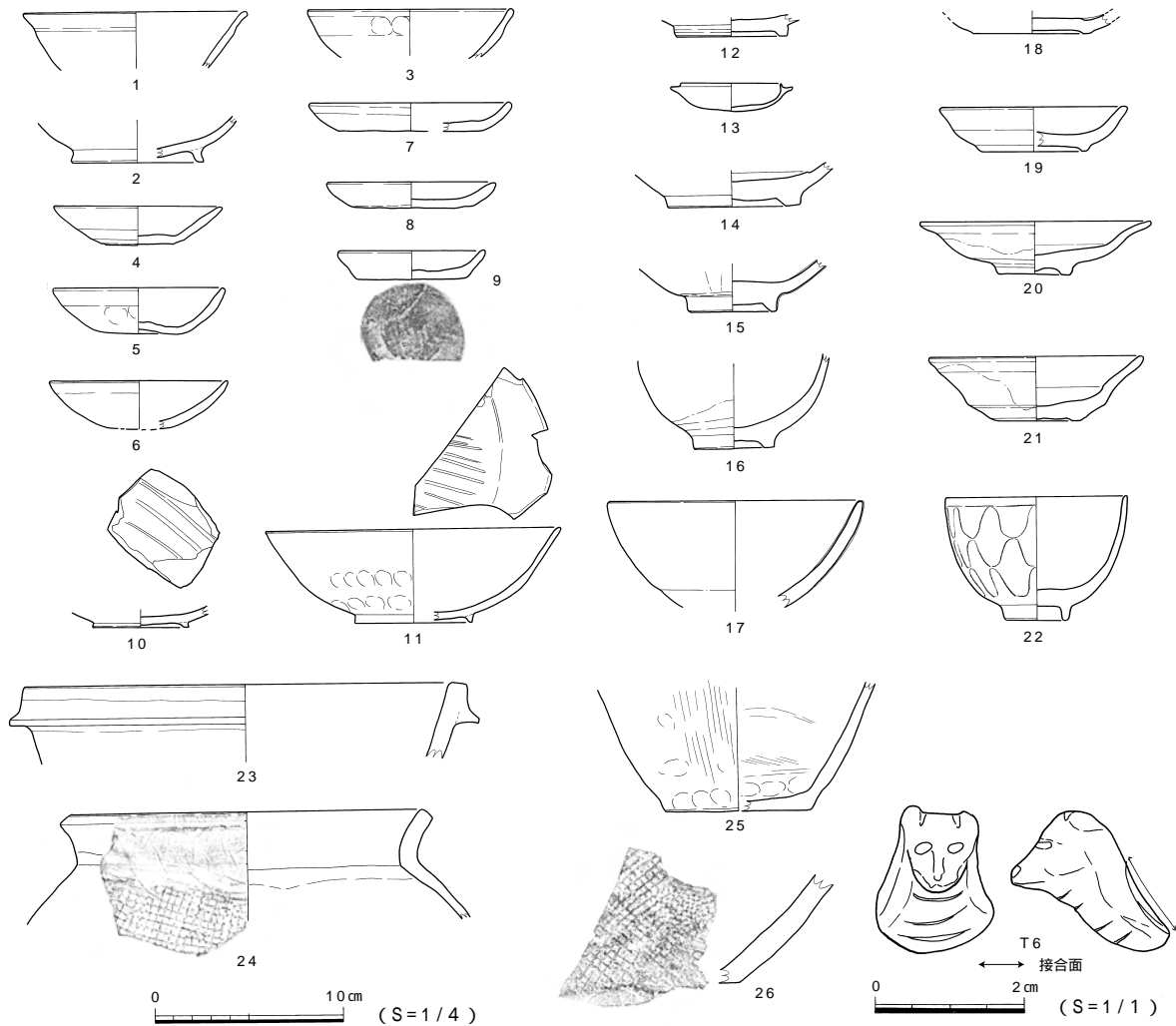
T 6 (図96) は動物の頭部をかたどった土製品であり、何らかの器の口縁などに貼り付けられていたものと考えられる。短い耳、小さく尖り気味の鼻を沈線で描くほか、頸部下側には横縞模様を同じく沈線で描く。石器は5点を掲載した (図99 - S19～S22)。S19・22・23は砥石である。いずれも流紋岩を利用している。S20・21は加工した結晶片岩であり、本遺跡付近では産出しない材である。いずれも破損して全形が不明であるため用途は不明である。



番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	特徴		
W 9	猿形木製品	9.2	2.7	1.4	カヤ	烏帽子を被ったニホンザルをかたどる、烏帽子を黒と朱の縞模様でサルの顔面と尻を水銀朱を塗る、両腕の位置に径0.5 cmの孔が貫通、図の底面にも径0.5 cmの孔を穿つ、棒を差し込み、動かして使用したものとみられる、		
W 10	棒状木製品	(20.3)	4.4	0.5	スギ	割り材、下部に割り込み、表面に工具による切り込み		
W 11	棒状木製品	16.4	1.3	1.0	-	柱目、両端面を面取りして加工		
W 12	板材	(9.5)	3.4	0.4	-	柱目板、下端は人為的な切断痕		
W 13	板材	11.3	1.9	1.2	スギ	柱目板、表面に削りの痕跡		
W 14	曲物底板	11.1	5.2	0.6	ヒノキ			
W 15	椀	口径15.4、底径7.2、器高6.3			カツラ属	内外面を平滑に仕上げ、底部器壁は厚い、短小な高台、全面に黒漆を塗布し、さらに内面全体に赤漆を塗布		
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴	胎土	色調：内面/外面
T 4	土錘	8.7	7.1	5.9	293.9	有溝土錘、裏面の一部欠損	細砂	淡赤褐
T 5	土錘	(5.0)	3.6	3.5	53.3	管状土錘、径1.1 cmの穿孔	微砂	淡橙褐

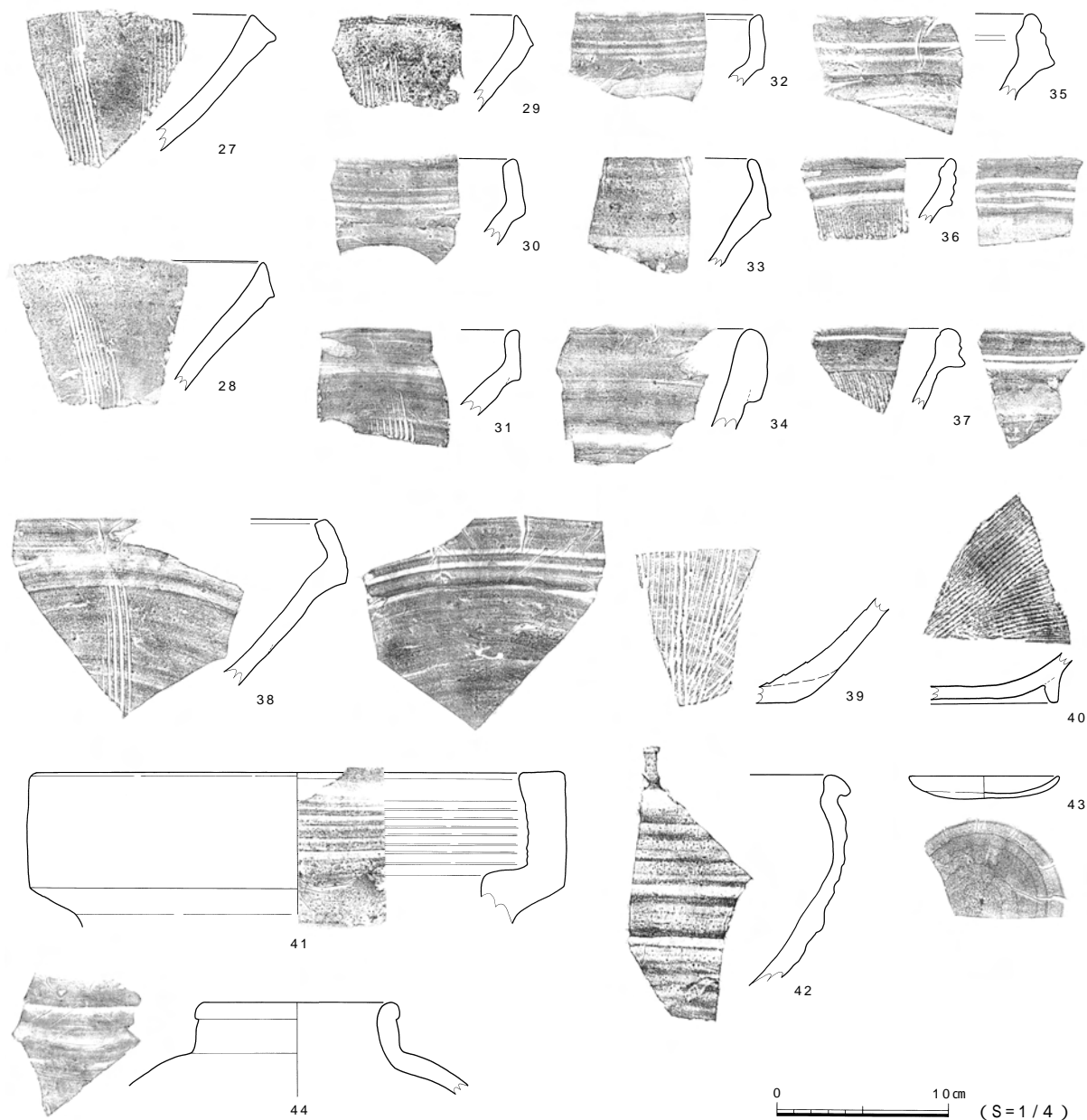
図96 溝21出土遺物(2) 木製品・土製品

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
1	土師質・椀	*11.8	-	-	ナデ、1/3残存	微砂	淡褐白
2	土師質・椀	-	*7.0	-	丁寧なナデ、内面に重ね焼き痕、1/3残存	微砂、精良	淡褐
3	土師質・椀	*10.8	-	-	(内)丁寧なナデ・光沢(外)ナデ・押圧、被熱、1/4残存	微砂	暗灰/暗灰褐
4	土師質・椀	*9.8	*4.7	2.0	横ナデ、(底外)系切り、口縁7/8欠	微砂	暗灰褐
5	土師質・椀	9.1	3.3	2.4	(内)丁寧なナデ(外)ナデ・押圧	微砂	淡橙褐
6	土師質・椀	*9.4	*3.4	2.6	(内)丁寧なナデ(外)ナデ・押圧、1/3残存	微砂	淡橙褐/淡黄褐
7	土師質・皿	*10.8	*7.6	1.5	ナデ(底外)系切り後ナデ、1/4残存	微砂	黄褐
8	土師質・皿	*9.0	*6.2	1.4	ナデ(底外)籠切り後丁寧なナデ、1/5残存	微砂、精良	淡黄褐
9	土師質・皿	7.8	5.8	1.6	ナデ(底外)籠切り後未調整、2/3残存	微砂、精良	淡黄褐
10	瓦器・椀	-	*5.2	-	ナデ(内)平行の暗文、摩滅顕著、1/3残存	微砂、精良	暗灰/暗灰褐
11	瓦器・椀	*15.6	*6.2	*5.0	(内)ナデ・平行の暗文(外)押圧・ナデ(口)横ナデ、1/5残存	微砂、精良	灰
12	緑釉陶器・椀	-	*5.9	-	ナデ、施釉(高台)削り出し・露胎	微砂、精良	灰(釉)暗緑灰
13	白磁・合子	*5.4	-	*1.5	受け部のみ露胎、その他は極めて丁寧に施釉、外面には細かい貫入	精緻	白(釉)白
14	白磁・碗	-	*7.0	-	(内)見込み外周に沈線一条・施釉(外)露胎、削りだし高台、2/3残存	精緻	灰白(釉)淡緑灰
15	青磁・碗	-	*4.8	-	(内)施釉(外)蓮弁文状の面取り・施釉厚め、畳付きと高台内は露胎	精緻	灰(釉)オリブ緑灰
16	肥前陶器・椀	-	*4.2	-	唐津焼き、内面～外面体部上半に施釉、深い貫入がみられる、体部下半～高台は露胎	精緻	淡茶褐(釉)淡灰
17	天目・椀	*13.6	-	-	体部下方は露胎(施釉)厚めで光沢・油濁状、1/6残存	精緻	茶褐(釉)漆～黒褐
18	美濃瀬戸陶器・皿	-	*6.2	-	見込み釉剥ぎ、高台釉削り、3/4残存	精緻	淡灰(釉)オリブ灰
19	灰釉陶器・皿	*10.0	*5.6	*2.4	畳付きのみ露胎、内面には貫入がみられる、1/2残存	微砂	灰(釉)オリブ灰
20	肥前陶器・皿	*12.2	*3.8	*2.8	唐津焼き、外面下方～削り出し高台部は露胎、内底部に重ね焼き痕、1/4残存	精緻	灰(釉)淡緑黄灰
21	肥前陶器・皿	*11.4	*4.5	*3.4	唐津焼き、外面下方～底部は露胎、内底部に重ね焼き痕、1/3残存	精良	灰(釉)灰白
22	肥前染付磁器・碗	*9.6	*3.2	*6.4	畳付きのみ露胎、外面に淡藍色で網文、1/4残存	精緻	灰白(釉)灰
23	瓦質・鍋	*23.4	-	-	ナデ、体部外面には煤付着、1/8残存	微砂、精良	灰白～灰/黒
24	龜山焼・甌	*18.6	-	-	(口)横ナデ(内)同心円タタキ・ナデ(外)格子目タタキ、1/3残存	微砂、精良	暗灰
25	瓦質・鍋?鉢?	-	*7.7	-	(内)横～斜位のハケ(外)ナデ・縦ハケ(底内)押圧(底外)丁寧なナデ、1/4残存	微砂	黒/暗灰黒
26	龜山焼・甌	-	-	-	(内)不定方向ナデ(外)格子目タタキ(底)ナデ	微砂、精良	灰
T6	土製品	長さ1.9、幅1.6、厚1.6	-	-	下顎～頸部には横縞、目・口・鼻等は細い沈線で表現される。耳は短く、犬・テン・イタチ等の動物の頭部を表す。接合面とみられる面は丁寧なナデ。器などの装飾か。重量2.9g	微砂、精良	淡黄褐

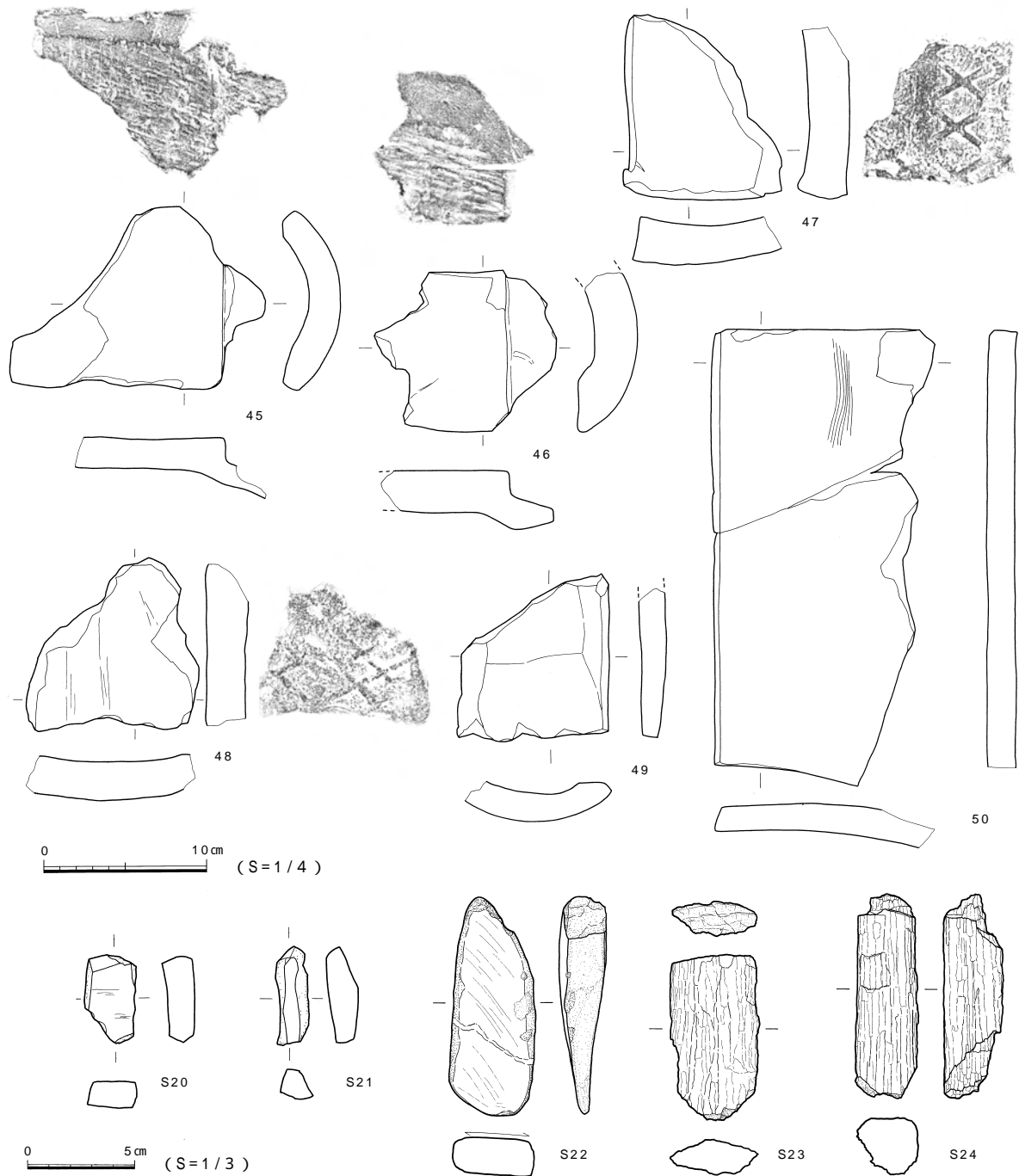
図97 溝23出土遺物(1)



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
		口径	底径	器高			
27	備前焼・擂鉢	-	-	-	(内)横ナデ・放射状の卸目(外)ナデ	微砂	淡茶褐/暗赤褐
28	備前焼・擂鉢	-	-	-	(内)ナデ・押圧、8条1組の放射状卸目(外)ナデ	微~細砂	淡茶褐/淡茶褐・暗灰
29	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、8条1組の卸目	微~細砂	暗灰(口)淡茶灰
30	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ	堅緻	暗紫灰/暗赤褐
31	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、8条1組の卸目	微砂、精良	暗茶褐/茶橙褐
32	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ	微砂、精良	暗茶褐/淡橙茶
33	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、口縁肥厚部外面は器壁剥落により白色を呈する	堅緻	淡赤褐/灰褐
34	備前焼・碗	-	-	-	横ナデ	堅緻	暗紫灰
35	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、6条1組の卸目、口縁肥厚部外面には凹線2条	微砂、精良	明茶褐/暗紫褐
36	関西系・擂鉢	-	-	-	横ナデ、口縁肥厚部には凹線3条、明石産か堺産	微~細砂	淡赤褐
37	関西系・擂鉢	-	-	-	横ナデ、卸目、明石産か堺産	微砂	淡赤褐
38	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、8条1組の深い卸目、(底外)籠切り後ナデ	細砂	橙茶/橙茶
39	備前焼・擂鉢	-	-	-	粗いナデ、卸目、底部は押圧	細砂	淡灰/淡黄褐
40	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、放射状卸目	堅緻	赤褐
41	備前焼・大甕	-	-	-	横ナデ、口縁部内面に横方向の条線状の凹線、頸部には一部ワレ	細砂	茶褐~淡赤褐
42	備前焼・鉢?	-	-	-	横ナデ	微砂、精良	暗紫灰/茶・暗褐
43	備前焼・灯明皿	8.8	3.7	1.3	横ナデ、(底)籠削り後ナデ、2/3残存	微砂	暗紫灰
44	備前焼・壺	*11.0	-	-	横ナデ、1/6残存	細砂	淡橙/淡赤褐

図98 溝23出土遺物(2) 備前焼

第7次調査（医学部基礎研究棟建設に伴う発掘調査）



番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法 他	胎土	色調：内面/外面
		長さ	幅	厚さ			
46	瓦質・丸瓦	(13.1)	(11.3)	1.9	(内)布目痕・一部タタキ(外)丁寧なナデ	微砂、精良	暗灰～黒
47	瓦質・丸瓦	(9.7)	(11.3)	2.8	ナデ	微砂、精良	灰
48	須恵質・平瓦	(10.9)	(9.6)	2.5	(内)ナデ(外)格子目タタキ、図の下側面の調整は非常に粗い、煤付着	微砂	灰
49	瓦質・平瓦	(10.4)	(10.3)	2.3	(内)工具ナデ(外)ナデ・格子目タタキ	微砂、精良	灰白
50	瓦質・平瓦	(9.8)	(9.2)	1.8	(内)布目痕・工具ナデ(外)ナデ	微砂、精良	灰
51	瓦質・敷瓦	(27.9)	(13.7)	1.8	(内)ナデ・一部にハケ状痕(外)ナデ	微砂、精良	灰白～暗灰

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S20	砥石	(4.1)	(2.3)	(1.5)	(17.5)	流紋岩	少なくとも3面に擦り痕があり
S21	砥石	(4.5)	(1.4)	(1.3)	(10.4)	流紋岩	一部に擦痕、S20と同一個体か
S22	砥石	101.8	47.5	18.2	102.9	流紋岩	表面が摩滅
S23	加工痕のある石材	(77.8)	(41.3)	(18.8)	(77.1)	珪質片岩	板状に整形、用途不明
S24	加工痕のある石材	(96.0)	(27.0)	(28.2)	(97.8)	結晶片岩	面取りを意識した加工、用途不明

図99 溝23出土遺物(3) 瓦・石器

溝23の出土遺物は中世前半末～近世（江戸時代中期）のものが中心的に認められる。（岩崎）

溝24（図100）

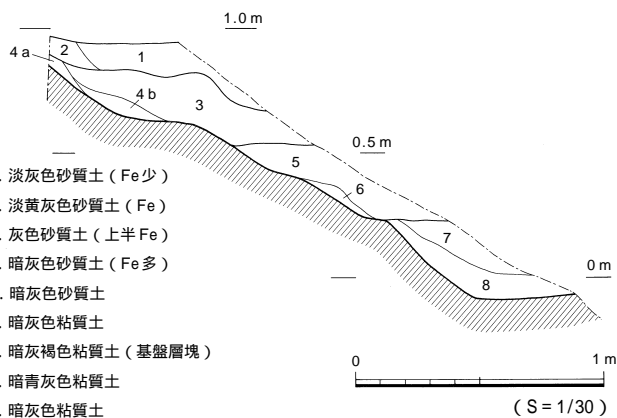
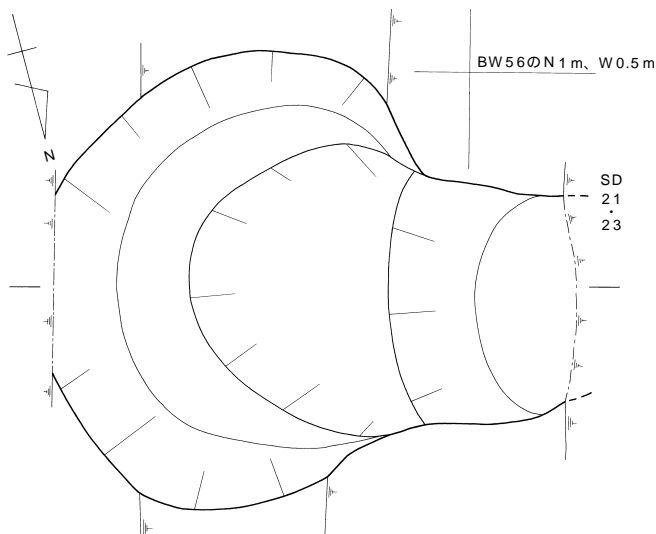
調査区の東端、BV 55～56区で検出した。溝21・23を完掘後にその壁面で明瞭に認めることができた。平面的な検出は標高0.93～0.98 m、5層 下面であり、9層 上面にあたる。

残存する平面形は東西1.8 m、南北1 mの円形が推定される。底面は標高0.13～0.15 mに位置し、溝20の底部とほぼ一致する。上面からの深さは1 mを測る。下端部から上面の東端部までの直線距離は2.1 mである。

埋土は、砂質土で構成される上層（1～4層）と粘質土となる下層（5～8層）に大きく分けられる。さらに、後者は、堆積状況から5・6層と7・8層に細分され、それぞれの底面が平坦面を形成することから、全体としては階段状の掘り方断面形態を生み出している。この形状は、溝21の北端部分の断面形態に類似する。各下面が底面としての機能を有していたとすると、その高さは、下部から標高 - 0.07 m・0.23 m・0.53 mとなる。

本遺構の機能の考える上で、埋土の傾斜が西に向かっており、位置関係からしても溝20あるいは21との関連を強く示す点は重要であろう。溝にとりつく取水口の役割も想定されるが、確定的な要素は指摘できない。また、水路使用の際の足場的な機能も視野に入れておきたい。

遺物は土師質土器椀・皿・鍋・竈、須恵器、瓦器の細片が約20片出土した。13世紀末葉を示すものを含むが、遺構の時期に合致するかどうかは明確ではないが、溝との関係も踏まえて13世紀末葉～14世紀前半の中で考えたい。



- 1. 淡灰色砂質土 (Fe少)
- 2. 淡黄灰色砂質土 (Fe)
- 3. 灰色砂質土 (上半Fe)
- 4a. 暗灰色砂質土 (Fe多)
- 4b. 暗灰色砂質土
- 5. 暗灰色粘質土
- 6. 暗灰褐色粘質土 (基盤層塊)
- 7. 暗青灰色粘質土
- 8. 暗灰色粘質土



a. 完掘状況（西から） b. 土層断面（西から）

図100 溝24

5. 近世の遺構・遺物

近世に属する遺構は、土坑8基・溝2条があげられる。

遺構の配置は、調査区の中央部に中世以降踏襲される溝23がL字形に走り、土坑は溝の南北両岸に位置する。溝の南側には6基の土坑、北側には調査区西端部に重複した2基の土坑がそれぞれ集中する。溝23と土坑の同時性については、南側土坑群の北端部が溝の肩部に接する部分もあるが、同土坑群の出土遺物溝23の近世遺物との間に明瞭な時期差が認められないことから、概ね同時併存していたと想定される。一方、北側の土坑に関しては、出土遺物の時期がやや新しい傾向を示しており、南側土坑よりは後出するものであることが窺われる。

これらの遺構のなかで、中世～近世の使用時期が想定された溝23については、その連続性から前述した。ここでは、5層 検出の南側土坑群と 4層 検出の北側土坑群および小規模な溝25について述べよう。

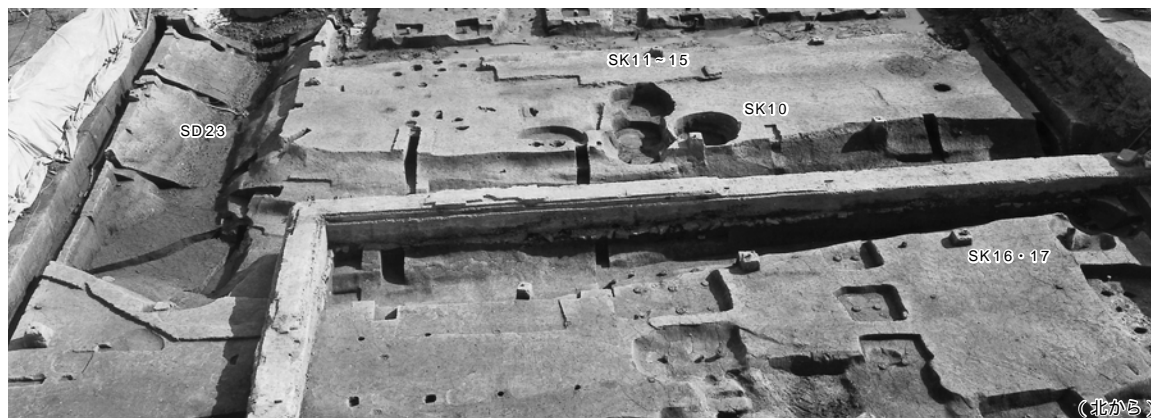
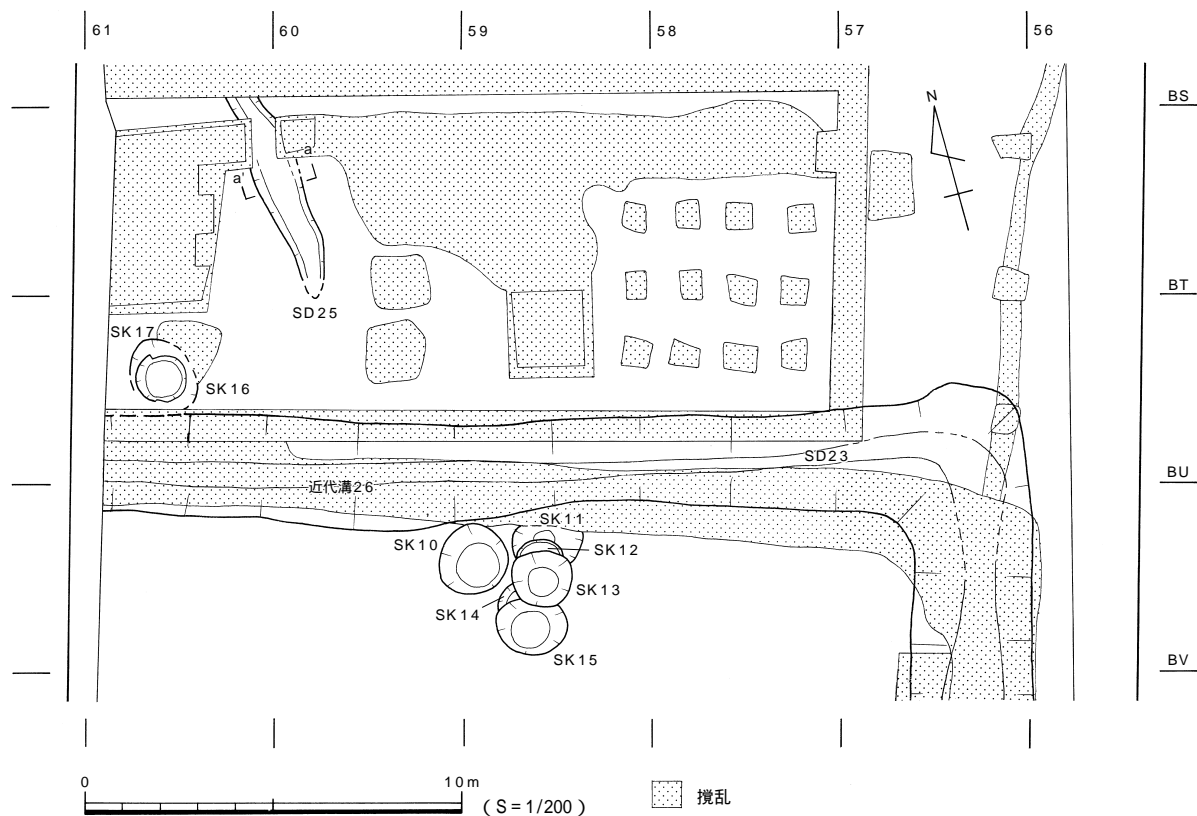


図101 近世遺構全体図

a . 土坑

土坑10 (図102・103・111、図版5)

調査区のほぼ中央部、BU 58～59区に位置する。近代畦畔の下部にあたり、溝22・23の南側に接する。

標高1.25m、5層 上面で検出された。平面形は直径1.8～1.9mの円形である。やや不整形な部分も認められるが、これは北西部側に古段階の掘り方が一部残存するためであり、その部分を除くと、平面形は直径1.5～

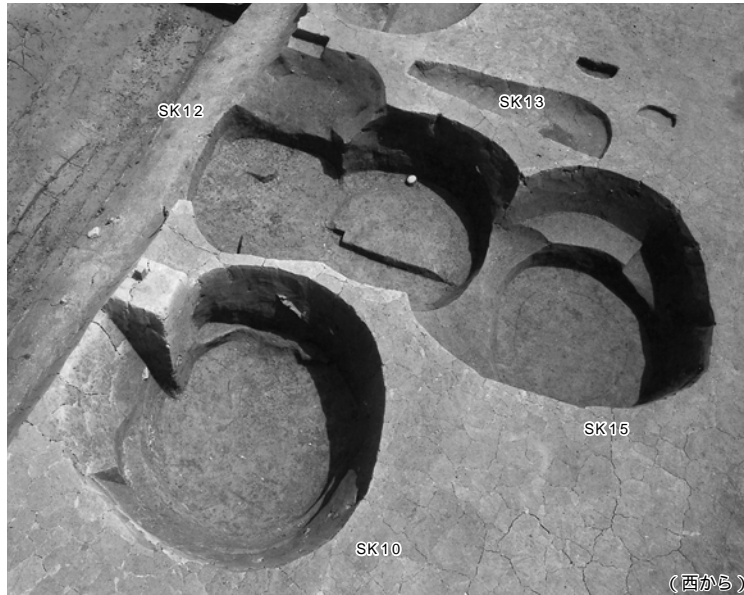


図102 土坑10周辺土坑群完掘状況

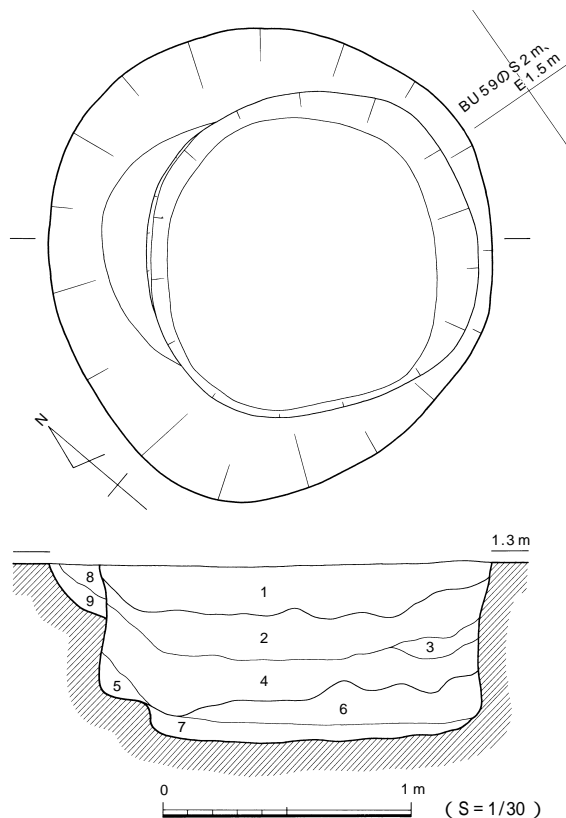


図103 土坑10



- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1. 淡灰色砂質土
(炭、砂・緑灰色粘土塊少) | 6. 灰色粘質土 (黄褐色土塊少) |
| 2. 淡灰色砂混土 (炭、黄褐色土塊多) | 7. 淡灰色粘土
(緑灰色粘土塊多、砂少) |
| 3. (淡)灰色土 (黄褐色土塊少) | 8. 暗灰(褐)色砂混砂質土 |
| 4. 淡灰色砂混粘質土 (黄褐色土塊過多) | 9. 暗灰褐色砂混砂質土 (Fe) |
| 5. 淡緑(灰)色砂質土 (黄褐色土塊) | |

1.6mの円形が復元される。底面は標高0.53mに位置し、直径1.07～1.16mの広くて平坦な円形を呈する。深さは0.72mである。ほぼ垂直に掘削されており、断面形態は箱形を示す。底面から0.1m上部に残る段の存在から考えて、内部に枠が設置されていた可能性が高い。

埋土は、新段階(1～7層)と古段階(8・9層)に大別される。前者は流入土と考えられる1層、多量の基盤層の塊りや砂を含む不均質な土質が特徴的な2～5層、砂の混入が少なく粘性が強い6・7層の3群にまとめられる。一方、後者は砂を多く含む不均質な土層であるが、1～7層と比べると暗い色調で区別される。

遺物は埋土全体から出土した。混入遺物を除くと、中心は小～中形片の瓦・陶磁器であり、約20片が含まれる。本遺構は近世の野壺と考えられる。

土坑11（図104・105）

調査区のほぼ中央部、BU58区に位置する。近代畦畔の下部にあたり、溝22・23の南側に接する。土坑10とは2m程度の距離を挟んで東側、そして重複する土坑群の最北部に位置にする。南側を土坑12に、北側を近代溝によって破壊される。標高1.23m、5層 上面で検出した。

平面形は直径1.77mを残すが、復元すると約1.9mの円形となる。底面は標高0.17mに位置し、直径0.62~0.65mの隅丸方形を呈す。深さは1.06mを測る。断面形は、底面から0.4mまでほぼ垂直に立ち上がった後、標高0.55m付近から上方に開いてY字形となる。

埋土は、5層を挟んで、断面形の開放部を中心に堆積する上層（1~4層）と筒部にみられる下層（6~8層）に大別される。前者の土層には粗砂が含まれるほか、基盤土層粒が下層に向けて量を増すなど包含物が多い。後者は際だった包含物が認められない粘土層群である。上層は埋め戻しの埋土、下層は使用段階に堆積した土層の可能性が考えられる。5層は包含物を含む粘土層で鉄分が多い点は6層と共通するなど、上層と下層の中間の特徴を示す。

本遺構の検出・掘り下げは2回にわたって行った。最初は1~5層までを埋土と認識し、標高

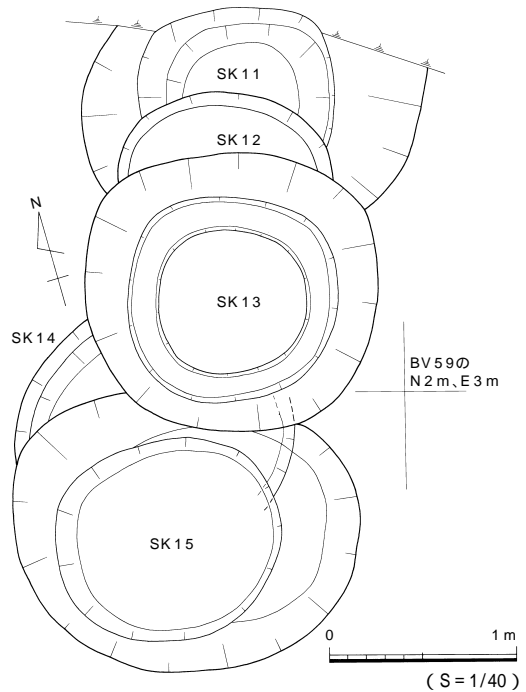
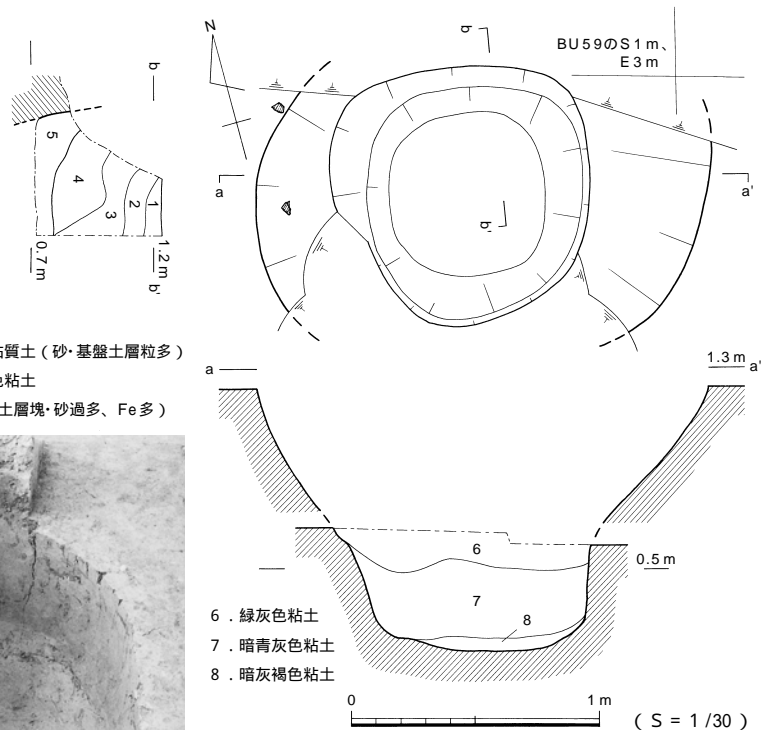


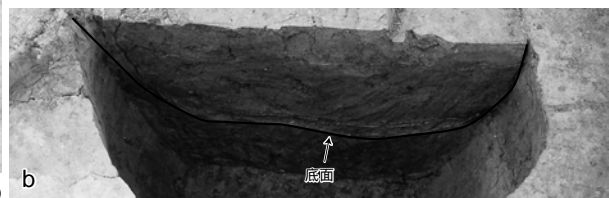
図104 土坑11~15



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 淡灰褐色砂質土（砂多） | 4. 灰色粘質土（砂・基盤土層粒多） |
| 2. 淡青灰色土（砂、基盤土層粒少） | 5. 淡灰色粘土 |
| 3. 暗灰色粘質土（砂、基盤土層粒） | （基盤土層塊・砂過多、Fe多） |



a. 下層部完掘状況（南から）



b. 土層断面：下層部（南から）

図105 土坑11

0.55 m 付近で6層上面を底面とした。その後、全体を下げた段階に再度検出されることとなり、結果的に別々に確認した遺構ではあるが、平面的な位置が一致することから同一遺構と判断した。

ところで、本土坑は周辺に群集する近世土坑とは異なる特徴があげられる。Y字形という断面形態あるいは底面の高さが際だって低い値を示し深くて狭い底面を形成する点は、機能面での違いを窺わせる。どちらかという井戸のような特徴とも言えるが、湧水砂層には達しておらず、現段階では湧水は認められない。

遺物は、下層から古墳時代土師器の細片が数点出土したのみである。この遺物を積極的に評価する考えもあるが、機能の特定とともに保留とし、現時点では本遺構の所属時期は近世としておきたい。

土坑12 (図106・111、図版5・6)

調査区のほぼ中央部、BU 58区に位置する。近代畦畔下部で、溝22・23の南側に接して形成される土坑群のなかに含まれる。土坑11の南側上部に重複する一方、土坑13によって南側を大きく破壊される。

標高1.23 m、5層 上面で検出した。平面形態は残存部分から直径1.14 m程度の円形が、そして標高0.68 mに位置する底面は直径1 m程度の円形がそれぞれ復元される。深さは0.55 mを測り、掘り方の断面形態は箱形を呈する。土坑13による破壊を免れた部分には、幅8 cm前後を残す曲物が壁面に張り付いて廻る。

埋土は、全体では砂質の1層、粘性を示す2～4層、粘土層である5・6層の3群にまとめられる。緑灰褐色粘質土をブロック状に多く含む2層と、曲物・板材などを含む暗灰色粘土の5層が明瞭に分離される。また、6層には砂・粘土ブロックが非常に多く含まれる。5・6層は使用段階の堆積土と判断される。

遺物は瓦(20点)が主体を成し、備前焼・陶磁器・土師質土器片を数点含むが、いずれも小～細片である。

本遺構は、近世の野壺と考えられる。

土坑13 (図106・111)

調査区のほぼ中央部、BU 58区に位置する。溝22・23の南側に接して形成される土坑群のなかに含まれる。土坑12・土坑14を大きく破壊し、さらに土坑15の北側の一部に重複する。同土坑群で最上部の土坑である。

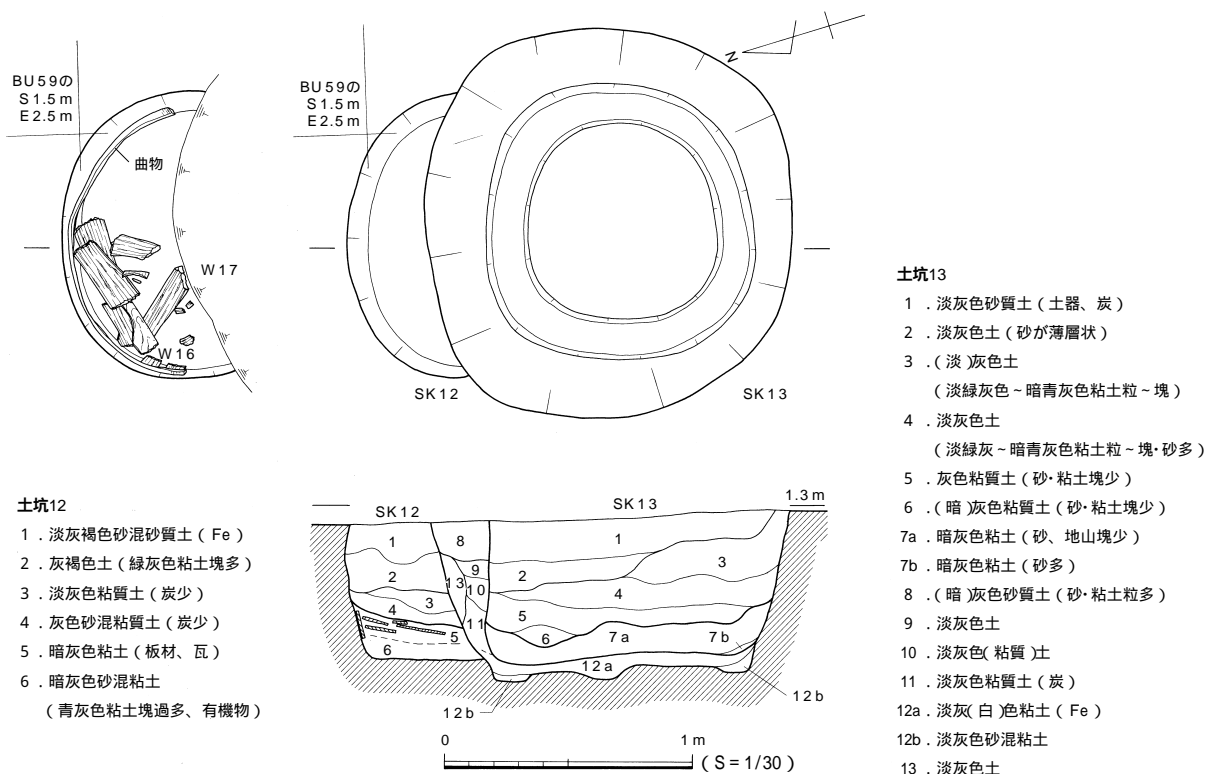
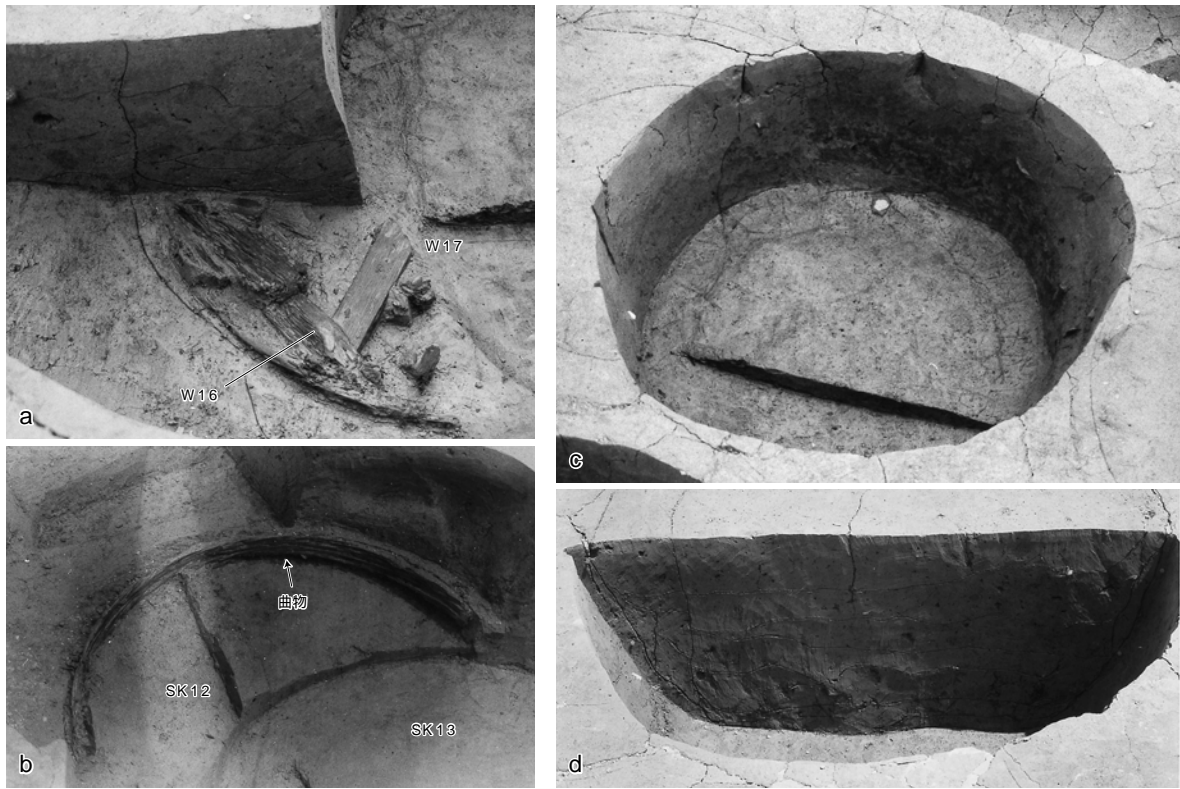


図106 土坑12・13(1)



a . 土坑12土層断面・木材出土状況（西から） c . 土坑13完掘状況（西から）
 b . 土坑12曲物出土状況（南西から） d . 土坑13土層断面（西から）

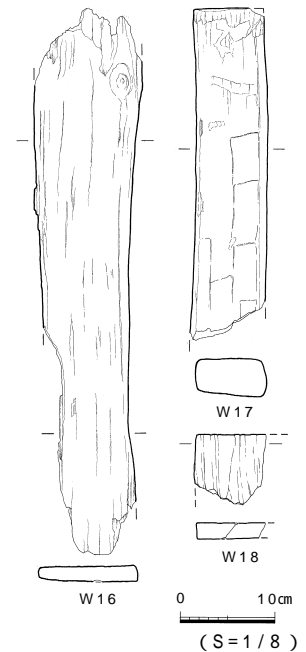
図107 土坑12・13(2)

標高1.28 m、5層 上面で検出した。平面形態は、直径1.5 m × 1.56 mの円形を呈する。底面は標高0.61 mにあり、直径1 m × 1.05 mの円形の周囲には幅16 cm程度、深さ2 ~ 3 cmの浅い溝状の凹みがめぐる。深さは0.55 mを測る。断面は逆台形~箱形である。

埋土は、新段階（1 ~ 7層）と古段階（8 ~ 13層）に大別される。

新段階では、1 ~ 6層が砂質~粘質土である。1層と2層あるいは5層と6層の類似性が高く、3層と4層では粘土粒あるいは粘土塊を多く含む。一方、粘土層の7層は上層と明瞭に区別される。また、底部には砂が薄く堆積する（7b層）。こうした特徴から、7層は使用段階の堆積土、4層以上の土層は埋め戻しの際の土層と考えられる。古段階では、9 ~ 11層が埋め土を構成する。12層は粘土層という点で7層と共通しており、使用段階に底部にたまった土層と捉えられる。また、溝状の凹みを埋める12b層はきめ細かい粘土に砂が含まれる状態を示す。

このように堆積土の状態から、少なくとも1度の掘り返しを想定すると、前述した平面形状は古段階のものとなる。廃棄時にあたる新段階の土坑は規模がやや縮小し、平面規模は直径1.2 m、底面は直径1.05 mの円形となる。深さは0.56 m、



番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W16	板材	(57.8)	11.3	2.0	マツ属複維管束亜属	柱目
W17	加工木	(35.2)	6.3	4.1	-	芯持ち材、面取り加工は丁寧、側面は丸みを帯びる、杭か？
W18	板材	(7.45)	(7.5)	1.75	マツ属複維管束亜属	柱目、上小口面の面取りは比較丁寧

図108 土坑12出土遺物 木製品

逆台形～箱形の断面形を呈する。

出土遺物は瓦片・陶磁器片が中心を成す。いずれも20片前後が確認される。その他には、土師質土器片・須恵器片などが全部で20片程度、古墳時代土師器の細片50片程度を含む。

本遺構は、近世の野壺と考えられる。

土坑14 (図104)

BU58区に位置する土坑群のなかの1基である。土坑の大半は土坑13・15によって破壊されている。

標高1.25 m、5層 上面で検出した。上面形態は、直径1.4 m程度が残存することから、それよりやや大きめの円形あるいは楕円形が復元される。底面は標高0.84 mまでが確認された。深さは、0.41 mを測るが、もう少し深くなる可能性を残す。断面は箱形が予想される。

埋土は全体に青灰色系の土層であるが、その多くが破壊されており、詳細は不明である。

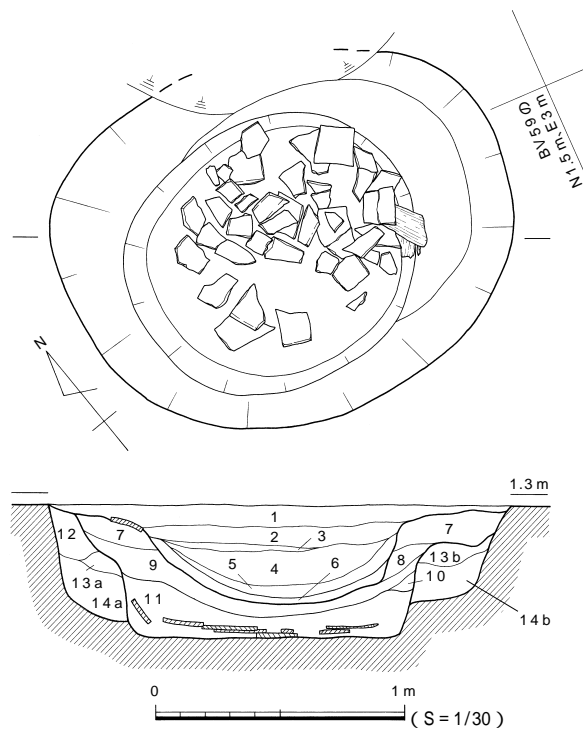
出土遺物は認められないが、周辺の状況から、本遺構は近世の野壺と判断される。

土坑15 (図109・111)

調査区のほぼ中央部、BU58区に分布する土坑群の南端に位置する。標高1.25 m、5層 上面で検出した。

平面形は、長辺1.81 m、短辺1.5 mの楕円形を呈する。底面は標高0.72に位置し、1.05 m × 0.93 mのほぼ円形、深さは0.53 mを測り、断面形は箱形を示す。底部には一面に平瓦が敷き詰められている。

埋土は堆積状況から1～6層・7～11層・12～14層の3群に大別され、少なくとも2回の掘り返しが



- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| 1. 淡(灰)褐色砂質土
(粗砂多、炭、焼土) | 10. 暗青灰褐色粘質土
(褐色土粒) |
| 2. 青灰褐色砂質土
(粗砂多、炭、焼土) | 11. 暗灰色粘土 (Fe塊多) |
| 3. 青灰褐色粗砂混砂質土 | 12. 淡青灰色(砂質)土 (Fe) |
| 4. 淡青灰色土 (粗砂多、炭) | 13a. 淡青灰色粘質土
(砂、褐色粘土塊、Fe塊) |
| 5. 淡灰色砂質土 (粗砂～細礫多) | 13b. 暗(青)灰褐色粘質土
(砂少、褐色粘土粒) |
| 6. (暗)青灰白色粘土
(植物遺体薄層状) | 14a. 青灰色土
(砂多、褐色粘土塊、Fe塊) |
| 7. 明黄青褐色土 | 14b. 暗灰褐色土
(砂少、褐色粘土粒、Fe) |
| 8. 青灰色土 (砂少、炭) | |
| 9. (暗)青灰色粘質土 (粗砂～細礫) | |

a . 瓦出土状況 (南西から) b . 土層断面 (南西から)

図109 土坑15

想定される。

最古段階の埋土は12～14層である。12層以外は褐色の粘土粒を含み不均質な堆積を示す点で共通性し、他と明瞭に異なる。次段階の埋土が7～11層である。本土層群は、9層に粗砂あるいは細礫が包含される以外は、際だった包含物は認められない。底部にあたる11層は粘土層であるのに対して、上層（7～8層）は粘性が弱い。底部には瓦の他に鉄分が塊状となって沈着する。最終段階の埋土は1～6層である。本土坑は、この段階で直径約1m、深さ0.4m程度の規模となる。砂の包含が特徴的な砂質土層が主体の1～5層と、炭化した有機物の堆積が顕著な粘土層である6層に分けられ、6層が使用段階の堆積土と評価される。1～3層は比較的的水平堆積であるのに対して、4～6層はたわんだ状況を示しており、堆積経緯の違いを示す。

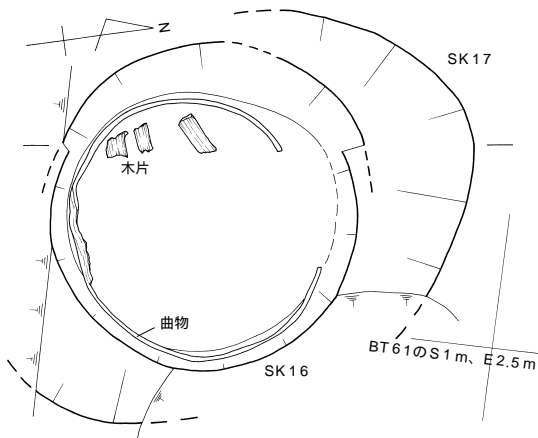
遺物はコンテナ2箱（1箱28ℓ）の量が出土した。ほとんどが平瓦であり、その数は約80片を数える。その他は陶磁器・竈・土師質土器の細片が数片のみである。瓦は黒色系の色調で焼成状態の良好な瓦質タイプと灰色系の色調で焼きの甘いタイプに分けられる。それぞれが全体に占める割合は瓦質タイプが多く、前者：後者が3：2の量的比率を示す。焼きの甘いタイプでは断面の中心が黒色の状態のものが約半数を占める。

本遺構は、その特徴から近世の野壺と判断される。

土坑16（図110・111、図版5・6）

調査区西壁際、やや北寄りに位置する。BT60区である。溝23の北側に近接し、土坑17の上部に重複する。北東部あるいは南側を攪乱によって破壊される。平面的な検出は標高1.22m、5層 上面で行った。

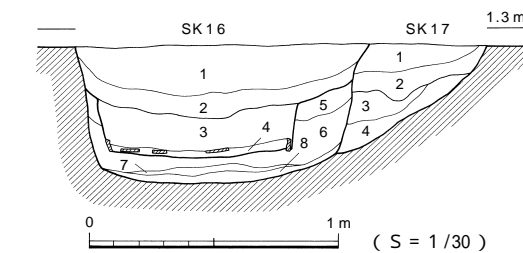
平面形は直径約1.2～1.3mの円形を呈する。完掘状態での底部は標高0.67mに位置し、直径1.06mの円形を示す。深さは0.55m、掘り方の断面形は箱形である。



深さは0.55m、掘り方の断面形は箱形である。

埋土下半において曲物が掘り方に張り付く状態で出土しており、本来は枠が設置されていたことを示す。曲物側板の下面レベルは標高0.78～0.8m、それに伴う埋土（4層）の最下面は0.73mに位置する。同レベルに、使用段階の底面が求められる。

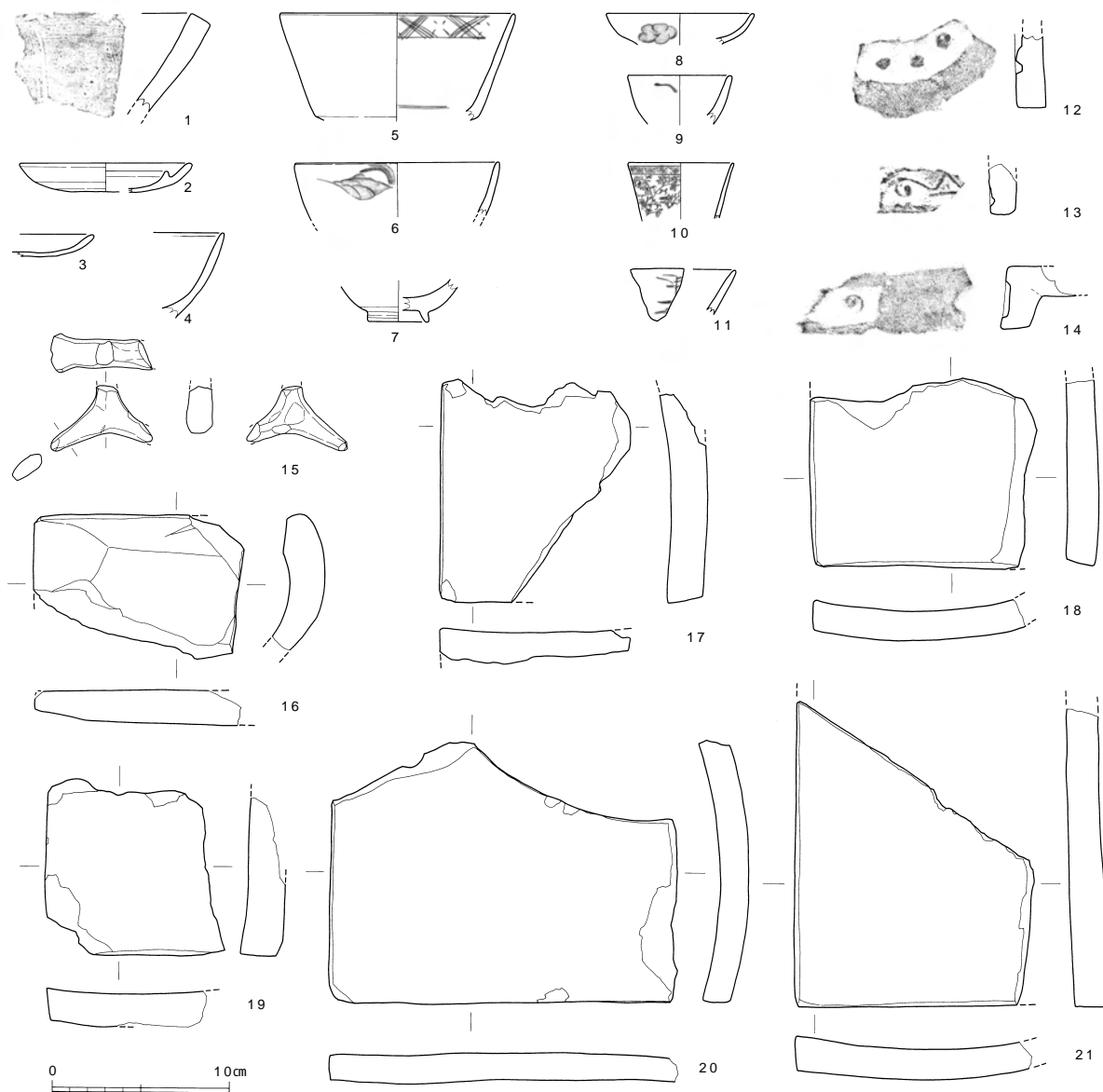
埋土は、1・2層、3・4層、5～8層にまとめら



- | | |
|--------------------|--------------|
| 土坑16 | 8. (暗) 灰色粘土 |
| 1. 淡灰色粗砂～細礫混砂質土（炭） | 土坑17 |
| 2. 淡黄灰色砂質土（炭） | 1. 淡黄灰色砂混砂質土 |
| 3. 淡灰色粘質土（炭） | 2. 黄灰色土 |
| 4. 灰色砂混粘土～粘土混砂（板材） | 3. (淡) 灰色土 |
| 5. (淡) 灰色粘土（炭） | 4. 灰色粘質土 |
| 6. 灰色粘土 | |
| 7. 灰色粘土（青灰色土塊） | |



図110 土坑16・17



(S=1/4)

番号	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
			口径	底径	器高			
1	土坑17	備前焼・擂鉢	-	-	-	横ナデ、卸目1ヶ所	微砂、堅緻	暗灰
2	土坑12	備前焼・灯明皿	*9.8	*4.0	*1.6	横ナデ、底部は糸切り後削り、1/3残存	微砂、堅緻	茶褐
3	土坑16	備前焼・灯明皿	-	-	-	横ナデ、底部は糸切り後削り	微砂	暗茶 断面 灰
4	土坑16	肥前染付・碗	-	-	-	施釉、内面口縁付近と見込み外周に呉須で一条横線を巡らせる	精良・堅緻	白(釉)白灰/淡緑灰
5	土坑16	肥前染付・碗	*13.2	-	-	施釉(内)呉須、1/7残存	精良・堅緻	灰 釉 淡緑灰
6	土坑12	肥前染付・碗	*11.6	-	-	施釉(外)呉須濃藍色、1/6残存	精良・堅緻	白(釉)白
7	土坑16	肥前染付・碗	-	*3.4	-	厚めの施釉、量付きのみ露胎、高台外面に呉須薄藍色	精良・堅緻	白(釉)灰白
8	土坑16	肥前染付・皿	*8.4	-	-	施釉(外)呉須、1/6残存	精良・堅緻	白
9	土坑10	肥前染付・猪口	*5.8	-	-	やや厚めに施釉(外)呉須、1/6残存	精良・堅緻	白
10	土坑10	肥前染付・猪口	*6.0	-	-	薄めに施釉(外)呉須藍色、1/5残存	精良・堅緻	白
11	土坑16	肥前陶器・椀	-	-	-	薄めに施釉(外)暗茶色釉で施文	微砂・精良	淡黄褐
12	土坑12	瓦質・軒丸瓦	長*4.6、幅*7.9、厚1.7	-	-	(内)ナデ・平滑(外)珠文3個・三巴文となるものと考えられる	緻密	暗灰 断面 灰
13	土坑12	瓦質・軒平瓦	長*3.1、幅*5.1、厚*1.4	-	-	(内)ナデ(外)唐草文の一部・変形唐草三転文になるものと考えられる	細砂	灰白 断面 灰白
14	土坑11	瓦質・軒平瓦	長*3.6、幅*9.0、厚*4.0	-	-	(内)ナデ・唐草文の一部、瓦当高3.6cm、文様区高2.1cm、側区片幅5.3cm	緻密	灰 断面 灰-黒
15	土坑16	土師質・トチン	長*2.8、幅*5.7、厚2.1	-	-	平面「人」字形、ナデ、一部に焼けた痕跡あり	微砂	にぶい橙-暗褐
16	土坑16	瓦質・丸瓦	長*12.0、幅*7.8、厚1.8	-	-	工具ナデ	細-微砂	暗灰 断面 灰
17	土坑16	瓦質・敷瓦	長*10.8、幅*12.7、厚2.1	-	-	ナデ、両面煤付着	微砂	灰-暗灰
18	土坑13	瓦質・敷瓦	長*10.6、幅*12.1、厚1.8	-	-	工具ナデ、両面煤付着、特に上面に顕著	微砂	灰-暗黒灰
19	土坑13	瓦質・敷瓦	長*9.2、幅*9.1、厚2.3	-	-	工具ナデ、両面煤付着	微砂	灰-暗黒灰
20	土坑15	瓦質・敷瓦	長*19.7、幅*14.9、厚*1.7	-	-	工具ナデ、図上面画特に平滑、上面に煤付着	微-細砂	黒灰-灰
21	土坑15	瓦質・敷瓦	長*13.5、幅*17.3、厚1.8	-	-	工具ナデ、非常に平滑、上面に煤付着	微砂	黒灰-灰

図111 土坑10～13・15～17出土遺物

れる。1・2層は砂質土であり、特に1層では粗砂あるいは細礫の混入が顕著である。最終的な埋土あるいは流入土といえる。3・4層は粘性を強めて粘質土あるいは粘土となる。その中で4層は砂の包含が非常に顕著であり曲物が含まれるなど、使用段階の堆積土と考えられる。5～8層は灰色系の粘土層で、8層は色調が暗い。

3・4層と5～8層の関係は、後者が古い段階の土坑の埋土を、前者が新段階の土坑埋土をそれぞれ構成しているという見解と、後者は前者の下部を整えて曲物を設置する際の裏込め土という見解が考えられるが、現状ではどちらとも決めがたい。

遺物は瓦15片、陶磁器約40片が中心をなす。そのほかに、土師質土器椀・皿・鍋などが20片程度出土したが、いずれも細片である。トチンと見なされる土製品が1点含まれる。曲物については、ほとんど泥化しており、取り上げ後、現状をとどめるものではなかった。植物遺体ではモモ核が1点認められる。

本遺構の時期は、近世に属する。

土坑17（図110・111、図版6）

調査区西壁際、BT 60区において、土坑16の下部から調査区西壁面にかけて検出された。全体に残存部が少なく不明な部分が多い。

完掘段階での平面形は、長辺が2.2mを測る楕円形となる。断面の立ち上がりは緩やかで、すり鉢状の形態が復元される。深さは土坑16の数値を超えることはないことから、0.5m程度と予想される。

埋土は、黄灰色系の色調を示す上層（1・2層）と灰色系の土層である下層（3・4層）にまとめられる。1層に砂の包含が顕著あるが、それ以外は、際だった特徴は認められない。

遺物はわずかであり、瓦1片・備前焼2片・土師質土器片4片があげられる。いずれも小～細片で、土坑16と共通する。

本遺構の時期は近世に属する。

b．溝

溝25（図112）

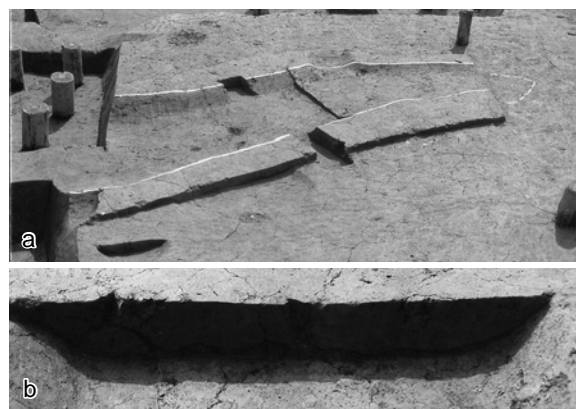
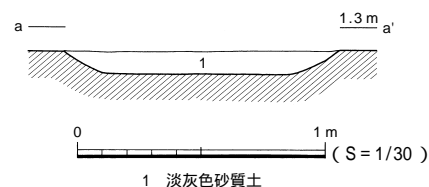
調査区の北西部、BR 60～BS 59区において検出した。北端部を中心に建物基礎などで破壊される。検出レベルは標高1.22m前後であり、4層上面にあたる。非常に明瞭に検出された。

形態は不整形であり、南端部は緩やかに上昇して姿を消す。北西から南東方向に5m程度が残る。幅は0.8～1m、底面の高さは標高1.06～1.15mで、深さは0.06～0.16mと浅い。断面形は皿状を示す。

埋土は淡灰色砂質土で3層と4層が混在するような状態である。遺物は全く出土していない。

非常に小規模でやや不整形な形態であることから人工的なものかどうかはやや疑問である。

時期は、検出面から近世が予想される。



a．完掘状況（西から） b．土層断面（南から）

図112 溝25

6．近代の遺構・遺物

近代の遺構は、3層 上面で検出された溝・畦畔・水口があげられる。調査区中央部を東西方向から南北方向へ流れる溝1条の両肩部に幅広の畦畔が形成され、その畦畔から北方向と南方向に幅の狭い畦畔が走る。

a．畦畔

検出レベルは標高1.5m～1.35m、3層 上面～上半である。畦畔は、溝26の両肩部に形成される畦畔Aと、同畦畔から南北に延びる畦畔Bが認められる。畦畔Aには7ヶ所に水口が設置される(図113)。

畦畔A(図113～115)

東西方向と南北方向で検出幅が異なる。前者では幅0.6～0.8mが残り、本来は0.8mの規模が想定される(図115-a断面)。後者は幅0.4～0.5mである。畦畔上面は標高約1.5mの数値が求められるが、検出段階では高低差を見せる。上面が水平に削平されていることは明らかであることから、本来は同レベルよりも上部に位置すると判断される。畦畔の構造については、a・b断面の観察から、削り出された4層 によって核が形成されていることがわかる。4層 上部には灰褐色砂質土が堆積し、形状が整えられる部分も認められる(b断面)。耕作土は場所によって砂質を強める場合(b断面)や有機質が堆積し粘性を強める場合(a断面)があるが、いずれも3層 に対応する。

畦畔Aとは規模や構築方法に違いを示す。

畦畔B(図113～115)

本来の姿を残す南壁面の断面(d断面)から幅0.4～0.45mを測ることが判る。頂部は標高1.62mに位置する。また、畦畔の構造は畦畔Aのように4層 を削り出すものではなく、3層 あるいは3層 類似の土層によって形成される(c・d断面)。このように、畦畔Aとは規模や構築方法に違いを示す。

耕作面との関係を見てみよう。3層 上面の高さは、溝26の北側西半部で標高1.43mの数値を示す以外は、いずれも同1.48mを測り高低差は少ない。ところが、この数値を畦畔頂部と比較すると、畦畔Bのなかで溝以北～以東に位置するものは、同一

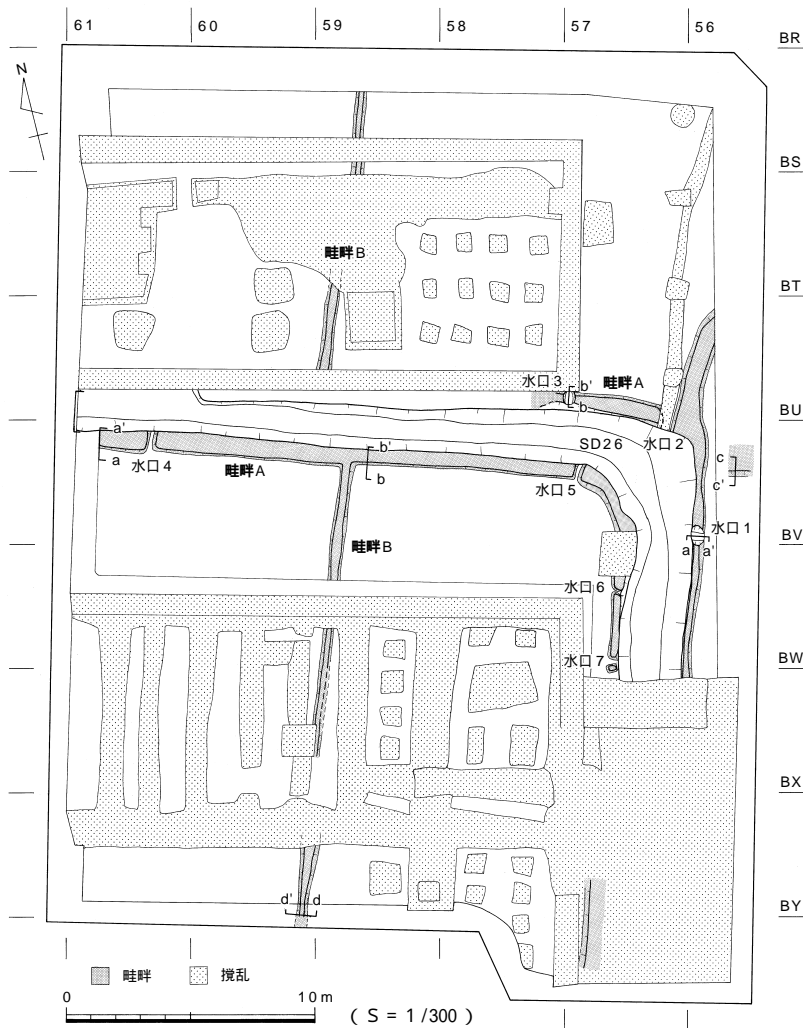


図113 近代遺構全体図



図114 近代遺構全景

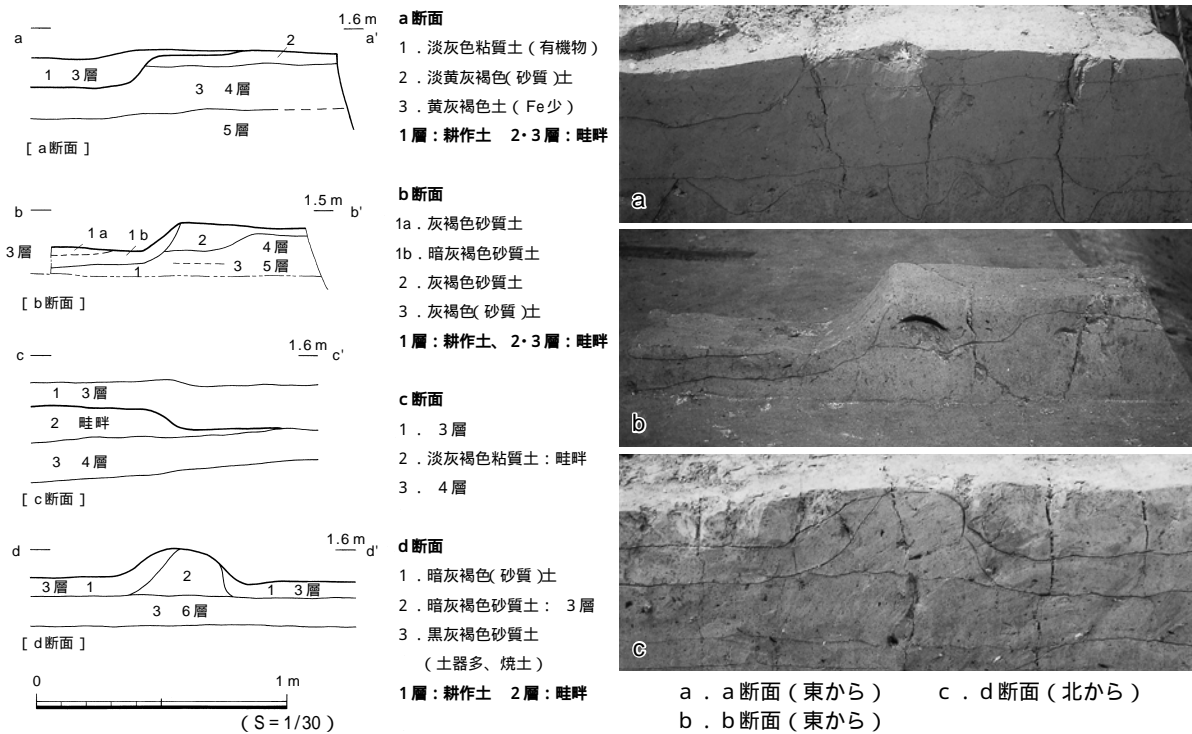


図115 畦畔土層断面図

レベルあるいは 3層 上面が畦畔レベルより高い状況を示す。つまり、これらの畦畔は、3層 耕作の中で消滅した可能性が考えられ、畦畔Bの継続性の弱さが現れている。それはc断面からも読み取れる。

一方、3層 下面は、溝26の北側では標高1.3m前後と低いが、南側では同1.33・1.37m・1.43mへと10~15m間隔で上昇する。下面に対応する土層は、北側では 4層、南端では 6層 となっており、旧地形の高低差が土地造成の過程に影響したことを示す。

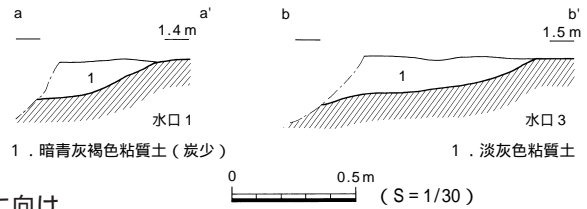
畦畔A・Bに認められる規模や構築方法の違いあるいは継続性の弱さは、溝の肩部に付随する畦畔Aが全体のなかで中心と位置づけられ、それに対して畦畔Bはやや流動的な面を有していたこと、そして、畦畔Aは前段階から踏襲される溝と一体化して、同様に継続的に形成された重要な畦畔であったことが窺われる。

3層 からは、瓦・中世土器・近世~近代陶磁器が出土しているなかで、瓦の比率が高い。

時期は、出土遺物から近世末~近代と判断される。

b. 水口

畦畔Aの検出に伴って7ヶ所で確認された(図113)、畦畔Aを切る状態で溝状を呈するが、1ヶ所(水口2)は、攪乱で詳細は不明である。幅は0.3m~0.4m(水口4~7)が中心であるが、0.5m~0.8m(水口1・3)におよぶものも含まれる。いずれも、畦畔側から溝に向けて傾斜し、埋土は灰色系あるいは灰褐色系の粘質土である(図116)。細分が可能なものもあるが、ブロック状の堆積であることから、全体で単一土層と捉えることができる。



a. 水口1断面(南から) b. 水口4断面(北東から)

図116 水口1・3・4

c. 溝

溝26(図113・117)

調査区の中央部、BT56~61区・BT~BV56区において検出された。検出面は標高1.45m前後、3層上面である。中世溝23を踏襲してL字形に走る溝である。

溝の長さは、溝23と同様で全長48mにおよぶ。幅は2m前後である。底面は標高0.69mに位置し、深さは0.8mを測る。断面形はすり鉢状の底面に箱形の水路部分が付随する。

埋土は上層(1~3層)と下層(4~6層)に大別される。上層は淡青灰色・黄灰色・暗灰色の粘土に加えて粗砂・円礫などが混在する土層として明瞭に区別される。1~3層の細分はその比率の違いによるものであり、基本的な差は認めがたい。2層との類似性が非常に高い。溝の廃棄段階の埋め土と評価される。下層は灰色系の粘質土~粘土である。堆積状況から4~6層と7層に細分される。6層には粗砂・砂利が非常に多く含まれる。水路の底面として機能していたことは明らかである。

遺物は、コンテナ2箱(1箱28ℓ)の量が、上層から集中的に出土した。瓦、中・近世~近代陶磁器類を含む。こうした遺物の内容も、溝23からの連続性を確認することができる。長期間におよぶ使用して複数回におよぶ溝さらえなどの管理が行われていることが窺われる。時期は近世~近代である。

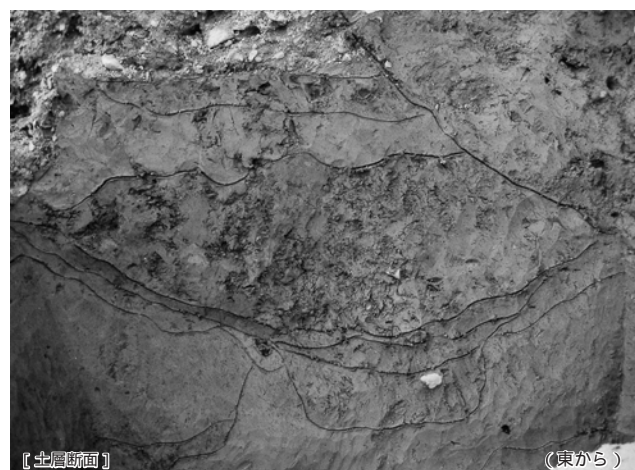
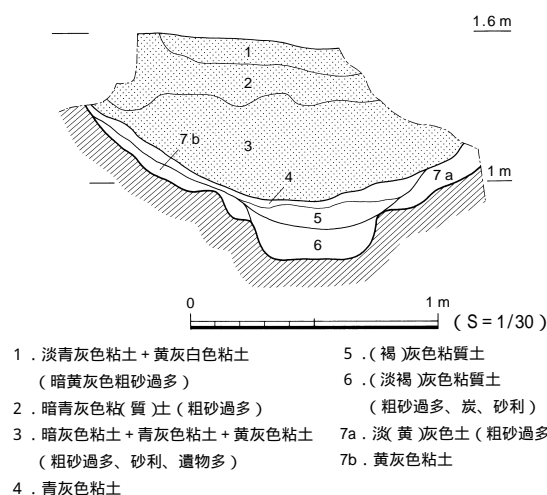
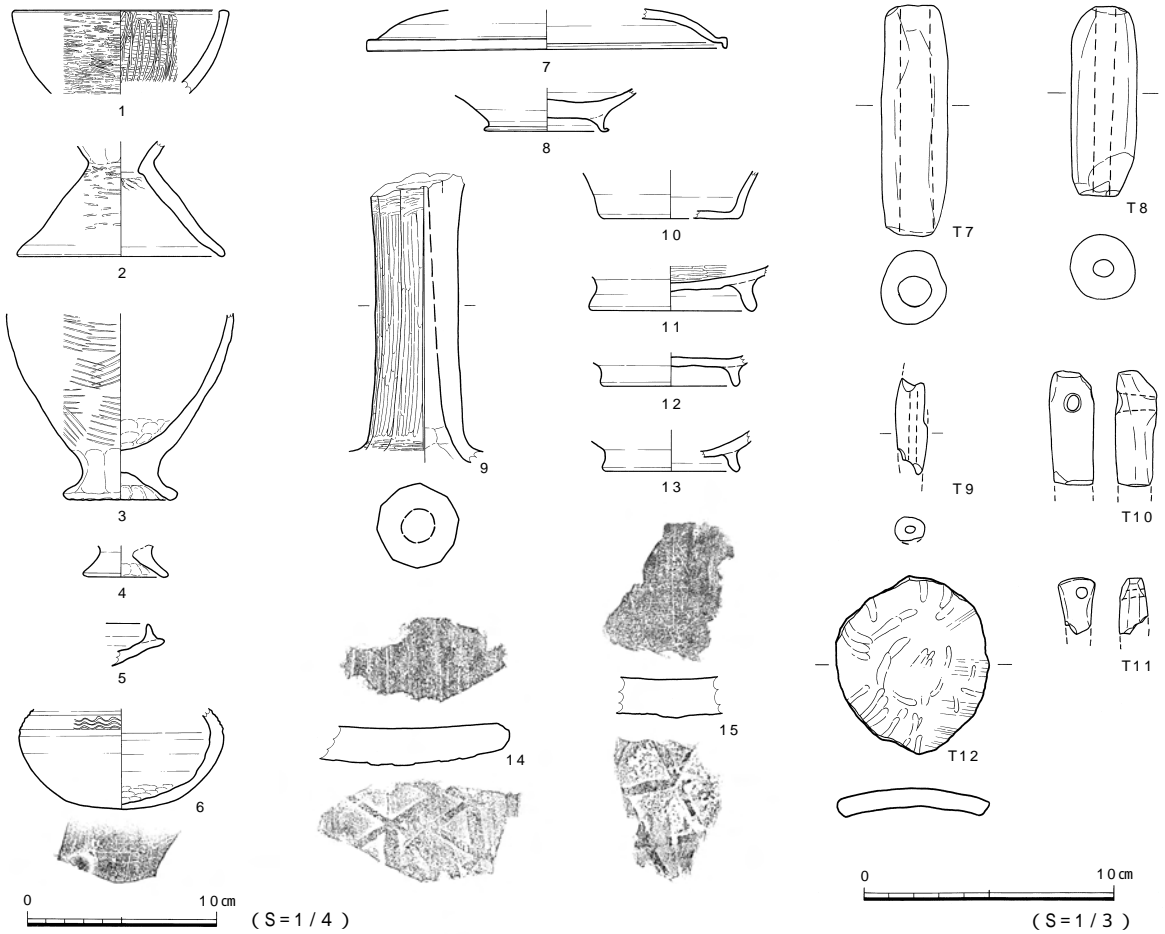


図117 溝26

7. 包含層出土遺物

遺構に伴わない遺物のなかで、ここでは古墳時代・古代の遺物、そして土製品・石器に注目して取り上げた（図118～120、図版7～9）。

1～4は古墳時代初頭に含まれる遺物で、3・4は製塩土器である。5～6は古墳時代後期の須恵器、7～13



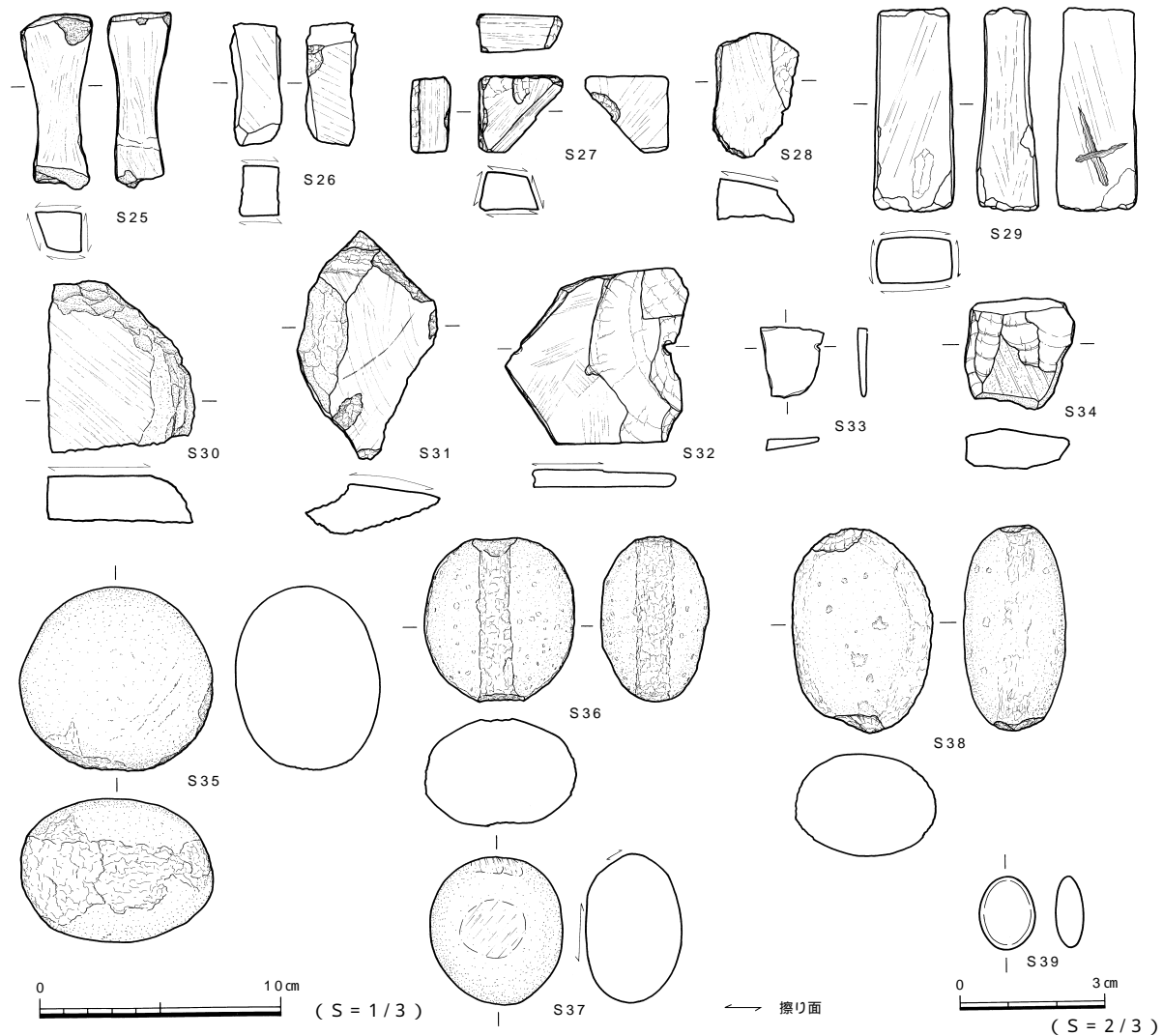
番号	層位	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調：内面/外面
			口径	底径	器高			
1	9層	土師器・鉢	*11.0	-	-	(内)密な篋磨き後波状の暗文(外)密な篋磨き、1/5残存	微砂、赤色粒	明橙褐
2	9層	土師器・器台	-	*10.7	-	(内)絞り目・ナデ(外)細かい篋磨き・押圧、1/4残存	微-細砂、均質	薄橙褐
3	9層	土師器・製塩土器	-	*5.4	-	(内)ナデ(外)平行タタキ(脚・底)押圧、被熱による変色・剥落、1/2残存	粗砂、斜長石、角閃石	赤褐/暗褐
4	9層	土師器・製塩土器	-	*3.9	-	押圧・ナデ、断面内黒褐色	粗砂、石英粒	赤褐
5	4層	須恵器・杯身	-	-	-	横ナデ、白黄灰色の自然釉が飛沫状に付着	微砂、精良	薄赤灰-灰
6	4層	須恵器・杯	-	-	-	横ナデ(底内)押圧(底外)ナデ・「x」篋記号、外面に3条の波状文、1/4残存	微砂、精良	灰-暗灰
7	3-4層	須恵器・杯蓋	*18.9	-	-	横ナデ、内面中央に墨?付着、転用碗の可能性あり	微砂、均質	青灰
8	5層	須恵器・椀	-	6.2	-	横ナデ、重ね焼き痕、高台端部は外側に屈曲	微砂、精良	青灰
9	5層	土師器・高杯	-	-	-	(内)ナデ・下部篋削り(外)縦位篋磨き・上下端横位篋磨き、10角形の面取り	精良、水漉粘土	乳橙
10	5層	土師質・杯	-	*7.2	-	(内外)横ナデ・丹塗り(底外)篋切り後丁寧なナデ、1/5残存	精良、水漉粘土?	薄赤褐/乳白
11	4層	黒色土器・椀	-	8.4	-	(内)密な篋磨き・炭素吸着(外)ナデ、摩滅、1/4残存	微砂、均質	橙/黒灰
12	1-3層	黒色土器・椀	-	6.8	-	(内)篋磨き・押圧・炭素吸着(外)ナデ、摩滅、1/4残存	細-粗砂、砂粒多	薄橙/黒灰
13	4層	黒色土器・椀	-	*6.9	-	ナデ、(内)炭素吸着、摩滅、1/4残存	微砂、赤色粒	薄橙褐/黒褐
14	4層	土師質・平瓦	-	-	-	(内)格子目タタキ(外)布目、側縁部は切り離し後ナデ	細-粗砂、均質	白灰-赤灰
15	4層	土師質・平瓦	-	-	-	(内)格子目タタキ(外)布目	細-粗砂、均質	乳灰
T 7	5層	土錘	長9.3、幅2.7、厚2.9	-	-	管状土錘、ナデ、孔径1.2cm、重量67.0g	細砂	明橙褐-灰黒
T 8	5層	土錘	長7.6、幅2.7、厚2.7	-	-	管状土錘、ナデ、孔径0.7cm、重量54.3g	細砂	淡黄褐
T 9	5層	土錘	長(3.3)、幅1.3、厚1.3	-	-	管状土錘、ナデ、孔径0.4cm、重量3.3g	微砂	淡橙-黄橙
T 10	5層	土錘	長(4.6)、幅1.8、厚1.8	-	-	棒状土錘、ナデ、孔径0.6cm、重量14.1g	細砂	淡灰褐-黄灰褐
T 11	5層	土錘	長(2.3)、幅1.4、厚1.4	-	-	棒状土錘、ナデ、孔径0.5cm、重量2.5g	細砂	淡茶褐
T 12	9層	土製円板	長7.2、幅6.2、厚0.8	-	-	ハケ後篋磨き、平板ではなく若干凸面を呈する、土器底面を打ち欠いて円板状に加工、重量39.0g	細砂	赤茶褐-黄茶褐

図118 包含層出土遺物(1)

は古代の須恵器・土師器・黒色土器、10・11は瓦である（図118）。

鹿田遺跡では、弥生時代中期後半～古墳時代初頭・古墳時代後期・古代前半・古代末～近世・近代の遺構が広がる。本調査地点では、古墳時代初頭・古代末～近世・近代の遺構が検出されたのみであるが、遺物からは、古墳時代後期あるいは古代前半の遺物が散在しており、周辺での活動を窺うことができる。

その中で、特に古代の遺物では高杯と黒色土器の存在が目される。高杯（9）は10角形に面取りがなされており、同時期の集落において一般的な遺物とは言い難く、本遺跡の性格を考慮する上で参考となる。一方、黒

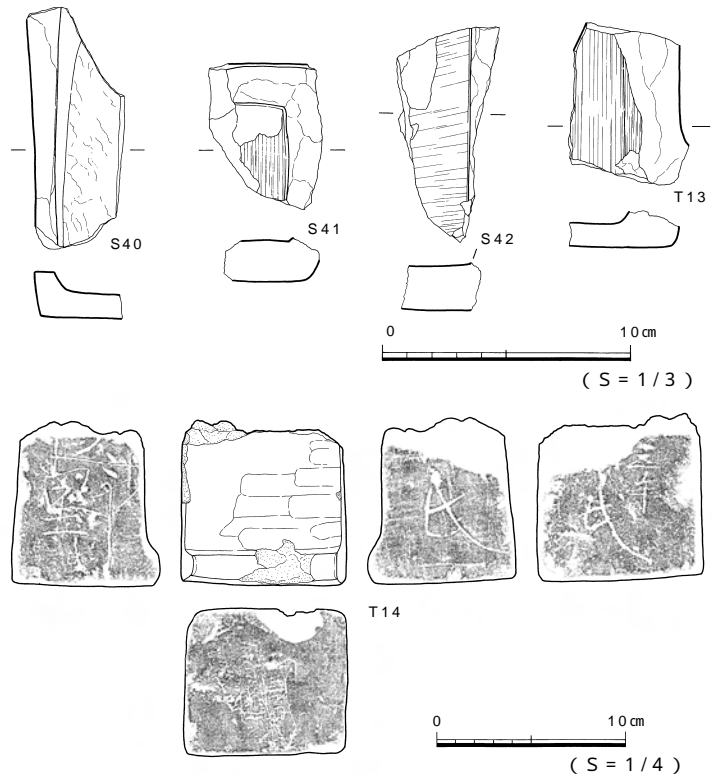


番号	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	特徴
S25	5層	砥石	72.4	29.2	18.1	58.4	流紋岩	四面が著しく磨耗
S26	9層	砥石	(51.0)	(17.0)	21.0	(22.6)	流紋岩	図の表裏面が摩耗
S27	4層	砥石	22.0	33.8	15.3	19.9	流紋岩	表裏面と側面が磨耗
S28	側溝	砥石	(51.2)	(30.4)	(31.2)	(34.1)	流紋岩	表面に研磨による線状痕
S29	側溝	砥石	84.1	33.2	19.0	96.3	流紋岩	四面に研磨による擦痕、溝状の擦痕
S30	5層	砥石	(70.8)	(61.2)	(19.8)	(120.2)	流紋岩	片面が磨耗
S31	5層	砥石	(93.9)	(55.1)	(20.1)	(96.1)	流紋岩	表面に研磨による線状痕
S32	4層	穿孔石器	(71.2)	(78.9)	12.6	(54.9)	粘板岩	両側縁の中央付近に打ち欠きあり、擦痕みられる
S33	5層	穿孔石器	(29.0)	(26.0)	5.0	3.7	粘板岩	図右側縁に打ち欠き一箇所、S32に似る
S34	9層	加工痕のある石材	46.5	43.2	15.8	39.9	流紋岩	表面に対向方向の撃痕跡
S35	9層	叩石	75.2	80.1	59.5	505.4	流紋岩質凝灰角礫岩	円盤の下縁に明瞭な撃打痕
S36	9層	石錘	68.0	62.5	44.0	265.0	流紋岩	表裏面と側縁に縄かけによる擦れの痕跡
S37	9層	磨石	61.2	55.0	40.0	215.8	閃緑岩	表面中央と上端付近に摩滅部位
S38	5層	石錘	85.0	58.3	41.6	279.7	花崗岩	両端に撃打による凹み、側縁に縄による擦れ
S39	4層	基石	20.0	11.1	5.9	1.5	流紋岩	良質の石材、丁寧な研磨

図119 包含層出土遺物(2) 石器

色土器（11～13）の存在は10世紀の痕跡を示す。本遺跡では、同時期の明確な遺構は極めて少ない。文献史料において特に記述の多い「鹿田荘」の時期でもあり、同時期の遺物には注意が必要である。

石器は砥石・叩き石・石錘・磨り石・碇石・穿孔石器・硯、そして土製の硯・瓦質の埴をあげた（図119・120）。砥石の多さと、硯の存在が特徴的である。砥石は、いずれも流紋岩であり、特にS25は良く使い込まれている。石質もきめ細かく均質な石材が使用されている。出土土層は、中世～近世の5層4層からが多いが、古墳時代初頭に遡る9層からも、砥石・叩き石・石錘・磨り石が出土しており、特に叩き石・石錘・磨り石は9層に属する可能性が高い。T14は4面に字が刻まれるほか、線刻なども認められる。明瞭に読みとれる文字は「氏」「三年」であるが、それ以外は、判読不明である。攪乱からの出土であるため、時期等の特定はできないが、宗教施設の存在も予想させる。



番号	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	特徴		
S40	4層	硯	(97.2)	(35.2)	17.5	(91.3)	粘板岩	一部器壁剥落、研磨による整形		
S41	攪乱	硯	(59.1)	(45.8)	17.5	(73.3)	粘板岩	研磨による整形		
S42	5層	硯	(87.2)	(32.4)	19.0	(49.4)	流紋岩	研磨による整形		
番号	層位	種類・器種	法量(cm)		形態・手法他			胎土	色調：内面/外面	
T13	攪乱	瓦質・硯	長(6.45)	幅(4.9)	厚1.5	丁寧な研磨により光沢あり、炭素吸着			微砂	黒断面 茶灰
T14	攪乱	瓦質・埴	長(8.8)	幅8.8	厚7.9	4側面に刻字・線刻・刺突を施文、全面炭素吸着、上部欠損			微砂	黒断面 灰

図120 包含層出土遺物(3) 石器・土製品